

真歩子 2 一下級生 Reverse

健さん 1 2 2 4

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

下級生の持田真歩子ちゃんを題材に書く小説の第2弾です。

真歩子ちゃんの高校3年生の1年間を描きます。いわば、ミッショングリンクの補完です。「真歩子―下級生 Reverse」のエピローグの前半からスタートします。

前作同様、イチャラブ有り、ハードなプレイ有りの作品です。

また、前作では書かなかった、ゲーム本編のエピソードも書きます。

エピソード毎の独自設定については、その都度解説します。

尚、カレンダーは、1997年〜98年の設定です。

町の位置関係、移動時間については、以下の通りです。

頼津市⇨頼津町、新頼津町

水無月市⇨葉月町、卯月町、八十八町、如月町、先負町、矢吹町、弥

生町

文月町、霜月町、新霜月町

頼津市頼津町―頼津市新頼津町―※葉月町

文月町

―

―※葉月町―卯月町―八十八町―※如月町

／ ―

霜月町 弥生町

新霜月町

(旧長月町と霜月町の海側)

— ※如月町—先負町

—

矢吹町

(旧霜月町山側)

霜月町

→

霜月港↑霜月駅(終点)

←

新霜月町

↓新霜月町

(旧霜月町海側) (旧長月町、新霜月町役場)

文月↓葉月(2時間)

葉月↓卯月(30分)

新頼津↓卯月(1時間)

頼津↓新頼津(45分)

霜月↓葉月(1時間30分)

葉月↓弥生(20分)

エピローグをもちまして終了しましたが、今後は、適宜加筆修正を  
します。

ご意見、ご感想等頂けましたら、幸いです。

## 目次

プロローグ	1
第1章 ホワイトデー	7
第2章 葉月学園テニス部部室で	12
第3章 葉月学園体育用具室で	18
第4章 アパートの部屋でセーラー服姿の真歩子を	24
第5章 アパートの部屋でセーラー服姿の真歩子に	33
第6章 新年度	40
第7章 テニスウェア姿の真歩子と	46
第8章 お花見で	51
第9章 テニスウェア姿でSM	57
第10章 遊園地でデートの後	65
第11章 ブルマー姿でSM	72
第12章 水族館でデートの後	80
第13章 土曜日、土砂降りの日に	87
第14章 夏祭り	94
第15章 植物園でデートの後	100
第16章 放課後デート	107
第17章 夏の3連休初日	116
第18章 夏の3連休2日目	123
第19章 夏の3連休最終日	134
第20章 葉月ドームでデートの後	141
第21章 夏の浜辺で	148
第22章 図書館でデートの後	159
第23章 美術館でデートの後	169

第24章	模擬試験の日に	177
第25章	指切り神社の夏祭りの後	184
第26章	8月最後の日曜日	191
第27章	9月の3連休初日	199
第28章	9月の3連休2日目	208
第29章	9月の3連休最終日	217
第30章	動物園でデートの後	225
第31章	テニスの練習の後	233
第32章	テニスの試合の後	244
第33章	映画鑑賞の後	254
第34章	10月の3連休初日	262
第35章	10月の3連休二日目	273
第36章	10月の3連休最終日	281
第37章	誕生日デート	290
第38章	中間テスト最終日に	298
第39章	11月の第1期3連休初日	308
第40章	11月の第1期3連休二日目	317
第41章	11月の第1期3連休最終日	328
第42章	学園祭で	336
第43章	11月の第2期3連休初日	345
第44章	11月の第2期3連休二日目	355
第45章	11月の第2期3連休最終日	366
第46章	期末テストの翌日に	377
第47章	冬の公園でデートの後	387
第48章	ジャージ姿で	395

第49章	コンサートの後	404
第50章	クリスマスイブ	413
第51章	初詣の後	423
第52章	真歩子が自分で自分に	432
第53章	始業式前日	440
第54章	受験前最後のデート	448
第55章	受験後最初のデート	457
第56章	バレンタインデーにラブホテルで	468
第57章	バレンタインデーの翌日	478
第58章	スポーツクラブでデートの後	486
第59章	博物館でデートの後	496
第60章	月曜日、午前授業の後	508
第61章	火曜日、午前授業の後、児童公園で	518
第62章	水曜日、午前授業の後、アパートの部屋で	528
第63章	3月8日のプレゼント	536
第64章	3月9日	546
第65章	3月10日	555
第66章	3月11日	566
第67章	14日、ホワイトデー	579
第68章	15日、ホワイトデーの延長戦	590
第69章	17日、卒業式の翌日に	600
第70章	21日、テニスその後で	612
エピローグ		624

## プロローグ

3月。卯月学園の卒業式。

その後、健太郎は佐竹晴彦の家での祝賀会に出席した。但し、卯月学園関係者のみが招待されたため、真歩子は参加出来なかった。

大広間にて。

「専門学校へ進学が決まったのね」

「はい」

静香の言葉に健太郎が頷いた。

稔は美夏と、慎二は菜々と付き合う事になった。

ティナとティムは帰国する事になり、卒業式の翌日、日本を発つ事になっていた。

卒業式の翌日。日曜日。

健太郎のアパートを、真歩子が訪ねた。

今日は一日、真歩子と二人だけの卒業祝いだった。

真歩子の手料理で、二人だけの卒業祝いは、前日佐竹家の卒業祝賀会より嬉しく、内容の有る物だった。

「卒業と進学、おめでとうございます」

「ありがとう」

「専門学校への進学、決まったんですね」

「ああ。二年制のコンピュータの専門学校。高校三年生になってから勉強の成績がアップして専門学校に入れたからね。これも真歩子ちゃんに出会ったからだね。真歩子ちゃんのお陰だよ」

「そんな…。健太郎さんが頑張ったからですよ」

「でも、やっぱり真歩子ちゃんのお陰だよ。真歩子ちゃんみたいな女の子でないと、僕はダメなんだ」

「健太郎さん…」

食事後。

健太郎と真歩子は、体を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスである。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。最初から互いの舌を絡める。

そのままベッドに倒れ込んだのだが、押し倒したのは真歩子だった。

「ま、真歩子ちゃん!?!」

「たまには、私が…」

そう言っつて、真歩子は健太郎の服を脱がした。

いつもならば、セックスの前にシャワーを浴びるか風呂に入るが、それ無しで真歩子は健太郎の胸にキスをした。

それから真歩子は、自分の服を脱ぎ捨てた。そして健太郎の男性器に手を伸ばす。

「もうこんなになっているじゃないですか」

既に健太郎の男性器は、限界までそそり立っていた。

真歩子は健太郎に跨がると、女性器に男性器を自分から挿入した。淫らな水音が、部屋に響く。

「ま、真歩子ちゃんだつて。オマンコ、こんなに濡れて」

「バレンタインデーからは、暫くデートしていなかったから、私、健太郎さんのオチンチンが欲しくて…」

「それで真歩子ちゃん、今日はこんなに積極的に」

「二人でしていたんですよ。その、健太郎さんに優しくされた時の事や、乱暴にされた時の事を思い出して」

「真歩子ちゃん…」

「エッチな女の子は嫌いですか?」

「そんな事無いよ。お淑やかな真歩子ちゃんも、エッチな真歩子ちゃんも大好きだよ」

「うふふ」

そう言っつと真歩子は腰の動きや角度を変える。

「どうですか?」

「凄く良い感じだよ。もう出そうだ」

「健太郎さんのオチンチン、私の中でピクピクして…。イキそうなんですね」



「ああ」

「じゃあ出して下さい。私の中を、健太郎さんでいっぱいにして…」

「出すよ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の中に全てをぶちまけた。

「あつ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんの熱いのでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふつ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「じゃあシャワーに行こうか。今度は、僕の番だよ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

浴室にて。

互いの身体を洗った後、先に真歩子が、後から健太郎が頭を洗う。それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音が、狭い浴室に響く。

「ああっ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです…。お漏らしして…」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

そう言うと健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。

「じゃあベッドに行こうか」

二人はバスタオルで丹念に身体を拭くと、再度ベッドに入った。

健太郎と真歩子は、互いに唇を重ねる。合図のためのキス。

一度唇を離すと、再度唇を重ねる。今度は舌を絡める。唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。健太郎は、真歩子の身体に丹念にキスをする。耳朵、首筋、鎖骨、左の乳首。

それと同時に、右の乳首を摘まんで転がす。

「乳首、硬くなっているよ」

「や、やあん」

健太郎は腹部にキスをした後、女性器に舌を這わせた。

真歩子のクリトリスに舌を這わせた後、真歩子の蜜を嚼る。更に指を入れてかき回す。

「健太郎さん、その、舌や指だけじゃなくて、そろそろ」

「僕もそろそろ入れたくなっていたんだ」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと。でないと、お預けだよ」

「は、はい…。健太郎さんのオチンチン、真歩子のエッチなオマンコに入れてください」

「じゃあ入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の女性器に男性器を挿入した。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ほ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

彼女の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色をしている。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女の子の大事な部分も、何もかも健太郎の物である。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。因みに、陰毛は、健太郎が剃っている。説得してOKが出ており、今は抵抗なく剃らせてくれる。

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。健太郎さんの意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる…！」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太くて硬いオチンチンでグリグリされて…、わ、私も、もうダメ…。ここ、壊れちゃう…。イツちゃう!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願いです…。出して、ください…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…ありがとう…、大好きです」

そう言つて真歩子は笑みを浮かべた。

この後、健太郎と真歩子はシャワーを浴びた。

そして健太郎は春休みと少し遅いホワイトデーの約束をして、真歩子を送った。

【続く】

## 第1章 ホワイトデー

3月。

健太郎は卯月町にある、コンピューターの専門学校の入学手続きを済ませた。

この時期、どの学校も卒業式の後には終業式、春休みである。

健太郎は少し遅いホワイトデーのデートを考えていた。

「この時期はプロ野球のオープン戦か……。そう言えば真歩子ちゃん  
は野球ファンだったな」

健太郎は卯月町のプレイガイドで、《葉月ドーム》で開催されるオープン戦のチケットを2枚買った。

プロ野球は16チームで、両リーグ共に8チームずつの2リーグ制。又、両リーグ共に4チームずつの東西2地区制である。

プロ野球は、シチズンリーグとピープルリーグで構成される。後、レギュラーシーズン終了後のクライマックスシリーズは、各リーグの東地区と西地区の優勝チームが、リーグ優勝と日本シリーズ進出を争う。

で、シチズンリーグ東地区は、札幌カブス、東京キャピタルズ、東京神宮ジェッツ、横浜クリッパーズ、西地区は名古屋ユニコーンズ、大阪レイダース、広島ファルコンズ、宮崎ウオリアーズ。ピープルリーグ東地区は北海道オウルズ、仙台ブラックナイツ、千葉ドルフィンズ、新潟セイバーズ、西地区は、埼玉ロコモティブズ、神戸アスレティックス、松山バツカニアーズ、福岡ツインズである。

因みにプロ野球のオープン戦は、コーンリーグとポテトリーグに分かれて開催される。

で、日曜日。

葉月駅のレストラン街での昼食後。

《葉月ドーム》のグッズショップにて。

「真歩子ちゃんは、これが似合うと思うんだけどね」

健太郎が選んだのは、真歩子がファンの東京キャピタルズのレプリカユニフォームだった。

「これ、少し遅いけど、ホワイトデーのお返しだよ」

「あ、有り難うございます」

それから試合を観戦した。対戦カードは、東京キャピタルズ対北海道オウルズである。

健太郎がゲットしたのは、葉月ドームの一塁側内野席である。公式戦ならばプラチナチケットだが、オープン戦なので比較的安価で購入出来た。

キャンプ、オープン戦はコーンリーグは四国、ポテトリグは九州・沖縄で開催するが、オープン戦は3月中旬からは各地で開催する。

健太郎はテレビ中継等で野球を観戦した事があるので、野球については全くの素人ではない。

ただ、オープン戦と言えど、東京キャピタルズのホームゲームとなると、試合の盛り上がりは公式戦と同レベルである。これについては、健太郎は全く知らなかった。

そして真歩子のノリも半端ではなかったが、ここは健太郎もノリに合わせた。

試合は拮抗し、9回規定により5対5で引き分けた。

試合終了後。健太郎と真歩子は、卯月町の健太郎のアパートに向かった。

アパートの部屋にて。

「じゃあ、健太郎さん」

そうやって真歩子は、レプリカユニフォームに着替えた。

「いいの？真歩子ちゃん」

「ええ…」

真歩子が頷くのと同時に、健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、服を脱がした。

そして、下着姿の真歩子を、ベッドに横たえた。

「随分派手な下着だね」

「そんな、普通ですよ」

真歩子が着けていた下着は、黄色で、全体にハートが描かれている物だった。

「学校にそんなのは良いの？ 僕ならば没収かな？ 真歩子ちゃんには清楚な下着が似合うと思うんだけどね」

そう言いながらも、健太郎の身体は、既に熱くなっていた。  
〈お楽しみ〉の、始まりである。

真歩子は健太郎に抱き付くと、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力も

あって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティから手を出すと、溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にして、それから真歩子をうつ伏せにさせた。

健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わり、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」



「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」  
真歩子がシートを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段と  
きつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻  
にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

シャワーから戻った後、真歩子が言った。

「私、幸せです。ずっと、一緒にいてくださいね…」

真歩子の言葉に健太郎は頷くと、そのまま彼女を抱き締め、唇を重  
ねた…。

【続く】

## 第2章 葉月学園テニス部部室で

春休み。

平日の午前中は、健太郎は《土下座》でバイトしているが、午後は自由である。

で、午後。健太郎は葉月学園に向かった。

この時期、真歩子は平日は部活動で登校している。

健太郎は、真歩子のもとより葉月学園テニス部部員の集中力や判断力を乱れさせてはいけない事を重々承知しており、練習中は、目立つた行動はしない事になっていた。

健太郎は、真歩子の視界に入らない様に気を配りながら、テニスコート外のフェンスにて練習を見学した。真歩子の太腿、尻、アンダースコート、プリーツのミニスカートが目眩しい。

真歩子は、三年生が部活動を卒業した直後、テニス部部长になった。更にテニス部のエースにもなっていた。

そのエースにコーチしてもらえる健太郎は、普段から『果報者』である事を自覚していた。

練習終了後。葉月学園のテニス部員達は、順次帰宅していた。最後は真歩子だった。勿論、テニスウェア姿のままである。

真歩子が正門から出て来る頃を見計らって、健太郎は移動した。そして声をかけた。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん」

「練習、お疲れ様」

「ありがとうございます」

「もう帰れるんだよね」

「ええ」

「じゃあ、立ち話もなんだろうから…」

「なら、部室に行きませんか？」

「そんな事して、大丈夫なの？」

「今日は顧問の先生は来ませんし、まだ正面玄関は施錠まで時間が

あります。後、今の時期は新一年生が部活見学に来るので、他校の生徒がいても誰も気にしませんから」

「でも部室の鍵は？」

「今の時期は、用務員さんと警備員さんが施錠解錠するので、それも大丈夫です。今は開いてます」

そうしている内に、二人は女子テニス部の部室に着いた。

「大丈夫です。どうぞ」

先に入った真歩子が言った。

「失礼します」

そうやって健太郎が入室した。

室内には、ホワイトボード、ロッカー、テーブル、棚がある。掃除も行き届き、整然としている。しかも、男子の気配が全くない。

「男子の部室はどっちなの？男子との合同練習とか、混合ダブルスの打ち合わせとかがあるんじゃない？」

「そもそも、この一帯は、女子の部活動の部室が並んでいるんです。男子の部活動の部室は、反対側です。混合ダブルスの打ち合わせは主にテニスコートや空き教室でしています」

「なるほど」

真歩子の答えに健太郎が頷いた。

真歩子と話している内に、健太郎の下半身は次第に熱くなっていた。それを見透かしたかの様に真歩子が言った。

「健太郎さん」

「ん？」

「もしかして、興奮しているんじゃないやありません？」

「あ、バレちゃった？」

「わかりますよ。それ位」

「真歩子ちゃん、良いの？」

「ええ。私だって、そのつもりがないと、健太郎さんを部室に招き入れませんよ」

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そうやって健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。

そのままテニスウェアとスポーツブラをずらすと、真歩子の乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。スポーツブラのせいかな？汗の味もしているね」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースカートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤ…。恥ずかしい…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、たくさん可愛がってあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ロッカーに手をついて、お尻を突き出すんだ」

「ええっ…」

「ほら、早く。早くしないと、お尻ペンペンするぞ」

「け、健太郎さんの意地悪」

そう言いつつも、真歩子は健太郎の言い付けに従う。

それから健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、お尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよね」

「イ、イヤーン」

そう言つて真歩子は、かぶりを振つた。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「ああんつ。ダメ、イツちやう」

そう言つて真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんのエッチ」

そう言つて真歩子は、少し頬を膨らませた。

そして健太郎は、真歩子のテニスウェアのミニスカートとアンダースコートとパンティを剥ぎ取り、彼女の下半身を丸出しにしてから、男性器の先端を当てた。

限界までそそり立った健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

しかし健太郎は軽く当てるだけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい。ほ、欲しいです…」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「もう、健太郎さんの意地悪」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のオマンコに入れてください

…。オチンチンで、イカせてく、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「け、健太郎さんのオチンチンが、わ、私のオマンコの奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げ

ていく。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、床に淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋に響く。

汗の香りが、部屋に漂う。

「ああ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。オチンチン欲しいです」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を啜え、舌が先端に触れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ン。ング。ンーツ」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山出て…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

それから二人は、股間の始末をしてから服装を直し、床の清掃をしてから部屋を後にした…。

【続く】

### 第3章 葉月学園体育用具室で

葉月学園テニス部部室で真歩子とセックスしてから三日後の午後。《土下座》でのバイトを終えた健太郎は、葉月学園へと向かった。まず電車で葉月町に向かう。到着後、葉月駅のターミナルでバスに乗り換え、葉月学園に向かった。葉月町には、野球場やコンサートホール等があり、健太郎は真歩子とのデートで何度もこの町に来ている。

葉月学園は、町の中心から離れた、閑静な住宅街にある。葉月学園前のバス停で降車し、学園の正門にて健太郎は足を止めた。

「あれ？」

健太郎が違和感を覚えたのも、無理はなかった。テニスコートには、誰もいなかったのだ。

「おかしいな。今日は晴れているのに。テニス部は誰もいないなんて」

そう言った直後だった。一人の女子学生が声をかけた。

「あの、持田先輩のお知り合いですか？」

「うん、そうだけど。君は？」

「陸上部の萩原です。中学校の後輩です。テニス部は、今日は体育館でランニングと壁打ちをしていました」

「そうなんだ。でも、どうして体育館で？」

「今日は、グラウンドは、今はサッカー部、次は野球部が練習に使うので、他の部活動は体育館を使うんです。もう少しでテニス部の練習は終わりますから、ここで待っていると良いか、と」

「うん、ありがとう」

「どういたしまして」

そう言うと、萩原は一礼して、正門から出て来た陸上部員と合流して、ランニングに出発した。

20分後。

練習を終えたテニス部部員達が、生徒玄関から出て来た。今日は、ジャージやブルマー姿である。



最後に出て来たのは、真歩子だった。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎先輩」

前回同様、何人か葉月学園の生徒がいたため、真歩子は健太郎を先輩と呼んだ。

「練習、お疲れ様。テニスコートにいないからビックリしたよ」

「ええ、今日はグラウンドは使わない日でしたから」

「もう帰れるんだよね」

「ええ」

「じゃあ、立ち話もなんだろうから…」

「なら、学校見学して行きませんか？」

「そうだね。時間もまだあるし」

健太郎は受付で出入り管理簿に必要事項を記入した。

そうして、健太郎と真歩子は葉月学園の校内に入った。

「今日はほとんどいないね。13時だからかな」

「ええ」

真歩子が頷く。そして続けた。

「以前お話していた、弟さんは…」

「弟は色々考えた結果、卯月学園に進学する事にしたんだよ」

「そうなんですネ」

「卯月学園の寮に先日入寮したし、《土下座》でのバイトも決まったからね」

「じゃあ叔父様も」

「うん、喜んでいたよ」

「良かったですね」

昨年、健太郎は卯月学園の前後期休み、通称秋休みを利用して葉月学園を見学した。健太郎は父の再婚でできた義母と不仲ではあるが、義母の連れ子である義弟と義妹とは仲が良い。義母もその事は認めており、会う事自体は否定していない。その義弟が、高校受験を迎えるに当たり、葉月学園も検討したい、と言ってきた事から、秋休みを利用して葉月学園を見学したのである。

校内を一通り見学した後、最後に来たのは体育館だった。

「今日はここで練習していました」

「そうなんだ。でも、この広い体育館で…」

「使っていたのは半分位ですね」

「えっ？」

「真ん中にネットがあるでしょう。このネットの向こう側を使いました。手前は、卓球部が使いました」

「なるほど。ならば、二つの部が同時に練習する事が出来る、という訳か」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

体育館を一周した後、真歩子は健太郎を体育用具室の中に招き入れた。

「ま、真歩子ちゃん!」

「健太郎さん、今日も大きくしていますよね?」

「あ、バレちゃった?」

「わかりますよ。でも、強引な健太郎さんも、優しい健太郎さんも大好きですから…」

「真歩子ちゃん…」

そう言うと、二人は同時に唇を重ねた。

唇を離すと、健太郎が尋ねた。

「でも大丈夫? 今日、これから体育館を使う部があるんじゃない?」

「それは大丈夫です。体育館入口に書いてありますが、今日はもう体育館は使いませんし、鍵の施錠解錠は、テニス部の部室と同じですから」

「うん、わかった」

そう言つて健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。

唇を離す。それから再度、唇を重ねる。今度は互いの舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎が真歩子の服を脱がそうとした時だった。

「ま、待ってください」

そう言って真歩子は跪いた。そして彼女は健太郎のズボンのベルトを外し、ファスナーを下ろす。それからズボンとパンツを下ろして、下半身を露にした。

「真歩子ちゃん…」

「お、大きい…。もうこんなに」

そう言って、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言っていると、真歩子は健太郎の男性器を舌先で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、室内に響く。

一度健太郎の男性器を舐めるのを止めると、真歩子が出た。

「私の事、積極的な女だなんて、思わないでくださいね。でも、何かしてあげたいんです」

「有り難う。真歩子ちゃんは、僕の前だけではエッチな女の子だよ。

それと…」

「はい」

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子のジャージを脱がした。但し、埃まみれにならない様に、丁寧に畳むと、掃除の行き届いた棚に置いた。

次に、Tシャツとブラジャーをずらして、乳房を露にする。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

そして乳房を揉みしだき、乳首を甘噛みした。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあって、最高だよ」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言うとき真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言うとき真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。

溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「もうこんなに…。校内だから、興奮しているのかな？」

そう言うとき健太郎はパンティから手を出した。

「や、やあん。み、見せないで…。健太郎さん、エッチです」

「これなら、OKだね」

「ええ。お願い、健太郎さんが、欲しいの…。早く…。オマンコにオチンチンを入れてください」

真歩子は、淫らなおねだりをする。

健太郎は、紺色のブルマーとパンティを膝まで下ろし、左脚を抜いた。

そして健太郎は、男性器を真歩子の女性器に宛がった。

ただし、正常位、後背位、騎乗位や座位では芸が無いと思った健太郎は、駅弁スタイルで挿入する事にした。

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんでいっぱいになってる…」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。淫らな水音をたてながら、最奥を突く。

熱く、甘く、荒い吐息、喘ぎ声が付近に響く。

汗と蜜の香が、付近に漂う。

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんのオマンコ、吸い付いて来る。イツ。いい締めりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんのオチンチンに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

「健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

健太郎の首の後ろに回された真歩子の手に一層の力がこもった。

更に真歩子の女性器の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健

太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…!!」

健太郎は、真歩子の中で、全てをぶちまけた。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜く。

それから二人は、軽く股間の始末をしてから居ずまいを正すと、体育館を出て、校内の見学を終えた。その後、健太郎と真歩子は正門から出て、二人で卯月町に向かった…。

【続く】

## 第4章 アパートの部屋でセーラー服姿の真歩子を

3月8日に卯月学園を卒業した健太郎は、4月1日の火曜日までは、午前中は叔父が経営する喫茶店《土下座》でバイト、午後はフリーである。

一方の真歩子は、15日に終業式、16日は葉月ドームで健太郎とデート、17日からは22日までは午前中は部活動で登校。この間18日と21日は葉月学園で健太郎と会っていた。

後、土曜日の午後は卯月町の花屋《カトレア》でのバイトである。で、22日と23日、健太郎は真歩子とは会えなかったが、24日の午後に葉月学園に行く事にした。

学園の正門にて。

「あれ？」

健太郎はまた違和感を覚えた。テニスコートには、誰もいなかったのだ。

「おかしいな。今日も晴れているのに。テニス部は今日も誰もいないなんて」

そう言った直後だった。一人の女子学生が声をかけた。

「すみません。あの、誰かお探しですか？」

「うん、そうだけど。テニス部の持田真歩子さんを。君は？」

「水泳部の湊と言います。持田先輩って、テニス部の部長ですよね。新3年生は、今日から土曜日まで午前中は春期講習です」

「春期講習？」

「はい。でも午前中までですから、ここで待っていると良いか、と思います」

「うん、ありがとう」

「どういたしまして」

そう言うと、湊は一礼して、正門から出て来た水泳部員と合流して、ランニングに出発した。

30分後。

講習を終えた生徒達が生徒玄関から出て来た。

真歩子はテニス部部員と一緒にだったが、健太郎の姿を確認すると、挨拶してから彼の方に向かって来た。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎先輩」

前回同様、何人か葉月学園の生徒がいたため、真歩子は健太郎を先輩と呼んだ。

「講習、お疲れ様。今日もテニスコートにいないからビックリしたよ」

「ええ、今日からは春期講習ですから。でも、誰に聞いたんですか？」

「聞いた、という訳じゃないんだよね。教えてもらったんだよ。これから走り込みに行く水泳部の生徒から」

「そうだったんですね」

「で、今日は、土日にあえなかったから来てみたんだけど。部活？それとも、もう帰れるの？」

「今日というより、今週は、午前中は春期講習で、午後は部活は休みです」

「えっ!?!じゃあ、新2年生はどうするの?」

「新2年生は、春期講習は必修ではありませんが、受講する生徒が半分はいるので、その間は部活は自主トレになります。新2年生は午後から講習です」

「そうなんだね。じゃあ午後は」

「ええ、大丈夫です」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

まずバスで葉月駅に向かう。その後二人は駅のレストラン街で食事をした。

そして電車で卯月町へ戻った二人は、そのまま健太郎のアパートに向かった。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてき

た。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあつたフェイスタオルを見せた。それは、今日、S Mチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

「はい…」

健太郎は真歩子をタオルで縛った。

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。それから、姿見の前に二人は立った。

健太郎は真歩子のセーラー服とブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳房を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあつて、最高だよ」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言うとき真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな?鏡の前でしているのを見るのは?」

「は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない?もう、オマンコはぐしょ濡れだよ」

そう言つて健太郎は、真歩子に手を見せた。

「ヤ、ヤアン…。み、見せないで…」

「じゃあ、次は」



そう言つて健太郎は、真歩子のスカートとパンティを一気に剥ぎ取り、下半身を丸出しにした。

「真歩子ちゃん」

「はい」

「久しぶりに、オマンコの毛、剃つてあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子をベッドに横たえた。そして、脚を開かせる。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シエービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てて。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシエービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子用の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…」

「ああつ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして?いつも見せてくれるじゃない?」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの?」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせると、尻たぶを掴み、左右に開く。

「んっ、あつ、そ、そんなに広げないで下さい」

真歩子のアナルが露になる。

「お尻の穴の細かい皺も可愛いなあ」

「ヤ、ヤアン。そんなに見ないで」

「今度は…」

健太郎は、真歩子のアヌスを指で突こうとする。

「ダ、ダメです。汚ないです。まだシャワーに」

「好きな人の体に、汚ない部分はないさ」

「でも…」

「言う事を聞いてくれないの? じゃあ、お仕置きだね」

「はい…、お仕置きして下さい」

「じゃあ、お仕置きするよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。

「お尻が、痛いです…。それに、熱いです。お尻に、健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、おねだりしないと」

「健太郎さんのオチンチンを、お尻に入れて、ください」

「わかったよ。でもその前に…」

そう言つて健太郎は、真歩子のアナルに舌を這わせた。

「チュツ。ペロ」

「ダ、ダメ、そんな…所。そこは、汚いです…。ヒヤウツ！な、舐めないで…」

一度、唇を離して言った。

「好きな人の身体に、汚い部分なんて無いさ」

「でも、まだシャワーに…」

「ありのままの、真歩子ちゃんが欲しいから」

そう言つて、健太郎は再度真歩子のアナルに舌を這わせた。

実際、真歩子のアナルは普段から、排泄物の匂いは殆どしない。清楚なアナルだった。

「イヤ…、イヤア、イヤーツ!!イヤーン!!」

真歩子の声が、部屋に響く。

尻を振つて逃れようとする真歩子をしっかりと押さえ、尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「も、もうダメ…。わ、私、イツちやう…」

そう言つて真歩子は絶頂に達した。

「可愛かったよ」

健太郎は真歩子の耳元で囁くと、再度尻を高く上げさせる。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。魅力的だね」

「も、もう…」

真歩子は、顔を赤く染めた。

健太郎は再び、真歩子の尻を撫でた後、尻たぶを掴み、真歩子のアヌスを外気にさらした。彼女の大事な部分も、丸見えである。

「凄いよ。お尻の穴、さつきよりもヒクヒクしてる」

「ヤ、ヤアン。そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言っただけだよ」

「は、恥ずかしい…。意地悪…」

「じゃあ、今度は…」

健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

「や、止めて……。健太郎さん、これ以上、焦らさないで……」

「そんなにお尻を振って、気持ち良いの?」

「もう、意地悪……」

「だって、真歩子ちゃんのお尻の穴、すぼまったり、広がったりして  
いるよ」

健太郎は、真歩子のアナルへの愛撫を続ける。

「あぁっ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「次は……」

健太郎は、真歩子のアヌスに、指を入れた。ヌプツという音がした。

「ア、アアン……」

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グニグニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「葉月学園のテニス部の持田真歩子ちゃん。こうしている間にも、  
僕の指と真歩子ちゃんのお尻の穴は、しつかりハメハメしているんだ  
よ」

「イ、イヤーン」

そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼  
は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あっさり絶頂に達した。

「可愛いかったね。じゃあ、入れるよ」

「え、ええ……。早く、オチンチンを、お尻の穴に入れて、ください……」  
そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げ  
ていく。更に、乳首を指先で転がす。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつ  
くす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れ  
る。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「あぁっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツーイヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…」

健太郎は男性器を真歩子のアヌスから引き抜いた。大量の白濁が吐き出された。そして真歩子のアヌスは元に戻っていく。

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しみましたよね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起こ

すと、タオルをほどいてから、唇を重ねた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。その後健太郎は真歩子の女性器に挿入。再度二人同時に絶頂に達した…。

【続く】

## 第5章 アパートの部屋でセーラー服姿の真歩子に

3月26日。

この日、健太郎は午前中は《土下座》でバイト。昼食もそこで摂る事にしていた。

というのも、真歩子が春期講習を受けている期間は、葉月学園に足繁く通う事を控える事にしたためである。

一方、真歩子は、健太郎に、卯月駅で待ち合わせをして、それからスケジュールを決める様に話をした。真歩子は、春期講習受講後、葉月駅のレストラン街で友達やテニス部部員と食事を摂るか家で食事を摂るか、健太郎と放課後デートの際に食事を摂るか、その日によって異なるためである。

昼食後。

健太郎は卯月駅に向かった。

卯月駅の改札口にて。健太郎は腕時計に目を遣った。

「もうすぐかな」

そう言った直後。真歩子が電車を降り、改札口を出た。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん」

「春期講習、お疲れ様」

「はい、ありがとうございます」

「で、昼食はどうするの?」

「今日の昼食は、葉月駅で友達と済ませましたので」

「じゃあ僕のアパートに」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!?!」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあったフェイスタオルを見せた。それは、今日、S Mチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

「はい…」

健太郎は真歩子をタオルで縛った。

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。それから、姿見の前に二人は立った。

健太郎は真歩子のセーラー服とブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあって、最高だよ。乳首こんなに立たせて」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言うとき真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言うとき真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。

溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな？鏡の前でしているのを見るのは？」

「は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない？もう、オマンコはぐしょ濡れだよ」

そう言うとき健太郎は、真歩子に手を見せた。

「や、ヤアン。み、見せないで…」

「次は…、真歩子ちゃん、お尻を突き出して」

「は、はい」



真歩子は、健太郎の意地悪な命令には逆らえない。

真歩子がお尻を健太郎の前に突き出すと、彼は彼女のスカートを捲った。そしてパンティを膝まで下ろし、下半身の自由を奪った。

「これで良し。じゃあ、真歩子ちゃん」

「はい」

「久しぶりに浣腸しようか。お腹をキレイにしてあげる」

「は、はい」

健太郎は冷蔵庫から1リットルの牛乳パックを、押し入れから注射器を、浴室から洗面器を持って来た。

「それじゃあ、浣腸をするよ」

健太郎は真歩子のアヌスから牛乳を注ぎ込む。

「アアッ……。っ、冷たいです」

「我慢するんだ。お尻に力を入れて」

「は、はい」

健太郎は真歩子に1リットルの牛乳を浣腸した。

真歩子の尻たぶには、汗が浮かぶ。排泄欲が疼く。下腹部が、ポツコリと膨らんだ。お腹が愛らしい音を奏でる。

「真歩子ちゃん、どうかな？」

「健太郎さん……。も、漏れそうです。お腹が痛いです」

「じゃあ、そろそろだね」

「はい。オナラが、ウンチが出そうです」

「うん」

真歩子の言葉に健太郎は頷く。

「健太郎さん」

「ん？どうしたの」

「お、お願いです。パンティとスカート、脱がしてください……」

「えっ？どうして」

「パンティとスカート、汚れてしまいます」

「うん。じゃあ脱がすけど、その間は我慢出来るよね」

「はい」

真歩子が頷くと、健太郎はパンティとスカートを脱がした。

「よく我慢したね。じゃあ、出して良いよ」

真歩子はしやがむと、健太郎が用意した洗面器に排泄をし始めた。健太郎は真歩子のお腹を優しく愛撫する。

破裂音が、部屋に響く。

「アーン、イイの」

「真歩子ちゃんのオナラ、可愛いね。おっ、今、小さなウンチが出たね。あつ、まただ。ウンチも可愛いね。久しぶりに浣腸したから、牛乳は薄茶色だ。真歩子ちゃんの特製カフェ・オ・レ」

「イヤーン、恥ずかしい」

牛乳は一端逆噴射を止めた後、再度噴き出す。

「ア、アーン。まだ出るう。ヤ、ヤーン」

漸く、牛乳の逆噴射が止まった。

健太郎は真歩子の上半身をベッドに俯せにさせると、トイレで洗面器の汚物を処理し、洗面所で洗面器と注射器を洗うと、洗面器にお湯を入れて戻って来た。

「健太郎さん…、それは…?」

「お湯だよ。もう一度、お腹を洗う浣腸だよ」

「は、はい…」

「じゃあ、浣腸するよ」

そう言って健太郎は、真歩子にお湯で浣腸した。牛乳で浣腸した場合、腸内に牛乳が残っていると、身体に害を及ぼす事がある。そこで、お湯の浣腸、言わば洗腸をしたのである。

暫くして、真歩子のアヌスからお湯が噴き出す。健太郎は洗面器でお湯を受ける。それは白濁しておらず、汚物は無い。全部出たところで、健太郎が尋ねた。

「真歩子ちゃん、お腹の具合は？」

「大丈夫です。痛くありませんし、違和感ありません」

「じゃあ、入れるけど、その前に…」

そう言って健太郎は、洗面器を持って再び浴室に行った。

お湯を処理し、洗面器を洗うと、再度洗面器にお湯を入れて戻って来た。

「健太郎さん？」

「これから、真歩子ちゃんのお尻とオマンコを石鹸で洗うからね」

「は、はい」

頷くと、真歩子は健太郎のされるがままになる。

「これでよし。じゃあ入れるけど、どこに欲しいのかな？」

「オマンコにもお尻にも欲しいです」

「欲張りだなあ。本当に真歩子ちゃんはエッチな女の子だね」

「でも、今日は両方に健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、先にどっちに欲しいのか、きちんとおねだりして」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のお尻に入れて下さい」

「ちゃんと言えたね。でも、まだお預けだよ」

「ええっ!?!」

「ちゃんと態度で示さない」と

「健太郎さんのエッチ。意地悪…」

「恥ずかしがらないで、お尻を振ってごらん」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は再度、尻を振りながら淫らなおねだりをする。

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のお尻に入れて下さい」

「可愛いね。真歩子ちゃんの大きなお尻。でも、お預け」

「意地悪。早くオチンチンを…」

「じゃあ、真歩子ちゃんを縛るタオル、ほどくから」

そう言っつて健太郎は真歩子の縛めを解いた。そして、右手を軽く掴むと、右の尻たぶに宛がわせた。

「えっ?」

「真歩子ちゃん、左手も同じようにして」

「はい」

健太郎の意地悪な言い付けに従う真歩子。

「よし。じゃあ、お尻を広げておねだりしてごらん」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいお尻に入れて下さい」

「ちゃんと言えたね。お尻の穴もヒクヒクしているし、細かい皺も可愛いね。じゃあ、入れるよ」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッチャう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私のお尻が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君のお尻の穴も、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。それに…」

「それに？」

「久しぶりのお流腸、恥ずかしかったですけど、気持ち良かったです。今日は、沢山楽しみましたようね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起こすと、セーラー服を脱がし、ブラジャーを外し、唇を重ねた。

この後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。その後健太郎は真歩子の女性器に挿入。再度二人同時に絶頂に達した…。

【続く】

## 第6章 新年度

3月28日までは、健太郎は真歩子と会ってはいたが、セックスはなかった。

3月29日から31日は、健太郎は《土下座》でのバイトが忙しく、真歩子には会えなかった。というのも、《土下座》に就職した後藤稔への引き継ぎ等でスケジュールが立て込んだためである。

4月1日。

健太郎は卯月町内のコンピューターの専門学校に入学した。

同じ日、真歩子の通う葉月学園では始業式が行われた。

4月5日、土曜日、午後。

健太郎は真歩子のアルバイト先のフラワーショップ《カトレア》に向かったが、そこに真歩子の姿はなかった。

「あれ?」

そう独り言を言った直後。《カトレア》の店長が健太郎に声をかけた。

「田中君、だよね」

「はい、そうですが。持田真歩子さんは…」

「持田君なら、今日は遅れて来るよ」

「えっ?」

「持田君は、今月から、原則第1土曜日は生け花、第3土曜日はフラワーアレンジメントの教室に通ってからここのシフトに入る事になったんだ」

「そうなんです。持田さんは今年、大学受験もありますよ」

「確かにそうだけど、本人が興味があると言っていたからね。それに、それぞれ月1回ずつだから、月謝はこっちで出す事にしたんだよ」

「なるほど」

「もう少しで来るから、店の外で待ってて良いよ」

「ありがとうございます」

それから10分後。《カトレア》の前に、一台のリムジンが停車した。

健太郎は一瞬、「新藤麗子か!？」と思ったが、降りて来たのは真歩子だった。車内には、彼女以外には運転手と二人の女性が乗車していた。

「ありがとうございます」

真歩子が一礼すると、リムジンは《カトレア》を後にした。

「あ、健太郎さん」

「真歩子ちゃん、こんにちは。今、時間は大丈夫?」

「はい」

「びつくりしたよ。店長さんから事情は聞いたけれど、まさかりムジンで来るなんて」

「教室で一緒になった人に、送ってもらったんです。先負学園のO Gの桜木舞さんの車に。その同期の鈴木美穂さんも一緒でした」

「桜木舞さん…、ってまさか!?!」

「ええ、あの都内有数の企業、桜木グループの」

桜木グループは健太郎も知ってはいるが、まさか生け花の教室で真歩子と舞が一緒になるとは思ってはいなかった。

「これまたものすごい人と知り合いになったね」

「ええ。でも思ったよりも気さくな人でした」

「うん。それで明日の事だけ」

「はい、明日は大丈夫、空いています」

「じゃあ、行き先は追って連絡するから」

「わかりました」

真歩子が頷くと、健太郎は《カトレア》を出た。

その後、健太郎は再度《カトレア》を訪れ、デートの約束を取り付けた。

4月6日、午後。

健太郎と真歩子は、卯月町内の《世界一公園》でゆつたりとした時間をごすごした。

健太郎のアパートの部屋にて。

健太郎は真歩子の体を抱き締めた。まずは、キス。次ぎに、服の上から、乳房を触る。それから、スカートを捲り、パンティのクロツチ

の上から女性器を触る。

そして、健太郎は真歩子の着ている服を脱がした。

それから、下着姿の真歩子の身体を、横たえた。

健太郎の身体は、いつも以上に熱くなっていた。

言葉だけではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子を再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」



「うん」

健太郎が頷いた。

真歩子は、必ずセックスの前にシャワーを浴びる。当初は別々に浴びていたが、今では二人一緒に浴びる。

そのまま浴室で挿入する事もある。その場合は、後背位か駅弁ファックである。また、真歩子の陰毛を剃る事もある。更には、真歩子がフェラチオをしてくれる事もある。

それ以外には、真歩子とアナルセックスをする事もある。既に、真歩子のアナルは、開発済で、健太郎の男性器を受け入れてくれる。

但し、今日は身体を洗うのみで、〈お楽しみ〉は、これからである。それでも、二人で一緒に身体を洗うだけであっても、興奮するのは、確かだ。既に健太郎の男性器は、最大限まで大きくなっていた。

シャワーを浴び、丹念に身体を拭いた後。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「あぁっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子の、オ、オマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言って健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け。イイツ。最高だ。

まさしく名器だよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュユで丁寧に拭いた。

そして言った。

「真歩子ちゃん、舐めて。綺麗にして」

「は、はい」

「終わったら、もう一度オマンコに入れるからね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

お掃除フェラが終わった後、健太郎と真歩子は、再度愛し合った。今度は正常位で挿入、フィニッシュは顔射である。健太郎は真歩子の顔を丁寧に拭いた。

「じゃあ、シャワーを浴びるよ」

「はい」

その後、二人で一緒にシャワーを浴びた。

そして服を着ると、二人はアパートを出た。真歩子を自宅まで送るためである。

道すがら、二人は4月に入ってからからの事を話した。専門学校の事、葉月学園の事、生け花やフラワーアレンジメントに興味を持った経緯、受験、部活等。

「それじゃあ、また」

「ああ。またね」

真歩子が家に入るのを見てから、健太郎はアパートに向かった。

【続く】

## 第7章 テニスウェア姿の真歩子と

4月12日、《カトレア》を訪問した健太郎は、真歩子から、4月18日と19日が実力テストという事を聞いたため、13日はデートは無しにして、20日にデートをする事で予め合意していた。

4月20日。

健太郎と真歩子は、卯月町内のスポーツクラブにいた。

今回のデートは、真歩子とのテニスである。真歩子が出場するテニスの春期大会に近い事もあり、健太郎が練習相手を買って出た。

健太郎は真歩子の指導を受け、テニスの腕前を着実に上げていた。

まず最初の30分は健太郎が真歩子のサーブを受ける。

次の30分は健太郎がサーブをして、真歩子がレシーブする。

最後は、試合形式で練習する。

勿論、健太郎はテニスを始めて半年程度のため、真歩子からセットを奪う程ではないが、サーブの練習では真歩子の希望するゾーンに打ち込む事は出来る。

そのためか、時々真歩子から「上達が早い」と言われる事はある。

練習後。健太郎と真歩子は、卯月町の駅前商店街のレストランにて昼食。その後、二人でアパートに向かった。

健太郎と真歩子は、健太郎のアパートの部屋で二人だけの時間を過ごしていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そうやって健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。

そのままベッドに倒れ込む。

テニスウェアとスポーツブラをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ……」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。スポー

ツブラのせいかな？汗の味もしているね」

「健太郎さん、ダ、ダメです。シ、シャワーに…」

「まだダメだよ。真歩子ちゃんのを、たっぷり楽しんでからだよ」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースコートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのおマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのおマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ベッドから降りて。立って。それからベッドのシートに手をついて、お尻を突き出すんだ」

「ええっ？早くシャワーに…」

「まだだよ」

そう言つて健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、お尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよね」

「イ、イヤーン」

そう言つて真歩子は、かぶりを振つた。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言つて真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言つて真歩子は、少し頬を膨らませた。

「じゃあ、シャワーに行こうね」

健太郎は真歩子のテニスウェアを脱がし、彼も服を脱ぎ捨てると、二人で浴室に入った。

シャワーを浴びた後。健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や

何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツいよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツっちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

お掃除フェラの後、今度は騎乗位で挿入。健太郎は再度中に解き放った…。

愛し合った後、真歩子が言った。

「私…」

「ん?」

「健太郎さんに会えたから、ここまで来る事が出来ました。健太郎さんのおかげです。大会、頑張りますね」

「真歩子ちゃん、応援しているよ」

健太郎が答えると同時に、真歩子は彼に抱きつき、唇を重ねた…。

翌週、27日。春期大会で、真歩子は見事に女子シングルの部で優勝した。

【続く】



## 第8章 お花見で

4月27日。テニスの春期大会、女子シングルの部で真歩子は見事に優勝した。

翌日、28日。健太郎は真歩子の家に電話を掛けて、29日のデートの約束を取り付けた。

迎えた29日。

まず健太郎と真歩子は、卯月駅前のレストランで、二人だけの優勝祝いをした。

そして、5月3日から5日は、真歩子が自宅で帰省するたけしも含めた四人で過ごす事から、5月11日にデートをする事で二人は合意した。

その足で、健太郎と真歩子は卯月町を流れる川に向かった。河川敷に桜並木が整備されたおり、今は花見のシーズンという事もあって、二人でゆったりとした時間を過ごしたいと考えたからである。

河川敷にて。

「綺麗…」

真歩子が言った。

「凄いな」

健太郎も続く。

河川敷の土手には、卯月町の《世界一公園》や、以前行った事のある、頼津町の《緑地公園》にも負けない位桜が咲き乱れていた。

「さて、と。下に降りようか」

健太郎が先に降り、続いて真歩子が段を踏んだ瞬間だった。

「キヤツ…!!」

真歩子が小さな悲鳴を上げる。

川原に一陣の風が吹いた。

「えっ!?!」

健太郎が真歩子の方を見ると、彼女のスカートが大きく広がっていた。即ち、健太郎の視線と真歩子の下着がモロに合っていた。

「け、健太郎さん…、み、見ちゃった?」

「み、見てない、見てない。ピンク色のパンティなんて絶対に見てない」

健太郎は否定したが、誰の目から見ても信憑性はなかった。

「み、見ているじゃないですか…」

真歩子が顔を真っ赤にしながらスカートを抑える。

その後、健太郎と真歩子は手を繋ぎながら土手をしばらく歩き、ベンチで一休みしてから散歩を再開したのだが、どこかぎこちないまま時間が過ぎていった。

しかし、それは気まずい、という類いではなかった。どこか熱っぽい物だった。

「ご、ごめんなさい。私に変な物を見せちゃったばかりに」

「変だなんてそんな!!とても良い物を。まさしく御利益…。って、いやそうじゃなくて」

二人の会話はどこかちぐはぐ。健太郎らしさも全く出なかった。

「実は、今日健太郎さんとのデート、という事で、気合い入れて、下着を選んだんです」

「えっ!?そ、それって…」

「あ、別に見せるつもりとか、そういうのじゃなくて。変なの穿いて来なくて良かったっていうか…。あわ、私、何言っているんだろ…」

「変なの、って、似合っていたし、それに私服だから、派手な下着でもガーターでも大歓迎だよ」

気が付くと、空は夕暮れに差し掛かり、河川敷をずっと散歩していた健太郎と真歩子は、いつの間にか鉄橋の高架下に来ていた。桜の木は少なくなり、周囲には誰もいない。

高架下、少し冷えた影の中、周囲を再度確認した健太郎と真歩子は互いを見つめ合うと、どちらともなくキスをしていた。

健太郎は真歩子の服をたくしあげ、ブラジャーをずらし、乳房を露にする。

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。同時に右の乳房を愛撫する。

次に健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛

撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「もうこんなにな…。外だから、興奮しているのかな？」

そう言つて健太郎はパンティイから手を出した。

「や、やあん。み、見せないで…。健太郎さん、エッチです」

「これなら、OKだね」

「ええ。お願い、健太郎さんが、欲しいの…。早く…、オマンコにオチンチンを入れてください」

真歩子は、高架下の冷たい壁に手をつき、尻を健太郎の方に向けた。そして、淫らなおねだりをする。

「じゃあ入れるよ」

そう言つて健太郎は真歩子の女性器に男性器を挿入した。

「はっ、ううんっ…ああっ。け、健太郎さん…」

健太郎が真歩子を突く。健太郎は真歩子の尻を掴み、男性器を出し入れする。前をはだけた真歩子は、少し大き目で、形の良い乳房を揺らしながら、甘い声を出す。更に、彼女は膝を振るわせ、手の置き場所を何度も変えては体勢を保つ。

「あつ、あつ、あ、熱い。け、健太郎さんのオチンチン…、はうっ」

「真歩子ちゃん、オマンコ、どんどん濡れているよ。そんなに気持ち良いの？」

「は、はい。き、気持ち良いです…。やつ、やんっ。健太郎さん、そ、

そこ、そこが擦られるの、んんっ…、気持ち良いの…」

「こう？真歩子ちゃんは、ここが気持ち良いの？」

「は、はい…。ん、んっ…、ああっ…、ダメ、そ、そこ、やつ…、感じちゃう…」

「真歩子ちゃんは背中側の膣壁が気持ち良いんだ。ここを擦られるのが好きなんだね」

健太郎が言葉責めをする。同時に突き上げる様に擦ると、真歩子は身体を振りながら嬌声を上げる。

真歩子はボブの髪を揺らしながら荒い呼吸で喘ぐ。

「んっ、あっ、あうっ、んっ、ああっ…、んっく、あふ、は、はうっ、はふっ、ふう、ふう…。あんっ、健太郎さん、気持ち良い、んあっ、た、立っていられない…。んっ、身体が溶けちゃいそうな位気持ち良い…。オ、オマンコが壊れちゃう」

「真歩子ちゃん、外でエッチするのは、興奮する？」

「わ、私、こんな所でエッチするなんて…。んっ…。ああっ、誰も来ませんよね…。？」

「大丈夫、来たって上の土手の方からじゃここは見えないよ…」

「で、でも。誰かに見られるかと思うと…。特に、私の学校の誰かに見られたらと思うと…。頭の中が真っ白になる位ドキドキして…。ああんっ、んんっ、んっく、あうっ…。まさか、健太郎さんと、こ、ここで、こんな所でエッチするなんて、思ってもみなくて…」

「真歩子ちゃん、外でエッチするのは、もしかして、嫌だった？」

真歩子が頭を横に振る。

「わ、私、そもそも、外でエッチするのは、嫌ではありません。それに、健太郎さんと一緒に歩いたり、ベンチで話したりしている内に、もっと触れ合いたくなって、ここでキスされた時に、か、身体の奥が、あ、熱くなって、ん、んあっ、ドキドキが止まらなくなって…。け、健太郎さん、こ、こんな私、んくっ…。き、嫌いですか…。？エッチな女の子は…。嫌いですか？」

「嫌いなもんか…。誘ったのは僕だよ。それに…。真歩子ちゃんの事が嫌いならば、僕のチンポ、こんなに固くなってないよ」

「ふふっ…。そうですね。んっ、健太郎さんのオチンチン、ずっと固くて…。大きくて…。んあっ…。わ、私の気持ち良い所に、あふ、ず、ずっと当たって…。ん、あ、んあっ…。私も、嫌だったら、こ、こんなに気持ち良くないです…」

「『嫌だったら、こ、こんなに気持ち良くないです』、か。そうだよ。好きでもない男とエッチしても、学校帰りにレイプされても、感じる訳ないね」

「は、は…。…」

真歩子が頷いた直後。彼女の女性器の締め付けがきつくなつた。

「くっ…、んんっ…。ま、真歩子ちゃん、で、出そうだ…」

「け、健太郎さん…、こ、このまま中に…、んっ、健太郎さんの一杯…、だ、出してください」

「な、中!?良いの…?」

「は、はい…、け、健太郎さんの全部、ほ、欲しいです…」

「くっ…、んん…、じゃあ真歩子ちゃん、出すよ。んっ…くうっ…!!  
んああっ…、くううっ…!!」

「あっ…、んああ…。あ、熱いのが、お腹の中に…っ、で、出てる…」  
真歩子は膝から崩れ落ちるのを必死に堪えながら、健太郎との繋がりを保っていた。

健太郎は真歩子を背中から抱き締めながら、腰を更に押し付け、全てを彼女の中、奥の奥まで注ぎ込んだ。

健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜く。その直後、真歩子はへたり込むかの如くにしゃがみ込んだ。

「ま、真歩子ちゃん?」

健太郎の問いに真歩子は答えず、彼女はスカートを捲り、パンティを少しずらした。

「あ、ああっ…。で、出る。出ちやう!!も、漏れちやう…!!」

その直後、真歩子は放尿した。

「真歩子ちゃん、イキながらオシッコするんだ」

「は、恥ずかしい…」

「恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

真歩子が頷く。

全て出し終えてから、健太郎と真歩子は股間の始末をすると、河川の敷のベンチに座った。

「桜だけじゃなくて、僕達も咲き乱れた、ってヤツかな…」

「えっ…!?な、何ですか、その言い方」

「ははは、冗談だよ」

「でも、花つて、種をつけるために咲く訳で…、それは桜も同じ訳で

すから」

「だからかな。春は恋をしたくなるのは」

「私と健太郎さんが、外でこんな事を、エッチをしたのも、きっと桜の持つ魔力のせいなんでしょうね」

「えっ!? 真歩子ちゃんがエッチな女の子だからじゃないの!?!」

「も、もう!! 人がせっかく綺麗な感じに収め様としたのに!!」

真歩子が頬を膨らませながら、健太郎の胸を叩く。二人の間を、桜の花びらを含んだ風が通り抜ける。二人が空を見上げると、役割を終えた花びらが風に乗って舞っていた。

「健太郎さん…」

健太郎と真歩子は、桜の花びらを見送るかの様に、自然と唇を重ねた。

そして二人は帰路についた…。

【続く】

## 第9章 テニスウェア姿でSM

5月11日。

健太郎と真歩子は、卯月町内のスポーツクラブにいた。今回のデートも、テニスである。但し、今回は練習ではなく、健太郎と真歩子の勝負であると同時に、健太郎を真歩子がテストする意味もあった。

「健太郎さん、上達は早いですけどね」

「有り難う。真歩子ちゃんにそう言われると嬉しいよ」

「でも、まだまだですね。今日、私から1セット取れたら、何でも言う事を聞きますよ」

「言ったな。確かに聞いたぞ」

「はい」

真歩子が笑顔で頷いた。

そして、健太郎と真歩子の真剣勝負が始まった。

実は、健太郎は、真歩子の練習相手を務めた際や、彼女の試合を観戦した際に、彼女の弱点を徹底的にメモした上に記憶していた。

試合開始直後。第1セット。

まず健太郎は、真歩子の弱点ではなく、敢えて得意とする所にボールを打ち込んだ。そして、ひたすら耐える作戦に出た。

その後、健太郎は真歩子の苦手とするゾーンにボールを打ち込み、ポイントを取取。遂に1セットをゲットした。

「健太郎さん、随分研究したんですね」

「ああ。このゴールデンウィーク期間中に真歩子ちゃんの弱点や苦手とするゾーンや試合運びを研究したからね」

「参りました。けど、次からは負けませんよ」

その言葉通り、真歩子は試合運びを修正して来た。第2、第3セットを取取。セットカウント2対1で真歩子が勝利した。

試合後。スポーツクラブを出た二人は、卯月駅前のファストフードで昼食を摂り、その足で健太郎のアパートに向かった。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言つて健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあつたフェイスタオルを見せた。それは、今日、SMチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

「は…」

健太郎は真歩子をタオルで縛った。

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。それから、姿見の前に二人は立った。

実は、健太郎は真歩子とSMチックなセックスをする際、鞭やバイブ、ボールギャグや縄は好まない。あくまでも、自分のテクニクでセックスを楽しむ主義である。又、縄は素人に扱える様な代物ではない。それ故に、健太郎は真歩子を縛るのはタオルか手錠にしている。更に、下半身の自由を奪うには、縄や足枷は要らない。パンティを膝の辺り位迄下げれば十分なのである。

背後からテニスウェアとスポーツブラをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあつて、最高だよ」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」  
そう言つと真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に入れて、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」



そう言って真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな？鏡の前でしているのを見るのは？」

「やっぱり、は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない？もう、オマンコはぐしょ濡れだよ」

そう言って健太郎は、真歩子に手を見せた。

「ヤ、ヤアン…。み、見せないで…」

「じゃあ、次は」

そう言って健太郎は、真歩子のミニスカートを一気に剥ぎ取った。

「アンダースコートって、可愛いよね」

そう言って健太郎は、アンダースコートの上から、真歩子の女性器や尻を愛撫する。

「さて、次は…」

健太郎は、傍らにあった、自分のテニスラケットを握った。

「健太郎さん？ラケット、どうするんですか？」

「こうするんだよ」

そう言っていると健太郎は、ラケットを股関節で挟ませた。

そして、股間に触れている、ボールを打つ部分、フェイスのフレームで股間を擦る。

「ヤッ、イヤッ」

体を振る真歩子。

「次は…」

今度は、健太郎はラケットのガットで乳房を責める。

「ダメです…」

「真歩子ちゃんのオツパイが、網焼きみたいになっちゃうぞ」

「や、止めて…」

「今度は…」

「キヤッ」

真歩子の小さな悲鳴が響く。

「こうだ!!」

そう言うのと健太郎は、ラケットのグリップの先端で真歩子の膣口を突く。

「ダメです…。や、止めてえ!!」

真歩子が叫んだ直後。彼女は絶頂に達し、潮を噴いた。

「は、恥ずかしいです…」

「感じ過ぎて、潮を噴いたんだ…。しかも、パンティとアンダーズコートを穿いたままで…。先にイツちゃうなんて、お仕置きだなあ」

「お、お仕置きですか？」

「うん。今日は真歩子ちゃんから1セット奪ったからね。何でも言う事を聞いてもらおうよ」

「は、はい」

「じゃあ、次は…」

そう言うのと健太郎は、真歩子のアンダーズコートとパンティを脱がした。

健太郎は真歩子の尻を愛撫した後、平手打ちをする。乾いた音が、部屋に響く。

「アッ!!」

すぐに真歩子の尻は、真っ赤になる。

「真歩子ちゃんの可愛い尻が、真っ赤に腫れちゃったよ」

「お尻が、痛い…。それに、熱いです」

「でも、今日はもう少しお尻ペンペンだよ」

「はい」

真歩子が頷くと、健太郎は本棚の上から、ある物を下ろした。

「健太郎さん、それは…?」

「竹製の50センチメートルの物差しだよ。今日はこれでお尻ペンペンするよ」

「はい」

何でも言う事を聞く、と言った以上、真歩子は健太郎に従順になる。

健太郎は真歩子の尻たぶに物差しを宛がうと、まずは円を描く様に愛撫する。

そして、動きを止めると、健太郎は真歩子の尻を物差しで叩き始め

た。

手とは違う、乾いた音が部屋に響く。

「あんっ!!」

「真歩子ちゃんのお尻、良い音がするね。叩き甲斐があるね」

「い、痛いです…!!」

「ダメだよ、真歩子ちゃん。我慢しなくちゃ。我慢しないと、まだまだお尻を叩かれる事になるよ」

「はい…」

真歩子が頷いた。ほどなく、健太郎は真歩子の尻へのスパンキングを止めた。

「次は、立て膝をして」

「はい」

ベッドの横で、言い付けに従う真歩子。

健太郎は、ベッドの上に置いた、真歩子のパンティとアンダーズコートを手を取った。

「真歩子ちゃんのパンティ、愛液と潮でビショビショじゃない。しかも、透け透けだよ」

そして健太郎は、真歩子の目の前でパンティを広げた。

「ほら」

「ヤ、ヤアン」

真歩子が頭を振る。健太郎は、そのまま真歩子のパンティの匂いを嗅いだ。

「真歩子ちゃんの愛液と潮、それに汗かな？良い匂いがするよ」

「そんな、クンクンしないで下さい。は、恥ずかしい…」

「そんな事言わない。自分で嗅いでごらん」

そう言うと健太郎は、真歩子のパンティを物差しに下げて、真歩子の顔面に突き付けた。

「イ、イヤッ!!」

真歩子は顔を背けた。

「言う事を聞かないと、又お仕置きするよ」

健太郎の言い付けに従い、顔を正面に向け、パンティに染み込んだ

匂いを嗅ぐ真歩子。

「ね、真歩子ちゃんの匂い。良いでしょ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

「次は、僕のチンポを舐めて、大きくするんだ」

「はい」

真歩子は頷くと、健太郎の男性器に舌を這わせた。

真歩子は手が使えない分、舌や唇、頭の動きに工夫を凝らす。健太郎の射精感はすぐに高まる。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

「真歩子ちゃん、出すからね。全部飲んで」

そう言った直後。健太郎は真歩子の口内で射精した。

「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中、気持ちいいから…。それに上手になったからね」

「うふふっ…」

真歩子が笑みを浮かべた。

次に、健太郎は真歩子の縛めを解き、テニスウェアを脱がした。

「それじゃ、シャワーに入ろうか」

「ええ」

シャワーから出た後、健太郎が尋ねた。

「じゃあ、次は…、どうして欲しいのかな？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のオマンコに入れて下さい」  
尻を振り、淫らなおねだりをする真歩子。

「ちちゃんと言えたね。じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。そして、真歩子の尻を撫で回した。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…!!」

健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。更に、背後から真歩子の乳房を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てをぶちまけた。

「あつ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

この後、健太郎は真歩子の両手を胸の前でタオルで縛った。

「真歩子ちゃんは、今日は何でも言う事を聞くんでしょ。僕がよし、と言う迄は」

そのまま、再度挿入し、真歩子の中で射精した。この時も、二人同時に絶頂に達した…。

【続く】

## 第10章 遊園地でデートの後

5月17日。

健太郎は、真歩子の自宅に電話を入れ、デートの約束をした。翌日、18日。健太郎と真歩子は、葉月町の遊園地に向かった。

遊園地に来たのは、去年の夏休み以来の事だった。

去年は絶叫マシンに二人で乗った際にスカートが捲かれて、健太郎は真歩子の下着を見てしまったが、その場は何とか誤魔化した。

又、二度目の遊園地でのデートでは真歩子に「遊園地には何回来ていますか」と質問され、健太郎は「真歩子ちゃんと同じ位かな」と答えていた。

今年の遊園地でのデートは、二人で大観覧車からの景色を静かに楽しみ、園内のフードコートで食事を楽しんだ。

卯月町、健太郎のアパートの部屋にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子の服を脱がし、下着姿にすると、再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」  
唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんて転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。



真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんで転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああつ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな?」

「真歩子のオマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの?」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああつ…、入つて来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのオマンコ。〈松葉崩し〉、恥ずかしいとか言つて…。本当は好きなんでしょ、真歩子ちゃん」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」  
「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。二人は身体を丹念に拭いた。そして、健太郎が聞いた。

「まだ、時間は大丈夫だよね」

「ええ」

真歩子が頷く。今日のデート、遊園地のオープン時間に合わせて早めに卯月町を出発、昼食後、早めに遊園地を出て葉月町から戻つて来た。そのため、まだ時間に余裕はあった。

「じゃあ…、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃つてはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になつたため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ、お口でして」

「はい」

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は、僅かに蠢く。この時、健太郎は、手が使える状態の真歩子に、ある事をしてみたくなつた。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!？」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を咥えさせた。

所謂、ヘイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子の口唇と舌による刺激に、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サディスティックになる健太郎。

真歩子の口の中で、健太郎は大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんんーっ」

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…。その、ちよつとだけ怖かったです。でも…」

「でも？」

「どうして、急に?いつもなら、私の手が使えない時にするのに…」

「たまには、こういうのも有り、かなって」

「もう、健太郎さんのエッチ…、意地悪」

「じゃあ次は…」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子に跨がる様に言ってから男性器を挿入した。所謂、対面座位である。

対面座位か後背座位は、お風呂でエッチする時に多いが、時々はベッドや椅子でする事がある。健太郎は真歩子を抱き締めると、最奥を突く。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の右の乳房を愛撫し、左の乳首

を舌先で転がす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いや…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締めまりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのおまんこの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の手の指先が、健太郎の肩を掴んだ。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今度は、中に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「な、中!？」

「今日は、大丈夫だから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して…」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好き」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

それから二人は、再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。それから、彼は帰路についた…。

【続く】

## 第11章 ブルマー姿でSM

5月24日。

《カトレア》を訪ねた健太郎は、真歩子から6月5日と6日が葉月学園の中間テストと知らされた事から、25日と6月1日はデートを無しにして、テスト明けの6月8日にデートする事で合意した。

その間健太郎は、叔父の経営する喫茶店《土下座》を手伝う一方で、パソコンの専門学校での勉強に真剣に取り組み、まず帝商の文書作成と表計算の初級の資格を取得した。

同じ頃、《土下座》に就職した健太郎の悪友、後藤稔は、昼は調理師学校に通い、夜は《土下座》のシフトという生活を送っていた。

6月7日。

健太郎は真歩子の家に電話をし、日程を再度確認した。

8日は真歩子の所属する葉月学園テニス部は、午前中に練習があるため、昼に卯月駅で待ち合わせして、その足でデートする事になった。

8日。卯月駅。部活を終えた真歩子が、改札口を出た。上下共にジャージを着ていた。葉月学園のロゴ入りである。

「真歩子ちゃん、お疲れ様」

「あ、健太郎さん。お待たせしました」

「で、昼食はどうするの？」

「今日は、昼食はまだです」

「じゃあ行こうか」

「はい」

二人はその足で、卯月駅前の商店街にあるレストランで食事をした。

昼食後。アパートに向かう途中、健太郎が真歩子に訊いた。

「今日はジャージだけど…、どうして？」

「今日の練習は、テスト明け、という事もあって、走り込みとストレッチをして、それからテニスコートに出たんです。中は、Tシャツとブルマーです」

「それで、テニスウェアじゃなかったんだ」

「ええ」

真歩子が頷いた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、ジャージを脱がした。ジャージの下は、彼女の言う通り、葉月学園のTシャツと紺色のブルマーだった。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあったフェイスタオルを見せた。それは、今日、S Mチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、後ろ手を組んだ。

健太郎は真歩子をタオルで縛った。

「じゃあ…」

「はい」

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。それから、姿見の前に二人は立った。

健太郎は真歩子のTシャツとブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳房を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあって、最高だよ」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言っていると真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言って真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな？鏡の前でしているのを見るのは？」

「は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない？もう、オマンコはぐしょ濡れだよ」

そう言つて健太郎は、真歩子に手を見せた。

「や、やあん…。み、見せないで…」

「じゃあ、次は」

そう言つて健太郎は、真歩子のブルマーとパンティを一気に剥ぎ取つた。

「真歩子ちゃん」

「はい」

「久しぶりに、オマンコの毛、剃つてあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子をベッドに横たえた。そして、脚を開かせる。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シエービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシエービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「ええ、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。それから、洗面器のお湯を捨て、中を



洗った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…」

そう言つて健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「ヤ、ヤンツ」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

「イ、イヤです。恥ずかしいです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの?」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は」

「はい」

「あっちに行こうか」

そう言つて健太郎は、寝室からダイニングキッチンに真歩子を連れ出した。

「えっ?」

健太郎は、食卓用の椅子を横に並べた。そして言った。

「じゃあ、椅子の上にしやがむんだ」

健太郎は真歩子に、椅子の座面にしやがむ様に命じた。

「は、はい」

「次は、左足を片方の椅子に乗せるんだ」

真歩子は健太郎の言われるまま、左足を椅子の座面に乗せる。  
「それじゃあ」

そう言つて健太郎は、左右の椅子の間隔を開けていく。  
真歩子の両脚は、所謂へM字開脚になる。

「イ、イヤーツ!!」

「これでよし」

「は、恥ずかしいです」

「じゃあ…」

そう言つて健太郎は、洗面器を再度持つて来ると、床に置いた。

「健太郎さん…?」

「真歩子ちゃんのオマンコ、丸見えだね。綺麗だね。可愛がつてあげる」

「は、はい」

健太郎は真歩子の女性器を愛撫する。

ほどなく、真歩子は下半身を振り始めた。

「け、健太郎さん…。ダ、ダメ…」

「どうしたの?」

「オシッコが、も、漏れそうです…」

「出してよ。そのために、洗面器を用意したんだから」

「アアツ、出ちゃう」

そう言つた直後、真歩子は失禁した。

「ア、アーン…」

真歩子は勢い良く放尿する。洗面器に薄黄色の液体が溜まる。

暫くして、真歩子の放尿が止まった。

「可愛かつたよ、真歩子ちゃん」

健太郎は、真歩子の尿をトイレで処理し、トイレットペーパーを取り、洗面器を洗つてから戻つて来た。

健太郎は、真歩子の女性器を丁寧に拭いた。そして言つた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。椅子から降りて。シャワーに行こうか」

「はい」

健太郎は真歩子のタオルをほどき、Tシャツとブラジャーを脱がした。そして二人はシャワーを浴びた。

シャワーを出した後、健太郎は真歩子を、再度タオルで後ろ手に縛つ

た。

そして健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせると、尻たぶを掴み、左右に開く。

「んっ、あつ、そ、そんなに広げないで下さい」

真歩子のアナルが露になる。

「お尻の穴の細かい皺も可愛いなあ」

「ヤ、ヤアン。そんなに見ないで」

「今度は…」

健太郎は、真歩子のアヌスを指で突こうとする。

「ダ、ダメです。汚ないです」

「好きな人の体に、汚ない部分はないさ」

「でも…」

「言う事を聞いてくれないの？じゃあ、お仕置きだね」

「はい…、お仕置きして下さい…」

「じゃあ、お仕置きするよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。

「お尻が、痛いです…。それに、熱いです。お尻に、健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、おねだりしないと」

「健太郎さんのオチンチンを、お尻に入れて、ください」

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツーイヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。オマンコが、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しみましたよね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起こすと、タオルをほどいてから、唇を重ねた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒に再度シャワーを浴

びた。その後健太郎は真歩子の女性器に挿入。再度二人同時に絶頂に達した…。

【続く】

## 第12章 水族館でデートの後

6月14日。

この日、真歩子は《カトレア》の配達で《土下座》を訪問した。マスターは不在だったが、山下美夏が応対した。そして健太郎もシフトだったので、その際にデートの約束をした。

翌日、15日。

健太郎と真歩子は、水族館に来た。

昨年、水族館にてデートした際、館内での写真撮影を巡って係員や警備員と一悶着あったが、健太郎は大人しく引き下がり、真歩子とのデートを楽しんだ。帰り際に、健太郎は水族館の「お客様の声」に投稿した。と言っても、係員を悪く言った内容ではなく、撮影可能な場所を明示して欲しい、という内容だった。

健太郎はリーフレットを取り、一部を真歩子に渡した。

昨年とは異なり、撮影可能な場所をカメラのアイコンで示してあった。

「これなら、写真撮影しても大丈夫だね」

「そうですね」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

撮影可能な場所で写真を撮影し、館内のカフェレストランで食事をしてから、健太郎と真歩子は卯月町に戻って来た。

健太郎が暮らすアパートの部屋にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、彼女の着ている服を脱がした。そして、下着姿の真歩子の身体を横たえた。

健太郎の身体は、いつも以上に熱くなっていた。

言葉だけではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子を再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌尖で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

シャワーを浴びた後。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああつ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと行ってごらん」

「意地悪。エッチ。真歩子のオマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、ご褒美だよ。入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああつ…、入つて来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」



そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いいよ。真歩子ちゃんのオマンコ。何て良く締まるんだ。イツ。最高だ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。

健太郎は真歩子に男性器を深く啜えさせた。

「出すからね。全部飲んで」

真歩子の舌の先端が健太郎の男性器に触れた直後。健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。それから、二人は丹念に身体を拭いた。そして、健太郎は言った。

「ねえ、真歩子ちゃん」

「はい」

「僕はまだ元気だから。見てごらん」

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言つて健太郎は真歩子に、下半身を見る様に促した。健太郎の

男性器は、再度フル勃起していた。そして真歩子を再度ベッドに横たえた。

健太郎は右手で左の乳房を包み込むと同時に、左の乳首に舌を這わせた。舌先で転がした後、唇で包み込み、音を立てて吸う。その間も、右の乳首を摘まんで転がす。

それから、真歩子の女性器を押し広げ、舌と指で愛撫する。

更に陰核を剥き出しにして舌で刺激する。

そして溢れ出した蜜を吸う。

「ねえ…、お願い」

「ん？どうしたの？」

「じ、焦らさないで…。早くして」

柔らかさと弾力を併せ持つ乳房も、ピンク色の乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

で、今回も健太郎はちよつと意地悪をする。

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ」

「もう…」

そう言いながら、真歩子は、大事な部分を指で開いた。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

「健太郎さんが、欲しいの…。早く、オチンチンを真歩子のオマンコに入れて…」

真歩子は、淫らなおねだりをする。

その直後、彼女は耳まで赤くした。

そして健太郎も、心臓が高鳴った。

健太郎は真歩子の中に、再度、男性器を挿入した。

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい

締めりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「け…、健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのおマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコ溶けちゃう。

イツっちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今度は、中に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「な、中!？」

「今日は、大丈夫だから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して…」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好き」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

それから二人は、再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。それから、彼は帰路についた…。

【続く】

### 第13章 土曜日、土砂降りの日に

6月21日、土曜日。

この日、昼過ぎ、土砂降りになった。

真歩子はフラワーアレンジメントの教室終了後に《カトレア》に来たのだが、来た時は降っていなかった雨が、直後に降り始め、アルバイトを終え、帰宅時間になっても雨は止まなかった。

一方の健太郎も、《土下座》のシフトを終え、帰宅しようとして店を出たが雨脚が強く、にっちもさっちも行かなかった。そんな中、真歩子が《土下座》に駆け込んで来た。

「あ、健太郎さん」

「真歩子ちゃん!? ヒドイ雨になったね」

「ええ。そんなに《カトレア》とここは離れていないのにびしょ濡れになっちゃいました」

僅かな距離ではあったが、真歩子は肌や下着が透ける程濡れていた。それ位雨脚が強い。

「あ、真歩子ちゃん。透けてる…」

「あ、あんまり見ないでください。流石にちよつと恥ずかしいです…」

「ごめん、ごめん。つい、ね」

健太郎は謝ったが、刺激的な姿に目が離せずにした。

「天気予報でこんなに外れる事ってあるんですね」

「1日中快晴、って予報ならそりゃあ傘だつて置いて来るよな」

「同感です…」

苦笑しながら真歩子が頷いた。そして続けた。

「しかし、この強い雨、結構長続きしそうですね」

「まさかこんなに濡れた状態でずっとここで雨宿りする訳にもいかないし…」

真歩子が頷くと同時にくしゃみをした。そして言った。

「ですよね…。少し寒くなってきました」

健太郎が頷く。そして、徐に真歩子に提案した。

「真歩子ちゃん。ここからだど、卯月駅が近いから、まず駅に行こう」

「はい」

健太郎と真歩子は、卯月駅に行き、駅の売店でレインコートを買った。

「じゃあ、この足で真歩子ちゃんの家に行こう」

「はい」

駅を出た二人。真歩子の自宅は、卯月駅から近い。その途中、雷が鳴った。

「これはヤバいな。やむを得ない」

健太郎がそう言うと、真歩子と一緒にラブホテルに駆け込んだ。

「取り急ぎ、服を乾かさないと…」

「健太郎さんも身体を拭かないと…」

健太郎は無言で頷くと、服を脱ぎ、身体を拭いた。

「後、真歩子ちゃん。風呂の用意が出来たから」

「じゃあ、一緒に…、入りませんか」

「ああ」

真歩子の提案に健太郎は同意した。

「じゃあ、真歩子ちゃん。オマンコとお尻を石鹸で洗って。一回湯船に浸かろうか」

「は、はい」

「体を温めて、それからしっかりと体を洗ってからだよ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

「じゃあ、そろそろ体を洗おうか」

「はい」

健太郎は風呂の椅子に腰掛けると、真歩子に言った。

「じゃあ、頼むよ」

「はい」

真歩子は頷くと、健太郎の体を洗い始めた。

真歩子の手が、健太郎の体に触れる。その手が、彼の男性器に触れた。真歩子の掌と指は少し強めに、彼の男性器を包み込む。堪らず、

彼は少し仰け反った。

「つつ…」

「健太郎さんのそういうところ、可愛いですね」

「真歩子ちゃん…」

「でも、まだイツたらダメですよ」

真歩子はそう言つて、少しイタズラっぽく笑つた。

その後、真歩子は健太郎の体を丹念に洗い、石鹸を洗い流した。

「はい。終わりました。次、お願いします」

そう言つて、真歩子は風呂の椅子に座つた。

健太郎はタオルに石鹸をつけると、真歩子の体を丹念に洗う。

真歩子の乳房、腰、女性器、尻、太腿にも触れるが、ここはソフト

タッチである。

そうこうしている内に、健太郎は真歩子の体を洗い終わった。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗つ

て。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗つてから、交代で健太郎が頭を洗う。

頭を洗い終わつて、湯船に入ると、健太郎は真歩子を立たせてから

抱き締め、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

「じゃあ、次は、しゃがんで」

「はい」

言われるまま、しゃがむ真歩子。彼女の眼前には、限界までそそり

立った健太郎の男性器。

「真歩子ちゃん。お口でして」

真歩子は頷くと、健太郎の男性器を柔らかい掌で包み、舌先で愛撫し始めた。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、浴室に響く。

「真歩子ちゃん」

「ん…」

健太郎が声を掛けると、真歩子は彼の男性器を啜えたまま、上目遣いで彼を見た。

「じゃあ、そろそろ」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子に背中を向けた状態で跨がる様に言ってから男性器を挿入した。所謂、後背座位である。

お風呂でエッチする時は、大抵は対面座位か後背座位である。健太郎は真歩子を抱き締めると、最奥を突く。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の右の乳房を愛撫し、左の乳首を指先で転がす。

「真歩子ちゃん、オツパイ、気持ち良いんだ」

「は、はい。それに…」

「それに…？」

「ん、あ、温かいです…」

「お湯の中ですのって、温かくって、気持ち良いよな」

「ん、んく、別にお湯だけじゃありません…。健太郎さんと触れ合っているところも…。温かいというより、あふっ、熱いです」

真歩子がそう言って、健太郎と繋がっている部分を触る。

「んっ…、あっ…、んあ…、本当に、入っているんですね」

「そりゃそうだよ。ほら、怯える事はないから、もっと触ってみなよ」

健太郎は律動のピッチを下げた。ゆっくりと腰を動かし、抽送が真歩子にもわかる様にする。



「ああっ、健太郎さんの長いオチンチンが、私の中を出たり入ったり…。本当に、全部…」

「ああ。僕のチンポのサイズを考えると、この辺位まで入っているんじゃないかな？」

健太郎はそう言つて、真歩子の可愛い臍の下辺りを指でさする。

「ん、んく、そ、そんな所まで…、健太郎さんのが…っ、んあっ、んああんっ」

健太郎は真歩子の膣の奥、子宮口の入り口付近を男性器の先端で押しした。

「あっ、んっ…、奥に来てるっ…、お、お腹の奥、んああっ」

「…を押しえると、もつと良くわかるのかな？」

健太郎は先程指でさすった部分を掌で押しながら、そこを狙って突き上げる。

「あ…、あっ…、健太郎さん、わ、わかります。ん、んく、ふ、太くて硬いオチンチンが私のお腹の中にあるのが…、はううっ…」

真歩子にとってそこは快感が強い場所だったのか、それとも彼女のお腹の中が健太郎の男性器で埋まっている事に興奮したのかは彼にはわからなかったが、真歩子は身体をびくんびくんと反応させ、湯面を波立たせる。

「…、感じるんだろ？気持ち良いんだろ？もつと突いてやるよ」

健太郎は真歩子の反応を見ながら角度を変え、更に強く擦る。

「あ、あっ、んあっ、そこっ、んくっ、そ、そんなにされたら、あふうっ！声が、で、出ちゃいますっ」

「もう充分声が出ているぞ。誰かに聞かれる訳じゃないんだ。もつと声出してよ。僕は真歩子ちゃんが気持ち良さそうに喘いでいるの、好きだから」

「はっ、恥ずかしい事、い、言わないでください。あっ、んっ、んんっ…、イ、イイツ、気持ち良い…っ、お腹の奥、グイグイ押されて、んくうっ…」

「ほら、真歩子ちゃんも自分で気持ち良い所を触ったらどうかな？もつと気持ち良いんじゃないか？」

健太郎は真歩子の手を取り、彼女の股間へと伸ばす。そして、男性器が出入りしている所だけでなく、莢の様になっている襞を広げ、その先端にある小さな粒を彼女自身に弄らせた。

「あ…、あつ…、これ…、ダ、ダメツ、んく…、身体が痺れちゃいます…。オナニーして自分でクリトリスを触っても、んあつ、こんな風には…ならないのにつ、あつ、あつ、んああつ。中を健太郎さんに擦られる度に、んくつ、ここが敏感になっていく気がします…。ク、クリトリスを弄ると、中も胸もいつもより感じて…」

「オマンコだけじゃなく、オッパイもか…」

健太郎は空いているもう片方の手で真歩子の乳房を包み込む様に揉みしだく。そして指先で硬くなった乳首を指先で転がす。

「あつ、あつ、ああつ！んんつ！ダ、ダメエツ、ダメです…、ぜ、全身が溶けちゃいます！こ、こんなの、んああつ…、お、おかしくなってます！あつ、んんつ、んんつ…!!」

真歩子が股間を弄るのを止めようとしたので、健太郎は強引に彼女の手を掴んで指先で弄らせる。

「あつ、んんつ、んんつ!!止めてえ、止めてください。これ以上、感じる所を触られたら、はううつ。ほ、本当に、お、おかしくなってます。んくうつ、気持ち良過ぎて、あひつ、わ、訳がわからなくて…つ」

真歩子が脚をバタつかせ、バシヤバシヤと湯を波立たせる。しかし、この体勢では、真歩子は健太郎に後ろからしっかりと抱き抱えられているため、逃げる事は出来ない。

「あつ、んんつ、んんつ、や、止めてつ、お、お願いです、あつ、ああつ、んんつ！んんつ、ダ、ダメ、ダメエツ…!!」

「真歩子ちゃん、このまま中に出すよ。良いね」

「んんつ、良いですつ、中に…、んくつ、だ、出して良いですから、あふつ、早く、んんつ、わ、私をイカせてくださいっ…!!」

「く…、僕ももう限界だ。真歩子ちゃん、んん…、で、出るっ…!!くうっ…!!」

「あつ、んああつ!!健太郎さんの熱いのが…、で、出てるう…!!イ、

イクツ、イツちやうつ…、あ、あ、んあああつ!!」

真歩子は健太郎の腕の中で大きく身体をのけ反らせながら激しく絶頂を迎えた。

「あ、あふ…、あう…、な、何も考えられないです…」

真歩子が健太郎の身体にぐったりともたれかかる。繋がっている部分からは、健太郎が解き放った白濁が溢れ、湯の中を漂っていた。

風呂から上がり、身体を丹念に拭き、ベッドで再度愛し合った後、真歩子はベッドの上で、シーツにくるまりながら言った。

「雨、まだ止まないですね」

「服はもう少しで乾くと思う。雨が止まなくても、フロントで傘は買えるし、駅で買ったレインコートもあるから」

「そうですね。後、健太郎さん」

「ん？」

「まだ時間はありますし、もう少し一緒にいませんか？」

「それは勿論…」

真歩子は健太郎の返事を聞き、静かに手を重ねたのだった。

【続く】

## 第14章 夏祭り

6月21日、土曜日。

ラブホテルから自宅に真歩子を送った際、7月2日から4日までが期末試験と聞いた健太郎は、7月6日にデートをする事で合意した。卯月町のある市の夏祭りという事もあり、その日にデートをする事になった。

より正確には、先負町、矢吹町、八十八町、如月町、卯月町、葉月町、頼津町、新頼津町、弥生町は一つの市であり、「水無月市」という。又、真歩子の実弟のたけしが通う文月学園のある文月町、健太郎と真歩子が行った霜月町、新霜月町はそれぞれ独立した町であり、この市ではない。但し、夏祭りは一市三町で合同で開催する。

このテスト期間中、真歩子と健太郎がデートをしていなかった事を、真歩子の両親は気に掛けてはいた。

6月29日。真歩子の自宅にて。夕食中。

「真歩子」

「何？ママ」

「ここしばらく、健太郎さんには会っていない様だけど…」

「時々、田中君とデートするまでブランクがあるみたいだね」

「パパ、ママ。別に喧嘩したとか、時々距離を置くとかじゃ無いの。」

テスト期間中は、健太郎さんが気を配ってくれるの」

「真歩子、そうなの？」

「はい」

「そうか…。それならば別に良いが、テスト前でも息抜きを兼ねて会うならば構わないぞ」

「うん、パパ、有り難う。今、デートしてなくても、健太郎さんはアルバイト先の《カトレア》に来て、話はしているから」

「そう…、なら安心したわ」

真歩子の母が頷いた。

7月4日。期末試験終了。バイトから帰宅し、夕食後。真歩子は自分の部屋にて、自慰に耽っていた。

「んっ…、あつ、あつ」

真歩子はセーラー服をたくしあげ、ブラジャーの中に手を滑らせる。そして、乳房を揉みしだく。更に乳首を指先で転がした。

「あつ、け、健太郎先輩…」

そう言つて右手でスカートを捲り、パンティの中に手を入れ、女性器を刺激する。滴った蜜が、指に絡み付く。

「あ…、んっ、んんっ…、せ、先輩。あ、あつ、イ、イク…ツ、あ、あああああーっ!!」

真歩子は絶頂に達すると、その身体をのけ反らせた。

7月5日、土曜日。葉月学園は午前授業で、幾つかの試験が返却された。真歩子の成績は健太郎の励ましもあり、優秀だった。

翌6日、日曜日。健太郎と真歩子は、夏祭りの花火大会に来ていた。

夏祭りは、商店街も盛り上がる。各店舗では笹を飾る。

「わあつ、先輩。花火が打ち上がりましたよ!!」

「おおっ!!凄いな」

大きな音と共に、夜空に艶やかな花が咲いた。

「ああつ、今度のも凄いつ!!先輩、先輩!!」

真歩子は健太郎の腕に絡み付いたまま、飛びはしゃいでいた。

「こうして真歩子ちゃんと夏祭りの夜、しかも七夕の前日に花火を見る事が出来るなんて幸せだよ」

「私もです。健太郎先輩と一緒に夜空を見上げていると、勉強疲れ、テスト疲れなんて吹っ飛んじやいました!!」

健太郎はそう言っている真歩子の方を見ると、彼女の瞳には彼と花火が映っていた。

「実は、《カトレア》の前に飾ってあった笹に、短冊を吊るしておいたんです。健太郎先輩と、ロマンチックな夜が過ごせますように、つて」

花火の明かりで、真歩子の唇が浮かび上がる。健太郎はたまらずに、彼女にキスをした。

「ん…、ダメ、見られちゃいます…」

「大丈夫だよ。皆、夜空しか見ていないから…」

二人の会話すらも、花火の音にかき消された。

「健太郎先輩、ん、んんっ、あっ…、うん、はうんっ…」

花火大会の後。健太郎と真歩子はいても立ってもいられなくなり、彼のアパートの部屋に駆け込んだ。そして寝室に入るなり、二人は互いを貪るようなキスをして、ベッドに倒れ込んだ。

健太郎は真歩子の浴衣の前をはだけさせた。その時、ある事に気が付いた。

「真歩子ちゃん、ノーブラだったんだね」

「え、ええ」

確かに和装をした場合、下着のラインが出ない様に、ブラジャーやパンティを着けない事はある、というのは健太郎の中に知識としてはあった。しかし、真歩子がノーブラとは思ってはいなかった。

「じゃあ、まさか」

健太郎は真歩子の浴衣の裾を捲った。そこには、清楚なデザイン、ピンク色のパンティがあった。

「下は、その…」

顔を真っ赤にする真歩子。

「ブラジャーはともかく、流石にノーパンという訳にはいかないよね」

「ええ」

真歩子が頷く。健太郎はパンティを膝まで下ろすと、左足を抜いた。

そして健太郎も、ズボンとトランクスを脱ぎ捨てると、前戯もそこそこに真歩子に後ろから挿入した。

「んっ、んんっ、け、健太郎さん…、健太郎さんのオチンチンが…、はう、入ってきます…っ、んああっ」

外は少し蒸し暑く、お互いに汗をかいていたにも関わらず、シャワーも浴びずに求め合った。はだけた真歩子の浴衣からは、彼女の汗の香りが漂ってきたが、どこことなく仄かにミルクの様な甘酸っぱさのある女性の汗は、余計に健太郎の興奮を刺激した。

「あっ、ああっ…、健太郎さんのオチンチン、んくっ、太くて硬いで

す…」

「真歩子ちゃんのおマンコの中、ぬるぬるが凄い事になってる…。奥を突く度に、真歩子ちゃんからエッチなオツユが溢れてくるよ…。それが、僕のチンポに纏わりついてきて…。凄く気持ち良いっ」

「あつ、やつ…。んんっ…。は、恥ずかしいです…」

「後ろからすると…。いつもと違うところに当たって…。くっ、イイツ…。真歩子ちゃん、この辺りがコリコリしているよ。ここが気持ち良いんでしょ」

健太郎は男性器の先が触れている膣壁の膨らんだ場所を重点的に擦る。

「あつ、やつ、んああつ、そこ、ダメ、ダメです、あひっ、へ、変な声が出ちやう。あ、ああつ、んっ、け、健太郎さん、そ、そこ、イイですつ。す、凄く感じますつ」

健太郎は真歩子の大きな尻を掴んで腰を振ると、彼か攻めているつもりでも、所謂カリがそこに引っ掛かりながらも何度も往復していると、腰が砕けそうな快感が押し寄せてくる。それでいて膣口は彼女が感じる度にキツく締め、扱かれている様な感覚が彼にはあった。

「はあ、ふう、くっ、真歩子ちゃんのおマンコの中、気持ちが良いすぎで、くっ、うっかりすると出そうになるよ…」

「健太郎さん、出そうになったら…。んく、遠慮しないで中に…。く、くださいっ…。わ、私、健太郎さんのなら…」

「有り難う…。僕も、真歩子ちゃんの中に出したい。真歩子ちゃんのおマンコの中に僕の精液をいっぱい出したいよ…。でも、まだもつたない。もつと真歩子ちゃんとのセックスを味わっていたい」

「わ、私もです…。んっ、もつと健太郎さんを感じていたいです。んっ、あつ、ああつ、あふうっ…。気持ち良いっ…。健太郎さん、おマンコ、気持ち良いですつ…。はあ、ふう、ふう、んくっ、もつと、奥を…。奥をオチンチンで突いて…。ください。私のお腹の中を、健太郎さんのでいっぱいにしてください。んんっ、んくっ、イイツ、気持ち良い、健太郎さんの…。気持ち良くて…。はうっ、私…。んああつ…。幸せですつ…。こんなにいっぱい気持ち良くて、健太郎さんを感じら

れて、私、幸せえ…」

「僕もだよ…。真歩子ちゃんと繋がれて、幸せだよ…。くうっ」

健太郎の気持ち良い所と真歩子の気持ち良い所が互いに擦れ合う。二人は気持ち良さが何倍にもなって、どうしようもない位の快樂の虜になっていた。

「はあ、ふう、ふう、んんっ、健太郎さん…。んく、健太郎さんっ、ん、あっ、あっ」

真歩子は時々ベッドに突っ伏しそうになりながらも健太郎にお尻を押し付ける様に腰を動かした。

一方、健太郎は真歩子の腕を掴み、引っぱりながら隙間なく身体を密着させて彼女の中を掻き回した。

「あっ、んっ、んんっ…。お腹の中、熱くて、気持ち良いっ…。はあ、ふう、健太郎さんのオチンチン、な、中でピクピクしていませんか？そ、そんなに、イ、イクの、我慢しているんですか…？」

「ははは、もう気持ち良すぎておかしくなりそうだけどね…」

「健太郎さん…。わ、私…。健太郎さんの欲しいです…。健太郎さんの熱いので…。イキたいっ…。だから、無理しないで、い、一緒にイキましよう…。な、中に…。んく…。だ、出して…」

「ああ、わかったよ…。くっ、これ以上は僕も…。んんっ、我慢が、ダメだ、出るっ…!!真歩子ちゃん、出すよっ、くううっ!んんっ、ま、真歩子ちゃん…!」

健太郎は真歩子の尻に思い切り下腹部を押し付け、射精した。彼自身、その脈動がわかるほど激しく精液を注ぎ込んだ。

「あっ、んああっ…。お腹の中、んくうっ、健太郎さんの精液が、出てるううっ…。健太郎さん、私…。んんっ、イキそ…。ああ、ダメ、イッチャう、んん、んふっ、ふあああああーっ!!」

健太郎の射精を受け、真歩子はまるで雷に打たれたかの如く全身をびくびくと痙攣させ、絶頂に達していた。

「はあ、はあ、はあ…。はあ、ふう、んくうて、身体中が、ガクガクしちゃう…。こんなに幸せな気持ち溢れているの…。初めて…。健太郎さん…。健太郎さん…」



真歩子は乱れていた浴衣を更に乱れさせ、ベッドの上に突っ伏したのだった。

一段落した二人は、全裸になってベッドの上で抱き合っていた。

「健太郎さんと、離れたくないな…」

真歩子が言った。そして続けた。

「一夜だけの逢瀬で別れなければならぬ織姫と彦星も、こんな気持ちだったのでしょうか」

「そうかもしれないな…。でも、僕達は、会おうと思えばいつでも会えるじゃないか」

「そう…。ですね。でも、今日はずっと離れたくない気分なんです…。だから、帰らなきゃならない時間まで、こうしていたい…。健太郎さん…」

「ん？」

「ずっとくっついていても、良いですか？」

「ああ、構わないよ。でも、こうして真歩子ちゃんに抱きつかれていると、また、セックスしたくなっちゃうかもね…」

「え、も、もう！折角ロマンチックな雰囲気だったのに、健太郎さんだったら…。でも、私もまだ、健太郎さんとエッチしたいかも…」

そう言っつて真歩子は、健太郎に抱きつくだけでなく、彼の身体に脚を絡めてくるのだった。

【続く】

## 第15章 植物園でデートの後

7月12日、午後。

《カトレア》を訪ねた健太郎は、真歩子と会い、デートの約束を取り付けた。

13日。この日二人は新頼津町まで足を伸ばし、植物園にてデートした。

新頼津町は、卯月町から一時間かかる。この町には、卯月町や葉月町には無い植物園以外に、プラネタリウムもある。

植物園にて。

「健太郎さん？どうして、今回は植物園を」

「その事だけど、ね。真歩子ちゃんと出会ってから、僕も植物について興味が湧いた事もあるけど」

「はい」

「後、癒しにもなるし、それと、真歩子ちゃんが生け花やフラワーアレンジメント教室に通うようになったから、こういう場所で現物を見るのも良いかな、と思って」

「はい、有り難うございます」

真歩子が礼を述べた。

植物園を出てから、新頼津町のレストランにて昼食を摂り、その後、二人は健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室で。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子の服を脱がし、下着姿にすると、再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあったフェイスタオルを見せた。それは、今日、SMチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、うつ伏せになり、後ろ手を組んだ。だが、健太郎は、首を横に振った。

「今日は、こつちじゃないよ」

「えっ?」

「真歩子ちゃん、仰向けになって」

「は、はい」

真歩子が仰向けになると、健太郎は彼女の手首をタオルで縛った。

「これでよし」

そう言って健太郎は、真歩子に覆いかぶさり、まずは軽くキスをした。

「ん、んっ、んちゅ」

唇を離す。次に健太郎は、真歩子の乳房を触る。

「け、健太郎さんの手…」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、形も良いし、たまらないよ。乳首もこんなに立たせて」

「イ、イヤン」

健太郎の言葉責めに真歩子は頭を振った。

次に健太郎はキスを首筋、鎖骨、乳房、乳首と移し、更にお腹もついでにばむ。

「真歩子ちゃん、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付

けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ!!こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んっ、ふああつ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、彼女は身体をびくんと反応させる。

「どう?感じる?イヤじゃない?」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あつ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、私のオマンコに、オチンチンを…」

「僕も、真歩子ちゃんのオマンコにチンポを入れたくなっていたんだ」

そう言つて健太郎は、へマングリ返しを止め、真歩子に覆いかぶさり、男性器を女性器に挿入した。

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになつてる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締まりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなる。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出してください…。な、中に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「な、中!?!」

「今日は、大丈夫だから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して…」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜くと、半ば強引に彼女を起こした。そして言った。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ。今日は前で縛っているから、手も使えるでしょ」

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に固さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、固くなった。

「真歩子ちゃんのお掃除フェラ、上手だから、すぐに僕のチンポ、大きくなったね。じゃあご褒美だよ。オマンコにチンポを入れるよ」

そう言つて健太郎は真歩子を縛るタオルを左だけほどくと、今度は彼女を後ろ手に縛った。そして彼女をうつ伏せにさせると、後ろから男性器を女性器に挿入した。

真歩子の大きな尻を撫で回しながら、健太郎は律動する。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…!!」

健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。彼は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。更に、背後から真歩子の乳房を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのおマンコの中、気持ちいい」  
真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シートに染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのおマンコの中、熱くて、吸い付いて来る」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコが溶けちゃう…。

イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てをぶちまけた。そして真歩子も、潮を噴いた。

「あつ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

この後、健太郎は真歩子を縛るタオルをほどくと、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体を乾かした後、健太郎は真歩子を家まで送った…。

【続く】



## 第16章 放課後デート

7月14日、月曜日。

健太郎の専門学校の授業は、月曜日は午前中で終わる。と言っても、学校全体が午前授業という訳ではなく、健太郎が選択した科目が午前だったという訳である。

「終わった、終わった」

そう独り言を言つて正門を見た健太郎は、ある事に気が付いた。

「あれは…?」

見慣れた葉月学園の制服。

「健太郎先輩」

「真歩子ちゃん!? どうして、ここに?」

話しをしている間も、専門学校の生徒は二人の事をチラ見して行く。

「それにしても、皆私達の事を見て行きますね」

「ああ。今の時期、他校の生徒は、まず来ないからね」

真歩子の言葉に健太郎は苦笑しながら頷いた。

「で、今日はどうしてここに?」

「今日から葉月学園は午前授業で、後、今日は部活動とヘカトレアのバイトは休みですので、来てみました」

「そうなんだ」

「後、凄く立派な学校ですね」

「うん。設備も充実しているからね」

「ええ…。それで、健太郎さん、今日は?」

「僕は今日は午後から授業はないから、どこか行こうか」

「はい」

真歩子が頷いた。

二人が向かったのは、最近オープンしたカフェだった。その店のドーナツも話題になっていた。

昼食後、その足で商店街をぶらつく。書店で大学の過去問題集や、テニスの本、生け花やフラワーアレンジメントの本を二人で選ぶ。更に服屋を見たり、ホームセンターやドラッグストアで面白い物を買ったり、おおよそ、放課後デートとして考えられる事は楽しんだ。

そして、二人は健太郎のアパートの部屋に向かった。

健太郎のアパートの部屋、寝室にて。

「真歩子ちゃん……」

そう言うと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う……うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ……」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真

歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あんっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ」

「イヤーン」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ？」

「真歩子ちゃんが、僕のズボンとパンツを脱がして、チンポを出すんだ」

「はい…」

真歩子が頷くと、健太郎はベッドに腰掛けた。

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。そして彼女は彼のズボンのベルトを外し、ファスナーを下ろす。それからズボンとパンツを下ろして、下半身を露にした。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言って、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あっ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言くと、真歩子は健太郎の男性器を舌先で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」  
淫らな音が、部屋に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。そして窓際に手をつく様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

そう言うと健太郎は、真歩子の制服のスカートを捲り、真歩子のパンティを晒す。

「真歩子ちゃんのパンティ、可愛いね。それにオマンコ、もう凄い事になってるよ。パンティはビショビショだね」

実際、真歩子のパンティのクロツチには、愛液染みが出来ていた。健太郎は真歩子のパンティを膝までずらしてから、女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのおマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いつ見ても魅力的だよ。お尻の穴も可愛いね」

「イ、イヤーン」

そう言って真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前

で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言って真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

少し頬を膨らませる真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

だが、彼は軽く当てただけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。ほ、欲しいです…。健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れて、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、床に淫らなマーブル模様を作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋に響く。

汗の香りも、部屋に漂う。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大きくて、太くて、硬いオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。更に真歩子の尻たぶを広げてアナルを外気に晒す。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ！！」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を啜え、舌が先端に振れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ソング。シート」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…、ありがとうございます…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

シャワーを浴び、丹念に身体を拭いた後。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「…は、何て言うのかな？」

「真歩子の、オマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」  
「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そうやって健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。  
淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…。エッチな女の子だね」

「ああっ…。入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、固くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…。ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そうやって健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして今度は正常位で挿入した。

「健太郎さんが、オチンチンが、は、入って来る…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け。イイツ。最高だ。

まさしく名器だよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。更に真歩子の乳房を揉みしだき、乳首を摘まんで転がす。

「き、気持ちいいの…。オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーツ。イツちゃううっ…

!!

「くうっ」



真歩子が絶頂に達し、潮を噴くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュユで丁寧に拭いた。

そして言った。

「じゃあ、もう一度シャワーを浴びるよ」

「はい」

そして、二人で一緒にシャワーを浴びた。

それから服を着ると、健太郎は真歩子を自宅まで送った…。

【続く】

## 第17章 夏の3連休初日

7月14日から17日まで、真歩子の通う葉月学園は午前授業である。で、真歩子はテニス部の練習を15日から17日に実施した。そして18日、金曜日。

葉月学園では、一学期の終業式が行われた。午後からはテニス部の練習。

そして真歩子は、帰宅後に健太郎に電話を入れ、明日午前中に自宅に来て欲しいと伝えた。

これを受け、健太郎は《土下座》に電話を入れ、明日のシフト、出勤は遅れる事をマスターに伝えた。

19日。朝食後。健太郎は真歩子の家に向かった。

「おはようございます」

「健太郎さん、おはようございます」

真歩子が健太郎を出迎える。

「あ、田中君。おはよう」

「健太郎さん、おはようございます」

真歩子の父と母も出迎えた。

「まずは、上がって」

「はい、お邪魔します」

真歩子の母に促され、健太郎は居間に通された。

「あの、昨日、真歩子さんから電話がありました、伺ったのですが」  
健太郎の言葉に真歩子の母が頷く。

「で、話というのは、今日からの3連休の事だが」

「はい」

真歩子の父の言葉に、健太郎が頷いた。

「たけしの事で、ね」

真歩子の実弟、たけしは真歩子より2歳下で、今年文月学園高校1年生になった。文月学園は、中高一貫・全寮制の男女共学校で、卯月学園、葉月学園と並ぶ都内の名門進学校である。

「今回の3連休は、たけしのいる文月町に行く事になった。という

のも、この期間は文月学園で模擬試験と面談があつてね。但し、真歩子は連休中もバイトや部活動で同行出来ないんだ」

「えっ?!? そうなんですか?」

「ええ」

健太郎の問いに真歩子が頷く。

「ただ、この家に真歩子一人では心細いので、健太郎さんにも、一緒に居て頂きたいのです」

「以前、田中君に真歩子を助けてもらった事もあるし、君ならば信頼出来る。この界限は物騒だからね」

「去年の秋にもお願いしましたが、今回もお願い出来るかしら」

「はい、よろしくお願い致します」

真歩子の両親に、健太郎は頭を下げた。

「お願いするのは、こちらの方です。健太郎さん、よろしく頼みます」

真歩子の母が言った。

午前10時。健太郎と持田家の三人は、卯月駅に向かい、持田家の三人は葉月町行き列車に乗った。文月町へは、葉月駅で乗り換え。葉月駅は、水無月市のターミナル駅であり、各方面への列車が出ている。尚、文月町までは列車で二時間かかる。又、文月学園は町の郊外にある。

因みに、文月町は、文月学園が存在している事から、「学園都市」とも呼ばれている。

三人は葉月駅で降り、真歩子は葉月学園へ、両親は文月駅行きの列車に乗り換えた。

一方、健太郎は持田家の三人を改札口で見送ると、その足で《土下座》に向かった。

既に営業を開始していたが、マスターは来ておらず、美夏と稔が来ていた。

「おはようございます」

「あ、健太郎君、おはよう」

「お、健太郎、おはよう」

美夏と稔が言った。

「あれ？マスターは？」

「今日はマスターは午後からの勤務で、健太郎君が上がる頃に来るから」

「はい」

美夏の言葉に健太郎が返事をした直後。一台の軽トラックが店の前に停車した。

「久しぶりだな、健太郎」

そう言つて店内に入つて来たのは、魚屋《江戸前》の娘、緑谷麻紀だった。

「あ、お久しぶりです」

「頼まれていた物、届けに来たよ」

「はい」

そう言つると健太郎は搬入を手伝う。発泡スチロールの箱には、アサリ、イカ、エビと書いたラベルが貼つてあつた。

「これで全部ですね」

「そう。後、これ。納品書ね」

麻紀が差し出した納品書に、健太郎はサインした。

「ああ、後、健太郎。絶対に浮気だけはするなよ」

「はい」

健太郎が頷く。麻紀は《土下座》を出た。

「お疲れ様でした」

「それじゃあな」

そう言つると麻紀は軽トラックに乗つて、次の配達先に向かつた。

その後、健太郎は《土下座》でバイト。店長が出勤し、シフトに入つた15時に退勤した。

一方、真歩子は、葉月学園の部活動の後に《カトレア》でバイトし、二人が落ち合ったのは、真歩子のバイト終了後の18時だった。

二人が真歩子の家に戻つた後、夕食。それから一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は居間を借りた。たけしの部屋を借りて良いとは言われていたが、やはり落ち着かないので、居間を使う事にした。

勉強の後、健太郎と真歩子は風呂に入った。

「真歩子ちゃんの家で、一緒にお風呂に入るのは、久し振りじゃないか？」

「ええ…」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は湯船にゆっくり入ってから、風呂を上がった。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子のオマンコ」

「じゃあ、ここは？」

「ク、クリトリス…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、ご褒美だ。入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、固くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、大量の白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

そう言つて健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、はい」

真歩子の舌尖が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に固さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、固くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ？なんですか？」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そう言つて健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。〈シックスナイン〉である。

「ええっ!？」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃん

とチンポを舐めない」と

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のAnalを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こっちも可愛がってあげるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷつ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のAnalを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああつ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちゃう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?!んっ!!んぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言つた。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるからね」

健太郎の言葉に真歩子は頷く。そして健太郎は、今度は後背騎乗位、所謂へ騎乗バツクで真歩子の女性器に挿入、最後は真歩子の背中に白濁を放つた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体をバスタオルで丹念に拭き、乾かしてから、二人は真歩子のベッドで裸のまま就寝。そして、日曜日の朝を迎えた。

【続く】



## 第18章 夏の3連休2日目

20日、日曜日。3連休2日目。この日は海の日でもある。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

真歩子の姿を見た健太郎は、ムラムラしたが、朝からは無しである。

この日、健太郎も真歩子もアルバイトは無く、又、彼女の部活動も休みである。

「おはようございます。眠れました？健太郎さん」

真歩子は服を着ているところだった。

「おはよう。良く眠れたよ、真歩子ちゃん」

健太郎もベッドから出ると、服を着た。

「これから朝ごはんにしますね」

「うん、ありがとう。それにしても、良い眺めだね。今日のブラジャーとパンティは、白か…。似合ってるよ」

「健太郎さん」

「ん？」

「あんまりじろじろ見ないで下さい」

「だって色っぽいんだもん」

「イヤです。恥ずかしい。またエッチな事考えているんじゃない？」

「ゴメンね。じゃあ見ない」

「私、魅力無いんですね…」

「あのね…どつちかにして…」

「だって、私、オッパイ小さいし…。お尻は大きいし」

「そんな事無いよ。オッパイは初めて会った時より大きくなったよ。パイズリも出来る様になったし。乳首も綺麗な色だもん。お尻だってプリプリして魅力的だよ。後ろも綺麗だね」

「もう、健太郎さん、エッチです…」

そう言って真歩子は頬を膨らませた。でも、彼女の目は笑っていた。

「さてと、僕も手伝うよ、着替えじゃなくて朝食の用意」

「ありがとうございます」

「今日は、沢山楽しむよ、日曜日だからね」

「ええ」

そう言つて真歩子は笑顔で頷いた。

朝食後。

健太郎と真歩子は、一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

その後、真歩子からシャワーを浴びる事になった。

これは、セックスのためではなく、身だしなみのためである。又、朝、来客があると困るため、シャワーは一人ずつ浴びる事にした。

暫くして、浴室のドアが開く音がした。

シャワーを浴びた真歩子が出て来た。バスタオルを身に着けていた。

「健太郎さん、終わりました。次…」

「うん。ありがとう」

そう言つて健太郎は服を脱いだ。健太郎の男性器は、立つてはいなかった。

今日は、昼食前に町に出て、デートする事になっている。

因みに、真歩子の両親は、火曜日にたけしを連れて帰ってくる予定のため、今日の夕食後のへお楽しみも、真歩子の部屋でする予定である。今は、ラブホテルに行く回数が減り、その代金をデート代に充てる事が可能になった。

真歩子の後に浴室に入った健太郎。ムラムラ来て、男性器はフル勃起したが、流石にここは抑えた。

健太郎は、シャワーついでに、風呂掃除もする。

その後、体を丹念に拭いた。

そして二人は家を出た。

今日のデートは、ガーデンプールである。

真歩子が着ていたのは、ワンピースではあるが、去年の物とは異なり、花が描かれていた。

「水着、買ったんですけど、どうでしょうか？似合っていないですよ

ね」

「そんな事はない、似合っているよ。花が描かれているの、良いじゃない。真歩子ちゃんらしいよ」

真歩子の問いに健太郎が答える。

「有り難うございます。嬉しいです」

真歩子が笑顔で頷いた。

その後、夕食。健太郎と真歩子は、一緒に夕食を作る。

それから一緒に後片付けをする。もう、すっかり手慣れた物である。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は今日も居間を借りた。

勉強の後、健太郎と真歩子は風呂に入った。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は湯船にゆつくり入ってから、風呂を上がった。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。

健太郎は、真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。合図のための、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、真歩子の乳房を直接愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、女性器を直接愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

「け、健太郎さんの意地悪」

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの大事な部分が、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ、シャワーに行こう。身体の隅々まで、洗ってあげる」

健太郎が言った。

浴室にて。

健太郎は、浴室の脱衣場にあった、物干しに目を遣った。そこには、真歩子がプールのデートで着ていた、水着がハンガーに掛けてあった。

「真歩子ちゃん、お願いがあるんだけど」

「なんですか？」

「水着、着て欲しいな」

「ええっ!？」

「真歩子ちゃんの生で水着を着るの、見たいな」

「け、健太郎さんが言うなら」

真歩子が頷くと、彼女は水着をハンガーごと下ろし、浴室のポールに掛けた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は湯船に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

頭を洗った後、健太郎が言った。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

「はい」

真歩子が頷くと、彼女は健太郎の前で水着を着る。

「終わりました」

真歩子の言葉に健太郎は頷く。

そして健太郎は、真歩子の背後から抱き付き、水着の上から乳房に  
触る。

「あ、あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、浴室に響く。

次に健太郎は、水着の中に手を入れ、真歩子の乳房を直接愛撫する。

「ああんっ…。そ、そこは、っ、摘まんじゃ」

「ほら、もう乳首が勃ってる。真歩子ちゃんのオツパイ、最高だよ」

健太郎は、真歩子の乳首を摘まんて転がす。

「次は…」

健太郎は、真歩子を鏡の前に立たせた。

「じゃあ、水着を脱ごうか」

「はい」

健太郎は、真歩子の背後から右側の肩紐をずらし、右腕を抜く。右  
側の乳房がプルンと露になる。

「今度は…」

次に健太郎は、真歩子の左側の肩紐をずらし、左腕を抜く。左側の  
乳房も露になった。

鏡の前で水着を脱がされる様子を見た真歩子は、いつも以上に頬を  
紅く染めていた。

それから健太郎は、真歩子の水着を脱がし、全裸にした。

健太郎は真歩子を正面から抱き締め、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

「じゃあ、次は、しゃがんで」

「はい」

言われるまま、しゃがむ真歩子。彼女の眼前には、限界までそそり立った健太郎の男性器。

「真歩子ちゃん。お口でペロペロして」

真歩子は頷くと、健太郎の男性器を舌先で愛撫し始めた。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、浴室に響く。

「真歩子ちゃん」

「ん…」

健太郎が声を掛けると、真歩子は彼の男性器を啜えたまま、上目遣いで彼を見た。

「じゃあ、そろそろ」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子に跨がる様に言ってから男性器を挿入した。所謂、対面座位である。

お風呂でエッチする時は、大抵は対面座位か后背座位である。健太郎は真歩子を抱き締めると、最奥を突く。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の右の乳房を愛撫し、左の乳首を舌先で転がす。

しかし、ここで健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよっとパターンを変えてみようか」

そう言って健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして、健太郎は真歩子に、湯船から出て、鏡の前に立つ様にした。



「綺麗だよ、真歩子ちゃん」

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「まずは、鏡に手をつけて。それから、お尻を突き出して」

「はい」

真歩子は健太郎の意地悪な命令に従い、尻を突き出した。

健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さん

のオチンチンを、真歩子のオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子を後ろから貫く。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、

気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げ

ていく。

健太郎が律動する度、彼の陰毛の先端が、愛らしい真歩子の尻穴の

皺に触れる。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、床に淫らなマーブル模様を作った。

淫らな水音と、二人の吐息が浴室の中に響く。

汗の香りが、浴室の中に充満している。

「真歩子ちゃん、鏡を見て」

健太郎の言う通りに鏡を見た途端、真歩子は耳まで赤くした。

それもそのはず、普段は見る事がない、二人が繋がっている姿を目にしたからである。

特に、後ろからする時にはまず見ない、真歩子の揺れる乳房を見た健太郎は、いつも以上に興奮した。

「イ、イヤーン。こ、こんなの、恥ずかしいです」

「どう？自分のエッチしている顔や様子を見て？」

「これじゃあ、どこからも犯されているみたいですよ」

「そうだよ。どこからも犯しているんだ。昨年ラブホテルでした事を家でもしてみたい、って」

そう言うのと健太郎は、敢えて律動のピッチを落とす、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとした。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

次第に律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い……。出して……。健太郎さんを、感じさせてえっ……!!」  
「くうっ……」

健太郎は、真歩子の中で、全てをぶちまけた。

「あっ……。あああああぁーっ!!イ、イクツ、イツちやう!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる……。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる……」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから……」

「うふふっ……。ありがとう……。大好きです……」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた……。

浴室でのセックスの後、二人は再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから真歩子の寝室に向かった。

そして二人共に裸のまま、就寝した……。

【続く】

## 第19章 夏の3連休最終日

21日、月曜日。3連休最終日。この日は、振替休日である。

この日、健太郎と真歩子は起床した後、一緒に朝食。洗い物をした後、一緒に真歩子の家を出た。

健太郎は、今日は《土下座》でアルバイトである。

そして真歩子も、一日《カトレア》でアルバイトである。

健太郎と真歩子は、彼女のアルバイト終了後に、《土下座》にて落ち合う事になっていた。

真歩子が《土下座》に顔を出したのは、18時30分だった。

健太郎と真歩子は、駅前のスーパーマーケットで買い物をしてから、真歩子の家に戻った。

帰宅後、夕食。健太郎と真歩子は、一緒に夕食を作る。

それから一緒に後片付けをする。もう、すっかり手慣れた物である。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は今日も居間を借りた。

勉強の後、健太郎と真歩子は風呂に入った。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の《お楽しみ》も、昨日と同様に、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は湯船にゆっくり入ってから、風呂を上がった。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。

健太郎は、真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。合図のための、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、真歩子の乳房を直接愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、女性器を直接愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

「け、健太郎さんの意地悪」

「じゃあ、次は…」

「はい」

「パイズリしてよ。真歩子ちゃんのオツパイで僕のチンポを挟んで」

健太郎は真歩子に跨がり、勃起した男性器を胸の谷間にあてがつた。

真歩子が健太郎の男性器を乳房で挟むと、健太郎は腰を前後させる。

この方法だと、真歩子の体力の消耗は少なくて済む。

「真歩子ちゃんのオツパイの感触、最高だよ」

「なんか変…。健太郎さんに胸を犯されているみたいですよ…」

健太郎の腰の動きが激しくなる。

「くっ…。で、出る」

そう言った直後、健太郎は真歩子の顔面に射精した。

「真歩子ちゃん、舐めて。綺麗にして」

「は、はい」

「終わったら、オマンコに入れてあげるね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

お掃除フェラの後、健太郎は真歩子の顔面をティッシュで拭いた。

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や

何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言っただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの大事な部分が、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコがイツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日も中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

お掃除フェラの後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、何もかも健太郎の物だ。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、チンポ、萎んじやうよ」

「も、もう…」



そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあつ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いから」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああつ…。私の中、引つ張られてる…」

「凄いよ。君の中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。出して…。今度も中に、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あつ…。ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

セックスの後、二人は再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから真歩子の寝室に向かった。

そして二人共に裸のまま、就寝した。

翌日、22日、火曜日。

この日は、真歩子の両親と実弟のたけしが、文月町から帰ってくる日である。

健太郎と真歩子は、早めに朝食を摂り、洗い物をして、身支度を整えから、真歩子の家を出た。

真歩子と一緒に卯月駅に向かう健太郎。

真歩子は葉月学園へ。今日からは、午前は夏期講習、午後はテニス部の練習である。

「それじゃ行つてらっしゃい。気を付けてね」

健太郎が言った。

「はい」

真歩子が頷く。そして続けた。

「健太郎さんも…。後、土曜日を楽しみにしています」

「うん。ありがとう。真歩子ちゃん。後、ご両親とたけし君によろしくお伝えください」

真歩子に健太郎はそう言って、手を振って見送った…。

【続く】

## 第20章 葉月ドームでデートの後

26日、土曜日。持田家の夕食にて。

「真歩子」

「何、パパ」

「明日のプロ野球、葉月ドームでのデーゲーム、東京キャピタルズ対大阪レイダースのチケット、2枚貰ったんだけど…。しばらくぶりにたけしと姉弟で行ったらどうだ」

「悪いけど、俺は姉ちゃんと行くのはやっぱり嫌だな。姉ちゃん、野球の応援となると見境が無くなるから」

真歩子の父にたけしが答えた。

「もう、たけしったら」

そう言って真歩子は頬を膨らませた。

「確かに、真歩子はキャピタルズの試合になると凄いからな」

真歩子の父がそう言った直後の事。徐にたけしが提案した。

「折角なら、姉ちゃん、彼氏の健太郎先輩と行ったら」

「たけし、健太郎さんの事知っているの?」

真歩子の母が尋ねた。

「ああ。そうだよ。以前姉ちゃんのバイト先の《カトレア》でばったり会って…、姉ちゃんから紹介されたんだ」

「そうよ、ママ」

「なら、話は早い。田中君に夕食後に電話したら」

「うん、そうする」

夕食後、真歩子は健太郎に電話をして、デートの約束をした。

就寝前。真歩子は筆筒から、健太郎にホワイトデーにプレゼントされた、キャピタルズのレプリカユニフォームを出した。

27日、日曜日。

午前に健太郎と真歩子は卯月駅を出発した。葉月町までは30分かかる。

混雑を避けるため、葉月駅のレストランで昼食後、葉月ドームに行き、二人は席に着いた。

プロ野球は、シチズンリーグとピープルリーグの2リーグで構成される。後、レギュラーシーズン終了後のクライマックスシリーズは、各リーグの東地区と西地区の優勝チームが、リーグ優勝と日本シリーズ進出を争う。又、レギュラーシーズンには交流戦も開催される。尚、レギュラーシーズンは交流戦も含め、地区に關係無く対戦する。

シチズンリーグ東地区の札幌カブスは子熊を意味する。東京キャピタルズは、首都に因む。東京神宮ジェットスは東京上空を飛ぶ旅客機に由来する。横浜クリッパーズは高速帆船に因むと同時に横浜みなとみらい21に帆船日本丸が係船されている事が名前の由来である。西地区の名古屋ユニコーンズは一角獣に由来する。大阪レイダースは楠木正成に由来する。又、レイダースは、兵庫県、岡山県倉敷市、京都府でもホームゲームを開催している。広島ファルコンズは隼だが、これはかつてのブルートレインに因む。宮崎ウォリアーズは九州の島津家と南九州の隼人に因む。

一方のピープルリーグ東地区の北海道オウルズは梟を意味するが、北海道がエゾフクロウやシマフクロウの生息地が名前の由来。仙台ブラックナイツは伊達政宗と所用の甲冑に因む。千葉ドルフィンズは太平洋というイメージから一般公募でイルカになった。新潟セイバーズは刃物工業が盛んな事からこの名前になった。西地区の埼玉ロコモティブズは機関車を意味し、鉄道博物館に由来する。神戸アスレティックスは競技者を意味する。これは開国後に神戸市で様々なスポーツが行われた事に因む。松山バッカニアーズは海賊を意味する。バッカニアは本来はカリブ海の子供だが、パイレーツよりインパクトのある名前という理由からこの名前になった。福岡ツインズは福岡市と北九州市に因む。又、関門海峡を隔てた山口県と福岡県にも由来する。

今日の対戦カードは、東京キャピタルズと大阪レイダースという屈指の好カード、しかもキャピタルズはシチズンリーグ東地区の、レイダースは西地区の首位である。

今回はオーブン戦とは異なり、二人の席はキャピタルズのホーム側の一塁側の外野席である。

12時30分、プレイボール30分前には、葉月ドームには4万8千人を超える観客が詰めかけていた。

13時、プレイボール。キャピタルズの白のユニフォームの選手が守備位置についた。帽子のTとCを組み合わせたマークと、伝統の“CAPITALS”の胸の文字が目立つ。

バッターボックスには、黒とグレーのユニフォームのレイダースの1番バッターが打席に立った。元々レイダースは、ビジター用ユニフォームは上下グレーだが、ドームでの試合は上は黒、下はグレーのユニフォームを使う。シルバーで書かれた“OSAKA”の胸の文字が映えている。又、帽子もビジター用の、黒にシルバーの“O”である。

試合は1回表から投手戦になり、静かな展開に。試合が動いたのは4回表。レイダースが2者連続のソロホームランで2点先制。その後、6回裏、キャピタルズがタイムリーヒットと2ランホームランで逆転。そのまま逃げ切るかと思われた9回表にレイダースがソロホームランで同点に追い付く。9回裏、キャピタルズにサヨナラホームランが出て、4対3でキャピタルズが勝利した。

試合終了後。

健太郎と真歩子は、葉月駅の駅中をぶらついてから卯月町に戻った。

卯月駅を出た二人は、健太郎のアパートに向かった。

健太郎のアパート部屋、寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ているレプリカユニフォームとミニスカートを脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色だもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、勃っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティから手を出すと、溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らかな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやったんだ。真歩子ちゃんのパンティ、ビショビショだよ。オマンコの毛も透け透けだね」

「は、恥ずかしい…。健太郎さんのエッチ」

「ちつとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせた

かつたんだから」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。健太郎はベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。ヒクヒク蠢くアヌスが露になる。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、早くください。健太郎さん

のオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」  
「じゃあ、ご褒美だよ。チンポ入れるよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、  
き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。  
溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段と  
きつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻  
にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

健太郎と真歩子は、シャワーで身体を洗った。その後、丹念に身体



を拭き、乾かしてから、アパートの部屋を出た。

そして真歩子を自宅に送ると、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第21章 夏の浜辺で

8月2日、土曜日。

健太郎は7月28日からこの日まで《土下座》でアルバイトである。一方の真歩子も、午前中はテニス部の練習、午後は《カトレア》でアルバイトである。又、今週の土曜日は第1土曜日のため、生け花教室もある。

で、アルバイト終了後、健太郎は真歩子に電話を入れた。

「はい、持田ですけど」

「あ、真歩子ちゃん？」

「あ、健太郎さん」

「真歩子ちゃん、明日なんだけど…、デート、良いかな」

「はい、良いですよ。で、どこに行きますか？」

「明日は天気も良いから、新霜月町のビーチに海水浴に行こうよ」

「はい、良いですね。私も昨年行ったあのビーチ、行きたかったんです」

「じゃあ、明日10時に卯月駅で」

「はい」

こうして二人はデートの約束をした。

3日、日曜日。

健太郎と真歩子は、卯月駅から新霜月町のビーチへ向かった。

まず、卯月駅を出発し、葉月駅で霜月町行き列車に乗り換える。

霜月町までは、葉月駅から1時間30分かかる。

健太郎と真歩子は、霜月駅で新霜月町役場行きのバスに乗った。行き先は、霜月海岸である。

バスを降りてから、二人は少し歩いた。二人が向かったのは、観光地として有名なビーチではなく、隠れ家的なビーチである。と言って、徒歩で行けない距離ではない。勿論、遊泳禁止ではない。このビーチには、人影は全くなかった。

砂浜に來ると、健太郎と真歩子は別々の岩陰で着替えた。

真歩子の水着は、先日、プールで着た物ではなく、昨年着た、黄色

のラインが入った水着だった。

健太郎は持参したレジャーシートを敷き、二人はそれに腰を下ろした。

「綺麗…」

「本当だね」

真歩子の横顔を見ながら健太郎が言った。勿論、彼は海だけではなく、真歩子の事も言ったのである。

「健太郎さん」

「ん？」

「先に、お弁当食べませんか？丁度お昼ですから。私、作ってきたんです。このクーラーバッグに入っています」

「本当に!?!じゃあ早速食べようか」

「ええ」

健太郎が頷くと、真歩子はクーラーバッグから弁当を取り出した。

「どうですか…?久し振りに作ったから」

「うん、美味しいよ」

「良かった、有り難うございます」

昼食後、二人は波打ち際に向かって歩き出した。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

「足の裏、熱くない？」

「大丈夫ですよ。でも、どうしてそう言う事を聞くんですか？」

「いや、熱かったら、オンプしようかなと思ったから」

「平気です。私子供じゃありませんから」

「そうだよね。なら、お姫様抱っこは？」

「もう…」

そう言つて真歩子は頬を膨らませる。

健太郎と真歩子はそのまま海に入った。丁度良い海水温が、二人には心地良かった。

「健太郎さん」

「どうしたの？」

そう言った健太郎の顔面に、真歩子は両手で掬った海水を浴びせた。

「うわっ!!」

「うふふ。引っ掛かりましたね」

「真歩子ちゃん、やったな」

そう言うのと健太郎は、海面を蹴って、真歩子に海水を浴びせた。

「キヤー!!もう、健太郎さんって」

こうして二人は、夏の太陽の光を浴びながら、時間が経つのを忘れ、笑い声を響かせて、童心に返ってはしゃいだ。

16時。

少し日が傾き、日差しも弱くなる。

レジャーシートで、真歩子は健太郎に寄りかかっていた。

「真歩子ちゃん」

「なんですか?」

「もう16時だし、そろそろ駅に…」

「もう少し一緒にいませんか?バスも電車もまだ大丈夫ですから」

「確かにそうだけど、真歩子ちゃん家は…?」

「それも大丈夫です」

真歩子が言った直後、二人は自然と唇を重ねていた。

唇を離すと、真歩子が言った。

「健太郎さん、誰か来るかも…」

「うん…。ならば、あの防風林に行かないか?」

「ええ」

健太郎の提案に真歩子が頷く。二人は荷物を持って防風林に向かった。ここは昨春秋に来た時に、真歩子とセックスした場所でもある。

健太郎は防風林にレジャーシートを敷き、四隅に石を置いて重石にする。それから再度、二人はそれに腰を下ろした。

健太郎と真歩子は再度、唇を重ねた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎は瑞の肩紐をずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露にな

る。

「あつ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ」

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、付近に響いた。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ?」

「跪くんだ。真歩子ちゃんが、僕の海水パンツを脱がして、チンポを出すんだ」

「はい…」

真歩子が頷くと、健太郎は黒松に寄りかかった。

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。そして彼女は彼の海水パンツを下ろして、下半身を露にした。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言っつて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言っつと、真歩子は健太郎の男性器を舌先でチロチロと刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」  
淫らな音が、付近に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。そして黒松に寄りかかる様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

健太郎はそう言って、真歩子の股を開かせる。

「真歩子ちゃんのおまんこ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのおまんこ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うのと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いつ見ても魅力的だよな。お尻の穴も綺麗だね。ヒクヒクしているよ」

「イ、イヤーン」

そう言って真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちゃう」

そう言って真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪  
少し頬を膨らませる真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

だが、彼は軽く当てるだけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。ほ、欲しいです…。オチンチン  
が欲しいです」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「健太郎さんの意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょう？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のオマンコに、入れて、くだ  
さい」

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、  
気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げ  
ていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオッパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋と背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつく  
す。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、草地に染みを作った。淫らなマール模様  
を描いた。

淫らな水音と、二人の吐息が付近に響く。

汗の香りも、付近に漂う。

「ああっ…、私の中、引つ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大事な部分が、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…、あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。その直後、真歩子の背中から尻に二筋三筋と精液をぶちまけた。

「背中とお尻が、熱いです…。沢山出て…」



「うん。真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…、ありがとう…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「ねえ、真歩子ちゃん」

「はい」

「僕はまだ元気だから」

そう言って健太郎は、真歩子に限界まで屹立した男性器を見せた。

「す、凄い…。お、大きい…。まだこんなに…」

「じゃあ、真歩子ちゃん。このまま海に入ろうか」

「ええーっ!?!このまま、って、裸ですか」

「そう。だって真歩子ちゃんの背中に僕の精液が付いたままだよ。洗い流さないよ」

「で、でも」

「大丈夫だよ。人もいないし、もう夕方だから。それに目立たないから」

「ええ」

健太郎の説得に真歩子が頷いた。

健太郎は海水パンツを持参したビニール袋に入れた。真歩子も同じように水着を入れた。

そして健太郎は真歩子の手を繋ぐと、一緒に裸のまま海に飛び込んだ。

「どう?裸で海に入るのは?」

「水着と違って、これも気持ち良いです」

「でしょう」

健太郎の質問に真歩子が答えた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の背中から尻を海水で洗った。自分が出した精液の臭いと粘り気は完全に無くなっていった。

それから健太郎は、真歩子を正面から抱き締め、唇を重ねた。合図のための、キス。一端唇を離し、再度唇を重ねる。今度は互いの舌を

絡める。

「んっ…、はあ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。真歩子は上気した視線を健太郎に向けていた。

その間、真歩子の髪の毛を撫で、右の耳朶を甘噛みする。

そして健太郎は、真歩子の首筋、肩口もついばむ。更に、真歩子の右の乳房のラインに沿って唇を這わせた後、乳首を舌先で転がし、口に含んだ。同時に左の乳房を揉みしだきながら、左手で背筋を撫でる。

その後、健太郎はお腹にキスをしながら、腰と尻を愛撫する。

「そろそろ、真歩子ちゃんのおまんこ、舐めて良いかな…?」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。彼は彼女の薄い陰毛に息を吹きかけてから舌を這わせた。

真歩子を立たせたままで、彼女の女性器を愛撫する健太郎。次第に快感が真歩子に押し寄せ、蜜が滴る。健太郎は唇を離すと、今度は指を入れる。クチュクチュと淫らな水音が付近に響く。真歩子の膝が、ガクガク震え出した。イク前兆だ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…、イ、イク…!!」

そう言つて真歩子は身をのけぞらせ、同時に潮を噴いた。絶頂に達した。

溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「もうこんなに…。外だから、興奮しているのかな?」

そう言つて健太郎は真歩子の顔面に手を差し出した。

「ヤ、ヤアン。み、見せないで…。健太郎さん、エッチです」

「これなら、OKだね」

「ええ。お願い、健太郎さんが、欲しいの…。早く…、真歩子のオマニコにオチンチンを入れてください」

「じゃあ、チンポを入れるよ」

そう言つて健太郎は、左手で真歩子の右の膝裏を軽く掴むと、そのまま持ち上げた。そして、真歩子に、首の後ろから腕を背中に回して、しつかり掴まる様に言った。

「あ：健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんでいっぱいになってる…」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。淫らな水音をたてながら、最奥を突く。熱く、甘く、荒い吐息、喘ぎ声が付近に響く。

汗と蜜の香が、付近に漂う。

「す、凄いや…。真歩子ちゃんのオマンコ、吸い付いて来る。イツ。いい締めりだ。最高だよ」

「あ、あんつ。健太郎さんのオチンチンに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が再度引かれていた。

「け：健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

健太郎の首の後ろに回された真歩子の手に一層の力がこもった。更に真歩子の女性器の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…!!」

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を啜え、舌が先端に振れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ソング。ソーツ」

真歩子は、健太郎の精液を全て嚙下した。精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に…」

「真歩子ちゃん、良かったよ」

「うふふっ…、私もです…」

そう言っつて真歩子は笑みを浮かべた。

健太郎は真歩子を抱き締めた。全裸の二人を、波の音と海風が包んでいた。

「18時か…。それじゃあ、そろそろ卯月町に戻ろうか」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。二人は身体を拭き、服を着ると、バスで霜月駅に向かい、霜月駅から卯月町に向かった。

帰りの電車の中。真歩子は健太郎の肩に頭を乗せていた。そのまま車窓からの景色を楽しんでいた。

卯月駅に到着してから健太郎は真歩子を自宅まで送った。健太郎は真歩子の両親とたけしにも挨拶をする。そして、自宅アパートに向かった…。

【続く】

## 第22章 図書館でデートの後

8月9日、土曜日。

健太郎は8月4日からこの日まで《土下座》でアルバイトである。一方の真歩子も、午前中はテニス部の練習、午後は《カトレア》でアルバイトである。又、第3土曜日のフラワーアレンジメント教室が、今月は講師の夏休みの関係から第2土曜日に繰り上がった。

で、アルバイト終了後、健太郎は真歩子に電話を入れ、デートの約束をした。

10日、日曜日。健太郎と真歩子は卯月町の図書館で静かに過ごした。真歩子は模擬試験が近い事、健太郎はパソコンの勉強をするため、というのが図書館を選んだ理由である。

図書館を出た後、健太郎と真歩子はアパートに向かった。アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ているポロシャツとミニスカートを脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティに手を入れると、溢れ出した蜜が絡みついた。丹念に愛撫してから、右手を真歩子に見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやったんだ…。潮まで噴いて…。エッチだなあ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん…」

真歩子が口を開いた。

「んっ…」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗

うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。健太郎はベッドに真歩子を仰向けにさせた。

そして健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックなセックスをする、というサインである。

真歩子は頷くと、口を開いた。

「健太郎さん、今日はどっちに…?」

「じゃあ、今日は…、うつ伏せになって」

「はい」

真歩子は健太郎に言われるまま、うつ伏せになった。

健太郎は真歩子の手を軽く掴むと、タオルで後ろ手に縛った。

「これでよし。次は…」

そう言うと健太郎は真歩子を再度仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、

右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そうやって健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。薄い陰毛に覆われた女性器が晒される。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

「オマンコの毛、剃ろうか」

「は、はい…」

健太郎は真歩子の上体を起こすと、ベッドに腰掛けさせた。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子用の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ…」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。オマンコはこれでよし。次は…、うつ伏せになって」

「はい」

言われるまま、うつ伏せになる真歩子。

「もうちょっとお尻を高くしないと…」

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

「じゃあ、お尻の穴も剃るよ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女のアナルに剃刀を当てた。

「ああ…」



「ほらほら、じっとしてないと、切れちゃうぞ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫した。真歩子は、次第に落ち着きを取り戻した。

「それじゃ、剃るよ」

そう言つると健太郎は、真歩子のアナルの毛を剃つた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は洗面器のお湯を処理し、用具をしまつと、再度真歩子の尻を持ち上げた。

健太郎は真歩子の太股に指を這わせながら言つた。

「今日はまずは〈お尻〉だから、念入りに準備するよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言つると健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

突く度に、真歩子のアナルはすぼまつたり広がつたりする。

「あぁっ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、い…入れて、く、ください…」

健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グングニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「あぁっ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」

そう言つた直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あつさりと絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言うのと健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。

「今度は、お尻の穴を舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、真歩子のアナルに舌を這わせた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子のお尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。舌先でツンツンと突いた後、舌を密着させ、細かい皺を舐める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちやう!!」

そう言うって真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。更に彼は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「先輩の、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イチヤウ…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。貴方を、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

健太郎が男性器を引き抜くと、真歩子のアヌスから彼の精液が吐き出された。彼女のアヌスは、又元に戻る。

「で、出てる…。私のお尻の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は、又、洗面所へ行くと、石鹸とお湯を入れた洗面器を持って戻って来た。

一度男性器を石鹸で洗うと、健太郎は真歩子をベッドから起こした。そして言った。

「じゃあ、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。もう一度、お口でして」

「はい」

手を使えない状態での、真歩子の舌と唇だけのフェラチオは、上手になったとは言え、劣るのも事実だった。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!？」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を咥えさせた。へイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のイラマチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サディステイックになる健太郎。

真歩子の口の中で、再度大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「け、健太郎さんの、いっぱい出て…。でも、ちよつとだけ怖かったです。後…」

「後？」

「次は…?どうすれば…」

「もう一度、うっ伏せになつて」

健太郎の言い付けに従う真歩子。

「じゃあ…」

そう言うのと健太郎は真歩子の大きな尻を平手で叩き始めた。乾いた音が、部屋に響く。但し、今日はテニスラケットや物差しを使うつもりは無かった。

「アッ!!」

すぐに真歩子の尻は、真っ赤になる。

「真歩子ちゃんの可愛いお尻が、真っ赤に腫れちゃったよ」

「お尻が、痛いです…。それに、熱いです」

そう言うと真歩子は、下半身をモジモジさせた。

「あれ？どうしたの？」

「ほ、欲しいです。健太郎さんのオチンチンを真歩子のいやらしいオマンコに入れて欲しいです」

「じゃあ、入れるよ」

そして健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

彼女にはこの体位が、合っている。

健太郎は、律動を開始する。

「あ：健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ほ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳房も、乳首も、お臍も、ウエストも、尻も、女性器も、何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰と尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。お尻の穴までヒクヒクしてる」

「や、やあん」

「真歩子ちゃんの前も後ろも丸見えだよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やあん…。は、恥ずかしい…。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

健太郎が真歩子を縛るタオルをほどいた直後、真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。オマンコが、こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!イ、イヤーツ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ、シャワーに行こうか」

「はい」

シャワーから出た後、真歩子が言った。

「私…」

「ん？」

「健太郎さんだけです…。私の目に映るのは」

「僕もだよ。僕も真歩子ちゃんだけだよ」

健太郎が答えると同時に、真歩子は彼に抱き付き、唇を重ねた…。その後、健太郎は真歩子を自宅まで送った。

【続く】

## 第23章 美術館でデートの後

16日、土曜日。

この時期は所謂、お盆休みで営業しない店もあるが、《土下座》と《カトレア》は営業している。よって、健太郎も真歩子もアルバイトで出勤である。

この日のアルバイト終了後、健太郎は真歩子に電話を入れ、デートの約束をした。

17日、日曜日。午後。

この日は健太郎と真歩子は昼食後に卯月町の美術館で待ち合わせ、二人は静かに過ごした。

美術館を出た後、健太郎と真歩子はアパートに向かった。アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ているポロシャツとミニスカートを脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力も

あつて、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色だもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌尖で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。それから、パンティに手を入れ、女性器を愛撫する。健太郎はパンティから手を出すと、真歩子に溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にしたてから、彼女の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやっただ…」

「は、恥ずかしいです…。そ、それにお部屋を汚して…」

「ちつとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。



真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うと同時に、乳房と太股と尻を愛撫するだけで、挿入は無しである。ボデイーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。健太郎はベッドに真歩子を仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朵、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、ツルツルオマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうっ、んっ、ふああっ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あっ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あっ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのオマンコにチンポを入れたくなっ

ていたんだ」

そう言つて健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さん

の太いオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、

き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シートに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシートを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…。オマンコ

が、溶けちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ

!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュスーパーパーで丁寧に拭いた。

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん?」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

真歩子の言葉に健太郎が頷く。

真歩子の蜜で潤った健太郎の男性器に、真歩子の舌がチロチロと触

れる。

ほどなくして、健太郎の男性器は綺麗になった。

お掃除フェラの後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ：健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじゃうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い?良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

健太郎と真歩子は、シャワーで身体を洗った。その後、丹念に身体

を拭き、乾かしてから、アパートの部屋を出た。

そして真歩子を自宅に送ると、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第24章 模擬試験の日に

23日、土曜日。

健太郎は8月18日からこの日まで《土下座》でアルバイトである。一方の真歩子も、午前中はテニス部の練習、午後は《カトレア》でアルバイトである。

で、アルバイト終了後、健太郎は真歩子に電話を入れ、デートの約束をした。但し、24日は葉月学園で模擬試験があるため、夕方、卯月駅で会う事になった。

24日、日曜日。時刻は17時。卯月駅の改札口にて。

「お待たせしました」

「真歩子ちゃん、模擬試験、お疲れ様」

健太郎が言った。

「有り難うございます、健太郎さん」

真歩子が一礼する。今日は葉月学園で模擬試験という事もあり、制服を着ていた。

二人はすぐに、健太郎の住むアパートに向かった。寝室にて。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言つて健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

そして健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックなセックスをする、というサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

「はい…」

健太郎は真歩子をタオルで縛った。

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。

それから、健太郎は、寝室からダイニングキッチンに真歩子を連れ出しました。

「えっ？」

健太郎は、食卓用の椅子を出した。そして言った。

「じゃあ、座って」

「はい」

健太郎に言われるまま、真歩子は座った。

その直後、健太郎は掌で、セーラー服の上から真歩子の乳房を包み愛撫した。

「キヤツ…!!け、健太郎さん…」

「どうかな？…こういうのは」

健太郎は真歩子の乳房に優しく触れながら尋ねた。

「イ、イヤじゃないです…」

真歩子の艶かしい喘ぎ声と吐息が部屋に響く。

健太郎は真歩子の乳房を丹念に愛撫してから、言った。

「次は…」

乳房から手を離すと、今度は健太郎はセーラー服の裾から手を入れ、ブラジャーの上から乳房に触れる。ここもソフトタッチである。

そして健太郎は、ブラジャーの中に手を滑らせ、真歩子の乳房に直に触れる。更に乳首を指先で転がす。

次第に真歩子の乳首は屹立していく。

一度、健太郎は真歩子の乳房への愛撫を止め、セーラー服とブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかいし、弾力もあつて、最高だよ。乳首、こんなに勃たせて」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言うと真歩子は、耳まで赤く染めた。

「じゃあ立って」



「は、はい」

言われるまま、真歩子は椅子から立った。

健太郎は、真歩子の制服のスカートとパンティ、靴下を脱がした。

「じゃあ次は…」

「はい」

「真歩子ちゃんのおまんことお尻、可愛いがってあげるね」

一旦健太郎は真歩子の正面に立ち、すぐさましゃがんだ。そして真歩子の女性器を舌と指で愛撫する。

「もう真歩子ちゃんの蜜でオマンコ、ビショビショだね。最高だよ」

「イ、イヤ。そ、そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らかな水音が、部屋に響く。

「ダメエ…」

絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやったんだ…。潮まで噴いて…。エッチだなあ」

「は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

「次は…」

健太郎は又一旦立つと、真歩子を回れ右させた。そしてすぐにしゃがみ、今度は彼女の尻を責め始めた。尻たぶをソフトタッチした後、軽く掴んで彼女のアナルを外気に晒す。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、もうヒクヒクしているよ」

「は、恥ずかしいです。それに、まだシャワー浴びてないですから、き、汚いです」

「うん…。じゃあ、真歩子ちゃん。先にお腹をキレイにしようか」

「は、はい」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女を再度椅子に座らせた。但し、今度は胸が背もたれに当たる、即ち前後逆に座らせた。

真歩子は両足を左右に大きく開く事になる。更に、健太郎は彼女の

尻が、座面の手前側に来る様に調整した。

健太郎は、浴室から洗面器を、冷蔵庫から紙パックの牛乳を、薬の入っている戸棚からへエネマシリンジをとり出した。

「じゃあ、お浣腸だ。ミルクをお尻の穴から飲もうね」

健太郎は、へエネマシリンジの先端を、真歩子のアヌスに挿した。真歩子の側からは、先端の嘴管は外れない。

もう一方の先端を、牛乳パックに入れ、握ったゴム球を押ししたり緩めたりして、真歩子の腸内に牛乳を注ぎ込む。

「アアツ…。っ、冷たいです」

「我慢するんだ。お尻に力を入れて」

「は、はい」

真歩子の尻たぶには、汗が浮かぶ。排泄欲が疼く。下腹部が、ポツコリと膨らんだ。お腹が愛らしい音を奏でる。

「よし、牛乳はこれ位にして」

そう言って健太郎は先端を牛乳パックから取り出した。そして、握ったゴム球を押ししたり緩めたりして、真歩子の腸内に空気を入れる。

「アアツ、な、何をするんですか」

「おまけだよ。空気を入れる事で、牛乳を出し易くするんだ」

暫く空気を入れた後、健太郎が尋ねた。

「真歩子ちゃん、どうかな？」

「健太郎さん…。お腹が、苦しいです。い、痛いです。も、漏れそうです」

「じゃあ、そろそろだね」

「はい。オナラが、ウンチが出そうです」

「うん」

真歩子の言葉に健太郎は頷く。

彼はへエネマシリンジの先端を、真歩子のアヌスから外すと、右手に洗面器を持ち、受ける用意をする。

「真歩子ちゃんのお腹を撫でてあげるね」

左手で真歩子の腹を愛撫すると、牛乳が勢い良く飛び出した。前回

に比べると、牛乳は白色で、薄茶色くは染まってはならず、汚物も混じってはいない。

「アーン、良いの…」

「真歩子ちゃん、お浣腸、気持ち良いんだ」

「ええ…」

そうしているうちに、真歩子は牛乳を全部出した。

「じゃあ、洗面器を洗って来るからね。終わったら、もう一度、お腹を洗うためのお浣腸だよ」

健太郎は、洗面器を洗って来ると、お湯で再度真歩子に浣腸をする。今度は、大型のプラスチック製の注射器を使う。

健太郎が真歩子の下腹部を愛撫すると、真歩子のアヌスからはお湯が噴き出す。健太郎は洗面器でお湯を受ける。それは白濁しておらず、汚物は無い。全部出たところで、健太郎が言った。

「じゃあ、もう一度洗面器を洗うから。それからシャワーに行こう」  
健太郎は真歩子のタオルをほどき、セーラー服とブラジャーを脱がした。そして二人はシャワーを浴びた。

シャワーを出した後、健太郎は真歩子を、再度タオルで後ろ手に縛った。

そして健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせると、尻たぶを掴み、左右に開く。

「いつ見ても、大きくて可愛いお尻だね」

「健太郎さん、お願いします。真歩子のエッチなお尻にお仕置きして

下さい…」

「良いの…?」

「はい…。お尻が、ウズウズ、ムズムズするんです…」

「じゃあ、お仕置きだ。お尻ペンペンするよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。

「あんっ!!お尻が、痛いです…。それに、熱いです。お尻に、健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、おねだりしないと」

「健太郎さんの太くて硬いオチンチンを、真歩子のいやらしいお尻の穴に入れて、ください」

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアナルに挿入した。

健太郎は、右手で真歩子の乳房を揉みしだき、左手で彼女の腰、尻、太股を愛撫しながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の首筋、肩口、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…。オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。お尻の穴が、壊れちゃう…。イッチャウ…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…」

健太郎が男性器を真歩子のアヌスから引き抜くと、彼が出した白濁が吐き出された。そして彼女の尻穴は、元に戻っていく。

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しみましょうね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起こすと、タオルをほどいてから、唇を重ねた。

この直後、健太郎と真歩子は、二人で一緒に再度シャワーを浴びた。シャワーの後、健太郎は真歩子の女性器に正常位で挿入。再度二人同時に絶頂に達した…。

それから健太郎は真歩子を自宅に送った。

後日届いた模試の結果、真歩子は優秀な成績を収めていた。

【続く】

## 第25章 指切り神社の夏祭りの後

25日、月曜日。

健太郎の通う専門学校は、夏休みが終わって、2学期の授業が始まった。

一方、真歩子の通う葉月学園は、まだ夏休みのため、30日までは午前はテニス部の活動、午後はアルバイトである。

又、葉月学園は9月1日が始業式のため、31日は午前は部活動がある、と健太郎は真歩子から聞かされていた。

そんな中、29日に、健太郎に真歩子から電話が入った。30日の指切り神社の祭りに行きませんか、という物だった。健太郎はすぐさまその誘いを受けた。

迎えた30日、土曜日。時刻は、20時。

健太郎と真歩子は、《指切り神社》に来ていた。『指切り』神社とは通称で、正式には『卯月』神社と言う。

健太郎と真歩子は、鳥居をくぐった。

健太郎と真歩子は、まずは参拝した。その後、境内をぶらついた。境内には、様々な屋台が出店している。健太郎と真歩子は幾つかの屋台で食べ物を買って歩く。その時、二人は背後から突然声を掛けられた。

「健太郎君に、真歩子さん…?」

「その声は…、みこちゃん!? こんばんは。久しぶり」

健太郎が振り返ると、そこには浴衣姿の一人の少女がいた。

「はい、お久しぶりです。健太郎君」

声の主は、神山みこ。この神社の一人娘である。又、健太郎とは卯月学園の同期生でもある。卒業後は、巫女として修行している。

「こんばんは」

「こんばんは。真歩子さんも御一緒だったんですね」

真歩子とみこは知り合いであった。昨年、指切り神社が《カトレア》に花を依頼した時に、カタログを届けたのが真歩子であり、その時境内を掃除していて、対応したのがみこだった。しかも、茶と煎餅を真

歩子に振る舞った。その頃から二人は付き合いがある。

「今日は私、神社の手伝いもありますので、御一緒出来ませんが、楽しんでくださいね」

みこは一礼すると、自宅でもある社務所に向かった。

健太郎と真歩子は《指切り神社》を出ると、健太郎のアパートに向かった。

言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスの場所は健太郎の寝室である。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、浴衣をはだけさせた。浴衣の下は、ノーブラだった。そして、健太郎は浴衣を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあつたフェイスタオルを見せた。それは、今日、SMチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷いた。

健太郎は真歩子の手を軽く掴むと、前で手首をタオルで縛った。

以前、体育の授業で着た柔道着の帯で真歩子を縛る事も考えたが、やはりここはいつも通りのタオルにした。

「じゃあ…」

「はい」

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。それから、姿見の前に二人は立った。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあって、最高だよ」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言う真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。

溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな？鏡の前でしているのを見るのは？」

「は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない？もう、オマンコはぐしょ濡れだよ」

そう言つて健太郎は、真歩子に手を見せた。

「ヤ、ヤアン…。み、見せないで…」

「じゃあ、次は」

そう言つて健太郎は、真歩子のパンティを一気に剥ぎ取った。

「真歩子ちゃん、次は…」

「はい」

「僕のチンポが、真歩子ちゃんに舐めて欲しいって」

そう言つて健太郎は勃起した男性器を真歩子に見せ、動かした。

「す、凄い…。大きい…」

「じゃあペロペロして。手も使えるでしょ」

「は、はい…」

真歩子は頷き、跪くと、掌で健太郎の男性器を包み込んだ。

真歩子の柔らかい掌に、健太郎の男性器はすぐに反応する。

「うふふ、可愛いですね、健太郎さんのオチンチン」

そう言つて真歩子は、健太郎の男性器を先端を舌先で刺激する。それから唇で包み込み、頭を前後させる。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、最大限まで大きく、固くなった。

「真歩子ちゃんのおフェラチオ、上手だから、すぐに僕のチンポ、元気になったね。じゃあご褒美だよ。オマンコにチンポを入れるよ」

「はい、オチンチンをください。御主人様」



そう言う真歩子を健太郎はうつ伏せにさせると、後ろから男性器を女性器に挿入した。

真歩子の大きな尻を撫で回しながら、健太郎は律動する。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…!!」

健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。彼は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。更に、背後から真歩子の乳房を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの中、熱くて、吸い付いて来る」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコが溶けちゃう…。  
イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。中に出して…!!健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くっっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てをぶちまけた。そして真歩子も、潮を噴いた。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「じゃあシャワー、浴びようか」

真歩子が頷く。健太郎は真歩子を縛るタオルをほどくと、二人で一緒にシャワーを浴びた。

シャワーを浴びた後。

健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる。ホラホラ」

「ああっ…。ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと saying してごらん」

「健太郎さんの。意地悪。エッチ。真歩子のオマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、ご褒美だよ。入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言って健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのおマンコ。何て良く締まるんだ。イイツ。最高だ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…。オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクツ、イクーツ」

「じゃあ出すよ。真歩子ちゃん、イクよ」

「お、お願い…。出して…。今度も中に、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

「それじゃ、シャワーに行こうか」

「はい」

健太郎と真歩子は、シャワーで身体を洗った。その後、丹念に身体を拭き、乾かしてから、アパートの部屋を出た。

健太郎は真歩子を家まで送り、31日について約束した。それから健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第26章 8月最後の日曜日

31日、日曜日。

この日の午前、真歩子は登校していた。テニス部の練習のためである。

練習後、真歩子は部員と葉月駅で昼食を摂り、その後一旦帰宅して、着替えてから外出した。

今日の健太郎とのデートは、《世界一公園》である。

健太郎と真歩子は、公園でゆったりとした時間を過ごした。公園にて。

「健太郎さん。あの、専門学校は…?」

「先週の月曜日から新学期が始まったよ。一学期に、まずは帝国商工会議所の『文章作成』と『表計算』の初級の資格を取ったよ」

「そうだったんですね。おめでとうございます」

「有り難う。真歩子ちゃんが応援してくれるから、僕も頑張れるよ」

「健太郎さん…」

公園を出てから、二人は今日も健太郎が住むアパートに向かった。寝室にて。

「真歩子ちゃん…」

そう言うのと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、セックスの始まりである。

「えっ?う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はブラウスをたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あんっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首が勃っているよ」

「イヤーン」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ?」

「真歩子ちゃんが、僕のズボンとパンツを脱がして、チンポを出すんだ」

「はい…」

真歩子が頷くと、健太郎はベッドに腰掛けた。

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。そして彼女は彼のズボンのベルトを外し、ファスナーを下ろす。それからズボンとパンツを下ろして、下半身を露にした。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言つて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかつた。

「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言つと、真歩子は健太郎の男性器を舌先で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。そして窓際に手をつく様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

そう言うのと健太郎は、真歩子のミニスカートを捲り、真歩子のパンティを晒す。今日の下着は、水色である。

「真歩子ちゃんのパンティ、可愛いね。水色も良いね。それにオマシコ、もう凄い事になってるよ。パンティはビシヨビシヨだね」

実際、真歩子のパンティのクロッチには、愛液染みが出来ていた。健太郎は真歩子のパンティを膝までずらしてから、女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。それからパンティを脱がし、両足首を軽く掴んで、開かせた。

そして再度、健太郎は真歩子の女性器に顔を近づけ、息を吹き掛ける。更に彼は彼女のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのおまんこ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

健太郎の意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うのと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いっ見ても魅力的だよ。お尻の穴も可愛いね。ヒクヒクしているよ」

「イ、イヤーン」

そう言っつて真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前

で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちゃう」

そう言って真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

少し頬を膨らませる真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

だが、彼は軽く当てただけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。ほ、欲しいです…。健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れて、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。真歩子ちゃんの、綺麗でエッチなオマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…。ああっ、そ、そこ。健太郎さんが…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首も限界まで屹立している。そこを健太郎は指先で摘まんて転がす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「や、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。  
溢れ出した真歩子の蜜が、床に淫らなマール模様を作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋に響く。

汗の香りも、部屋に漂う。



「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大きくて、太くて、硬いオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「ほ、欲しいです。健太郎さんのオチンチンでイカせてください…」

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。更に真歩子の尻たぶを広げてアナルを外気に晒す。

「も、もうダメ…。わ、私、イツちやう…。オマンコが、壊れちやう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜え

させた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を咥え、舌が先端に振れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ン。ング。ンーツ」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…、ありがとう…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

シャワーを浴び、丹念に身体を拭いた後。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子の、オマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…。エッチな女の子だね」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、固くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言って健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして今度は正常位で挿入した。

「健太郎さんが、オチンチンが、は、入って来る…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け。イイツ。最高だ。

まさしく名器だよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。更に真歩子の乳房を揉みしだき、乳首を摘まんで転がす。それから、左の乳首に舌を這わせる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーツ。イツちやううつつ…!!」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を噴くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「ああっ…、健太郎さんの、こんなに沢山…」

そう言いながら、真歩子は自分の身体を撫で上げた。そして指先に付いた健太郎の精液を眺めた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。

そして言った。

「じゃあ、もう一度シャワーを浴びるよ」

「はい」

そして、二人で一緒にシャワーを浴びた。全てを洗い流した。

それから服を着ると、健太郎は真歩子を自宅まで送った…。

【続く】

## 第27章 9月の3連休初日

8月31日のデートの後、健太郎は真歩子から、9月12日と13日が実力テストという事を聞いたため、7日はデートは無しにして、14日にデートをする事で予め合意していた。

しかし、である。6日、土曜日。

「終わった、終わった」

そう独り言を言つて正門を見た健太郎は、ある事に気が付いた。

「あれは…?」

見慣れた葉月学園の制服。

「健太郎先輩」

「真歩子ちゃん!? どうして、ここに?」

話しをしている間も、専門学校の生徒は二人の事をチラ見して行く。

「それにしても、皆私達の事を見て行きますね」

「ああ。今の時期、他校の生徒は、まず来ないからね」

真歩子の言葉に健太郎は苦笑しながら頷いた。

「で、今日はどうしてここに?」

「今日、バイト後に、家に来て頂けませんか?」

「えっ!?! どうして?」

健太郎が尋ねた。

「来週、13日からの三連休の事で、両親から『健太郎さんに来てもらつて』、と言われて」

「わかった。じゃあ真歩子ちゃんのバイト終了の時間に《カトレア》に行くから」

「はい。待ってます」

真歩子は学校を出ると、生け花教室に行き、終了後に《カトレア》に向かった。

一方、健太郎も学校を出て《土下座》に向かった。時間まで手伝つてから、《カトレア》に真歩子を迎えに行った。

真歩子の自宅にて。

「ただいま」

「こんばんは」

「真歩子、お帰り。あ、田中君。こんばんは」

「健太郎さん、いらっしやい。お待ちしておりました」

真歩子の父と母が出迎えた。

「まずは、上がって」

「はい、お邪魔します」

真歩子の母に促され、健太郎は居間に通された。

「あの、本日、真歩子さんが僕の専門学校に来まして。お話があるとの事で、伺ったのですが」

「ええ。そうなんです」

健太郎の言葉に真歩子の母が頷く。

「で、話というのは、来週土曜日からの3連休の事だが」

「はい」

真歩子の父の言葉に、健太郎が頷いた。

「たけしの事で、ね」

真歩子の父が言った。そして続けた。

「今回の3連休も、たけしのいる文月町に行く事になった。というのも、この期間は文月学園で学園祭があつてね。で、PTAも手伝う事になっているので、私達も行く事になった。但し、真歩子は連休中もバイトや部活動で同行出来ないんだ」

「そうなんですな」

「ええ。そうなんです。健太郎さん」

真歩子が頷く。

「ただ、この家に真歩子一人では心細いので、健太郎さんにも、一緒に居て頂きたいのです」

「田中君は信頼出来る。この界限は物騒だからね」

「去年の秋と今年の夏にもお願いしましたが、今回もお願い出来るかしら」

「はい、わかりました。よろしくお願い致します」

真歩子の両親に、健太郎は頭を下げた。

「お願いするのは、こちらの方です。健太郎さん、よろしく頼みます」

真歩子の母が言った。

そして迎えた、13日、土曜日。

健太郎は学校を出ると、まずアパートに向かい、風呂道具や着替え等を取りに行った。それから《土下座》に向かう。時間まで手伝つてから、《カトレア》に真歩子を迎えに行った。

一方、真歩子は、葉月学園に登校する際に、両親と一緒に家を出た。葉月駅で列車を降り、両親と別れ、葉月学園の実力テストの後に《カトレア》でバイトし、二人が落ち合ったのは、真歩子のバイト終了後の18時だった。

二人はまずスーパーマーケットで買い物。そして真歩子の家に戻った後、夕食。それから一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は居間を借りた。たけしの部屋を借りて良いとは言われていたが、やはり落ち着かないので、今回も居間を使う事にした。

勉強の後、健太郎と真歩子は風呂に入った。

「真歩子ちゃんの家で、一緒にお風呂に入るのは、久し振りじゃないか？」

「ええ…。夏の3連休以来ですね」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の《お楽しみ》は、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗っ

て。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は湯船にゆつくり入ってから、風呂を上がった。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる。ほら。ツンツンツ」

「ああつ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな?」

「オ、オマンコ」

「じゃあ、ここは?」

「ク、クリトリス…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの?」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、ご褒美だ。入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。



健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。  
淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああつ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、固くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言って健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、恥ずかしい…」

「凄いや。真歩子ちゃんのおまんこ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オまんこが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、大量の白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「真歩子ちゃん。ペロペロ舐めて。チンポを綺麗にしてよ」

そう言って健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に固さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇

で包み込む。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、固くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ?なんですか?」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そう言って健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。ヘシックスサインである。これも久し振りにする。

「ええっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めないよ。そうしないと、僕も止めちゃうよ」

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアナルを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こつちも可愛がってあげるよ」

そう言って健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷっ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああっ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ。イ、イッちゃう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?!んっ!!んぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に

達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるからね」

健太郎の言葉に真歩子は頷く。彼は真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。ヒクヒク蠢くアヌスが露になる。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

そう言つて真歩子は、尻を振った。

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコにチンポ入れるよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「真歩子ちゃんのオマンコの中、ぬるぬるが凄い事になってる…。奥を突く度に、真歩子ちゃんからエッチなオツユが溢れてくるよ…。それが、僕のチンポに纏わりついてきて…、凄く気持ち良いっ」

「あつ、やつ…、んんっ…、は、恥ずかしいです…」

「後ろからすると…いつもと違うところに当たつて…、くっ、イイツ…。真歩子ちゃん、この辺りがコリコリしているよ。ここが気持ち良いんでしょ」

健太郎は男性器の先が触れている膣壁の膨らんだ場所を重点的に擦る。

「あつ、やつ、んああつ、そこ、ダメ、ダメです、あひつ、へ、変な声が出ちゃう。あ、ああつ、んっ、け、健太郎さん、そ、そこ、イイですつ。す、凄く感じますつ」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

更に健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。健太郎は真歩子の大きな尻を掴んで腰を振ると、彼が攻めているつもりでも、所謂カリがそこに引つ掛かりながらも何度も往復していると、腰が砕けそうな快感が押し寄せてくる。それでいて膣口は彼女が感じる度にキツく締めまり、扱かれている様な感覚が彼にはあった。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。真歩子は時々ベッドに突っ伏しそうになりながらも健太郎にお尻を押し付ける様に腰を動かした。

健太郎は真歩子の腕を掴むと、引つ張りながら隙間なく身体を密着させて彼女の中を掻き回した。

溢れ出した真歩子の蜜が、シートに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引つ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシートを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…。オ、オマ

ンコが溶けちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。健太郎さんも、一緒に、イ、イツてえ…」

「ああ、じゃあ僕もイクよ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ

!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くっ…!!」

そして健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻にかけて大量の白濁をぶちまけた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁

寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

互いの身体をバスタオルで丹念に拭き、乾かしてから、二人は真歩子のベッドで裸のまま就寝。そして、日曜日の朝を迎えた。

【続く】

## 第28章 9月の3連休2日目

14日、日曜日。3連休の2日目である。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

真歩子の姿を見た健太郎は、ムラムラしたが、流石に朝からは無しである。

この日、健太郎も真歩子もアルバイトは無く、又、彼女の部活動も休みである。

「おはようございます。眠れました？健太郎さん」

真歩子は服を着ているところだった。

「おはよう。良く眠れたよ、真歩子ちゃん」

健太郎もベッドから出ると、服を着た。

「これから朝ごはんにしますね」

「うん、ありがとう。それにしても、良い眺めだね。今日のブラジャーとパンティは、ピンクか…。似合ってるよ」

「健太郎さん」

「ん？」

「あんまりじろじろ見ないで下さい」

「だって色っぽいんだもん」

「イヤです。恥ずかしい。またエッチな事考えているんじゃない？」

「ゴメンね。じゃあ見ない」

「私、魅力無いんですね…」

「あのね…どつちかにして…」

「だって、私、オッパイ小さいし…。お尻は大きいし」

「そんな事無いよ。オッパイは初めて会った時より大きくなったよ。パイズリも凄く上手になったし。乳首も綺麗な色だもん。お尻だってプリプリして魅力的だよ。大きなお尻は真歩子ちゃんの最大のアピールポイントだよ。後ろも綺麗だね」

「もう、健太郎さん、エッチです…」

そう言つて真歩子は頬を膨らませた。でも、彼女の目は笑つていた。

「さてと、僕も手伝うよ、着替えじゃなくて朝食の用意」

「ありがとうございます」

「今日は、沢山楽しむよ、日曜日だからね」

「ええ」

そう言つて真歩子は笑顔で頷いた。

朝食後。

健太郎と真歩子は、一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

洗い物を済ませた後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は今日も居間を借りた。その後、二人で洗濯も済ませた。

今日は、昼食後に町に出て、デートする事になっている。

そして14時に二人は家を出た。

今日のデートは、葉月ドームでナイトゲームの観戦である。この日のために健太郎がチケットをゲットしていた。今日も二人の席はキャピタルズのホーム側の一塁側の外野席である。

今日の対戦カードは、東京キャピタルズ対横浜クリツパースである。シチズンリーグの東地区首位と2位のこのカード、地区優勝を占う好カードである。

17時30分、プレイボール30分前には、葉月ドームには4万8千人を超える観客が詰めかけていた。プレイボール前、売店でホットドッグとジュースを買い、軽く腹ごしらえをする。

18時、プレイボール。キャピタルズの白のユニフォームの選手が守備位置についた。帽子のTとCを組み合わせたマークと、伝統の“CAPITALS”の胸の文字が目立つ。

バッターボックスには、青と白のユニフォームのクリツパースの1番バッターが打席に立った。白で書かれた“YOKOHAMA”の胸の文字が映えている。帽子はホーム・ビジター共用の、青に白の“Y”である。

試合は1回表から打撃戦となった。前日はクリツパースの投手陣に抑え込まれ、3対0で完封負けだったキャピタルズ、今日も先発がクリツパースの打線に捕まり2点を先制される。

一方、キャピタルズも負けてはいない。2回裏に3ランホームランが出て一気に逆転。更に3回裏にも犠牲フライとタイムリーヒットで2点を追加する。

その後は一転して投手戦になり、キャピタルズの二番手ピッチャーとクリッパーズの二番手ピッチャーが共に好投。試合は両チームの打線は沈黙して終盤を迎えるかと思われた。

ところが6回表、クリッパーズのクリーンアップトリオがバックスクリーンに3連続ホームラン。しかも3番が2ランホームランだったため5対6と再逆転。

これで真歩子のハートに火がついた。

「頑張れー、キャピタルズー!!」

健太郎も真歩子のノリに合わせ応援する。間違っても、付近にいるビール片手に応援しているオヤジにつられて下品な応援はしなかった。

6回裏、キャピタルズは三者凡退に終わると、真歩子はおもいつきり悔しがつた。

「あー、もう、好打順だったのに!!」

7回表、クリッパーズは三者凡退。その裏、キャピタルズの攻撃。真歩子の思いが通じたか、満塁ホームランが出て9対6と逆転。この時、真歩子は健太郎に抱き付いた。

「やりました!!満塁ホームランですよ!!逆転しましたよ!!」

その後は、キャピタルズの投手陣がクリッパーズ打線を1点に抑え、9対7でキャピタルズが勝利した。

試合終了後、健太郎と真歩子は、混雑を避けるため、遅い時刻の列車で卯月町に戻り、卯月駅前まで遅くまで営業している中華料理店で夕食を摂ってから帰宅した。

帰宅後。

健太郎と真歩子は、全てを脱ぎ捨て、浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、いつも通り、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗



うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして健太郎は、真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねた。合図のため、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、真歩子の乳房を直接愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「イ、イヤ…」

「だって、ほら」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ、コリコリってされたら」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、女性器を直接愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。シャワーの水分とは違って、しっとりとしている。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

そう言っただけで健太郎は、真歩子の女性器から溢れ出した蜜まみれの指を見せた。

「も、もう…。み、見せないでください…。け、健太郎さんの意地悪」

「じゃあ、次は…」

「はい」

「パイズリしてよ。真歩子ちゃんのオツパイで僕のチンポを挟んで」

健太郎は真歩子に跨がり、勃起した男性器を胸の谷間にあてがった。

真歩子が健太郎の男性器を乳房で挟むと、健太郎は腰を前後させる。

この方法だと、真歩子の体力の消耗は少なくて済む。

「真歩子ちゃんのオツパイの感触、最高だよ」

「なんか変…。健太郎さんに胸を犯されているみたいですよ…」

健太郎の腰の動きが激しくなる。

「くっ…。で、出る」

そう言った直後、健太郎は真歩子の顔面に射精した。

「真歩子ちゃんの顔、先に拭くから。それからチンポを舐めて。綺麗にして」

「は、はい」

「終わったら、オマンコに入れてあげるね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は真歩子の顔面をティッシュで拭いた後、お掃除フェラをさせる。

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け：健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、背中、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの大事な部分が、ビクビクして、暴れてる…」  
ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコがイツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は、な、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

お掃除フェラの後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポ、萎んじゃうよ」

「も、もう…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!!イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い?良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いから」

「真歩子ちゃんは、エッチだなあ」

そう言つて健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。  
こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。出して…。今度も中に、中にください…。健太郎さん  
んを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に真歩子は、笑みを浮かべて頷き、静かな寝息を立て  
始めた。

「僕も、大好きだよ、真歩子ちゃん」

そう言っつて健太郎は、真歩子の頬にキスをした。

そして、そのまま二人共に裸で就寝した…。

【続く】

## 第29章 9月の3連休最終日

15日、月曜日。3連休の最終日。この日は、敬老の日である。

この日、健太郎と真歩子は起床した後、一緒に朝食。洗い物をした後、一緒に真歩子の家を出た。

健太郎は、今日は《土下座》でバイトである。

そして真歩子も、今日は一日《カトレア》でバイトである。

健太郎と真歩子は、真歩子のバイト終了後に、《土下座》にて落ち合う事になっていた。

真歩子が《土下座》に顔を出したのは、18時30分だった。

健太郎と真歩子は、駅前のスーパーマーケットで買い物をしてから、真歩子の家に戻った。

帰宅後、夕食。健太郎と真歩子は、一緒に夕食を作る。

それから一緒に後片付けをする。もう、すっかり手慣れた物である。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は今日も居間を借りた。

勉強した後。真歩子が居間に来て、健太郎に聞いた。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん。でもその前に」

そう言うと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

「け、健太郎さん、ここでは、い、居間ではダメです…」

「真歩子ちゃん、が、我慢が出来ないよ。真歩子ちゃんが欲しい」

「で、でも、健太郎さん…」

「じゃあ真歩子ちゃんの部屋に…」

「は、はい」

真歩子の部屋は二階にある。

階段を上り、部屋に入ると、再度健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。合図のための、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は真歩子の服を脱がすと、彼女をベッドに横たえた。そして彼も服を脱ぎ捨てると、言った。

「真歩子ちゃん、へオナニーして見せて」

「は、はい」

真歩子は頷くと、健太郎の前で自分を慰め始めた。彼女の左手が乳房を、右手が女性器を撫で、乳首を転がし、陰唇やクリトリスを刺激する。真歩子の喘ぎ声と吐息、淫らな水音が、真歩子の部屋に響く。女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作る。

「はあ、ああっ、ああんっ…、け、健太郎さん…」

「どうしたの？」

「は、早く、シャワーに…」

「うん」

健太郎は頷くと、二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、



自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ…」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして健太郎は、真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねた。合図のため、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、真歩子の乳房を直接愛撫する。

鼓動と温もりが、掌を通じて伝わる。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

「ほらほら、コリコリって。どうかな。それとも、ツンツン、が良いのかな」

「も、もう、健太郎さんのエッチ、意地悪」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、女性器を直接愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんな…。ビショビショだよ」

「そ、それは…、健太郎さんの目の前でへオナニーして…」

「真歩子ちゃん、チンポが欲しい？」

「は、はい、健太郎さんのオチンチン、欲しいです。真歩子のいやらしいオマンコに入れてください…」

そう言って真歩子は、自分で女性器を広げ、淫らなおねだりをする。

「じゃあ入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や

何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツいよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの大事な部分が、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツっちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜くと、ベッドに仰向けになって言った。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

「は、はい…」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に固さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇

で包み込む。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、固くなっていく。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

「はい？」

「大きくしてくれたご褒美だよ。入れるよ」

健太郎は真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんの太くて硬いオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコにください…。」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「ああっ、あんっ、け…健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シートに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…。そこ、健太郎さん、気持ち良いの…」

健太郎の男性器が、真歩子の膣壁の膨らみを刺激する。

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てをぶちまけた。

「あつ…。あああああーっ!!イ、イクツ、イツちゃう!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も潮を吹いた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「それじゃ、シャワーに行こう。身体の隅々まで、洗ってあげる」

健太郎が言った。

二人は再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから真歩子の寝室に向かった。

そして二人共に裸のまま、就寝した…。

翌日、16日、火曜日。

この日は、真歩子の両親が、文月町から帰ってくる日である。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

「健太郎さん、おはようございます」

「真歩子ちゃん、おはよう。良く眠れた？」

「ええ」

真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、身支度を整え、早めに朝食を摂り、洗い物をしてから、真歩子の家を出た。

真歩子と一緒に卯月駅に向かう健太郎。

真歩子は葉月学園へ。今日は、通常授業である。

「それじゃ行ってらっしゃい。気を付けてね」

健太郎が言った。

「はい」

真歩子が頷く。そして続けた。

「健太郎さんも…。後、土曜日を楽しみにしています」

「うん。ありがとう。真歩子ちゃん。後、ご両親によろしくお伝えください」

真歩子に健太郎はそう言って、手を振って見送った…。

【続く】

### 第30章 動物園でデートの後

20日、土曜日。

この日、真歩子は《カトレア》の配達で《土下座》を訪問した。マスターは不在だったが、山下美夏が応対した。そして健太郎もシフトだったので、その際にデートの約束をした。

翌日、21日。

健太郎と真歩子は、葉月町の動物園に来た。

象のコーナーで。

「わあっ、大きい。私、象さんが大好きなんです」

真歩子のはしゃぐ。

「そうなんだ」

「健太郎さんは？」

「僕は、虎かな。後は、フクロウとペンギンだね」

「フクロウ、そうなんです」

「意外だったかな？フクロウは森の賢者というイメージだから。それにペンギンはこの前、水族館でも話をしたけど、愛嬌があるからね」

「ええ」

健太郎と真歩子は、順路通りに進み、鳥のゾーンに来た。

そこを出た後の爬虫類コーナーは、さすがに足早に通り過ぎた。やはり二人共にトカゲや蛇は苦手だった。

一通り見た後、健太郎と真歩子は、記念のツーショット写真を撮影した。

今回は、午前に卯月町を出発し、動物園をじっくり見学した後、葉月駅のレストラン街の Pasta 屋で昼食を摂り、卯月町に戻って来た。

そのまま健太郎と真歩子は、彼のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーションケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子の服を脱がし、下着姿にすると、再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。今日の真歩子のブラジャー

とパンティは、水色である。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロッチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

そう言って健太郎は、真歩子の蜜まみれになった手を差し出す。

「は、恥ずかしい…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。



真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。ボデイーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして横倒しにしてから、背中側から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる。ほらほら。ツンツンツ。次は、コリコリツ」

「ああつ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ。真歩子ちゃんの母乳、最高に美味なのが出るんだろうね」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の腹部と腰を愛撫した後、股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子のオマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください…」

「じゃあ、チンポを入れるよ」

そう言っただけ健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…あつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言っただけ健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのオマンコ。〈松葉崩し〉、恥ずかしいとか言っただけ…。本当は好きなんですしよ、真歩子ちゃん」

「イヤ、イヤーン」

「正直に言わないと、止めちゃうぞ」

「お、お願いです…。や、止めちゃイヤ…!!」

「じゃあちゃんとやってよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「へ松葉崩し、き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

健太郎が真歩子の身体に付着した白濁をティッシュで拭いた後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。さすがに、シャワーでの挿入は無しである。

二人は身体を丹念に拭いた。浴室を出てから、健太郎が聞いた。

「まだ、時間は大丈夫だよね」

「ええ」

真歩子が頷く。

「じゃあ…、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。お口でペロペロして」

「はい」

そう言っつて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言っつと、真歩子は健太郎の男性器をチロチロと舌尖で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢き、大きくなる。すぐに健太郎の射精感が高まる。

「真歩子ちゃん、出すからね。全部飲んで」

健太郎はそう言って、真歩子の口の中で大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんーっ」

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんのお口、気持ち良いからね。じゃあ次は…」

「はい」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子に跨がる様に言ってから男性器を挿入した。所謂、対面座位である。

対面座位か後背座位は、お風呂でエッチする時に多いが、時々ベッドや椅子でする事がある。健太郎は真歩子を抱き締めると、最奥を突く。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の右の乳房を愛撫し、左の乳首を指先で転がす。

「真歩子ちゃんのオッパイ、揺れているよ」

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締めりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を再度指先で転がした後、摘まんで転がし

た。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の手の指先が、健太郎の肩を掴んだ。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコが溶けちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今度は、中に…。い、一緒に、イツてえ…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「な、中!?!」

「今日は、大丈夫ですから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して、く、くださいっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ、ああああああっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ、シャワー浴びようか」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。そして二人は、再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。道すがら、23日の約束をする。それから、彼は帰路についた…。

【  
続  
く  
】

### 第31章 テニスの練習の後

21日、日曜日。

健太郎は真歩子を自宅に送る道すがら、23日の約束をした。で、迎えた23日、火曜日。この日は、秋分の日である。

この日、健太郎と真歩子は、卯月町のスポーツクラブにいた。

今回のデートは、真歩子とのテニスである。真歩子が出場するテニスの秋期大会が近い事もあり、健太郎が練習相手を買って出た。

健太郎は真歩子の指導を受け、テニスの腕前を着実に上げていた。まず最初の30分は健太郎が真歩子のサーブを受ける。

次の30分は健太郎がサーブをして、真歩子がレシーブする。最後は、試合形式で練習する。

勿論、健太郎はテニスを始めて一年程度のため、真歩子からセットを奪うのはそう多くはないが、サーブの練習では真歩子の希望するゾーンに打ち込む事は出来る。

そのためか、時々真歩子から「上達が早い」と言われる事はある。

練習後。健太郎と真歩子は、卯月町の駅前商店街のレストランにて昼食。その後、二人でアパートに向かった。

健太郎と真歩子は、健太郎のアパートの部屋で二人だけの時間を過ごしていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。

そのままベッドに倒れ込む。

テニスウェアとスポーツブラをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あつ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首がこんなに勃っているよ。スポーツブラのせいかな？汗の味もしているね」

「健太郎さん、ダメです。シ、シャワーに…」  
「まだダメだよ。真歩子ちゃんのを、たっぷり楽しんでからだよ」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースコートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ベッドから降りて。立って。それからベッドのシートに手をついて、お尻を突き出すんだ」

「ええっ？早くシャワーに…」

「まだだよ」

そう言つて健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、お尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよ。丸くて、大きなお尻」

「イ、イヤーン」

そう言つて真歩子は、かぶりを振つた。



健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言って真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言って真歩子は、少し頬を膨らませた。

「じゃあ、シャワーに行こうね」

健太郎は真歩子のテニスウェアを脱がし、彼も服を脱ぐと、二人で浴室に入った。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎はフェイスタオルを真歩子に見せた。それは、今日はSMチックなセックスをするというサインである。

「はい」

真歩子は心得たかのように背中を向け、後ろ手を組んだ。

健太郎は真歩子の両手首をタオルで縛った。

次に健太郎は、真歩子をベッドに腰掛けさせると、彼女に言った。  
「股を開け」

健太郎に言われるまま、真歩子は股を開く。女性器は、薄い陰毛に被われていた。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

「オマンコの毛、剃ろうか」

「は、はい」

真歩子が頷くと、健太郎は棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子用の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。ツルツルオマンコ、綺麗だよ」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言っつて真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…、うつ伏せになっつて」

「はい」

言われるまま、うつ伏せになる真歩子。

「もうちよつとお尻を高くしないと…」

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

「じゃあ、お尻の穴も剃るよ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女のオナルに剃刀を当てた。

「ああ…」

「ほらほら、じっとしてないと、切れちゃうぞ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫した。真歩子は、次第に落ち着きを取り戻した。

「それじゃ、剃るよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のオナルの毛を剃った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は洗面器のお湯を処理し、用具をしまつと、再度真歩子の尻を持ち上げた。

健太郎は真歩子の太股に指を這わせながら言つた。

「今日はまずは〈お尻〉だから、念入りに準備するよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言つて健太郎は、真歩子のオナルを指で突いた。

突く度に、真歩子のオナルはすぼまつたり広がったりする。

「ああつ、ヤンツ」

真歩子は次第に、オナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、い…入れて、く、ください。指で、お尻の穴を…」

健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グニグニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「葉月学園3年生、テニス部部長の持田真歩子ちゃん。こうしている間にも、僕の指と真歩子ちゃんのエッチなお尻の穴は、しつかりハ

メハメしているんだよ」

「ああっ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」  
そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あっさりと絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言うとき健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。

「今度は、お尻の穴を舐めてあげるね。お尻の穴、ヒクヒクしてすばまったり広がったりしているよ。欲しいんだね」

「え、ええ。エッチなお尻の穴も、健太郎さんの物です…」

健太郎は頷くと、真歩子のアナルに舌を這わせた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子のお尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。舌先でツンツンと突いた後、舌を密着させ、細かい皺を舐める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツっちゃう!!」

そう言うとき真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください…。いやらしいお尻に、健太郎さんのオチンチンを入れてください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。しかし、指と舌で準備したため、切れてはいない。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「先輩の、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを掴んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いのでグリグリされて…、オマンコはクチククチクされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イチちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。貴方を、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとうございます…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は、又、洗面所へ行くと、石鹸とお湯を入れた洗面器を持って戻って来た。

一度男性器を石鹸で洗うと、健太郎は真歩子をベッドから起こした。そして言った。

「じゃあ、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を

萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。もう一度、お口でして」

「はい」

手を使えない状態での、真歩子の舌と唇だけのフェラチオは、上手になったとは言え、劣るのも事実だった。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!？」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を啜えさせた。へイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らかな音が、部屋に響く。

真歩子のイラマチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サディスティックになる健太郎。

真歩子の口の中で、再度大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

だが真歩子は、健太郎の精液を全て飲まないで、吐き出してしまった。

「あれれ?どうしたの?吐き出して」

「ご、ごめんなさい。でも、健太郎さんの、凄い勢いで、それに沢山

出て…」

「そう。でも、飲んでくれなかったから、お仕置きだなあ」

「はい。お仕置きして下さい…」

「じゃあ、ベッドにうつ伏せになって、お尻を突き出すんだ」

「はい」

真歩子は健太郎の意地悪な命令には逆らえない。

健太郎は真歩子の尻を愛撫した後、平手打ちをする。乾いた音が、部屋に響く。

「アンツ!!」

すぐに真歩子の尻は、真っ赤になる。

「真歩子ちゃんの可愛いお尻が、真っ赤に腫れちゃったよ」

「お尻が、痛いです…。それに、ムズムズして、熱いです」

「次は…、どうして欲しいのかな?」

「健太郎さんのオチンチンが、欲しいです」

「どこに欲しいのかな?きちんとおねだりしてよ」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のオマンコに入れて下さい」

「ちゃんと言えたね。じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。そして、真歩子を拘束するタオルをほどいた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ち良い…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…。ああっ、そ、そこ、気、気持ち良いです…」

「真歩子ちゃん、この辺りがコリコリしているよ。ここが気持ち良いんでしょ」

健太郎は男性器の先が触れている膣壁の膨らんだ場所を重点的に擦る。

直後、真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコが溶けちゃう。イツっちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ!!イ、イク…。あつ…。あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てをぶちまけた。

「あつ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も潮を吹いた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

この後、健太郎は真歩子は、二人でシャワーを浴びた。

そしてシャワーを浴び、身支度を整えると真歩子を自宅に送る。

その途中、テニスの秋季大会が27日と28日に開催される事を真歩子から知った。

「そう、今度の土日試合が…」

「そうなんです」

「じゃあ今日のデートは、丁度良い調整になったんじゃないかな？」



「そうですね。有り難うございます」

「後、真歩子ちゃんにとっては最後の大会なんだね」

「はい。是非、観に来てください」

真歩子が頷いた。

そして健太郎は真歩子に、日曜日に試合観戦に行く事を約束した

…。

【続く】

### 第32章 テニスの試合の後

28日、日曜日。

健太郎は真歩子の高校最後のテニスの試合を観に来ていた。

会場は卯月町の隣町、八十八町のテニスコートである。

前日の27日、土曜日の時点で、真歩子率いる葉月学園はテニスに転向したOGで陸上部エース田中美沙が臨時コーチを務める先負学園、頼津学園に勝利。一方健太郎の母校でOGの結城瑞穂が臨時コーチを引き受けた卯月学園は八十八学園、聖メアリミード学院に勝利し、日曜日の試合を迎えた。

健太郎は試合中の真歩子の集中力を削いではならない事を重々承知しており、会場内では目立った行動や派手な応援は控えていた。

この葉月学園対卯月学園の決勝戦、団体優勝したのは卯月学園だったが、個人の総合成績では真歩子が優勝し、有終の美を飾った。

試合後。健太郎は真つ直ぐに八十八駅に向かい、電車で卯月町に戻り、駅で真歩子を待つ事にした。真歩子は一度葉月学園にバスで戻り、それから卯月町に電車で戻る事を、23日に真歩子から聞かされていた。

卯月駅にて。

健太郎は真歩子を見つけると、彼女を出迎えた。

「真歩子ちゃん、お疲れ様。個人の優勝、おめでとう。団体は準優勝で惜しかったけど、見事だったよ」

「健太郎先輩、有り難うございます」

真歩子が一礼した。

試合終了は昼過ぎで、夕食までは時間があるため、健太郎と真歩子は、《土下座》で二人で優勝祝いに乾杯した。健太郎はジンジャーエールを、真歩子はオレンジジュースをオーダーした。勿論、ここで媚薬を入れる、等という様な卑劣な真似をする健太郎ではない。

《土下座》を出た二人は、健太郎の住むアパートに向かった。

寝室にて。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言つて健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。一度唇を離すと、再度唇を重ねる。今度は互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が光っていた。

「じゃあ…」

そう言つて健太郎はフェイスタオルを真歩子に見せた。それは、今日はSMチックなセックスをするというサインである。

「はい」

真歩子は心得たかの様に背中を向け、後ろ手を組んだ。

健太郎は真歩子の両手首をタオルで縛った。

健太郎は真歩子と向き合おうと、テニスウェアとスポーツツブラをずらす。真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あつ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首がこんなに勃っているよ。スポーツブラのせいかな？汗の味もしているね」

「健太郎さん、ダメです。シ、シャワーに…」

「まだダメだよ。真歩子ちゃんの身体を、たっぷり楽しんでからだよ」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースコートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの?」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ベッドから降りて。立って。それからベッドのシーツに身体をうつ伏せにして、お尻を突き出すんだ」

「ええっ?早くシャワーに…」

「まだまだよ」

そう言つて健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよ」

「イ、イヤーン」

そう言つて真歩子は、かぶりを振つた。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言つて真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言つて真歩子は、少し頬を膨らませた。

「次は、シャワーの前に、お腹の中をキレイにしようか」

「は、はい」

真歩子が頷く。健太郎は真歩子のパンティとアンダースコートを脱がした。そして言つた。

「その前に、ベッドに正座するんだ」

言われるまま、ベッドに正座する真歩子。

健太郎は真歩子の腿と脛を、体育の授業で使用していた柔道着の帯で軽く縛つた。柔道着は二着あったので、同じ色の帯で縛る事が出来

た。

「これで良し。後は」

健太郎はそう言って、真歩子のポジションを調整し、真歩子の足の甲が、ベッドのマットレスに当たる様にした。

バランスを崩したら、ベッドからベッドから落ちてしまいそうな不安定なポジションのため、真歩子は少し前屈みになる。

「どう、かな?」

「健太郎さん、こんなの、恥ずかしいです」

「そんな事言って、もうお尻の穴、ヒクヒクしているよ」

そう言って健太郎は真歩子のスカートを捲る。

健太郎は真歩子の女性器に指を這わせる。既に真歩子のそこからは大量の蜜が滴っている。

健太郎は真歩子のアナルを、少し焦らすかの如く愛撫する。

「あぁっ、は、早く…」

そう言って真歩子は尻を振る。

健太郎は真歩子のアヌスに指を入れ、グニグニと揉みほぐす。

「ヤ、ヤンツ」

次第に真歩子はアナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、お浣腸するよ」

「は、はい」

真歩子が頷くと、健太郎は服を脱いだ。

次に健太郎は、浴室から洗面器を、冷蔵庫から紙パックの牛乳を、薬の入っている戸棚からへエネマシリンジと注射器を取り出した。

そして真歩子をうつ伏せにさせた。

「じゃあ、ミルクをお尻の穴から飲もうね」

健太郎は、へエネマシリンジの先端を、真歩子のアヌスに挿した。

真歩子の側からは、先端の嘴管は外れない。

もう一方の先端を、牛乳パックに入れ、握ったゴム球を押ししたり緩めたりして、真歩子の腸内に牛乳を注ぎ込む。

「アアッ…。っ、冷たいです」

「我慢するんだ。お尻に力を入れて」

「は、はい」

真歩子の尻たぶには、汗が浮かぶ。排泄欲が疼く。下腹部が、ポツコリと膨らんだ。お腹が愛らしい音を奏でる。

「よし、牛乳はこれ位にして」

そう言つて健太郎は先端を牛乳パックから取り出した。そして、握ったゴム球を押ししたり緩めたりして、真歩子の腸内に空気を入れる。

「アアツ、く、空気が…」

「そうだよ。空気を入れる事で、牛乳を出し易くするんだ」

暫く空気を入れた後、健太郎が尋ねた。

「真歩子ちゃん、どうかな？」

「健太郎さん…。お腹が、苦しいです。い、痛いです。も、漏れそうです」

真歩子のお腹は、愛らしい音を奏で始めた。

「じゃあ、そろそろだね」

「はい。オナラが、ウンチが出そうです」

「うん」

真歩子の言葉に健太郎は頷く。

彼はヘエネマシリンジの先端を、真歩子のアヌスから外す。そしてテニスウェアのミニスカートを捲り、牛乳がかからないようにすると、左手に洗面器を持ち、受ける用意をする。

「真歩子ちゃんのお腹を撫でてあげるね」

右手で真歩子の腹を愛撫すると、牛乳が勢い良く飛び出した。今回も、牛乳は白色で、薄茶色くは染まってはおらず、汚物も混じっていない。

「アーン、良いの…、で、出てる…」

「真歩子ちゃん、お浣腸、気持ち良いんだ」

「ええ…。でも…」

「でも、何？」

「お浣腸は、健太郎さんとエッチする時だけです。普段、お手洗いではしてませんし、お通じも自然です」

「そうなんだ。良かった。下手すると依存症になるからね」  
そうしているうちに、真歩子は牛乳を全部出した。

「じゃあ、洗面器を洗って来るからね。終わったら、もう一度、お腹を洗うためのお浣腸だよ」

健太郎は、洗面器を洗って来ると、お湯で再度真歩子に浣腸をする。今度は、大型のプラスチック製の注射器を使う。

健太郎が真歩子の下腹部を愛撫すると、真歩子のアヌスからはお湯が噴き出す。健太郎は洗面器でお湯を受ける。それは白濁しておらず、汚物は無い。全部出たところで、健太郎が尋ねた。

「真歩子ちゃん、お腹の具合は？」

「大丈夫です。痛くありませんし、違和感もありません」

「じゃあ、もう一度洗面器を洗うから。それからお尻の穴とオマンコを洗うよ」

そう言って健太郎は、洗面器を持って再び浴室に行った。

お湯を処理し、洗面器を洗うと、再度洗面器にお湯を入れて戻って来た。

「これから、真歩子ちゃんのお尻とオマンコを石鹸で洗うからね」

「は、はい…」

頷くと、真歩子は健太郎のされるがままになる。

まだ真歩子のアヌスはヒクヒク蠢き、ピチツピチツと音を奏でる。

「まだ可愛いオナラさせて…」

「ああん、恥ずかしい」

健太郎は丹念に真歩子の女性器とアナルを洗うと、背中から抱きつき、耳朶と首筋にキスをした。そして乳房と乳首を愛撫する。そしてベッドから真歩子を降ろし、カーペットの上にうつ伏せにさせた。

「じゃあ真歩子ちゃん、チンポをペロペロするんだ」

「け、健太郎さん」

「何？」

「こ、怖い事はしないでください…」

「それって、ヘイラマチオの事？」

「はい。手を縛られていますから…」

「大丈夫だよ。真歩子ちゃん。手が使えないならば、工夫してくれば良いよ」

真歩子は頷くと、健太郎の男性器を舌と唇、更に頭を巧みに動かして愛撫する。

健太郎の男性器は激しく蠢く。

「それじゃ、真歩子ちゃん。お尻の穴にチンポを入れるよ」

「はい。真歩子のお尻に健太郎さんのオチンチンを入れてください」

真歩子は尻を振って、淫らなおねだりをする。

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。オマンコが、壊れちゃう…。イッちゃう…」



「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢

山楽しみましょうね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子を縛るタオルと帯をほどき、彼女を立たせ全裸にしてから唇を重ねた。

「それじゃ真歩子ちゃん、シャワーに行こうか」

「はい」

真歩子が頷く。そして二人はシャワーを浴びた。

浴室を出た健太郎と真歩子は、再度身体を重ねた。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、何もかも健太郎の物だ。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、チンポ、萎んじゃうよ」

「も、もう…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いから」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。君の中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。」

こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。出して…。今度も中に、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

セックスの後、二人は再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから身支度を整え、真歩子の自宅に向かった。

そして真歩子の両親に挨拶と優勝報告をしてから、健太郎は帰宅の途についた。

【続く】

### 第33章 映画鑑賞の後

10月4日、土曜日。

《カトレア》でのアルバイトを終えた真歩子は、その足で《土下座》を訪問した。

健太郎は真歩子に、紅茶を振る舞う。

「なるほど、10月と11月は行事が目白押しなんだ」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子は頷く。

5日と12日は行事は無いが、18日と19日は体育祭。26日は中間テストの前日のため、デートは無しとなった。27日と28日は中間テスト。20日の午後にデートで合意した。

11月は1日から3日の3連休は予定は無し。7日から9日まで学園祭。又16日は模擬試験のため、9日と16日はデート無しとなった。また22日から24日の3連休も予定は入っていない。但し、30日も予定は無いが12月10日から12日が期末テストのため、30日と7日はデート無しで合意した。

5日、日曜日。

健太郎と真歩子は映画館《ミラクル座》にいた。ここは所謂シネマコンプレックスで、地下にはカフェレストランもある。又、エントランスでは懐かしい映画のパンフレットが販売される事もある。

10月から11月は、邦画・洋画問わず名作が公開される。

上映中の事。真歩子はスクリーンを見つめながら大粒の涙をこぼしていた。感受性豊かな彼女故だった。

併設されているカフェレストランにて。

真歩子に映画の感想を質問された健太郎は、こう答えた。

「正直言つて、恋愛映画は苦手だからね」

「じゃあどういった作品が好きなんですか?」

「アクション、コメディ、SFかな。それに、ドキュメンタリーに戦争映画。後アニメも好き。ただホラーは苦手」

「そうなんですね」

真歩子が頷いた。

《ミラクル座》を出てから、健太郎と真歩子は、健太郎が住むアパートに向かった。

健太郎が暮らすアパートの部屋にて。

「真歩子ちゃん」

「健太郎さん…」

健太郎は真歩子を抱き締めると、彼女の着ている服を脱がした。そして、下着姿の真歩子の身体を横たえた。

健太郎の身体は、いつも以上に熱くなっていた。言葉だけではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子を再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロッチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

シャワーを浴びた後。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして彼女を横倒しにすると、背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘んで転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる。ツンツンツ」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ。乳首もほら、コリコリつと」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

「ほらほら、真歩子ちゃんのオッパイ、たっぷりモミモミしてあげる」

「イ、イヤーン…。そんなにきつく揉まないでください…」

健太郎の言葉責めと乳房への愛撫に、真歩子は耳まで紅く染めた。それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと言ってごらん」

「意地悪。エッチ。真歩子のオマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、ご褒美だよ。入れるよ」

そう言っただけ健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言っただけ健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコ。何て良く締まるんだ。イイツ。最高だ。本当は〈松葉崩し〉が好きなんですよ？気持ち良いんですよ?」

「は、恥ずかしい…」

「あれれ? 答えてくれないの? なら止めちゃうぞ」

そう言っただけ健太郎は、律動を止める。

「ああんっ。健太郎さんの意地悪」

そう言う真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

「正直に言っただけよ」

「き、気持ち良いの…」

「じゃあご褒美だよ」

真歩子がそう言った直後。健太郎の腰の動きが、再度激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。

健太郎は真歩子に男性器を深く啜えさせた。

「出すからね。全部飲んで」

真歩子の舌の先端が健太郎の男性器に触れた直後。健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ん、んぐ、んんんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。

それから、二人は丹念に身体を拭いた。そして、健太郎は言った。

「ねえ、真歩子ちゃん」

「はい」

「僕はまだ元気だから。見てごらん」

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言うと健太郎は真歩子に、下半身を見る様に促した。健太郎の男性器は、再度フル勃起していた。そして真歩子を再度ベッドに横たえた。

健太郎は右手で左の乳房を包み込むと同時に、左の乳首に舌を這わせた。舌先で転がした後、唇で包み込み、音を立てて吸う。その間も、右の乳首を摘まんで転がす。



それから、真歩子の女性器を押し広げ、舌と指で愛撫する。  
更に陰核を剥き出しにして舌で刺激する。

そして溢れ出した蜜を吸う。

「ねえ…、お願い」

「ん？どうしたの？」

「じ、焦らさないで…。早くして」

柔らかさと弾力を併せ持つ乳房も、ピンク色の乳首も、臍も、ウエ  
ストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

で、今回も健太郎はちよつと意地悪をする。

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ」

「もう…」

そう言いながら、真歩子は、大事な部分を指で開いた。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

「健太郎さんが、欲しいの…。早く、オチンチンを真歩子のいやらし  
いオマンコに入れてください…」

真歩子は、淫らなおねだりをする。

その直後、彼女は耳まで赤くした。

そして健太郎も、心臓が高鳴った。

健太郎は真歩子の中に、再度、男性器を挿入した。

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でも、どこか温かく、そして  
優しく締め付ける。

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチン  
チンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい  
締めりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。そして健太郎は真歩子の耳朶を甘噛みしてから、首筋にキスをする。

続いて健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、包み込んだ。そしてきつく吸う。

「け…、健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを挿んだ。イク前兆だ。

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーツ。イツちゃううっ…

!!わ、私、壊れちゃう…。オマンコ溶けちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。健太郎さんも、一緒にイッてえっ…!!」

「分かった。真歩子ちゃん、イクよ」

「全部、出して…」

「くうっ…」

「あっ…、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達し、潮を噴くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。真歩子も、熱い精を浴び、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがたくさん…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。その間、彼女は乳房から腹を撫で、指に絡みついた彼の白濁を見つめていた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。

そして言った。

「じゃあ、もう一度シャワーを浴びるよ」

「はい」

それから二人は、再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから、アパー

トを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。それから、彼は帰路についた…。

【続く】

### 第34章 10月の3連休初日

9日、木曜日。

「終わった、終わった」

そう独り言を言つて正門を見た健太郎は、ある事に気が付いた。

「あれは…?」

見慣れた葉月学園の制服。

「健太郎先輩」

「真歩子ちゃん!? どうして、ここに?」

話しをしている間も、専門学校の生徒は二人の事をチラ見して行く。

「それにしても、皆私達の事を見て行きますね」

「ああ。今の時期も、他校の生徒は、まず来ないからね」

真歩子の言葉に健太郎は苦笑しながら頷いた。

「で、今日はどうしてここに?」

「明日、健太郎先輩はアルバイトですよ」

「うん。真歩子ちゃんもアルバイトでしょ」

「ええ、それで、《カトレア》でのアルバイトが終わったら、そちらに伺いたいのですが」

「うん、わかったよ」

「じゃあ明日、宜しくお願いします」

そう言う真歩子は一礼して専門学校を後にした。

その日の夕方。持田家の夕食にて。

「真歩子」

「何、パパ」

「明日、午前中にたけしが《文月学園》から帰省すると、電話があった」

「それで卯月駅に迎えに行くけど、真歩子はアルバイトでしょ」

「はい」

母の言葉に真歩子が頷く。

「で、真歩子はどうする? 田中君と一緒に過ごすなら、それも構わな

いぞ」

「パパ、それって…?」

「いつも健太郎さんに私達が文月町に行く時は、留守を預かってもらっているから、今度の3連休は、真歩子が健太郎さんの所に行くのはどう?」

「ママ、本当に良いの…?」

「ええ。但し、一つだけ条件があるの。健太郎さんのアパートがどんな所か、明日、真歩子と一緒に見てみたいの」

「ええ。それは問題無いわ」

「じゃあお願いね」

「はい」

真歩子は再度頷いた。

翌日。10日、金曜日。この日は、体育の日である。

真歩子は、自宅を両親と一緒に出て、卯月駅でたけしを迎えた後に《カトレア》でアルバイトをした。

一方真歩子の母は、真歩子のアルバイトが終わる前に《カトレア》に向かい、二人は合流した。

この日健太郎はアパートを出て、《土下座》に向かう。そしてシフト終了後、《カトレア》から真歩子が来るのを待った。

全員が落ち合ったのは、真歩子のバイト終了後の18時30分だった。

「こんばんは、健太郎先輩」

「こんばんは、健太郎さん」

「こんばんは。えっ?!お母様も御一緒ですか」

健太郎が驚くのも、無理はなかった。そして続けた。

「立ち話もなんでしょうから」

そう言うと健太郎は、椅子を勧めた。そして健太郎はジンジャーエールを、真歩子はオレンジジュースを、母はコーヒーをオーダーした。

「それで、今日はどうしてお二人で…?」

健太郎の質問に真歩子が答えた。

「ママが、『私のアルバイトが終わったら、ちょっと健太郎先輩に会ってみたい』、と」

「そうだったんですね」

「それで健太郎さん。急で申し訳ないんですけど、健太郎さんのアパート、見せて頂けませんか？」

「それは構いませんが」

「では、宜しくお願い致します」

真歩子の母が一礼した。

健太郎のアパートの部屋にて。

「どうぞ、お入りください」

「お邪魔します」

「お邪魔します、健太郎さん」

真歩子と彼女の母が中に進む。

健太郎は押し入れのクローゼットケースと段ボールに本を入れている。所謂ポルノ雑誌やSMの首輪等は段ボールに入れ、押し入れの奥に入れている。大きな箆笥は無いがチェストに衣類を入れている。以前使っていた本棚には、ブロック玩具を入れている。

冷蔵庫には食品や飲料を入れている。

薬品が入っている戸棚は見なかった。

「男の子の部屋にしては、キレイね。自炊もしているみたいで」

「自炊といっても、冷凍食品と卵と生野菜サラダ位です」

真歩子の母の問いに健太郎が答える。

「安心したわ。健太郎さん」

「あ、有り難うございます」

「じゃあ、今日から12日まで宜しくお願いしますね、健太郎さん。

真歩子、お母さんは帰るわよ」

そう言つて真歩子の母は、健太郎と真歩子に告げ、アパートを出て、帰宅の途についた。

「はい、帰り、気をつけて。ママ」

「お気をつけて」

真歩子の母がアパートを出た後、健太郎が真歩子に聞いた。

「真歩子ちゃん、これは一体…?」

「パパとママが、『今回の3連休に、たけしが帰省するから、健太郎さんと一緒に過ごしたら』、って」

「本当に!?!」

「ええ。ただ、『その条件として、ママが健太郎さんのアパートを見る』、と」

「そうだったんだ」

「という訳で、これから宜しくお願いします」

「お願いするのは、僕の方だよ、真歩子ちゃん。宜しくお願いします」

そう言って健太郎は真歩子に頭を下げた。

「で、健太郎さん、今日の夕食は…」

「今日は僕がある物で作るよ」

そう言って健太郎はすぐさま料理を始めた。

「あの、何か手伝えませんか…?」

「大丈夫、任せて」

そう言って健太郎は、手早く料理を仕上げた。普段、飯は何合か炊き、冷蔵している。又、味噌汁は2回分は予め作っておく。

「それじゃ、頂きます」

「どうぞ」

健太郎と真歩子は、二人同時に箸をつけた。

「健太郎さん、意外とやりますね。カップ麺とか、レトルトとか、そういう物ばかりだと思っていました」

「意外だった? 《土下座》で鍛えたからね」

「ふっ…」

真歩子が笑みを浮かべた。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さま」

二人は、ほぼ同時に食事を終えた。

その後、二人は洗い物をする。

歯磨きは真歩子が持参しており、又、シャンプーやコンディショ

ナーは健太郎の浴室に普段から置いてあるので、慌ててコンビニに行く必要は無かった。

そして…。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている服を脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力も

あって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。それから、パンティに手を入れ、女性器を愛撫する。健太郎はパンティから手を出すと、真歩子に溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。



「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にしたてから、彼女の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやっただ…」

「は、恥ずかしいです…。そ、それにお部屋を汚して…」

「ちつとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

「健太郎さん…」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股と尻を愛撫するだけで、挿入は無しである。ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。健太郎はベッドに真歩子を仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朵、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言っただけ健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へまんぐり返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んっ、ふああっ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言っただけ健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あっ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですばまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのおまんこにチンポを入れたくなつていたんだ」

そう言つたと健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいおまんこに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ほ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああつ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段と

きつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…。オマンコが、溶けちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとうございます…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

真歩子の言葉に健太郎が頷く。

真歩子の蜜で潤った健太郎の男性器に、真歩子の舌がチロチロと触れる。

ほどなくして、健太郎の男性器は綺麗になった。

お掃除フェラの後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転

がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もっと動いてみて。僕のチンポで、おもいっきりイケよ」

健太郎に 言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。そう言いながら真歩子は、自分の胸から腹部を撫で上げ、指に絡みついた健太郎の白濁を眺めていた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

互いの身体をバスタオルで丹念に拭き、乾かしてから、二人は健太郎のベッドで裸のまま就寝。そして、土曜日の朝を迎えた。

【続く】

## 第35章 10月の3連休二日目

11日、土曜日。

この日は、健太郎も真歩子も、午前は学校、午後はアルバイトである。真歩子は、金曜日に葉月学園のセーラー服を持参していた。

二人は早めに起床し、身支度を整えてから、朝食を摂った。

この日の朝食は、トースト、バナナ、チーズ、ヨーグルト、サラダ、ウインナー、それにコーヒーである。

朝食後、洗い物を済ましてから二人は学校に向かった。

健太郎と真歩子は、彼女のアルバイト終了後に、《土下座》にて落ち合う事になっていた。

真歩子はテニス部を卒業しているが、トレーニングと後輩への指導を兼ねて土曜日の午後の練習は続けている。

真歩子は部活終了後、葉月学園を出て、一度自宅に立ち寄り、着替えてから卯月町の《カトレア》に向かった。

一方の健太郎は、土曜日は午前授業で、昼食後にアルバイト先の《土下座》に向かった。

真歩子が《土下座》に顔を出したのは、18時30分だった。

健太郎と真歩子は、駅前のスーパーマーケットで買い物をしてから、健太郎のアパートに戻った。

帰宅後、夕食。健太郎と真歩子は、一緒に夕食を作る。流石に真歩子に裸エプロンをさせる健太郎ではない。

真歩子の手料理は、9月の3連休以来の事だった。

「それじゃ、頂きます」

「どうぞ」

健太郎と真歩子は、二人同時に箸をつけた。

「真歩子ちゃんの料理、最高だよ」

「有り難うございます、健太郎さん」

夕食を食べ終わったのは、二人ほぼ同時だった。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

それから一緒に後片付けをする。もう、すっかり手慣れた物である。

その後、健太郎と真歩子は勉強。健太郎は自室で、真歩子は和室を借りた。

勉強の後、健太郎と真歩子はシャワーを浴びた。セックスの始まりである。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみも、昨日と同様に、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ…」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。合図のための、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、真歩子の乳房を直接愛撫する。

鼓動と温もりが、掌を通じて伝わる。



そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色だもの。真歩子ちゃんの母乳、きつと美味しいのが出るんだろうな」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…。突かれたら…」

「ほらほら、ツンツンツンツンツンツ、コリコリコリコリつと」

「ヤ、ヤンツ。イヤーン」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、女性器を直接愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

そう言っつて健太郎は、真歩子に蜜まみれになった手を見せる。

「け、健太郎さんの意地悪」

「じゃあ、次は…」

「はい」

「パイズリしてよ。真歩子ちゃんのオツパイで僕のチンポを挟んで」

健太郎は真歩子に跨がり、勃起した男性器を胸の谷間にあてがった。

真歩子が健太郎の男性器を乳房で挟むと、健太郎は腰を前後させる。

この方法だと、真歩子の体力の消耗は少なくて済む。

「真歩子ちゃんのオツパイの感触、最高だよ」

「なんか変…。健太郎さんに胸を犯されているみたいですよ…」  
健太郎の腰の動きが次第に激しくなる。

「くっ…。で、出る」

そう言った直後、健太郎は真歩子の顔面に射精した。

「真歩子ちゃん、舐めて。キレイにして」

「は、はい」

「終わったら、オマンコに入れてあげるね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

お掃除フェラの後、健太郎は真歩子の顔面をティッシュで拭いた。  
それから健太郎は、真歩子の身体を丹念に愛撫した後、彼女を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、オチンチンが…、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの大事な部分が、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコがイツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は、な、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!い、一緒に、イッてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

お掃除フェラの後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。尻たぶを撫でる左手の人差し指が、真歩子のアヌスを刺激する。

「ヒイツ!!そこ、そこは、お尻の穴は、いきなりはダメです」

「真歩子ちゃんは、お尻の穴でも感じる、エロい女の子でしょ」

「で、でも、い、いきなりは、ダ、ダメですっ」

「じゃあ」

そう言って健太郎は一度人差し指を離した。そして言った。

「真歩子ちゃん、お尻の穴、ツンツンするよ」

「はい、健太郎さん…。真歩子のエッチなお尻の穴もいじってください」

健太郎は、真歩子のアヌスを刺激しながら、律動を続ける。

溢れ出した蜜のおかげもあり、健太郎はスムーズに動く事が出来る。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

まさしくヴェールと化している。

健太郎の寝室には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!？」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポ、怒って萎んじゃうよ」

「も、もう…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイ  
イ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いから」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いので、オチンチンでグリグリされて…。わ、私、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。出して…。今度も中に、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あっ…。ああああああーっ!! イ、イヤァッ!! イ、イク、イクツ、イツちゃうーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

セックスの後、二人は再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから健太郎の寝室に向かった。

そして二人共に裸のまま、就寝した…。

【続く】

## 第36章 10月の3連休最終日

12日、日曜日。3連休の最終日である。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

真歩子の姿を見た健太郎は、ムラムラしたが、朝からは無しである。

この日、健太郎も真歩子もアルバイトは無く、又、彼女の部活動も休みである。

「おはよう。良く眠れた？真歩子ちゃん」

健太郎はベッドから先に出て、服を着ているところだった。

「おはようございます。良く眠れました、健太郎さん」

真歩子もベッドから出ると、まず下着を着けた。

「これから朝ごはんにしますね」

「うん、ありがとう。それにしても、良い眺めだね。今日のブラジャーとパンティは、ピンクか…。似合ってるよ」

「健太郎さん」

「ん？」

「あんまりじろじろ見ないで下さい」

「だって色っぽいんだもん」

「イヤです。恥ずかしい。またエッチな事考えているんじゃない？」

「ゴメンね。じゃあ見ない」

「私、魅力無いんですね…」

「あのね…どつちかにして…」

「だって、私、オッパイ小さいし…。お尻は大きいし」

「そんな事無いよ。オッパイは初めて会った時より大きくなったよ。パイズリも出来る様になったし。乳首も綺麗な色だもん。お尻だってプリプリして魅力的だよ。後ろも綺麗だね」

「もう、健太郎さん、エッチです…」

そう言って真歩子は頬を膨らませた。でも、彼女の目は笑っていた。

「さてと、僕も手伝うよ、着替えじゃなくて朝食の用意」

「ありがとうございます」

「今日は、沢山楽しむよ、日曜日だからね」

「ええ」

そう言つて真歩子は笑顔で頷いた。

朝食後。

健太郎と真歩子は、一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

洗い物を済ませた後、健太郎と真歩子は勉強。健太郎は居間で、真歩子は今日も和室を借りた。その後、二人で洗濯も済ませた。

今日は、昼食後に町に出て、デートする事になっている。又、今日は真歩子が夕方に帰宅する日でもある。

そして13時に二人は家を出た。

今日は新頼津町のプラネタリウムでデートである。プラネタリウムは、卯月町と葉月町には無いため、新頼津町まで足を伸ばした。

プラネタリウムを出た後、卯月町に戻る列車の中にて。

「健太郎さんがプラネタリウムでデートするって…」

「意外だったかな？」

「ええ」

「元々、僕は天文学や太陽系、宇宙開発には興味があつたし、ホラー以外のSF映画は好きだからね。それで、昨年、葉月学園を見学した時に、『屋上を地学・天文部が観測に使っている』って言った時に、『面白そうだね』って答えたんだよ。それと、ギリシャ神話かな。僕はギリシャや北欧の神話は好きで、特にギリシャ神話は星座の元ネタになつた物も多いんだよ。『ペルセウスとアンドロメダ』とか…」

「そうだったんですね」

真歩子が言つた。

健太郎のアパートにて。

「真歩子ちゃん…」

そう言つと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ? う、う…うん」

合図のための、キス。



一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎は上着の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あんっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。敏感なんだね」

「イヤーン。恥ずかしい…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ？」

「真歩子ちゃんが、僕のズボンとパンツを脱がして、チンポを出すんだ」

「は、はい…」

真歩子が頷くと、健太郎はベッドに腰掛けた。

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。そして彼女は彼のズボンのベルトを外し、ファスナーを下ろす。それからズボンとパンツを下ろして、下半身を露にした。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言って、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかつた。  
「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言うと、真歩子は健太郎の男性器を舌先で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。そして窓際に手をつく様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

そう言うと健太郎は、真歩子のスカートを捲り、彼女が穿いているピンク色のパンティを晒す。

「真歩子ちゃんのパンティ、可愛いね。それにオマンコ、もう凄い事になっているよ。パンティはビショビショだね」

実際、真歩子のパンティのクロツチには、愛液染みが出来ていた。健太郎は真歩子のパンティを膝までずらしてから、女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うのと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いつ見ても魅力的だよ。お尻の穴も可愛いね」

「イ、イヤーン」

そう言うって真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言うって真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

少し頬を膨らませる真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

だが、彼は軽く当てるだけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。ほ、欲しいです…。健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れて、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。  
溢れ出した真歩子の蜜が、床に淫らなマール模様を作った。  
淫らな水音と、二人の吐息が部屋に響く。

汗の香りも、部屋に漂う。

「あぁっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大きくて、太くて、硬いオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなかった。イク前兆だ。

ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。更に真歩子の尻たぶを広げてアナルを外気に晒す。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ

!!

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を啜え、舌が先端に振れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ソ。ング。ンーツ」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…、ありがとう…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

シャワーを浴び、丹念に身体を拭いた後。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子の、オマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…。エッチな女の子だね」

「ああつ…。入つて来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…。あつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして今度は正常位で挿入した。

「健太郎さんが、オチンチンが、は、入つて来る…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け。イイツ。最高だ。まさしく名器だよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。更に真歩子の乳房を揉みしだき、乳首を摘まんで転がす。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」  
「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーツ。イツちやうううっ…!!」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を噴くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。  
そして言った。

「じゃあ、もう一度シャワーを浴びるよ」

「はい」

そして、二人で一緒にシャワーを浴びた。

それから服を着ると、健太郎は真歩子を自宅まで送った。

「只今」

「お帰りなさい。あ、健太郎さん、こんばんは」

真歩子の母が挨拶する。

「こんばんは」

「この前は突然伺って…」

「いえいえ」

「この3日間、お世話になりました」

「こちらこそ、真歩子さんにはお世話になりました」

「健太郎先輩…」

健太郎の言葉に真歩子は頬を紅く染めた。

「又、宜しくお願ひしますね、健太郎さん」

「今後とも、宜しくお願ひします。後、お父様とたけし君にも、宜しくお伝えください」

健太郎はそう言って一礼し、帰宅の途についた…。

【続く】

### 第37章 誕生日デート

18日の土曜日と19日の日曜日は、葉月学園で体育大会が開催された。関係者しか入れなかったため、19日、健太郎と真歩子はデートは無しにした。

迎えた20日、月曜日。この日、葉月学園は日曜日に登校した事に伴い、振替休日になった。この日、健太郎と真歩子は息抜きを兼ねて午後から会う事になっていた。尚、26日、日曜日は中間テストの前日のため、二人はデートは無しとする事と、テスト終了日の28日、火曜日にデートする事で合意していた。

20日。午前中。真歩子は第3土曜日の18日に行けなかったフラワーアレンジメントの教室に行き、一度帰宅した。そして昼食後、健太郎との待ち合わせ場所に向かった。

一方、健太郎は月曜日は午前授業で、授業終了後、すぐに昼食を摂り、その足で待ち合わせ場所に向かった。

まず健太郎と真歩子が待ち合わせをしたのは、《世界一公園》だった。健太郎は葉月学園での体育大会について真歩子に話を聞いた。

「そう、体育大会は陸上競技メインで…」

「ええ、そうなんです。私は、女子100メートル走3年生の部に出場して、3位でした」

「そうだったんだね。おめでとう」

「有り難うございます」

「見に行きたかったけど、学園関係者しか入れないから、仕方ないね。でも、話を聞く事が出来て、良かったよ」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。こうして、二人はゆったりとした時間を過ごした。

次に健太郎と真歩子は、《カトレア》に向かった。

「いらっしやいませ」

「こんにちは。先日、予約しておいた物を」

「はい。こちらですね。田中様」



健太郎は、店員から花束を受け取った。

「確かに。有り難うございます」

そう言うと、その花束を真歩子に渡した。

「えっ!? 健太郎さん…、これは?」

「真歩子ちゃん。誕生日おめでとう」

「あ、有り難うございます」

「じゃあ、真歩子ちゃん、次に行こうか」

「はい」

そう言つて健太郎と真歩子は、《カトレア》を後にし、予約していたレストランへ向かった。

予約していたレストランで、健太郎は真歩子に誕生日プレゼントを渡した。小説と風景画、純金のリングである。

食事後、二人は健太郎のアパートに向かった。

健太郎は花瓶に、真歩子にプレゼントした花束を入れた。真歩子の家に戻るまで、花束が萎れない様にするためである。

そして健太郎と真歩子は、寝室で、二人だけの時間を過ごしていた。

「真歩子ちゃん…」

そう言つて健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ? う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子を後ろから抱き締め、服を脱がしていく。そして彼女を四つん這いにさせた。

「えっ!?!」

「ん?」

「いきなりこんな格好…、恥ずかしいです」

健太郎は真歩子の大事な部分に指を這わせながら言った。

「今日はまずはへお尻でしょ。だから、きちんと準備しておかない

と」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言うのと健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

突く度に、真歩子のアナルはすぼまったり広がったりする。

「ああつ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、お尻に、い…入れて、く、ください」

健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グニグニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「ああつ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」

そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼

は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あつさりと絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言うのと健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。

「今度は…」

そう言うのと健太郎が真歩子の女性器に唇を近付けた直後。

真歩子は股間を手で隠した。

「ダメです…」

「あれっ?どうしたの」

「まだ洗って無いですから…」

真歩子はアナルを舐められる事自体は平気になったが、やはり洗って無い事には抵抗があるのも、又事実である。

「じゃあ、シャワーを浴びようか」

「は、はい」

シャワーから戻った後、健太郎は再度真歩子を四つん這いにさせた。

「じゃあ、舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、真歩子の女性器に舌を這わせた。

それから、アナルを舐めた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子の尻たぶを撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちやう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、真歩子ちゃん、チンポを入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください。真歩子のいやらしいお尻の穴に、健太郎さんのオチンチンをください」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「あぁっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのお尻の中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを掴んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いオチンチンでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュユされて…。わ、私、も、もうダメ…。お尻が、こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ、シャワーに行こう。身体の隅々まで、洗ってあげる」

健太郎が言った。

シャワーから戻った後、真歩子が言った。

「健太郎さん」

「ん？」

「大好きです。ずっと、このままいてくださいね」

真歩子が言い終わると同時に、健太郎は彼女を抱き締め、唇を重ねた…。

そのまま二人は、第二ラウンドに突入した。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに仰向けにした。そのまま全身を丁寧に愛撫する。

そして、横倒しにした後、背中から抱き付いた。

所謂《背面側位》《側背位》と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんで転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな?」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと言ってごらん」

「イ、イヤ…。健太郎さんの意地悪。真歩子のオマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの?」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに入れて、ください」

「じゃあ、今度は真歩子ちゃんのスケベなオマンコにチンポを入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、《松葉崩し》である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのオマンコ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう…」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ。イツちやううつ…!!」

「くうっ…!!」

「あつ、あああああああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達し潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「で、出てる…。健太郎さんがたくさん…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

そう言いながら真歩子は、自分の胸から腹部を撫で上げ、指に絡みついた健太郎の白濁を眺めていた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

二人はシャワーを浴び、身体を丹念に拭いた後、真歩子の家に向かった。

玄関先にて。

「只今」

「あ、おかえりなさい。あら、健太郎さんいらつしやい」

真歩子の母が言った。

「こんばんは」

健太郎が一礼する。

「真歩子。食事はして来たんでしよう。でも、誕生日ケーキはあるから、皆で食べましょう。健太郎さんも上がって」

「健太郎先輩も一緒に、どうですか」

「有り難うございます。では、お邪魔します」

真歩子の母と真歩子に促され、健太郎は歩を進めた。

この日は、健太郎にとっても真歩子にとっても、最高の日となった。

【続く】

### 第38章 中間テスト最終日に

28日、火曜日。

この日は、葉月学園の中間テスト二日目にして、最終日である。テスト終了後。

真歩子は葉月駅前の商店街でクラスメイトと昼食を摂ってから、卯月町に戻った。

その足で、健太郎の通う専門学校に向かった。

一方の健太郎は、火曜日は通常、午前中の授業の後、午後に一講を受けてから帰宅する。

講義終了後。

校門前で待っていた真歩子と合流した健太郎は、その足でデートに向かった。

「お待たせ、真歩子ちゃん」

「あ、健太郎先輩。そんなに待っていませんよ。私も少し前に来ましたから」

「それじゃ、行こうか」

「はい」

健太郎と真歩子は、卯月駅から電車に乗った。行き先は、今年の夏と秋、それに今年の夏、海水浴に来た新霜月町である。

新霜月町は、港湾都市である。又、ビーチも有名な、観光地でもある。

まず二人は、霜月駅から近くの、埠頭に向かう。

霜月港には、客船、貨物船等、大型の船舶が停泊している。海上自衛隊の艦艇や海上保安庁の巡視船の姿もあった。

埠頭近くの臨海公園にて。二人は、ベンチに腰を下ろした。

「秋の海、良いですね」

「うん。それに、久し振りに船を見たくてね」

「ええ…」

「父さんが船員である事は、前にも話したとは思うけど、父さんはパソコンの専門学校に進学した事を話したら、『パソコンの専門学校に



進学したならば、まずはしっかりと学べ』って言ってたよ」

「はい」

「それと、叔父が経営している《土下座》については、卯月学園に進学した義弟が継ぐ気を見せていて、高校を卒業したら、調理師学校に進学する事を決めているんだ」

「そうだったんですね…」

「父さんは、『パソコンの専門学校を終えて調理師学校に行くなら、それも良いから』って言った。後、『その後で大学進学も良いから』とも言ってたよ」

「ええ」

「それじゃ、そろそろ行くこうか。思い出のビーチへ」

「はい」

健太郎と真歩子は、霜月駅からバスに乗った。行き先は、霜月海岸である。

バスを降りてから、二人は少し歩いた。二人が向かったのは、観光地として有名なビーチではなく、隠れ家的なビーチである。と言っても、徒歩で行けない距離ではない。勿論、遊泳禁止ではない。

砂浜に來ると、健太郎は持参したレジャーシートを敷き、二人はそれに腰を下ろした。

「あの日の事、覚えています？ 昨年と今年の…」

「ああ」

真歩子の問いに健太郎が頷く。

健太郎と真歩子は、昨年との事を思い出していた。

昨年の夏休みのある日。健太郎と真歩子は、この隠れ家的なビーチで、思う存分遊んだ。二人で真歩子が作った弁当も食べた。ただ、夏の暑い盛りという事もあり、その日はセックスはなかった。

昨年の秋、真歩子とのデートでは、黒松の防風林で身体を重ねた。そして今年の夏。健太郎と真歩子は、二人で弁当を食べて、思い切り泳いだ。そして夕方、防風林と海の中でセックスをした。

健太郎はそれらを思い出しながら言った。

「真歩子ちゃん…」

健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

「健太郎さん…、誰か来るかも…」

「大丈夫。誰も来ないよ。それにここは、隠れ家的なビーチだから」

「でも、砂浜で、服が汚れると…」

「うん。それじゃ…」

健太郎が指を指した先には、防風林があった。

「あそこなら、目立たないし、草地もあるから。前もそうだったけど」

「ええ…」

真歩子が頷く。健太郎は持参したレジャーシートを持って、防風林に向かった。

健太郎は防風林にレジャーシートを敷き、四隅に石を置いて重石にする。それから再度、二人はそれに腰を下ろした。

健太郎と真歩子は三度、唇を重ねた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、白いブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌尖で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首がこんなに勃っているよ。ほらほら。外でエッチするのは、気に入ったのかな？コリコリ、っと」

「あんっ…。も、もう…。っ、摘まんじゃ。コリコリってされたら

…」

真歩子の喘ぎ声が、付近に響いた。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ？」

「真歩子ちゃんが、僕のズボンとパンツを脱がして、チンポを出すんだ」

「はい…」

真歩子が頷くと、健太郎は黒松に寄りかかった。

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。そして彼女は彼のズボンのベルトを外し、フアスナーを下ろす。それからズボンとパンツを下ろして、下半身を露にした。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言っつて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言っつと、真歩子は健太郎の男性器をチロチロと舌尖で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌尖を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。更には掌で健太郎

の玉袋を丹念に愛撫する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、付近に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ちいいんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。

そして黒松に手をつく様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

そう言うのと健太郎は、真歩子の制服のスカートを捲り、真歩子の白いパンティを晒す。

「真歩子ちゃんのパンティ、可愛いね。それにオマンコ、もう凄い事になってるよ」

健太郎は真歩子のパンティを膝までずらしてから、女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのおマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「も、もう、健太郎さんの意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい…」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うのと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いつ見ても魅力的だよ。細かい皺が可愛いお尻の穴も」

「イ、イヤーン」

そう言うつて真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言うつて真歩子は、絶頂に達した。更に潮を噴いた。

「潮まで噴いて…」

「健太郎さん…、も、もつとイカせて…」

そう言うつて淫らなおねだりをする真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。だが、彼は軽く当てるだけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの？」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。オ、オチンチンが、ほ、欲しいです…」

「じゃあ、どこに欲しいのか、きちんとおねだりしないと」

「健太郎さんの意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに入れて、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオッパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、草地に染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が付近に響く。

汗の香りも、付近に漂う。

「あぁっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。そ、それに膣壁の膨らみ、ここを擦られると、感じるんだね」

「あ、健太郎さんの大事な部分が、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…。そ、そこ、健太郎さんが、あ、当たって、き、気持ちいい」  
真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。  
ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を啜え、舌が先端に振れた直後。

「くっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ソング。ソーツ」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…、ありがとうございます…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「ねえ、真歩子ちゃん」

「はい」

「僕はまだ元気だから」

そう言うのと健太郎は、真歩子をレジャーシートに横たえた。

健太郎は右手で左の乳房を包み込むと同時に、左の乳首に舌を這わせた。舌先で転がした後、唇で包み込み、音を立てて吸う。その間も、右の乳首を摘まんで転がす。

それから、真歩子の女性器を押し広げ、舌と指で愛撫する。

更にクリトリスを剥き出しにして舌で刺激する。

そして溢れ出した蜜を吸う。

「ねえ…、お願いです」

「ん？どうしたの？」

「じ、焦らさないで…。早く…してくださーい」

柔らかさと弾力を併せ持つ乳房も、ピンク色の乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

で、今回も健太郎はちよつと意地悪をする。

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ」

「もう…」

そう言いながら、真歩子は、女性器を指で開いた。

中から溢れ出した蜜が、レジャーシートに染みを作った。

「健太郎さんが、欲しいの…。早く、オチンチンをオマンコに入れて

…」

真歩子は、淫らなおねだりをする。

その直後、彼女は耳まで赤くした。

そして健太郎も、心臓が高鳴った。

健太郎は真歩子の中に、再度、男性器を挿入した。

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締めまりだ。最高だよ」

「あ、あんつ。健太郎さんに私の中、引つ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がレジャーシートを掴んだ。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今度は、中に…。健太郎さんを、感じさせたいっ…!!」

「な、中!?!」

「今日は、大丈夫ですから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して、く、ください…」

「じゃあ、出すよ、真歩子ちゃん。く、くうっ…」

「じゃあ、出すよ、真歩子ちゃん。く、くうっ…」



健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

それから二人は、軽く股間の始末をして居ずまいを正すと、霜月海岸のバス停から霜月駅に向かい、それから電車に乗った。卯月駅に着いてから、健太郎は真歩子を家まで送る。それから、帰路についた…。

【続く】

### 第39章 11月の第1期3連休初日

10月31日、金曜日。

健太郎は専門学校の授業と《土下座》でのバイトを終え、アパートの部屋に戻っていた。

現在、健太郎は授業のある日の平日は、木曜日と金曜日に《土下座》でのアルバイトを入れている。それ以外の平日は、時間のある時に手伝っている。土曜日は午後から、祝日は原則フルタイム勤務としている。夏休みと冬休みは月曜日から土曜日まで勤務、又、春休みは午前中のみシフトに入る。但し、日曜日は休みである。後は、義弟と悪友の後藤稔がシフトに入っている。

健太郎がカレンダーを確認していた時の事。電話が鳴った。真歩子からだった。

「健太郎さん、こんばんは」

「あ、真歩子ちゃん？こんばんは。どうしたの？」

「あの、明日からの3連休の事ですけど…」

「うん…」

「明日、たけしが帰省するので、パパとママから、『今度の3連休、健太郎さんと一緒に過ごしたら』、と話があつて、どうでしょうか？」

「大丈夫だよ。こっちは土曜日と祝日の月曜日のアルバイト以外は予定は入っていないから」

「わかりました。じゃあ明日から宜しくお願いします」

「お願いするのは、僕の方だよ、真歩子ちゃん。後、お父様とお母様に宜しくお伝えして」

「はい」

「それじゃあね」

そう言つて健太郎は電話を切った。

翌日、11月1日、土曜日。

真歩子は葉月学園を出ると、生け花教室に行き、終了後に《カトレア》に向かった。バイト終了まで、葉月学園の制服を着ていた。

一方、健太郎も学校を出て《土下座》に向かった。時間まで手伝つ

てから、《カトレア》に真歩子を迎えに行った。

二人はまずスーパーマーケットで買い物。そして健太郎のアパートに戻った後、夕食。それから一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は居間で、健太郎は和室を借りた。

勉強の後。

健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締めた。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!?!」

戸惑う真歩子。

「じゃあ……」

そして健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックなセックスをする、というサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

「はい……」

しかし、健太郎はタオルを使わなかった。傍らにタオルを放った。

「えっ……?」

戸惑う真歩子。

「今日はこつちを使うよ」

そう言って健太郎は真歩子に手錠を掛けた。金属音が、部屋に響いた。実は、真歩子から連絡があった後、押し入れから久し振りに手錠等の道具を用意した。

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。

それから、姿見の前に二人は立った。

健太郎は真歩子のセーラー服とベージュのブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳

首を摘まんで転がす。次第に、乳首は屹立し、硬度を増す。

「や、やあん…。オ、オツパイを、そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあって、最高だよ。ツツツツツツツ、つと。で、コリコリコリコリっ。それから、モミモミ、乳搾り、つと」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…。そ、それに…む、胸を、乳首をそんなに…」

そう言うとき真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスの包皮を剥き、直に摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言うとき真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。

溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな？鏡の前でしているのを見るのは？」

「は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない？もう、オマンコはぐしょ濡れだよ。ピチャピチャ音を立てて…」

そう言うとき健太郎は、真歩子に手を見せた。

「や、ヤアン…。み、見せないで…。恥ずかしいです…」

「じゃあ、次は」

そう言うとき健太郎は、真歩子の制服のスカートとパンティを一気に剥ぎ取り、下半身を丸出しにした。

「真歩子ちゃん」

「はい」

「久しぶりに、オマンコの毛、剃ってあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子をベッドに横たえた。そして、脚を開かせる。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器に

お湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子用の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言っつて真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…、うつ伏せになって」

「はい」

言われるまま、うつ伏せになる真歩子。

「もうちよつとお尻を高くしないと…」

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

「じゃあ、お尻の穴も剃るよ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女のアナルに剃刀を当てた。

「ああ…」

「ほらほら、じつとしていないと、切れちやうぞ」

そう言っつて健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫した。真歩子は、次第に落ち着きを取り戻した。

「それじゃ、剃るよ」

そう言っつと健太郎は、真歩子のアナルの毛を剃った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、

パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言って真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は洗面器のお湯を処理し、用具をしまうと、再度真歩子の尻を持ち上げた。

健太郎は真歩子の太股に指を這わせながら言った。

「次は…」

「ああつ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。滴った蜜が、シートに淫らな染みを作る。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がってあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせると、尻たぶを掴み、左右に開く。

「んっ、あつ、そ、そんなに広げないで下さい」

真歩子のアナルが露になる。

「お尻の穴の細かい皺も可愛いなあ」

「ヤ、ヤアン。そんなに見ないで」

「今度は…」

健太郎は、真歩子のアヌスを指で突こうとする。

「ダメです。汚ないです。まだシャワーに」

「好きな人の体に、汚ない部分はないさ」

「でも…」

「言う事を聞いてくれないの？じゃあ、お仕置きだね」

「はい…、お仕置きして下さい」

「じゃあ、お仕置きするよ。お尻ペンペンだよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。すぐに、真歩子の尻は真つ赤になった。

「お尻が、痛いです…。それに、熱いです。お尻に、健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、おねだりしないと」

「健太郎さんのオチンチンを、スケベなお尻の穴に入れて、ください」

「わかったよ。でもその前に…」

そう言つて健太郎は、真歩子のアナルに舌を這わせた。

「チュツ。ペロ」

「ダメ、そんな…所。そこは、汚いです…。ヒヤウツ！な、舐めないで…」

一度、唇を離して言った。

「好きな人の身体に、汚い部分なんて無いさ」

「でも、まだシャワーに…」

「ありのままの、真歩子ちゃんが欲しいから」

そう言つて、健太郎は再度真歩子のアナルに舌を這わせた。

実際、真歩子のアナルは普段から、排泄物の匂いは殆どしない。清楚なアナルだった。

「イヤ…、イヤア、イヤーツ!!イヤーン!!」

真歩子の声が、部屋に響く。

尻を振つて逃れようとする真歩子をしっかりと押さえ、尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「も、もうダメ…。わ、私、イツちやう…」

そう言つて真歩子は絶頂に達した。同時に潮を噴いた。

「可愛かったよ」

健太郎は真歩子の耳元で囁くと、再度尻を高く上げさせる。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。丸くて魅力的だね」

「も、もう…」

真歩子は、顔を赤く染めた。

健太郎は再び、真歩子の尻を撫でた後、尻たぶを掴み、真歩子のアヌスを外気にさらした。彼女の大事な部分も、丸見えである。

「凄いよ。お尻の穴、さつきよりもヒクヒクしてる」

「ヤ、ヤアン。そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言っただけだよ」

「は、恥ずかしい…。意地悪…」

「じゃあ、今度は…」

健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

「や、止めて…。健太郎さん、これ以上、焦らさないで…」

「そんなにお尻を振って、気持ち良いの?」

「もう、意地悪…」

「だって、真歩子ちゃんのお尻の穴、すぼまつたり、広がったりしてるよ」

健太郎は、真歩子のアナルへの愛撫を続ける。

「ああっ、ヤンッ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「次は…」

健太郎は、真歩子のアヌスに、人差し指を入れた。ヌプツという音がした。

「ア、アアン…」

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グニグニと、丹念に揉みほぐす。更に、指を第二関節まで挿入し、直腸粘膜を刺激する。

「葉月学園三年生の持田真歩子ちゃん。こうしている間にも、僕の指と真歩子ちゃんのお尻の穴は、しっかりハメハメしているんだよ」

「イ、イヤーン」

そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼



は、指を根元まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あっさりと絶頂に達した。

「可愛いかったね。じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを、真歩子のエッチなお尻の穴に入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。更に、乳首を指先で転がす。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツー！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…。オツパイはモミモミされて、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。お尻が…。イク…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!い、一緒に、イ、イツてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私のお尻の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎は男性器を真歩子のアヌスから引き抜いた。大量の白濁が吐き出された。そして真歩子のアヌスは元に戻っていく。

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しましようね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起すすと、手錠を外してから、唇を重ねた。

この後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。シャワーを浴びた後、健太郎は後背座位で真歩子の女性器に挿入。再度二人同時に絶頂に達した。

そのまま健太郎と真歩子は、裸のまま眠りについた…。

【続く】

## 第40章 11月の第1期3連休二日目

2日、日曜日。3連休の二日目である。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

真歩子の姿を見た健太郎は、ムラムラしたが、朝からは無しである。

この日、健太郎も真歩子もアルバイトは無く、又、彼女の部活動も休みである。

「おはよう。良く眠れた？真歩子ちゃん」

健太郎はベッドから先に出て、服を着ているところだった。

「おはようございます。良く眠れました、健太郎さん」

真歩子もベッドから出ると、まず下着を着けた。

「これから朝ごはんにしますね」

「うん、ありがとう。それにしても、良い眺めだね。今日のブラジャーとパンティは、白か…。似合ってるよ」

「健太郎さん」

「ん？」

「あんまりじろじろ見ないで下さい」

「だって色っぽいんだもん」

「イヤです。恥ずかしい。またエッチな事考えているんじゃない？」

「ゴメンね。じゃあ見ない」

「私、魅力無いんですね…」

「あのね…どつちかにして…」

「だって、私、オッパイ小さいし…。お尻は大きいし」

「そんな事無いよ。オッパイは初めて会った時より大きくなったよ。パイズリも出来る様になったし。乳首も綺麗な色だもん。お尻だってプリプリして魅力的だよ。後ろも綺麗だね」

「もう、健太郎さん、エッチです…」

そう言って真歩子は頬を膨らませた。でも、彼女の目は笑っていた。

「さてと、僕も手伝うよ、着替えじゃなくて朝食の用意」

「ありがとうございます」

「今日は、沢山楽しむよ、日曜日だからね」

「ええ」

そう言つて真歩子は笑顔で頷いた。

朝食後。

健太郎と真歩子は、一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

洗い物を済ませた後、健太郎と真歩子は勉強。健太郎は居間で、真歩子は今日も和室を借りた。その後、二人で洗濯も済ませた。

今日は、昼食後に町に出て、デートする事になっている。

そして13時に二人は家を出た。

今日は頼津町の市民ホールでデートである。今日は日曜日だが、ある理由から真歩子は葉月学園の制服を着ている。

実は、土曜日から月曜日まで、ここ頼津市民ホールでは、真歩子が通う生け花教室の展覧会が開催される。真歩子は通い始めて半年程だが、彼女の才能は確かで、桜木舞の隣に作品が展示された。

「凄いな…」

健太郎は静かに言った。

「えっ!？」

「いや、真歩子ちゃんの作品が、かの桜木舞さんの隣に展示されているから」

「は、はい…」

そう言つて真歩子は頬を紅く染めた。

この展覧会は、優劣を競う物ではないが、やはり舞の隣という事もあり、来客から注目されていた。

「こんにちは、持田さん」

「あ、こんにちは、桜木さん」

「貴女様が、桜木舞さんですか。前に一度、お見かけしました。田中健太郎です」

「貴方が持田さんの…」

そう言つて舞が一礼した。

「舞ちゃん」

そう言って舞を呼んだのは、僕の妹、京子だった。

「貴女は…」

「葉月学園テニス部の持田先輩ですよ。この前の大会で、先負学園のメンバーだった、桜木京子です」

「京子ちゃん、知り合いだったの…?」

舞の言葉に京子が頷いた。

「申し訳ありません。舞様、京子様、そろそろ時間ですので…。それに、拓郎様がお待ちです」

桜木家の執事とおぼしき老紳士が言った。

「はい」

京子が頷く。

「ごめんなさい。時間ですので…。又、次の生け花教室で…」  
舞が言った。

桜木家一行が退出する際、健太郎とほぼ同じ年格好の男性が迎えに来た。

「あの人が、拓郎さんか…」

健太郎が言った。

一通り作品を見てから、健太郎と真歩子はホールを出た。

その後、頼津駅で電車に乗り、卯月駅で降りてから、駅前商店街で

健太郎と真歩子は夕食を摂り、アパートへ戻った。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ているセーラー服とスカートを脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「ほらほら、乳首、立っているよ。ツンツンしちやえ」

「ああっ…、そ、そんな。突かれたら…、摘まんじゃ…、コリコリさ  
れたら…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティに手を入れると、溢れ出した蜜が絡みついた。丹念に愛撫してから、右手を真歩子に見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやっただ…。潮まで噴いて…。エツチだなあ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん…」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックなセックスをする、というサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

しかし、健太郎はタオルを使わなかった。傍らにタオルを放った。

「えっ…？」

戸惑う真歩子。

「今日はこつちを使うよ」

そして健太郎は、真歩子の背後に立つと、ある物を取り出した。

そして、真歩子の首にそれをつけた。首輪だった。

「ええっ?! 健太郎さん、それは…」

「そうだよ、首輪だよ。それじゃあ、言う事を聞いて。まず四つん這いになるんだ」

「は、はい…」

健太郎の言い付けに従い、四つん這いになる真歩子。

「それじゃ、寝室を出るよ」

「はい…」

真歩子は健太郎の部屋を四つん這いになったまま進む。

「は、恥ずかしいです。こんな格好」

「二人だけだから、恥ずかしい事なんか無いでしょ」

「で、でも。やっぱり四つん這いは…」

真歩子が答えた直後。健太郎は彼女の尻を平手打ちした。

「アンツ!!ぶ、ぶたないでください…」

「じゃあ、『よし』と言うまでこのまま進んで」

「はい」

真歩子は健太郎の言い付けに再度従う。

健太郎と真歩子は、洗面所に来た。

「よし。じゃあ立って。手を洗おうか」

「はい」

ハンドソープで手を洗うと、健太郎と真歩子は部屋に戻った。

健太郎は、真歩子につけた首輪を外した。

そして、健太郎は真歩子をベッドに仰向けにさせた。

「次は」

「はい」

「へオナニー、して見せて」

「はい」

真歩子は言われるまま、自分の女性器を弄り始めた。

「真歩子ちゃん」

「ん? 何ですか?」

「真歩子ちゃんは、一人でする事は多いの?」

「ええ」

真歩子は頷くと、更に激しく指を動かした。淫らな水音が部屋に響



き、多量の蜜が溢れ出す。

「じゃあ、そろそろ」

健太郎は、真歩子に限界まで勃った男性器を舐めさせた。

真歩子は健太郎の男性器にチロチロと舌を這わせた。それから、啜えた。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

「出すからね。全部飲んで」

健太郎は、彼女の口の中で、全てをぶちまけた。

「ん、んぐ、んんんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「じゃあ、次は…」

健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。

「はい。今日は？」

「これは、目隠しに使うよ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は、真歩子を立たせてから、タオルで視界を奪う。そして、背後から真歩子の身体を愛撫する。

「今は、何をされているのかな？」

「健太郎さんに、オ、オッパイを揉まれています」

次に健太郎は右手を真歩子の下半身に這わせた。

「今は？」

「健太郎さんの右手が、お尻を触っています。あ、今、オ、オマンコを触っています…」

「じゃあ、そろそろ…、後ろ手に組んで」

「はい」

健太郎は真歩子が後ろ手を組むと、ある物を取り出した。手錠だった。

健太郎は真歩子の目隠しを外した。

「えっ？ 健太郎さん？ 手錠!?!」

「うん。今日も手錠が良いかな、って」

金属音が、部屋に響いた。

「じゃあ、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。もう一度、お口でして」

「はい」

手を使えない状態での、真歩子の舌と唇だけのフェラは、それほど気持ち良くはない。それでも健太郎の男性器は、僅かに蠢いた。

「真歩子ちゃん」

「はい?」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!?!そんな…」

「じゃあ、お仕置きするけど、どっちか選んで。お口にするか、お尻ペンペンか」

「く、口にします」

「じゃあ、おしゃぶりしてもらおうよ」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を咥えさせた。

所謂、ヘイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らな音が、部屋に響く。

「ヘイラマチオ」に、健太郎の男性器は激しく蠢く。すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サデイスティックになる健太郎。

真歩子の口の中で、再度大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんのお口、気持ち良いからね。じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子をベッドにうつ伏せにさせ、尻を突き出させた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、グシヨグシヨだね。それにお尻の穴までヒクヒクしている」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻と太腿を愛撫する。

「じゃあ、次は…」

そう言つて健太郎は、右手人差指をアヌスに、左手人差指を女性器に入れた。

「アアッ!!」

身を仰け反らせる真歩子。

健太郎はアヌスをグニグニと揉みほぐし、指ピストンを女性器にする。

クチュクチュと、淫らな水音が部屋に響く。真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、ベッドのシートに淫らな染みを作っているが、その染みは大きくなる。健太郎は次第にピッチを上げる。

「き、気持ちいいの…、アソコが、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「イッて良いよ。出してよ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤァッ。イクーッ!!で、出ちやう!!」

健太郎は、女性器に入れた指を引き抜くと同時に真歩子が絶頂に達

し、大量の潮を吹いた。

「こんなに出たんだ。じゃあ次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のアヌスからも指を引き抜いた。

「じゃあ、舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、まず真歩子の女性器に舌を這わせた。

それから、アナルを舐めた。真歩子のアナルは、入浴中に洗った事もあって、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子の尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちやう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを真歩子のエッチなお尻の穴に、い、入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。お尻の穴が、イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。良かったです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山山樂しみましようね」

この後、健太郎は、手錠をしたまま真歩子の女性器に一回解き放った。その後、手錠を外してシャワーを浴びた。

そして、健太郎と真歩子は全裸で就寝した…。

【続く】

## 第41章 11月の第1期3連休最終日

3日、月曜日。3連休の最終日。この日は、文化の日である。

健太郎は、今日は《土下座》でアルバイトである。

そして真歩子も、今日は一日《カトレア》でアルバイトである。但し、一旦自宅に戻り、私服に着替えてから出勤する事になっている。

健太郎と真歩子は、真歩子のアルバイト終了後に、《土下座》にて落ち合う事になっていた。

真歩子が《土下座》に顔を出したのは、18時30分だった。

健太郎と真歩子は、駅前のスーパーマーケットで買い物をしてから、真歩子の家に戻った。

帰宅後、夕食。健太郎と真歩子は、一緒に夕食を作る。

それから一緒に後片付けをする。もう、すっかり手慣れた物である。

その後、健太郎と真歩子は勉強。健太郎は自室で、真歩子は今日も和室を借りた。

又、今日、真歩子は帰宅する事になっている。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子の服を脱がし、下着姿にすると、再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は

僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあったフェイスタオルを見せた。それは、今日、S Mチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、うつ伏せになり、後ろ手を組んだ。だが、健太郎は、首を横に振った。

「今日は、こつちじゃないよ」

「えっ？」

「真歩子ちゃん、仰向けになつて」

真歩子が仰向けになると、健太郎は彼女の手首を胸の前でタオルで縛った。

「これでよし」

そう言つて健太郎は、真歩子に覆いかぶさり、まずは軽くキスをした。

「ん、んっ、んちゅ」

唇を離す。次に健太郎は、真歩子の乳房を触る。

「け、健太郎さんの手…」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、形も良いし、たまらないよ。乳首もこんなに立たせて」

「イ、イヤン」

健太郎の言葉責めに真歩子は頭を振った。

次に健太郎はキスを首筋、鎖骨、乳房、乳首と移し、更にお腹もつ  
いばむ。

「真歩子ちゃん、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマンガリ返しである。

「イ、イヤッ!!こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。



「ひゃうっ、んっ、ふああっ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、彼女は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あっ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですばまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あっ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、私のオマンコに、オチンチンを…」

「僕も、真歩子ちゃんのおマンコにチンポを入れたくなっていたんだ」

そう言つて健太郎は、へマングリ返しを止め、真歩子に覆いかぶさり、男性器を女性器に挿入した。

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。

「あ…健太郎さんが、は、入つて来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締めまりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引つ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなる。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して下さい…。な、中に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「な、中!?!」

「今日は、大丈夫だから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して…」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜くと、彼女を起こした。そして言った。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ。今日は前で縛っているから、手も使えるでしょ」

「は、はい」

「でも、その前に…」

そう言って健太郎は、真歩子の視界をタオルで奪った。

「じゃあ、真歩子ちゃん。チンポ、ペロペロして」

そう言って健太郎は、自分の男性器の龟头を、真歩子の唇に軽く宛がった。

真歩子の舌先が、亀頭にチロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。その後、唇で包み込まれた。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。その間、真歩子は手を使い、玉袋を優しく愛撫する。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなった。

「真歩子ちゃんのお掃除フェラ、上手だから、すぐに僕のチンポ、大きくなったね。じゃあご褒美だよ。オマンコにチンポを入れるよ」

そう言って健太郎は真歩子を縛るタオルを左だけほどくと、今度は彼女を後ろ手に縛った。そして彼女をうつ伏せにさせると、後ろから男性器を女性器に挿入した。

真歩子の丸くて大きな尻を撫で回しながら、健太郎は律動する。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…!!」

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。彼は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。更に、背後から真歩子の乳房を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「ああっ、む、胸を、そ、そんなに…」

「真歩子ちゃんのオツパイ、たっぷり可愛がってあげるね。ほらほら、乳搾り」

「イ、イヤーン。そ、そんなにきつくオツパイ揉まないで…!!オツパイが、ちぎれちゃう…」

そうしているうちに、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シートに染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんのオマンコの中、熱くて、吸い付いて来る。」

それに、お尻の穴もヒクヒクしているよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコが溶けちゃう…。  
イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーつ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てをぶちまけた。そして真歩子も、  
潮を噴いた。

「あつ…。あああああーつ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「それじゃ、シャワーに行こうか。身体の隅々まで、洗い流すよ」  
「ええ」

この後、健太郎は真歩子を縛るタオルをほどくと、二人で一緒に  
シャワーを浴びた。身体を乾かした後、健太郎は真歩子を家まで送っ  
た。

「只今」

「お帰りなさい。あ、健太郎さん、こんばんは」

真歩子の母が挨拶する。

「こんばんは」

「この3日間、お世話になりました。有り難うございました」

「ごちらこそ、真歩子さんにはお世話になりました」

「健太郎先輩…」

健太郎の言葉に真歩子は頬を紅く染めた。

「又、宜しくお願いしますね、健太郎さん」

「今後とも、宜しくお願いします。後、お父様とたけし君にも、宜しくお伝えください」

健太郎はそう言って一礼し、帰宅の途についた…。

【続く】

## 第42章 学園祭で

7日の金曜日から9日の日曜日まで、葉月学園は学園祭である。そのため、健太郎と真歩子のデート自体は無い。

しかし、8日と9日は、学園祭の一般公開の日であるため、9日、健太郎は葉月学園を訪れた。8日の土曜日は、健太郎は《土下座》のアルバイトのため、葉月学園には行けなかった。

健太郎は、上下共にきちんとした身なりで葉月学園に向かった。

健太郎は受付でもらったリーフレットを頼りに、真歩子のクラスに向かう。

「ここだ、ここだ」

そう言つて健太郎は真歩子のクラスに入った。

「あ、健太郎先輩、いらっしやいませ」

「真歩子ちゃん、来たよ。その格好、凄く似合っているよ」

「本当ですか？嬉しいです」

そう言つた直後、真歩子の同級生が彼女に声をかけた。

「真歩子の彼氏？」

「ちよつと、紹介してよ」

「止めてよ、こういう場所じゃ」

真歩子は顔を紅くした。

「ほら、ちゃんとお客様の応対をしないと」

クラスの委員が制した。

「すみません、先輩。それでご注文は…」

「それじゃジンジャーエールを」

「はい、かしこまりました」

真歩子のクラスは、バー風カフェで、女子はきらびやかなドレスを着用していた。

流石に葉月学園関係者しか参加出来ない後夜祭までいるつもりは健太郎にはなかった。

真歩子の休憩時間。健太郎と彼女は校内をぶらつく事にした。

真歩子はドレスを脱ぎ、セーラー服に着替えていた。

そして、二人はしばらく他のクラスや部活の出し物を楽しんだ。  
その後、真歩子は健太郎の手を取り、言った。

「健太郎さん、ちょっとこっちに…」

真歩子は健太郎を空き教室に導いた。

「健太郎さん…」

そう言った真歩子を健太郎は抱き締めた。

「あふっ…ふあっ、んあっ、け、健太郎さん…」

「んっ、真歩子ちゃんの中、とろとろだ…、凄く気持ちいいよ」

愛撫もそこそこに健太郎は挿入したのだが、真歩子の中は驚くほど濡れていた。

「ふあっ、健太郎さんが、私の中で気持ち良くなってくれて…、ん、あっ、嬉しい…。はあ、はあ…」

「そのつもりがなかったなんて、信じられないよ」

「あ…、んっ、今日、ずっとこんな格好をしていましたから、無意識に興奮していたかもしれないです」

健太郎は真歩子のパンティのクロッチをそつとなぞる。

真歩子の蜜が、健太郎の指に絡みついた。

「しかも、真歩子ちゃん、ノーブラだったんだね」

そう言つて健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだく。

真歩子は机の上で、所謂〈松葉崩し〉の状態になっていた。

「あっ、んっ、んんっ…。そ、そこ、気持ちいいです。んっ、ああっ…。健太郎さんのオチンチンの硬い所が当たつて、凄く気持ちいいです…」

真歩子の身体が大きく反応し、乗っている机がガタガタ揺れる。

「真歩子ちゃん、気を付けないと、落ちちゃうよ」

「ん、あっ、だ、だつて…、気持ち良くて、つい…」

真歩子はそう言つて体勢を変え、身体を安定させた。

「んっ、こ、これなら大丈夫。あ、あっ、で、でも、今度は違う場所が押されて…、ふああっ、感じちゃう…。ん、んっ、あっ、ああっ、お、奥に当たつて、あふっ、気持ちいい…!!あっ、ああんっ、健太郎さん、もつと…、ああっ」

「真歩子ちゃん、声大きいって。教室の外に聞こえちゃうって」  
「だって、んっ、ああっ、こ、こんなの、我慢出来ないっ…んっ、んくうっ…」

かと言つて、健太郎は攻め方を変える事は、なかった。健太郎は真歩子を煽るかの様に更に激しく奥を突き上げ、掻き回す。

「あっ、やつ、んあっ!!健太郎さん、ダメ、そんなにしたらっ、もつと声、で、出ちゃうっ…!!あっ、ああっ、ダメ、ダメッ、んっ、んっくう…」

バレてはいけないという状況がスパイスになるのか、真歩子は更に激しく喘いでいた。

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーツ。イツちやううっ…!!わ、私、壊れちゃう…。オマンコ溶けちゃう。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。健太郎さんも、一緒にイツてえっ…!!中に、出してえっ…!!」

「分かった。真歩子ちゃん、イクよ」

「全部、中に出して…」

「くうっ…」

「あっ…、あああああーっ!!」

「で、出てる…。健太郎さんがたくさん…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

真歩子は汗でしっとりした顔で、健太郎を見つめていた。

「そろそろ、戻らないと。その…、皆には二オイとかでわかったりバレたり、しませんよね」

「大丈夫じゃないかな」

「健太郎さんがいっぱい出したのは、予備のナプキンを当てておけば漏れないと思います」

「ごめん、いっぱい出しちゃって」

「ふふ、良いんですよ、健太郎さん。それだけ、私とのセックスが気持ち良かったからですよね」



「ああ。凄く気持ち良かったよ。学園祭の最中に真歩子ちゃんとエッチしたんだから」

「私も、良かったです。あ、そろそろ休憩時間が終わっちゃいます…」

健太郎と真歩子は、服装を整えると、そそくさと教室を後にした。健太郎は一般公開が終了する少し前に、真歩子のクラスに立ち寄り、挨拶をしてから葉月学園を後にした。

その後、葉月駅で電車に乗り、卯月駅の駅前商店街のカレーライスの専門店夕食を摂ってから、アパートに戻った。

アパートに戻ってしばらくして、電話が鳴った。真歩子からだった。

「健太郎さん？」

「真歩子ちゃん？どうしたの」

「後夜祭が終わって、今、卯月駅にいます。今日、これから伺っても良いですか？」

「真歩子ちゃん、片付けは大丈夫なの？それに真歩子ちゃんの家は？」

「片付けは、明日月曜日です。家には、今日は遅くなる、って言ってありますので…」

「わかった。じゃあ駅にいて。これから迎えに行くから」

そう言って健太郎は卯月駅に向かった。

健太郎は真歩子を迎えると、二人でアパートに向かった。

健太郎のアパートの寝室で。

「ビックリしたよ。まさか電話があるなんて」

「ウフフ、ごめんなさい。二人だけの後夜祭がしたくて」

「真歩子ちゃん…」

そう言って健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あんっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ」

「イヤーン」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ？」

「真歩子ちゃんが、僕のズボンとパンツを脱がして、チンポを出すんだ」

「はい…」

真歩子が頷くと、健太郎はベッドに腰掛けた。

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。そして彼女は彼のズボンのベルトを外し、フアスナーを下ろす。それからズボンとパンツを下ろして、下半身を露にした。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言っつて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「っっ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あっ、今、ピクンっつて…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言うと、真歩子は健太郎の男性器を舌先で刺激した。それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。そして窓際に手をつく様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

そう言うと健太郎は、真歩子の制服のスカートを捲り、真歩子のパンティを晒す。

「真歩子ちゃんのパンティ、可愛いね。それにオマンコ、もう凄い事になっているよ。パンティはビショビショだね」

実際、真歩子のパンティのクロツチには、愛液染みが出来ていた。

健太郎は真歩子のパンティを膝までずらしてから、女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。い

つ見ても魅力的だよね。お尻の穴も可愛いね」

「イ、イヤーン」

そう言って真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちゃう」

そう言って真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

少し頬を膨らませる真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

だが、彼は軽く当てるだけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。ほ、欲しいです…。健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のオマンコに、入れて、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、床に淫らなマール模様を作った。  
淫らな水音と、二人の吐息が部屋に響く。

汗の香りも、部屋に漂う。

「ああつ…、私の中、引つ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大きくて、太くて、硬いオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。更に真歩子の尻たぶを広げてアナルを外気に晒す。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…、あああああーつ!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、啜えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を咥え、舌が先端に振れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ソ。ング。ソーツ」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…、ありがとう…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日はへお楽しみを〜を終えたため、お風呂場では身体を洗うだけである。

健太郎は、ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗う。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

シャワーを終えると、二人は丹念に身体を拭いてから、身支度をし、健太郎は真歩子を自宅まで送った…。

【続く】

## 第43章 11月の第2期3連休初日

16日、日曜日は、葉月学園で模擬試験が行われた。そのため、健太郎と真歩子はデートは無しにしていた。

その16日。模擬試験終了後。真歩子は《土下座》を訪れた。

「こんばんは。健太郎さんは…？」

「うん、今、いるよ。健太郎」

稔が健太郎を呼んだ。

「あ、真歩子ちゃん。いらっしやいませ」

「健太郎さん。今日、アルバイト終わってからで良いのですが、私の家に来て頂けますか？」

「それは構わないけど、どうして？」

「両親が、『今度の3連休の事で、健太郎さんにお会いしたい』、と」

「分かった。今日はもう少しで上がりだから…、何か飲む？」

「はい、じゃあ紅茶を」

健太郎は真歩子に紅茶を振る舞う。

アルバイト終了後。健太郎と真歩子は、真歩子の自宅に向かった。

「ただいま」

「こんばんは」

「真歩子、お帰り。あ、田中君。こんばんは」

「健太郎さん、いらっしやい。お待ちしておりました」

真歩子の父と母が出迎えた。

「まずは、上がって」

「はい、お邪魔します」

真歩子の母に促され、健太郎は居間に通された。

「あの、本日、真歩子さんが僕のアルバイト先に来まして。お話があるとの事で、伺ったのですが」

「ええ。そうなんです」

健太郎の言葉に真歩子の母が頷く。

「で、話というのは、今週土曜日からの3連休の事だが」

「は」

真歩子の父の言葉に、健太郎が頷いた。

「たけしの事で、ね」

真歩子の父の言葉に、健太郎が頷いた。

「今回の3連休は、たけしのいる文月町に行く事になった。というのも、この期間は文月学園で模擬試験と面談があつてね。但し、真歩子は連休中もバイトで同行出来ないんだ」

「えっ!? そうなんですか?」

「ええ」

健太郎の問いに真歩子が頷く。

「ただ、この家に真歩子一人では心細いので、健太郎さんにも、一緒に居て頂きたいのです」

「以前、田中君に真歩子を助けてもらった事もあるし、君ならば信頼出来る。この界限は物騒だからね」

「去年の秋と今年の夏と秋にもお願いしましたが、今回もお願い出来るかしら」

「はい、よろしくお願い致します」

真歩子の両親に、健太郎は頭を下げた。

「お願いするのは、こちらの方です。健太郎さん、よろしく頼みます」

真歩子の母が言った。

翌日、17日、月曜日。

健太郎は午前中のみ授業であり、午後は予定は入っていなかった。

健太郎は卯月駅で電車に乗ると、葉月町に向かった。

そして、葉月学園御用達のスポーツ用品店で、葉月学園指定のある物を二つ買った。更に卯月町に戻った際、理科実験等にも使うある医療用品を買い、アパートに戻った。

そして迎えた、22日、土曜日。

健太郎は学校を出ると、まずアパートに向かい、風呂道具や着替え等を取りに行った。それから《土下座》に向かう。時間まで手伝ってから、《カトレア》に真歩子を迎えに行った。

一方、真歩子は、葉月学園に登校する際に、両親と一緒に家を出た。



葉月駅で列車を降り、両親と別れ、授業の後に《カトレア》でバイトし、二人が落ち合ったのは、真歩子のバイト終了後の18時だった。二人はまずスーパーマーケットで買い物。そして真歩子の家に戻った後、夕食。それから一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていけない。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は居間を借りた。たけしの部屋を借りて良いとは言われていたが、やはり落ち着かないので、今回も居間を使う事にした。

勉強の後、健太郎と真歩子は風呂に入った。

「真歩子ちゃんの家で、一緒にお風呂に入るのは、久し振りじゃないか？」

「ええ…。秋の3連休以来ですね」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、真歩子の部屋でのセックスのため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「はっ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は湯船にゆつくり入ってから、風呂を上がった。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSM

チツクなセックスをする、というサインである。

真歩子は頷くと、口を開いた。

「健太郎さん、今日はどっちに…?」

「じゃあ、今日は…、うつ伏せになって」

「はい」

真歩子は健太郎に言われるまま、うつ伏せになった。

健太郎は真歩子の手を軽く掴むと、タオルで後ろ手に縛った。

「これで良し。次は…」

そう言うと健太郎は真歩子を再度仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朵、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌尖で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「ああつ…、胸をそんなに…」

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる。真歩子ちゃんのオツパイ、こうされるのが気に入っているみたいだね」

「イ、イヤーン」

「次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んつ、ふああつ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あつ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのエッチなオマンコにチンポを入れ  
たくなつていたんだ」

そう言つて健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さん  
のオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、  
き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げ  
ていく。

「真歩子ちゃんのオツパイ揉み揉み、ほら、乳搾り」

「ああつ、ヤンッ」

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」  
真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。  
淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ。  
それに中のこのぷっくりとした腔壁。ここ、擦られると、気持ち良い  
んでしょ?」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…。  
ああっ、そ、そこ、気持ちいいの。健太郎さんのオチンチン、私の」  
真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段と  
きつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…。オマンコ  
が、溶けちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。イツちゃうっ…!! あっ…、あ  
あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻  
にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎は真歩子をベッドから起こすと、言った。

「じゃあ、次は…、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精  
した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を

萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。もう一度、お口でして」

「はい」

手を使えない状態での、真歩子の舌と唇だけのフェラチオは、劣る事は否めない。それでも健太郎の男性器は、僅かに蠢いた。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!?!そんな…」

「じゃあ、お仕置きするけど、どっちか選んで。お口にするか、お尻ペンペンか」

「く、口にします」

「じゃあ、おしゃぶりしてもらおうよ」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を啜えさせた。

所謂、ヘイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らな音が、部屋に響く。

〈ヘイラマチオ〉に、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サディスティックになる健太郎。

真歩子の口の中で、再度大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんのお口、気持ち良いからね。じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子をベッドにうつ伏せにさせ、尻を突き

出させた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、グシヨグシヨだね。それにお尻の穴までヒクヒクしている」

そう言って健太郎は、真歩子の尻と太腿を愛撫する。

「それじゃあ、今度は…」

そう言うとき健太郎は、右手人差指をアヌスに、左手人差指を女性器に入れた。

「アアツ!!」

身を仰け反らせる真歩子。

健太郎はアヌスをグニグニと揉みほぐし、指ピストンを女性器にする。

クチュクチュと、淫らな水音が部屋に響く。真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、ベッドのシーツに淫らな染みを作っているが、その染みは大きくなる。健太郎は次第にピッチを上げる。

「き、気持ちいいの…、アソコが、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「イッて良いよ。出してよ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ!!で、出ちゃう!!」

健太郎は、女性器に入れた指を引き抜くと同時に真歩子が絶頂に達し、大量の潮を吹いた。

「こんなに出たんだ。じゃあ次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のアヌスからも指を引き抜いた。

「じゃあ、舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、まず真歩子の女性器に舌を這わせた。

それから、アナルを舐めた。真歩子のアナルは、入浴中に洗った事もあって、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子の尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イッちゃう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを真歩子のエッチなお尻の穴に、い、入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…。オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。お尻の穴が、イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、良かったです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きですよ」

「真歩子ちゃん…」

この後、健太郎と真歩子はタオルをほどいてから、シャワーを浴びた。

そして、健太郎と真歩子は全裸で就寝した…。

【続く】



## 第44章 11月の第2期3連休二日目

23日、日曜日。3連休の二日目である。この日は、勤労感謝の日である。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

真歩子の姿を見た健太郎は、ムラムラしたが、朝からは無しである。

この日、健太郎も真歩子もアルバイトは休みである。

「おはようございます。眠れました？健太郎さん」

真歩子は服を着ているところだった。

「おはよう。良く眠れたよ、真歩子ちゃん」

健太郎もベッドから出ると、服を着た。

「これから朝ごはんにしますね」

「うん、ありがとう。それにしても、良い眺めだね。今日のブラジャーとパンティは、白か…。似合ってるよ」

「健太郎さん」

「ん？」

「あんまりじろじろ見ないで下さい」

「だって色っぽいんだもん」

「イヤです。恥ずかしい。またエッチな事考えているんじゃない？」

「ゴメンね。じゃあ見ない」

「私、魅力無いんですね…」

「あのね…どつちかにして…」

「だって、私、オッパイ小さいし…。お尻は大きいし」

「そんな事無いよ。オッパイは初めて会った時より大きくなったよ。パイズリも出来る様になったし。乳首も綺麗な色だもん。お尻だってプリプリして魅力的だよ。後ろも綺麗だね」

「もう、健太郎さん、エッチです…」

そう言っつて真歩子は頬を膨らませた。でも、彼女の目は笑っていた。

「さてと、僕も手伝うよ、着替えじゃなくて朝食の用意」

「ありがとうございます」

「今日は、沢山楽しむよ、日曜日だからね」

「ええ」

そう言つて真歩子は笑顔で頷いた。

朝食後。

健太郎と真歩子は、一緒に後片付けをする。

健太郎は、別に家事を苦にしていない。

洗ひ物を済ませた後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は今日も居間を借りた。

今日は、昼食前に町に出て、デートする事になっている。

そして11時に二人は家を出た。

二人はまず、卯月駅前の商店街にあるレストランで食事をした。

昼食後。二人は、《世界一公園》で、ゆったりとした時間を過ごした。夕食後。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ているポロシャツとミニスカートを脱がし、

下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティに手を入れると、溢れ出した蜜が絡みついた。丹念に愛撫してから、右手を真歩子に見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやったんだ…。潮まで噴いて…。エッチだなあ」

そして健太郎は、真歩子の背後に立つと、ある物を取り出した。

そして、真歩子の首にそれをつけた。首輪だった。

「ええっ!?!健太郎さん、それは…」

「そうだよ、首輪だよ。それじゃあ、言う事を聞いて。まず四つん這いになるんだ」

「は、はい…」

健太郎の言い付けに従い、四つん這いになる真歩子。

「それじゃ、部屋を出て、お風呂に入るよ。パンティは、穿いたままが良いからね。」

「はい…」

この時、健太郎はビニール袋にある物を入れていた。真歩子は健太郎に言われるまま、自宅を四つん這いになったまま進む。

「は、恥ずかしいです。こんな格好」

「二人だけだから、恥ずかしい事なんか無いでしょ」

「で、でも。やっぱり四つん這いは…」

真歩子が答えた直後。健太郎は彼女の尻を平手打ちした。

「アンツ!!ぶ、ぶたないでください…」

「じゃあ、『よし』と言うまでこのまま進んで」

「はい」

真歩子は健太郎の言い付けに再度従う。

「よし、階段は立って良いよ」

一階に降りると、健太郎は再度真歩子を四つん這いにさせた。

浴室に来た健太郎は、真歩子に着けた首輪を外した。

「じゃあ、真歩子ちゃんは先に入っていて。1、2分したら僕も入るから」

「え、ええ」

健太郎の言葉に真歩子は怪訝な表情をしながらも、言われた通り先にシャワーに入った。

健太郎はのスーパーで買ったある物を冷蔵庫から出して、それを持って脱衣場に向かった。

脱衣場にて。

健太郎は、浴室の脱衣場で、葉月学園指定のスクール水着を袋から出し、ハンガーに掛けた。

浴室にて。

「真歩子ちゃん、お願いがあるんだけど」

「なんですか?」

「水着、着て欲しいな」

「ええっ!?!」

「真歩子ちゃんの生で水着を着るの、見たいな」

「け、健太郎さんが言うなら」

真歩子が頷くと、健太郎は水着を浴室のプールに掛けた。  
健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は湯船に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

頭を洗った後、健太郎が言った。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

「はい」

真歩子が頷くと、彼女は健太郎の前で水着を着る。

「終わりました。サイズ、ピッタリです」

真歩子の言葉に健太郎は頷く。

「前、プールでデートした日に、真歩子ちゃんの水着のサイズを見て覚えておいたから」

そして健太郎は、真歩子の背後から抱き付き、水着の上から乳房に  
触る。

「あ、あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、浴室に響く。

次に健太郎は、水着の中に手を入れ、真歩子の乳房を直接愛撫する。

「ああんっ…。そ、そこは、っ、摘まんじゃ」

「ほら、もう乳首が勃ってる。真歩子ちゃんのオッパイ、最高だよ」

健太郎は、真歩子の乳首を摘まんで転がす。

「次は…」

健太郎は、真歩子を鏡の前に立たせた。

「じゃあ…、ちよっと待ってて」

そうやって健太郎は、持参した袋から裁ち鋏を出した。

「健太郎さん…、それは？」

「じゃあ、水着をちよつと改造するよ」

「か、改造…？」

「ああ」

健太郎は頷くと、水着の左胸に鋏を入れ、左の乳房を晒した。

「次は…」

そうやって健太郎は、右胸にも鋏を入れ、右の乳房も晒す。

「え、ええーっ!？」

「真歩子ちゃんの可愛いオツパイが丸出しだ」

「ヤダ、恥ずかしい…」

「もう少し改造するよ」

そうやって健太郎は、水着の股布を左手の人差し指で押し、女性器を確認してから鋏を入れ、スリットを作った。

更に、真歩子の尻の割れ目を人差し指でなぞり、アヌスの位置を確認してから、尻の布を円形に切り取った。所謂、へ〇バックである。

「これでよし」

そうやって健太郎は、裁ち鋏を袋に入れた。

「じゃあ次は…」

健太郎は、水着のスリットに指を入れ、女性器を愛撫する。

ほどなく、真歩子は下半身を振り始めた。

「け、健太郎さん…。ダ、ダメ…」

「どうしたの？」

「オシッコが、も、漏れそうです…」

「出してよ。真歩子ちゃん」

「アアッ、出ちゃう」

そう言った直後、真歩子は失禁した。

「ア、アーン…」

真歩子は勢い良く放尿する。浴室の床に薄黄色の液体が溜まる。暫くして、真歩子の放尿が止まった。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

健太郎は、真歩子の尿をシャワーで洗い流し、更に真歩子の股間もシャワーで洗った。

「じゃあ次は、お浣腸だよ」

健太郎はそう言うと、脱衣場に用意していたある物を浴室に入れた。点滴の様な袋で、チューブが伸びている。

「健太郎さん…、それは…？」

「これは〈高圧浣腸〉というんだよ」

そう言って健太郎は、1リットル牛乳パック2本分の牛乳を袋に入れ、フックに引っ掛けた。

「これで良し。じゃあお尻を突き出して」

「は、はい」

真歩子は壁に手を付き、尻を突き出す。

健太郎は真歩子のアヌスに嘴を挿す。

そして、先端の〈ローラークレンメ〉、即ちローラーの付いた弁を緩め、牛乳を真歩子の中に注ぎ込む。

「アアツ…。つ、冷たいです」

「我慢するんだ。お尻に力を入れて」

「は、はい」

真歩子の尻たぶには、汗が浮かぶ。排泄欲が疼く。下腹部が、ポツコリと膨らんだ。お腹が愛らしい音を奏でる。

「よし、牛乳は全部入ったよ」

そう言って健太郎は真歩子のアヌスにエネマシリンジの嘴を挿した。そして、握ったゴム球を押したり緩めたりして、真歩子の腸内に空気を入れる。

「アアツ、く、空気が」

「そうだよ。空気を入れる事で、牛乳を出し易くするんだ」

暫く空気を入れた後、健太郎が尋ねた。

「真歩子ちゃん、どうかな？」

「健太郎さん…。お腹が、苦しいです。い、痛いです。も、漏れそうです」

真歩子のお腹は、愛らしい音を奏で始めた。

「じゃあ、そろそろだね」

「はい。オナラが、ウンチが出そうです」

「うん」

真歩子の言葉に健太郎は頷く。

彼はへエネマシリンジの先端を、真歩子のアヌスから外した。

「真歩子ちゃんのお腹を撫でてあげるね」

右手で真歩子の腹を愛撫すると、牛乳が勢い良く飛び出した。今回も、牛乳は白色で、薄茶色くは染まってはおらず、汚物も混じっていない。

「アーン、良いの…、で、出てる…」

「真歩子ちゃん、お浣腸、気持ち良いんだ」

真歩子が頷く。

そうしているうちに、真歩子は牛乳を全部出した。

「じゃあ、次は、お腹を洗うためのお浣腸だよ」

健太郎は、洗面器に入れたお湯で再度真歩子に浣腸をする。今度は、大型のプラスチック製の注射器を使う。

健太郎が真歩子の下腹部を愛撫すると、真歩子のアヌスからはお湯が噴き出す。それは白濁しておらず、汚物は無い。全部出たところで、健太郎が尋ねた。

「真歩子ちゃん、お腹の具合は？」

「大丈夫です。痛くありませんし、違和感ありません」

「じゃあ、水着を脱がしてからお尻の穴とオマンコを洗うよ」

「は、はい」

健太郎は洗面器にお湯を入れた。そして水着を脱がした。それからシャワーで床に溜まった牛乳と湯を洗い流す。

真歩子は健太郎のされるがままになる。

まだ真歩子のアヌスはヒクヒク蠢き、愛らしい音を奏でる。

「まだ可愛いオナラをさせて…。ブリブリ言っているよ」

「ああん、恥ずかしい」

健太郎は丹念に真歩子の女性器とアナルを洗うと、背中から抱きつき、耳朶と首筋にキスをした。そして乳房と乳首を愛撫する。



「じゃあ、真歩子ちゃん。もう一度、身体を温めようか」

「はい」

健太郎と真歩子は、二人で湯船に入る。それから、風呂を上がった。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。健太郎は持参した道具と改造した水着を持っていた。水着は明日、自分のアパートに持って帰る。

真歩子の部屋にて。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言っただけ健太郎は真歩子を、タオルで後ろ手に縛った。

そして健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせると、尻たぶを掴み、左右に開く。

「いつ見ても、丸くて大きくて可愛いお尻だね」

「健太郎さん、お願いします。真歩子のエッチなお尻にお仕置きして下さい…」

「良いの…?」

「はい…。お尻が、ウズウズ、ムズムズするんです…」

「じゃあ、お仕置きだ。お尻ペンペンするよ」

そう言っただけ健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。

「あんっ!!お尻が、痛いんです…。それに、熱いです。お尻に、健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「健太郎さんの太くて硬いオチンチンを、真歩子のいやらしいお尻の穴に入れて、ください」

そう言っただけ真歩子は尻を振り、淫らなおねだりをする。

「じゃあ、チンポを、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、右手で真歩子の乳房を揉みしだき、左手で彼女の腰、尻、太股を愛撫しながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾

力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の首筋、肩口、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、可愛がつてあげるね。乳首、こんなに勃たせて。ほらほら、ツンツンツンツンツンツン。乳首も…、コリコリつと」

「ああつ、ダ、ダメです。胸をそんなに…」

「真歩子ちゃんの可愛いオツパイ、たつぷり揉み揉みしてあげるよ。ほらほら、乳搾り。美味しい母乳が出るんだろうね。いいサイズだよ」

「ア、アーン、そんな事言わないで、は、恥ずかしい。そ、それにそんなにきつくオツパイ揉まないで…。オツパイ、ちぎれちゃうっ…!!」

そうしている間にも、ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああつ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。お尻の穴が、壊れちゃう…。イクッ、イツちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!イ、イヤーツ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとうございます…、大好きです」

健太郎が男性器を真歩子のアヌスから引き抜くと、彼が出した白濁が吐き出された。そして彼女の尻穴は、元に戻っていく。

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しみましたようね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起こすと、タオルをほどいてから、唇を重ねた。

この後、健太郎は真歩子の女性器に正常位で挿入。再度二人同時に絶頂に達した…。

その後、健太郎と真歩子は、一緒にシャワーを浴びた。真歩子の部屋に戻った二人は、全裸で就寝した…。

【続く】

## 第45章 11月の第2期3連休最終日

24日、月曜日。3連休の最終日。この日は、振替休日である。

健太郎は、今日は《土下座》でアルバイトである。但し、一度アパートに立ち寄ってから出勤する。

そして真歩子も、今日は一日《カトレア》でアルバイトである。

真歩子が《土下座》に顔を出したのは、18時30分だった。

健太郎と真歩子は、駅前のスーパーマーケットで買い物をしてから、健太郎のアパートに戻った。

帰宅後、夕食。健太郎と真歩子は、一緒に夕食を作る。流石に真歩子に裸エプロンをさせる健太郎ではない。

夕食後、一緒に後片付けをする。もう、すっかり手慣れた物である。

その後、健太郎と真歩子は勉強。真歩子は自室で、健太郎は居間を借りた。

勉強した後。真歩子の部屋で。健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている上着とスカートを脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんて転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくつて、形も良くつて、弾力もあつて、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色だもの。たっぷり可愛がつてあげるよ。ほらほら、揉み揉みしちやえ。ソフトタッチじゃ物足りない、と」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「ほらほら、乳首、立っているよ。ツンツンしちやえ」

「ああつ…、そ、そんな。む、胸をそんなに…。突かれたら…、摘まんじゃない、コリコリされたら…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティに手を入れると、溢れ出した蜜が絡みついた。丹念に愛撫してから、右手を真歩子に見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやったんだ…。潮まで噴いて…。エッチだなあ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん…」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

浴室にて。健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。僕は湯船に入るから、先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「はこ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は湯船にゆっくり入ってから、風呂を上がった。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、真歩子の部屋に戻った二人。

そして健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックなセックスをする、というサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

しかし、健太郎はタオルを使わなかった。傍らにタオルを放った。

「えっ……?」

戸惑う真歩子。

「今日もこつちを使うよ」

そして健太郎は、真歩子の背後に立つと、ある物を取り出した。

そして、真歩子の首にそれをつけた。首輪だった。

「ええっ!?!健太郎さん、それは……」

「そうだよ、首輪だよ。それじゃあ、言う事を聞いて。まず四つん這いになるんだ」

「は、はい……」

健太郎の言い付けに従い、四つん這いになる真歩子。

「次は……」

そう言つて健太郎は、鞆からある物を取り出した。

「健太郎さん…、それは？」

「100円ショップで買った、カーネーションの造花だよ」

「それを、どうするんですか…？」

「こうするんだよ…」

そう言つて健太郎は、造花を真歩子のアヌスに挿入した。

「イ、イヤーツ!!ぬ、抜いて、く、ください!!」

「ダメ。真歩子ちゃんに、お似合いの尻尾だよ。お花の尻尾、可愛いじゃない」

確かに、真歩子は、アヌスに健太郎の舌、指や男性器、綿棒を挿入されてはいるが、造花を尻尾として挿入されるのは嫌だった。

「イ、イヤです。お尻が…、変になっちゃう…」

「ほらほら、言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻をスパンキングする。乾いた音が、部屋に響く。すぐに真歩子の尻は真っ赤になる。

「い、痛いです。お尻が、熱いです」

「じゃあ言う事を聞いて。尻尾、お尻の穴にしばらく挿すよ」

「は、はい」

「それじゃ、寝室を出るよ」

「はい…」

真歩子は健太郎に言われるまま、二階を四つん這いになったまま進む。

「は、恥ずかしいです。こんな格好」

「二人だけだから、恥ずかしい事なんか無いでしょ」

「で、でも。やっぱり四つん這いは…」

真歩子が答えた直後。健太郎は彼女の尻を平手打ちした。

「アンツ!!ぶ、ぶたないでください…」

「じゃあ、『よし』と言うまでこのまま進んで」

「はい」

真歩子は健太郎の言い付けに再度従う。

真歩子の部屋に一度戻ると、健太郎は彼女のアヌスに挿した造花を

抜き、パンティを穿かせた。それから再度、部屋を出た。

「よし、階段は立って良いよ」

一階に降りると、健太郎は再度真歩子を四つん這いにさせた。

健太郎と真歩子は、洗面所に来た。

「よし。じゃあ立って。手を洗おうか」

「はい」

ハンドソープで手を洗うと、健太郎と真歩子は部屋に戻った。

健太郎は、真歩子につけた首輪を外し、パンティを脱がしてから、彼女をベッドに仰向けにさせた。

「次は…」

「はい…」

「へオナニー、して見せて」

「はい」

真歩子は言われるまま、自分の女性器を弄り始めた。

「真歩子ちゃん…?」

「ん? 何ですか?」

「真歩子ちゃんは、一人でする事は多いの?」

「ええ」

真歩子は頷くと、更に激しく指を動かした。淫らな水音が部屋に響き、多量の蜜が溢れ出す。

「じゃあ、そろそろ…、チンポをペロペロして」

健太郎は、真歩子に限界まで勃った男性器を舐めさせた。

真歩子は健太郎の男性器にチロチロと舌を這わせた。それから、啜えた。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。その間も、真歩子は女性器を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

「出すからね。全部飲んで」

健太郎は、彼女の口の中で、全てをぶちまけた。



「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「じゃあ、次は…」

健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。

「はい。今日は…?」

「これは、目隠しに使うよ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は、真歩子を立たせてから、タオルで視界を奪う。そして、背後から真歩子の身体を愛撫する。

「今は、何をされているのかな?」

「健太郎さんに、オ、オッパイを揉まれています」

次に健太郎は右手を真歩子の下半身に這わせた。

「今は?」

「健太郎さんの右手が、お尻を触っています。あ、今、オ、オマンコを触っています…」

「じゃあ、そろそろ…、後ろ手に組んで」

「はい」

健太郎は真歩子が後ろ手を組むと、ある物を取り出した。手錠だった。

健太郎は真歩子の目隠しを外した。

「えっ? 健太郎さん? 手錠!?!」

「うん。今日も手錠が良いかな、って」

金属音が、部屋に響いた。

「じゃあ、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精

した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。もう一度、お口でして」

「はい」

手を使えない状態での、真歩子の舌と唇だけのフェラは、それほど気持ち良くはない。それでも健太郎の男性器は、僅かに蠢いた。

「真歩子ちゃん」

「はい？」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!?!そんな…」

「じゃあ、お口にお仕置きするよ」

「はい、お仕置きしてください」

「じゃあ、おしゃぶりしてもらおうよ」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を啜えさせた。

所謂、ヘイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らな音が、部屋に響く。

〈ヘイラマチオ〉に、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サディスティックになる健太郎。

真歩子の口の中で、再度大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんのお口、気持ち良いからね。じゃあ次は…」

そう言って健太郎は、真歩子をベッドにうつ伏せにさせ、尻を突き

出させた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、グシヨグシヨだね。それにお尻の穴までヒクヒクしている」

そう言って健太郎は、真歩子の尻と太腿を愛撫する。

「じゃあ、次は…」

そう言うとき健太郎は、右手人差指をアヌスに、左手人差指を女性器に入れた。

「アアツ!!」

身を仰け反らせる真歩子。

健太郎はアヌスをグニグニと揉みほぐし、指ピストンを女性器にする。

クチュクチュと、淫らな水音が部屋に響く。真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、ベッドのシーツに淫らな染みを作っているが、その染みは大きくなる。健太郎は次第にピッチを上げる。

「き、気持ちいいの…、アソコが、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「イッて良いよ。出してよ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ!!で、出ちゃう!!」

健太郎は、女性器に入れた指を引き抜くと同時に真歩子が絶頂に達し、大量の潮を吹いた。

「こんなに出たんだ。じゃあ次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のアヌスからも指を引き抜いた。

「じゃあ、舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、まず真歩子の女性器に舌を這わせた。

それから、アナルを舐めた。真歩子のアナルは、入浴中に洗った事もあって、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子の尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イッちゃう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを真歩子のエッチなお尻の穴に、い、入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。お尻の穴が、イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふつ…、ありがとう…、良かったです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しむでしょうね」

この後、健太郎は、手錠をしたまま真歩子の女性器に一回解き放つた。その後、手錠を外してシャワーを浴びた。

そして、健太郎と真歩子は全裸で就寝した。その際、健太郎は真歩子にあるお願いをした。

「真歩子ちゃん、お願いがあるんだけど」

「なんですか?」

「乱暴な事はしないから、真歩子ちゃんの、オッパイ吸わせて」

「もう、健太郎さんのエッチ」

そう言いながらも、真歩子は健太郎に右の乳首を啜えさせた…。

翌日、25日、火曜日。

この日は、真歩子の両親が、文月町から帰ってくる日である。

健太郎と真歩子は、ほぼ同時に目を覚ました。

「健太郎さん、おはようございます」

「真歩子ちゃん、おはよう。良く眠れた?」

「ええ」

真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、身支度を整え、早めに朝食を摂り、洗い物をしてから、真歩子の家を出た。

真歩子と一緒に卯月駅に向かう健太郎。

真歩子は葉月学園へ。今日は、通常授業である。

「それじゃ行ってらっしゃい。気を付けてね」

健太郎が言った。

「はっ」

真歩子が頷く。そして続けた。

「健太郎さんも…。後、次のデートを楽しみにしています」

「うん。ありがとう。真歩子ちゃん。後、ご両親によろしくお伝えください」

真歩子に健太郎はそう言って、手を振って見送った…。

【続く】

## 第46章 期末テストの翌日に

12月10日から12日は、葉月学園の期末テストである。

このため、健太郎と真歩子は、11月30日と7日はデートを無しにした。

で、テスト明け、13日、土曜日。《土下座》にて。

「健太郎さん、こんばんは」

「いらっしやいませ。あ、真歩子ちゃん、こんばんは。どうしたの？」

「昨日、期末テストが終わったので、今日、これから健太郎さんのアパートに伺っても…」

「うん、構わないよ。後、せつかく来てくれたから、なんか飲む？」

「じゃあ紅茶を」

健太郎は真歩子に紅茶を振る舞う。

アルバイト終了後。健太郎と真歩子は、健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言っただけ健太郎は、勉強机の椅子を出した。そして言った。

「じゃあ、座って」

「はい」

健太郎に言われるまま、真歩子は座った。

その直後、健太郎は掌で、セーラー服の上から真歩子の乳房を包み愛撫した。

「キャツ…!!け、健太郎さん…」

「どうかな? こういうのは。学校の教室で、オツパイ触られているみたいでしょ」

健太郎は真歩子の乳房に優しく触れながら尋ねた。

「イ、イヤじゃないです…」

真歩子の艶かしい喘ぎ声と吐息が部屋に響く。

健太郎は真歩子の乳房を丹念に愛撫してから、言った。

「次は…」

乳房から手を離すと、今度は健太郎はセーラー服の裾から手を入れ、ブラジャーの上から乳房に触れる。ここもソフトタッチである。

そして健太郎は、ブラジャーの中に手を滑らせ、真歩子の乳房に直に触れる。更に乳首を指先で転がす。

次第に真歩子の乳首は屹立していく。

一度、健太郎は真歩子の乳房への愛撫を止め、セーラー服とブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあつて、最高だよ。乳首、こんなに勃たせて」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」  
そう言うとき真歩子は、耳まで赤く染めた。

「じゃあ立って」

「は、はい」

言われるまま、真歩子は椅子から立った。

「次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子背後に立ち、彼女のスカートを捲った。  
「キャ…」

「真歩子ちゃん、今日のパンティは白だったんだ。可愛いよ」

「ヤ、ヤダ…。エッチ」

「ところで、真歩子ちゃん」



「なんですか？」

「中学校の頃は、学校でオツパイ触られたり、スカート捲りされたりしたの？」

「は、はい。でも、男子より女子にされました」

「そう…。後、たけし君は？去年は、オツパイを触ろうとしたり、スカート捲りをしようとしたりすると言ったけど」

「ええ、でも、今は、たけしはそういう事はししないで」

「うん。それでお願いがあるんだけど」

「なんですか？」

「真歩子ちゃん、スカートを押さえている手を、頭の辺りに挙げて」

「は、はい」

「じゃあ、いくよ」

そう言つて健太郎は、スカートを完全に捲り上げた。真歩子の白いパンティが現れ、両脚がむき出しになった。しかし、スカートの裾は頭頂部には届かなかった。

「キヤー!!な、何をするんですか!？」

「〈茶巾寿司〉は無理か…」

「は、恥ずかしい…」

「じゃあ戻すよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のスカートを元に戻した。

「もう…。健太郎さんのエッチ。意地悪」

そう言つて真歩子は少し頬を膨らませた。そして続けた。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗

うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎はベッドに真歩子を仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。女性器が晒される。恥毛は、薄い。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んっ、ふああっ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言っつて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あっ、や、やんっ」

ツンツンと舌尖ですばまりを突っつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あっ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言っつて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのオマンコにチンポを入れたくなっ  
ていたんだ」

そう言っつと健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わり、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さん  
のオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって、き、  
気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げ  
ていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…。オマンコ

が、溶けちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ。イ、イク。あつ、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

「じゃあ、真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

そう言って健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、は、は…」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…。レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。更に真歩子は、玉袋も丁寧に愛撫する。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ? なんですか?」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そう言つて健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。へシックスサイン< である。

「ええっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めないよ」

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアナルを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こつちも可愛がつてあげるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷつ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああつ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?!んっ!!んぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるからね」

へシックスサイン< の後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじゃうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い？良いの？」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。そして身体を丹念に拭き、乾かした。

そして真歩子を自宅に送る。その道すがら、日曜日の約束をした。  
そして健太郎はアパートに戻った…。

【続く】



## 第47章 冬の公園でデートの後

14日、日曜日。

健太郎と真歩子は、午後から《世界一公園》でデートした。

「そう…、葉月学園は火曜日に終業式か」

「はい、17日の水曜日から冬休みに入ります。それで、今年も駅前商店街のクリスマススイベントを手伝う事になりました」

健太郎の言葉に真歩子が答えた。

「そうなんだ。今年のクリスマスイベントも楽しみにしているよ」

「はい」

今度は、真歩子が頷いた。

クリスマスが近い事もあり、公園内にはイルミネーションが施されている。

夜。公園内はライトアップされていた。

「健太郎さん」

徐に、真歩子がベンチから立つと、健太郎に言った。

「えっ!?!真歩子ちゃん?」

「私を捕まえられたら、なんでも言う事を聞きますよ」

そう言つて真歩子は駆け出した。

「言つたな。確かに聞いたぞ」

そう言つると健太郎はダッシュして真歩子を追いかける。

「健太郎さん、私、結構足が速いんですよ。鍛えましたからね」

「はあ、はあ、ま、待つてよ。真歩子ちゃん」

「ふふっ、健太郎さん。こっちですよ」

真歩子は健太郎を巧みに躲す。

しかし、公園の中央広場で、健太郎は真歩子を捕まえた。

「よし、捕まえたぞ」

「じゃあ、健太郎さん、なんでも言つてください」

「うん、ならば」

そう言つると健太郎は真歩子を抱き締めた。

「えっ!?!」

「なんでも言う事を聞くと言ったよね」

「あつ…。健太郎さん、人が見てます…」

「構わないさ…」

そう言つて健太郎は真歩子にキスをした。

公園を出た健太郎と真歩子は、彼が住むアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子の服を脱がし、下着姿にすると、再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…。パンティもビショビショだよ」

「イ、イヤ。そんな事…」

「そんな事、あるだろ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして横倒しにしてから、背中側から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる。ほら、ツンツンツンツンツン。次

は、コリコリっと」

「ああっ…、ヤンツ。む、胸をそんなに…」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、なかなかのサイズだし、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ。ほらほら、乳搾り。手荒に揉み揉み、真歩子ちゃんのオツパイ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン。そんなにきつく揉まないで…。オツパイが、ちぎれちゃいます」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子のオマンコ…」

「じゃあ、ここは…？」

「ク、クリトリス…」

「良く言えたね。クリトリスも勃っているね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、どこに何が欲しいの？」

「健太郎さんの、太くて硬いオチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

そう言っつて真歩子は、淫らなおねだりをする。

「じゃあ、入れるよ」

そう言っつて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…」

「ああつ…、入っつて来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…：ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのオマンコ。〈松葉崩し〉、恥ずかしいとか言つて…。本当は好きなんですよ、真歩子ちゃん」

「は、恥ずかしい…」

「あれれ？答えてくれないの？なら止めちゃうぞ」  
そう言つと健太郎は、律動を止める。

「ああんっ。健太郎さんの意地悪」

そう言う真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

「正直に言つてよ。言わないと、じつとして動かないぞ」

「き、気持ち良いの…」

「じゃあご褒美だよ」

真歩子がそう言つた直後。健太郎は律動を再開する。彼の腰の動きが、再度激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ…!!イ、イツちゃうつ…!!」

「くうっ」

「あつ、あああああああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「良かったよ、真歩子ちゃん」

「うふふっ…、ありがとうございます…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。その間、彼女は乳房から腹部を撫で、指に絡みついた彼の白濁を見つめていた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。

二人は身体を丹念に拭いた。そして、浴室を出てから、健太郎が聞いた。

「まだ、時間は大丈夫だよね」

「ええ」

真歩子が頷く。

「じゃあ…、跪け」

「はい」

健太郎の意地悪な命令に従う真歩子。

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。お口でペロペロして」

「はい」

そう言つて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかつた。

「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言つと、真歩子は健太郎の男性器をチロチロと舌先で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。その間、玉袋を掌

で愛撫する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「真歩子ちゃん、出すからね。全部飲んで」

健太郎はそう言つて、真歩子の口の中で大量の精液を放つた。

「ん、んぐ、んんんーっ」

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「じゃあ次は…、ご褒美だよ」

「はい」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子に跨がる様に言ってから男性器を挿入した。所謂、〈対面座位〉である。

〈対面座位〉か〈後背座位〉は、お風呂でエッチする時に多いが、時々ベッドや椅子でする事がある。健太郎は真歩子を抱き締めると、最も奥を突く。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の右の乳房を愛撫し、左の乳首を舌先で転がす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締めりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。更に彼は、真歩子の背筋から腰、尻を撫で回す。一方、真歩子も、自分から動き、健太郎を刺激する。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の手の指先が、健太郎の肩を掴んだ。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オ、オマンコが溶けちゃう。イツちゃう…。ま、また、イツちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今度は、中に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「な、中!？」

「今日は、大丈夫ですから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、中に出して、く、くださいっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ、ああああああっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「じゃあ、もう一度シャワーに行こうか」

「ええ…」

それから二人は、再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。それから、彼は帰路についた…。

【続く】



## 第48章 ジャージ姿で

20日、土曜日。《土下座》にて。

「健太郎さん、こんばんは」

「あ、真歩子ちゃん？こんばんは。どうしたの？」

「たった今、《カトレア》でのアルバイトが終わったので、今日、これから健太郎さんのアパートに伺っても…」

「うん、構わないよ。後、せつかく来てくれたから、なんか飲む？」

「じゃあ紅茶を」

健太郎は真歩子に紅茶を振る舞う。

アルバイト終了後。健太郎と真歩子は、健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。健太郎が尋ねた。

「今日は上下ジャージだけど、どうしたの？」

「今日は午前中は学校に行って、トレーニングをして、それから来ました」

「そうなんだ」

「真歩子の言葉に健太郎が頷いた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、ジャージを脱がした。ジャージの下は、葉月学園の長袖Tシャツと紺色のブルマーだった。そして、健太郎は服を脱いだ。その直後、健太郎の中の黒い欲望が、頭をもたげてきた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあったフェイスタオルを見せた。それは、今日、SMチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、後ろ手を組んだ。

健太郎は真歩子をタオルで縛った。

「じゃあ…」

「はい」

健太郎は真歩子を背後から抱き締めると、彼女の身体を愛撫する。それから、姿見の前に二人は立った。

健太郎は真歩子のTシャツとブラジャーをずらして、乳房を露にした。

それから乳房を手のひらで包み込み、揉みしだいた後、屹立した乳首を摘まんで転がす。

「や、やあん…。そ…そんなにされたら」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかいし、弾力もあつて、最高だよ」

「そ、そんな事、言わないで下さい…。は、恥ずかしいです…」

そう言うとき真歩子は、耳まで赤く染めた。

健太郎は、パンティの中に手を入れ、真歩子の女性器を直接愛撫する。更にクリトリスを摘まむ。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身をのけぞらせた。軽い絶頂に達した。

溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付く。

「どうかな？鏡の前でしているのを見るのは？」

「は、恥ずかしいです…」

「だから、いつも以上に興奮しているんじゃない？もう、オマンコはぐしょ濡れだよ」

そう言つて健太郎は、真歩子に手を見せた。

「や、やあん…。み、見せないで…」

「じゃあ、次は」

そう言つて健太郎は、真歩子のブルマーとパンティを一気に剥ぎ取った。

「真歩子ちゃん」

「はい」

「久しぶりに、オマンコの毛、剃つてあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子をベッドに横たえた。そして、脚を開かせ

る。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。それから、洗面器のお湯を捨て、中を洗った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言って真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…」

そう言って健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「ヤ、ヤンツ」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

「イ、イヤです。恥ずかしいです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じて

いるの?」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は」

「はい」

「パンティとブルマー、穿かせてあげるね」

そう言っただけ健太郎は、真歩子にパンティとブルマーを穿かせた。但し、膝上位の辺りで止めた。

「これでよし」

「えっ!？」

「真歩子ちゃん、下半身の自由を奪うには、ロープも足枷も必要無いんだよ」

「ヤ、ヤダ…。は、恥ずかしい…」

真歩子は羞恥に身を振る。

「じゃあ、次は…、お尻を突き出すんだ」

真歩子は、健太郎の意地悪な命令には逆らえない。

健太郎はしゃがむと、尻たぶを掴み、真歩子のアナルを外気に晒す。それから、真歩子の女性器に舌を這わせる。

更に、真歩子のアヌスも舌で愛撫する。

「ああ…、ダ、ダメです…。そ、そんな所、舐めないでください…」  
「どうして?」

「ま、まだシャワーで洗ってないです…」

「じゃあ、キレイにしようか。まずは中を、ね」

そう言っただけ健太郎は、洗面器とイチジク洗腸を用意した。

「じゃあ、お洗腸するよ。今日はキッチンとしたお薬だよ」

そう言っただけ健太郎は、イチジク洗腸の封を切り、真歩子の愛らしいアヌスに先端を挿した。

「じゃあ、入れるよ」

「ああ、入って来る…。なんだか、お尻が、ひんやりします…」

「これで、全部だね」

健太郎は真歩子の腸内に薬液を全て入れた。

数分後。真歩子の表情が歪んだ。排泄欲が疼き始めた。

「お、お腹が、い、痛いです…。苦しい…。出ちやう。も、漏れちやう。オナラが、ウンチが…」

「もうちよつと我慢して」

「お、お願いします。ブルマーとパンティ、ぬ、脱がしてください」「えっ!?!どうして?」

「ブルマーとパンティ、汚れてしまいます」

「うん。じゃあ、脱がしてあげるけど、その間はウンチ、我慢出来るよね」

「はい」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子のブルマーとパンティを剥ぎ取った。

「脱がしたよ。もう少し、我慢出来るかな?」

「もうダメ。辛い!」

「じゃあ、出して良いよ」

「ああつ、出るう」

真歩子がしゃがんだ直後。彼女のアヌスから飛沫が飛び出す。更に破裂音が響き、刺激臭が漂う。

「アーン、良いの」

その直後、直腸内の汚物が飛び出した。

薬液と汚物が排泄された直後。健太郎は、トイレで汚物を処理した。その後、換気扇のスイッチを入れてから、棚からある物を取り出した。

「健太郎さん、それは?」

「アルコールだよ。真歩子ちゃんのお尻の穴を消毒してあげるね」

脱脂綿をアルコールで湿らせてから、真歩子のアナルを拭く。それから、健太郎は真歩子の縛めを解き、服を脱がした。

「真歩子ちゃん、お腹の具合は、どうかな?」

「大丈夫です。違和感はありませんし、痛くもないです」

「それじゃ、シャワーに入ろうか」

「ええ」

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

まず健太郎は、真歩子のアナルを洗う。

「まずは、真歩子ちゃんのお尻の穴を洗わないと、ね」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を愛撫しながら、アナルをポ  
デイーソープで洗う。

「アアーン、気持ちいいの」

「お尻を触られただけで、甘えた声を出すなんて」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻に平手打ちをする。浴室に乾いた  
音が響く。

「イヤーツ!!」

「真歩子ちゃんのお尻は、叩き甲斐のあるお尻だからね」

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言つて真歩子は頬を膨らませた。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

真歩子は健太郎の男性器を手で包み込むと、少しキツく握った。

「つつ…、ま、真歩子ちゃん…」

そう言つて健太郎は少し上半身をのけぞらせる。

「さっきのお返しです。この程度で仰け反るなんて、ダメじゃない  
ですか。今度は、私が健太郎さんのお尻叩きますよ」

そう言つて真歩子は笑った。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗  
うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

身体を洗つてから、湯を張つてはいないが、健太郎は湯船に入り、縁  
に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗つてから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

それから、真歩子のお尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。  
健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいお尻の穴に入れて下さい」

「ちゃんと言えたね。じゃあ、お尻の穴に入れるよ」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私のお尻が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんのお尻の穴も、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

シャワーを浴びた後。健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」



「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」  
ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

三度シャワーを浴びてから、健太郎は真歩子を自宅に送り、日曜日の約束をした…。

【続く】

## 第49章 コンサートの後

21日、日曜日。

この日、健太郎と真歩子は、午後から葉月町に向かった。行き先は、《葉月ムーンプラザ》。

このプラザでは、様々なジャンルのコンサートが開催される。今日は、クラシック音楽のコンサートだ。

終了後、ロビーにて。

「健太郎さん、やっぱり心が綺麗な人ですよ」

「えっ!？」

「その…、お花や絵が好きの人に、悪い人はいません。音楽が好きなのも同じです。悪い人ではありません。健太郎さんは出会った時から変わっていませんよ」

「真歩子ちゃん、有難う」

真歩子がそう言うのは、理由がある。

昨年も、健太郎と真歩子は葉月ムーンプラザでクラシック音楽のコンサートに来た。

終了後、ロビーにて。真歩子が言った。

「健太郎さんって、音楽も好きなんですね」

「ああ」

「でも、どうして部活動に参加しなかったんですか?」

「その事だけど、ね」

そう言うのと健太郎は、過去の事を話し始めた。

健太郎は、中学校の時に吹奏楽部に入部した。顧問の先生からスカウトされた。

でも、部長と反りが合わず、わずか一ヶ月で辞めた。先生に退部届は、出したのだが、実際にはクビだった。部長にクビを宣告された。

その後、吹奏楽部の部長派の女子にいじめられた。暴言だけではなく、教科書やノートを破られたり落書きをされたり、殴られたり、頭から水をかけられたり、口臭防止スプレーを目にかけられたりもした。

ただ、皮肉な事に、健太郎が辞めた後に吹奏楽部は市のコンクールでも成績が下位になり、いじめ問題もあつて評価はガタ落ちになつた。

その女子のいじめが原因で、健太郎は極度の女嫌いになつた。それを脱却したのは、卯月学園に入学してからである。

「そんな事があつたんですね…」

「ああ。但し、音楽自体は嫌いにならなかつたんだよ」

昨年話した事を、二人は回想していた。

因みに、健太郎は、ある理由から、絵が描けないというトラウマもある。

昨年、《卯月町立美術館》でのデート、ラウンジにて。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「はい？」

「絵、好きなんです」

「ああ。ただ、僕はある事が原因で、乗り物以外は絵が描けないんだ」

「えっ!?それは一体」

真歩子の問いに、健太郎は口を開いた。

実は、健太郎は画家や美術館を扱うテレビ番組や、画集は好きだが、あるトラウマが原因で、人物画と風景画が描けない。実際、鉛筆を持っただけで手が震える。

そのトラウマの原因は、小学校四年生の時まで遡る。

そもそも、健太郎は絵を描くのが苦手だった。四年生の時には、担任の女教師に目の敵にされた。

そんなある日。担任の女教師が、図画工作の時間に描いた絵を、「一人ずつ教壇に立って見せ、良いところを褒め合いなさい。もしアドバイスがあるならば、言つてあげなさい」と命じた。

しかもその日は参観日。

健太郎の番になつた際、皆が手を挙げたが、発言内容は「下手」「似てない」「失礼」等の罵詈雑言。

散々野次られたが、教師は見ているだけで全く制止しない。健太郎は保護者の前で晒し者にされたも同然だった。

そんな中、同級生の一人が「褒め合いなさいと先生が言ったのに、バカにしているだけじゃないか」と言ったところ、一気に教室内はシラケた。

そして健太郎が教壇を下りた直後、その女教師は「もう時間がないから一人につき指名は一人」と宣った。

これがトラウマになり、健太郎は人物画・肖像画が描けなくなった。更に別の絵でも、彼女は健太郎にひどい仕打ちをした。

写生した風景画の空の色が上手くいかなかったのだが、その教師は健太郎の絵を取り上げ、隣のクラスに持って行って言いふらしてバカにするという暴挙に出た。しかも、その隣のクラスの男性教師も一緒になってバカにしたのである。

それ以来、風景画も嫌いになり、描けなくなった。

但し、凶画工作や美術の成績が悪い訳ではない。ペーパーテストや乗り物や道具のスケッチや絵画は、別に平気なので、その分でカバーしている。

「そうだったんですね…」

「ああ…」

「でも、健太郎さんは、心が綺麗な人ですよ」

「えっ!？」

「その…、お花や絵が好きの人に、悪い人はいませんか」

「真歩子ちゃん…、有難う」

その事も二人は回想していた。

葉月ムーンプラザを出た二人は、葉月駅で電車に乗った。

卯月駅で下車後、二人は健太郎のアパートに向かった。

アパートの部屋にて。

真歩子が目を閉じた。

健太郎は、真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

合図のための、キス。

唇を離すと、徐に真歩子は、背中を向けて、後ろ手を組んだ。

「真歩子ちゃん…、今日はそっちじゃないよ」

そう言うと健太郎は、真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

今度は互いに舌を絡める。唇を離すと、二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いな

がら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

シャワーを浴びた後。

健太郎は、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして正面から抱き付いた。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな?」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと saying してごらん」

「イ、イヤ…。意地悪。真歩子のオ、オマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの?」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入つて行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…」

「ああっ、入つて来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「あつ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子を四つん這いにして、再度、男性器を挿入した。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのおマンコ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イク、イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を噴くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を背中から尻にかけてぶちまけた。

真歩子の身体を拭いた後。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「パイズリしてよ。真歩子ちゃんのおツパイで僕のチンポを挟んで」

健太郎は真歩子を仰向けにすると彼女に跨がり、勃起した男性器を胸の谷間にあてがった。

真歩子が健太郎の男性器を乳房で挟むと、健太郎は腰を前後させる。

この方法だと、真歩子の体力の消耗は少なくて済む。

「真歩子ちゃんのおツパイの感触、最高だよ」

「なんか変…。健太郎さんに胸を犯されているみたいですよ…」

健太郎の腰の動きが激しくなる。

「くっ…。で、出る」

そう言った直後、健太郎は真歩子の顔面に射精した。

「真歩子ちゃん、舐めて。綺麗にして」

「は、はい」

「終わったら、オマンコに入れてあげるね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

お掃除フェラの後、健太郎は真歩子の顔面をティッシュで拭いた。

「真歩子ちゃんのお掃除フェラ、上手だから、すぐに僕のチンポ、大きくなったね。じゃあご褒美だよ。オマンコにチンポを入れるよ」

そう言つて健太郎は真歩子の女性器に〈松葉崩し〉で挿入した。

真歩子の丸くて大きな尻を撫で回しながら、健太郎は律動する。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、

気持ちいい…!!」

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのおマンコの中、気持ちいい」

健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。彼は、真歩子の乳房

を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「こんなに乳首を勃たせて…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、

ツンツンツンツンツ。今度は、摘まんで、コリコリつと」

「ああつ、む、胸を、そ、そんなに…」

「真歩子ちゃんのおツパイ、たっぷり可愛がつてあげるね。ほらほ

ら、乳搾り。たっぷり揉み揉みしてあげる」

「イ、イヤーン。そ、そんなにきつくおツパイ揉まないで…!!おツパ

イが、ちぎれちゃう…」

そうしているうちに、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、

でもどこか優しく締め付ける。



溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに染みを作った。  
淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのおマンコの中、熱くて、吸い付いて来る。  
それに、お尻の穴もヒクヒクしているよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…。あ  
あっ、そ、そこ。そこを擦られると、き、気持ちイイです」

「真歩子ちゃんは、このぷくりとした所をチンポで擦られるの、好き  
なんでしょ？」

健太郎の男性器が、真歩子の女性器の中、膣壁を擦る度、真歩子は  
嬌声を上げる。

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オマンコが溶けちゃう…。  
イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。イツちゃう。あっ…、あああ  
ああああーっ!!」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器  
から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「健太郎さんの、こんなに沢山…」

そう言いながら、真歩子は自分の乳房から腹部を撫でた。そして指  
に絡み付いた、健太郎の白濁をうっとりした表情で見つめていた。

「真歩子ちゃんの中、気持ち良かったから…」

「うふふ、有り難う、大好きです…」

「それじゃ、シャワーに行こうか」

「ええ…」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。

身体を乾かした後、真歩子が言った。

「健太郎さん。来週、楽しみにしてくださいね…」

「ああ」

真歩子の言葉に、健太郎は頷き、唇を重ねた。

アパートを出てから、健太郎は真歩子を家まで送る。それから、彼は帰路についた…。

【続く】

## 第50章 クリスマスイブ

23日。この日、健太郎は《土下座》でのアルバイトだったため、真歩子とは会えなかった。但し、イベント終了後に備えて、レストランとホテル等の予約は済ませておいた。

一方の真歩子も卯月町駅前商店街のイベントのため、健太郎とは会えなかった。しかし、帰宅後、健太郎に電話して、イベントの後に会う事になった。

24日、クリスマスイブ。

この日、真歩子は、卯月町駅前商店街のクリスマスのイベントに参加していた。サンタクロースの衣装を身に纏い、花を配るのが彼女の担当である。

又、健太郎の同級生で、現在は大学に進学した結城瑞穂と、音楽大学の学生で《土下座》でアルバイトしている山下美夏もイベントに参加していた。

一方、健太郎はマスターや義弟や稔と共に、《土下座》でのアルバイトである。

イベント終了後。健太郎は真歩子と予約していたレストランで食事をした。その場で、クリスマスプレゼントとして、植物画集、植物写真集、ネックレスを渡した。

その後、健太郎と真歩子は、ホテルで二人だけの時間を過ごしていた。

健太郎は真歩子を正面から抱き締め、服を脱がした後、卯月町商店街のクリスマスイベントで真歩子が着ていたサンタクロースの衣装に着替えてもらった。

「随分大人っぽい下着を着けているね。黒のブラジャーにパンティ、網タイツだなんて…」

「そんな、普通ですよ」

真歩子がそう言った直後。健太郎は彼女のパンティに手を入れ、女性器を直接愛撫した。

「パンティだって、びしょびしょじゃない。染みが出来ているね。」

ピチャピチャ音がしているよ」

一度、パンティから手を出すと、健太郎は真歩子のブラジャーをずらし、乳房を掌で包み込んだ。そして、右の乳首を指で摘まむと、左の乳首を舌先で刺激する。

「真歩子ちゃんの乳首、どんどん硬くなっているよ。こうされるのが、好きなんだね」

「は、恥ずかしいです…」

乳房から手と舌を離すと、今度は指先で、焦らすかの如く真歩子の乳房と乳首を愛撫する。所謂、フェザータッチである。

それから健太郎は、舌と指で真歩子の女性器を愛撫した。そのまま包皮を剥き、クリトリスを刺激する。

「これが、真歩子ちゃんの味…」

「そ、そんな事、い、言わないで…」

「もう、OKだね」

「は、はい。健太郎さんのオチンチンを真歩子のいやらしいオマンコに入れてください」

それから健太郎は、真歩子そのまま正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女の子の大事な部分も、何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シートに淫らな染みを作っ

た。

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大事な部分、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツっちゃう!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイですから…。」

健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

健太郎と真歩子は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「お口でしますから……」

「あ、ああ……。でも、その前に」

「え？」

「その服、脱いじゃおうか」

お掃除フェラの後。健太郎は真歩子のサンタクロースの衣装を脱がした。

「じゃあ、真歩子ちゃん。そろそろ、シャワーに」

「ええ」

真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

ベッドにて。健太郎は真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わり、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん……。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんの太くて硬いオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコにください……」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「ああっ、あんっ、け……健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって……き、気持ちいい……」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ……、私の中、引っ張られてる……」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる……」

そ、そこ、健太郎さん、気持ち良いの……」

健太郎の男性器が、真歩子の腔壁の膨らみを刺激する。

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ……。わ、私、壊れちゃう……。イツちゃう……」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ……。イ、イク。あっ……、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ……!!」

「真歩子ちゃん、出すよ」

「お、お願い…。出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くっっ…」

健太郎は、真歩子の中に、全てをぶちまけた。

「あっ…。あああああーっ!!イ、イクッ、イツちゃう!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も潮を吹いた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

真歩子が笑みを浮かべた。そして続けた。

「私、健太郎さんしか見えないです。幸せです。ずっと一緒にいて下さい」

「僕もだよ。僕も、真歩子ちゃんの事しか見えないよ」

「ありがとうございます。大好きです」

真歩子が答えると同時に、健太郎は彼女を抱き締め、唇を重ねた。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

そう言って健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…。レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ? なんですか?」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そう言って健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。へシックスナインである。



「ええっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めないよ」

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアナルを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こつちも可愛がつてあげるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷつ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああつ、ヤンツ」

尻を振りながら逃げようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?!んっ!!んぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるからね」

5

その後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじゃうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。  
こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツっちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけ反らせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。そして、胸から腹部を撫で、指先に付着した健太郎の白濁をうっとりとした表情で見つめていた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

この後、健太郎は真歩子の中に何度も精液を注ぎ込んだ。  
ひとしきり愛し合った後。体力を使い果たした健太郎と真歩子は、  
全裸でベッドに横たわり、天井を見つめていた。

「最高のクリスマス、有り難うございます」

「礼を言わないといけないのは、僕の方だよ、真歩子ちゃん」

「それは私も同じですよ、健太郎さん。貴方に会えたから  
そう言った直後、二人は白々と唇を重ねていた…。」  
【続く】

## 第51章 初詣の後

27日の土曜日と、28日の日曜日は、年末という事もあり、健太郎と真歩子はアルバイトもあつて会えなかった。

31日、大晦日。健太郎はアルバイト終了後、真歩子に電話をして、初詣の約束をした。

1月1日、木曜日、元日。

健太郎は真歩子の自宅に向かうと、持田家の全員に挨拶した。

それから、健太郎と真歩子は、初詣に《卯月神社》に向かった。参拝後。健太郎が聞いた。

「真歩子ちゃんは、何をお願いしたの？」

「受験の事と、家族の健康、そして、健太郎さんと一緒にいられるように、です」

「なるほど」

「そう言う健太郎さんは、何をお願いしたんですか？」

「僕も同じ。真歩子ちゃんの入試の合格と、家族の健康と父さんの航海安全、そして、真歩子ちゃんと一緒にいられるように」

健太郎がそう言った直後、二人は笑った。

授与所にて。

「ちよつと待つててください」

そう言つて真歩子は列に並んだ。

しばらくして。

「健太郎さん、これ、お揃いのお守りです」

「真歩子ちゃん、有り難う。大事にするよ」

「有り難うございます。私も、これを持って受験に行きますね」

その後健太郎と真歩子は、露店を巡り、買い食いを楽しんだ。その初詣の帰り。健太郎のアパートにて。

健太郎と真歩子は、二人だけの時間を過ごしていた。

健太郎は真歩子を正面から抱き締め、晴れ着をはだけさせた。

「真歩子ちゃん、ノーブラだったんだね」

そう言つて健太郎は、真歩子の乳房を愛撫する。

そして裾を捲り、パンティのクロッチをずらしてから、健太郎は真歩子を正面から貫いた。

真歩子はこの体位の方が、締め付けがキツくなる。

健太郎は、律動を開始する。

「あ…貴方のオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…き、気持ちいい…」

「ほ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、首筋にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。

因みに、陰毛は、健太郎が剃った。今は全く抵抗なく、剃らせてくれる。

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「いつも以上にキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やあん…。は、恥ずかしい。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

彼女の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」  
ついに彼女がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、も  
うダメ…。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健  
太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁーっ!!」

僕達は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は肉棒を引き抜く。

真歩子の女性器から、大量の精液が吐き出された。

「健太郎さん…」

「ん？」

「私、着付け、練習しましたから、大丈夫です」

そう言うと、真歩子は、晴れ着と襦袢を脱ぎ捨てた。

「今日は沢山しましょ。健太郎さんを、感じさせて」

「積極的だね、真歩子ちゃん」

「今年は自分の思いに対して、積極的になりたい、と決めたんです  
そう言うと、真歩子が健太郎に抱き付いた。

「でも、真歩子ちゃん、シャワーに入らなくても良いの？」

「今日は髪の手や髪飾りの事もありますので、大丈夫です」

「本当に!?!」

「たまには、私が…」

いつもならば、セックスの前か間にシャワーを浴びるか風呂に入るが、それ無しで真歩子は健太郎の胸にキスをした。

それから真歩子は、健太郎の男性器に手を伸ばす。

「もうこんなになっっているじゃないですか」

既に健太郎の男性器は、再び限界までそり立っていた。

真歩子は健太郎に跨がると、女性器に男性器を自分から挿入した。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ま、真歩子ちゃんだって。オマンコ、こんなに濡れて」

「クリスマスイブからは、暫くデートしてはなかったから、私、健太郎さんのオチンチンが欲しくて…」

「それで真歩子ちゃん、今日はこんなに積極的に」

「二人でしていたんですよ。その、健太郎さんに優しくされた時の

事や、乱暴にされた時の事を思い出して」

「真歩子ちゃん…」

「エッチな女の子は嫌いですか？」

「そんな事無いよ。お淑やかな真歩子ちゃんも、エッチな真歩子

ちゃんも大好きだよ」

「うふふ」

「うふふ」

そう言ううと真歩子は腰の動きや角度を変える。

「どうですか？」

「凄く良い感じだよ。もう出そうだ」

「健太郎さんのオチンチン、私の中でピクピクして…。イキそうなん

んですね」

「ああ」

「じゃあ出して下さい。私の中を、健太郎さんでいっぱいにして…」

「出すよ、真歩子ちゃん」

そう言っつて健太郎は、真歩子の中に全てをぶちまけた。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんの熱いのでいっぱいになってる…」



「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

健太郎は、仰向けのままで真歩子に言った。

「は、はい」

真歩子の舌尖が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ?なんですか?」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そう言っただけで健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。へシックスサインである。

「ええっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めないよ」

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアンナを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こっちも可愛がってあげるよ」

そう言っただけで健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷっ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩

子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああつ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?んっ!!んぐぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「次はオマンコに入れるけど、もう一度、真歩子ちゃんが上になつて」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!？」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ。積極的になるんでしょ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイ  
イ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を  
貪る。

「イツて、良いの？」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いで  
すから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ、私の中、引つ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…」

こ、壊れちやう…、オマンコが壊れちやう。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再  
度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き  
出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

「まだまだ元気だからね」

そう言って健太郎は真歩子の女性器に（松葉崩し）で挿入した。

真歩子の丸くて大きな尻を撫で回しながら、健太郎は律動する。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、

気持ちいい…!!」

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのおまんこの中、気持ちいい」

健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。彼は、真歩子の乳房

を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「ああつ、む、胸を、そ、そんなに…」

「真歩子ちゃんのオツパイ、たっぷり可愛がってあげるね」

「イ、イヤーン。そ、そんなにきつくオツパイ揉まないで…!!」

そうしているうちに、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、

でもどこか優しく締め付ける。

汗の香りが、部屋の中に充満する。

「ああつ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんのおまんこの中、熱くて、吸い付いて来る。

それに、お尻の穴もヒクヒクしているよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。おまんこが溶けちゃう…。

イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

健太郎は次第に律動のピッチを上げる。

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ

!!」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器

から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「真歩子ちゃんと過ごした、最高の元日、良かったよ」

「私もです…」

この後、真歩子は晴れ着を着た。着付けを学んだ事もあり、見事な所作だった。

そして健太郎は真歩子を自宅に送った…。

【続く】

## 第52章 真歩子が自分で自分に

3日、土曜日。

三箇日はどこも初売りやセールで忙しい。それは卯月町の駅前商店街も例外ではない。

この日、健太郎も真歩子もアルバイトのため、会えなかった。

しかし、アルバイト終了後、健太郎は真歩子に電話を入れ、デートの約束をした。

4日、日曜日。

健太郎と真歩子は、午後から《卯月町立児童公園》に来ていた。

松の内は、どこも混雑すると健太郎が判断した事から、この場所を選んだ。

「葉月学園の卒業テストは、1月28日の水曜日から30日の金曜日までか…」

「はい、そうなんです。12日に始業式があります。健太郎さん」

「そして受験が2月5日、6日、9日」

「ええ」

「じゃあ今月は11日と15日にデート。2月は受験後の11日が最初。卒業テストと受験、頑張つて。応援しているからね。真歩子ちゃん」

「はい、有り難うございます、健太郎さん」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

15時。

「それじゃ、少し早いけど」

健太郎はそう言うと、真歩子と一緒にアパートに向かった。

アパートの健太郎の部屋にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスの始まりである。

健太郎は真歩子の服を脱がし、下着姿にすると、再度抱き締め、唇を重ねる。そして互いに舌を絡め合う。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「じゃあ…」

健太郎は、傍らにあったフェイスタオルを見せた。それは、今日、SMチックなセックスをする日のサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、後ろ手を組んだ。

しかし、健太郎はタオルを使わなかった。傍らにタオルを放った。

「えっ…?」

戸惑う真歩子。

「今日はまだ使わないよ」

そう言うと健太郎は、服を脱ぎ、洗面器と薬品の入っている戸棚からイチジク浣腸を出して、寝室に戻った。

そしてベッドに腰掛けると、真歩子に言った。

「僕のチンポ、舐めて。大きくするんだ」

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。更に玉袋を掌で愛撫する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ? なんですか?」

真歩子が尋ねた。

健太郎は真歩子の顔面にイチジク浣腸を見せた。

「はい…」

真歩子は頷き、フェラチオを止めて尻を突き出そうとしたが、それを健太郎は制するように言った。

「真歩子ちゃん、そうじゃないよ」

「えっ!？」

「真歩子ちゃんがフェラチオをしながら、自分で自分にお浣腸をするんだ」

そう言うと健太郎は、イチジク浣腸の封を切り、真歩子に渡した。

真歩子は舌先と左手で健太郎の男性器を愛撫しながら、右手でイチジク浣腸を尻穴に挿すと、薬液を腸内に注ぎ込んだ。

「んっ、んんっ…」

再度、健太郎は真歩子に男性器を咥えさせる。

数分後。真歩子の表情が歪んだ。排泄欲が疼き始めた。

「どうしたの?」

「お、お腹が、い、痛いです…。苦しい…。出ちゃう。も、漏れちゃう。オナラが、ウンチが…」

「もう少し、我慢出来るかな?」

「もうダメ。辛い!」

「じゃあ、出して良いよ」



「ああっ、出るう」

真歩子が傍らに置いてある洗面器にしゃがんだ直後。彼女のアヌスから飛沫が飛び出した。更に破裂音が響き、刺激臭が漂う。

「アーン、良いの…」

その直後、直腸内の汚物が飛び出した。

「真歩子ちゃんのおナラもウンチも可愛いね」

「は、恥ずかしいです…」

薬液と汚物が排泄された直後。健太郎は、トイレで汚物を処理した。その後、換気扇のスイッチを入れてから、棚からある物を取り出した。

「健太郎さん、それは？」

「アルコールだよ。真歩子ちゃんのお尻の穴を消毒してあげるね」

脱脂綿をアルコールで湿らせてから、真歩子のアナルを拭いた。それから、健太郎は真歩子に尋ねた。

「真歩子ちゃん、お腹の具合は、どうかな？」

「大丈夫です。違和感はありませんし、痛くもないです」

「それじゃ、シャワーに入ろうか」

「ええ」

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

まず健太郎は、真歩子のアナルを洗う。

「まずは、真歩子ちゃんのお尻の穴を洗わないと、ね」

そう言って健太郎は、真歩子の尻を愛撫しながら、アナルをポディーソープで洗う。

「アアーン、気持ちいいの」

「お尻を触られただけで、甘えた声を出すなんて」

そう言って健太郎は、真歩子の尻に平手打ちをする。浴室に乾いた音が響く。

「イヤーツ!!」

「真歩子ちゃんのお尻は、叩き甲斐のあるお尻だからね。丸くて、大きくて、可愛いからね。お尻の穴も可愛いよ」

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言つて真歩子は頬を膨らませた。

真歩子が健太郎の身体を洗つた後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

真歩子は健太郎の男性器を手で包み込むと、少しキツく握つた。

「つつ…、ま、真歩子ちゃん…」

そう言つて健太郎は少し上半身を仰け反らせる。

「さっきのお返しです。この程度で仰け反るなんて、ダメじゃない

ですか。今度は、私が健太郎さんのお尻を叩きますよ」

そう言つて真歩子は笑つた。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗つて。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張つてはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗つてから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻つた二人。

健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして、タオルで真歩子を後ろ手で縛つた。

それから、真歩子のお尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいお尻に入れて下さい」

「ちゃんと言えたね。お尻の穴もヒクヒクしているし、細かい皺も可愛いね。じゃあ、入れるよ」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。オツパイも揉み揉みされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私のお尻が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君のお尻の穴も、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は、真歩子を縛るタオルをほどくと、言った。

「それじゃ、シャワーを浴びるよ」

二人でシャワーを浴びた後。健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして今度は、前側で真歩子の手首をタオルで縛った。

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎は、ピンク色の乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ、シャワーに行きましょうか」

「ああ」

真歩子の言葉に健太郎が頷く。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

身体を乾かし、身支度を整えてから、健太郎と真歩子は、アパートを出た。

健太郎は真歩子を家まで送る。それから、彼は帰路についた…。

【続く】

## 第53章 始業式前日

10日、土曜日。

この日、健太郎は《土下座》でアルバイトである。一方、真歩子は、3日は休みだった生け花の教室を受講してから《カトレア》のアルバイトに出勤した。

その日の夜、健太郎は真歩子の家に電話を入れ、デートの約束をした。

11日、日曜日。午後。

昼食後、健太郎と真歩子は、《卯月町立美術館》でデートをした。美術館にはラウンジもあり、喫茶店も併設されている。又、画集や本も多数あり、ゆったりとした時間を過ごす事が出来る。

健太郎はドミニク・アングルやジャック・ルイ・ダヴィッド、ウジェーヌ・ドラクロワ、後シュールレアリスムの作品が好きで、これらの画集や本を読む事が多い。

一方の真歩子は画集の他、美術史の本を主に読んでいる。又、植物の絵画も好きな作品である。

ラウンジでは、健太郎も真歩子も紅茶をオーダーする。

美術館を出てから、健太郎と真歩子は、彼の住むアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

真歩子が目を閉じた。

健太郎は、真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

合図のための、キス。

一端唇を離すと健太郎は、再度唇を重ねた。

今度は互いに舌を絡める。唇を離すと、二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のポルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

シャワーを浴びた後。

健太郎は、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして正面から抱き付いた。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ。吸い付いてくるみたいだ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな?」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと言ってごらん」

そう言う健太郎は、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、右手の人差し指で、女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ。ここは何て言うのかな?」

「意地悪…、真歩子のオ、オマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの?」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。



淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリつと。たっぷりおツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。真歩子ちゃんの母乳、美味しんだろうね」

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言って健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子を四つん這いにして、再度、男性器を挿入した。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコ。お尻の穴までヒクヒクしてる」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イク、イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を背中から尻にかけてぶちまけた。

真歩子の身体を拭いた後。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

そう言つて健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。更に玉袋も手で愛撫する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなつた。

「真歩子ちゃん」

「えっ？なんですか？」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がつてあげる」

そう言つて健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。へシックスナインである。

「ええっ!？」

戸惑う真歩子。へシックスナインは、真歩子は完全には慣れていない。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めない」と

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のAnalを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こっちも可愛がつてあげるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷっ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のAnalを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああっ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れ

る術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ?!んっ!!んぐぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるからね」

「ええ」

真歩子が頷くと、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてよ」

「ええっ!？」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…」

こ、壊れちゃう…。オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてくださいっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです…」

真歩子は、乳房から腹部を撫でた。そして、自分の指に絡みついた健太郎の白濁を、うっとりとした表情で見つめる。その後真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整えると、二人はアパートを出て、真歩子の家に向かった。

真歩子を家に送ると、健太郎はアパートに戻った。

翌12日、月曜日。

葉月学園では、始業式が行われた。真歩子の卒業までの、最後の学期が始まった…。

【続く】

## 第54章 受験前最後のデート

14日、水曜日。

夕方、健太郎は真歩子に電話を入れ、15日のアルバイト終了後に会う事で合意した。

翌15日、木曜日。この日は、成人の日である。

アルバイト終了後、健太郎は真歩子を《カトレア》に迎えに行き、それからアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている服を脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色だもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。それから、パンティに手を入れ、女性器を愛撫する。健太郎はパンティから手を出すと、真歩子に溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にしたてから、彼女の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやつたんだ…」

「は、恥ずかしいです…。そ、それにお部屋を汚して…」

「ちつとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股と尻を愛撫するだけで、挿入は無しである。ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、

自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。健太郎はベッドに真歩子を仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌尖で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。薄い恥毛に包まれた女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

健太郎は無言で頷くと、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、唇と舌で、真歩子の女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ。ここは何て言うのかな？」

「意地悪…、真歩子のオ、オマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れ



てください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリつと。たつぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。真歩子ちゃんの母乳、美味しんだろっね」

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「いつも以上にキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やあん…。は、恥ずかしい。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

彼女の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…。イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は男性器を引き抜く。

真歩子の女性器から、大量の精液が吐き出された。

「じゃあ、次は。真歩子ちゃん」

「はい」

「オマンコの毛、剃ってあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子の脚を開かせる。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器に

お湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。それから、洗面器のお湯を捨て、中を洗った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな。それに、今回は受験前だから、おまじないになるよね」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…、うつ伏せになつて」

「はい」

言われるまま、うつ伏せになる真歩子。

「もうちよつとお尻を高くしないと…」

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

「じゃあ、お尻の穴も剃るよ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女のアナルに剃刀を当てた。

「ああ…」

「ほらほら、じつとしていないと、切れちやうぞ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫した。真歩子は、次第に落ち着きを取り戻した。

「それじゃ、剃るよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアナルの毛を剃った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は洗面器のお湯を処理し、用具をしまつと、再度真歩子の尻を持ち上げた。

健太郎は真歩子の太股に指を這わせながら言つた。

「次は〈お尻〉だから、念入りに準備するよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言うのと健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

突く度に、真歩子のアナルはすぼまったり広がったりする。

「ああつ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、い…入れて、く、ください。指で、お尻の穴を…」

健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グニグニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「葉月学園3年生の持田真歩子ちゃん。こうしている間にも、僕の指と真歩子ちゃんのエッチなお尻の穴は、しつかりハメハメしているんだよ」

「ああつ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」

そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あっさり絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言うのと健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。

「今度は、お尻の穴を舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、真歩子のアナルに舌を這わせた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子のお尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責め

る。舌先でツンツンと突いた後、舌を密着させ、細かい皺を舐める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちやう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください」

そして、健太郎は真歩子のアナルに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「先輩の、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを挿んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いのでグリグリされて…。オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちやう…。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。貴方を、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふつ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

一段落した二人は、全裸になってベッドの上で抱き合っていた。

「健太郎さんと、離れたくないな…」

真歩子が言った

「気持ちわかるよ…。でも、真歩子ちゃんの受験が終わったら、僕はデートが出来るよ。それに、いつでも電話で話は出来るから」

「そう…。ですね。でも、今日はずっと離れたくない気分なんです…。だから、帰らなきゃならない時間まで、こうしていたい…。健太郎さん…」

「ん？」

「ずっとくっついていても、良いですか？」

「ああ、構わないよ。でも、こうして真歩子ちゃんに抱きつかれていると、また、セックスしたくなっちゃうかもね…」

「え、も、もう！健太郎さんったら…。でも、私もまだ、健太郎さんとエッチしたいかも…」

そう言って真歩子は、健太郎に抱きつくだけでなく、彼の身体に脚を絡めてくるのだった。

【続く】

## 第55章 受験後最初のデート

16日の土曜日から、健太郎は、真歩子が卒業テストや大学受験という事を考慮して、デートを休む事にした。

卒業テスト終了後。31日、土曜日。

この中旬から下旬にかけて、真歩子と健太郎がデートをしていなかった事を、真歩子の両親は気に掛けてはいた。

真歩子の自宅にて。夕食中。

「真歩子」

「何？ママ」

「ここしばらく、健太郎さんには会っていない様だけど…」

「今日は、15日以降は田中君とデートしていないみたいだね」

「パパ、ママ。別に喧嘩したとか、時々距離を置くとかじゃ無いの。テスト期間中という事と、受験があるから、健太郎さんが気を配ってくれたの」

「真歩子、そうなの？」

「はい」

「そうか…。それならば別に良いが、テスト前でも息抜きを兼ねて会うならば構わないぞ。来てもらっても良いからね」

「うん、パパ、有り難う。今、デートしてなくても、健太郎さんはアルバイト先の《カトレア》に来て、話はしているから」

「そう…。なら安心したわ」

真歩子の母が頷いた。

その卒業テスト、真歩子は優秀な成績を修め、受験に向け勢いづけた。

2月5日、6日、9日に真歩子は短期大学を受験した。

9日。全ての受験を終了した真歩子。就寝前。彼女は自分の部屋にて、自慰に耽っていた。

「んっ…、あっ、あっ」

真歩子はセーラー服をたくしあげ、ブラジャーの中に手を滑らせる。そして、乳房を揉みしだく。更に乳首を指先で転がした。

「あつ、け、健太郎先輩…」

そう言つて右手でスカートを捲り、パンティの中に手を入れ、女性器を刺激する。滴った蜜が、指に絡み付く。既にパンティは、真歩子の蜜でビシヨ濡れた。

「あ…、んっ、んんっ…、せ、先輩。あ、あつ、イ、イク…ツ、あ、あああああーっ!!」

真歩子は絶頂に達すると、その身体をのけ反らせた。

10日、火曜日。

健太郎は真歩子に電話を入れ、デートの約束をした。

翌11日、水曜日。この日は、建国記念の日である。

健太郎と真歩子は、午後から《世界一公園》でデートした。

公園のベンチにて。

「そう、三校受けたんだね、真歩子ちゃん」

「はい」

「で、合格発表が3月に入ってから」

「そうなんです、健太郎さん」

「大丈夫だよ、真歩子ちゃん。真歩子ちゃんはやれるだけの事をやっただから」

「有り難うございます」

そう言つて真歩子は頷いた。

15時。

「それじゃ、少し早いけど」

「はい」

そう言つて健太郎は、真歩子と一緒にアパートに向かった。

健太郎のアパート。寝室にて。

健太郎と真歩子は、体を重ねた。言葉ではないコミュニケーション、即ちセックスである。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。最初から互いの舌を絡める。

そのままベッドに倒れ込んだのだが、押し倒したのは真歩子だった。



「ま、真歩子ちゃん!？」

「たまには、私が…」

そう言つて、真歩子は健太郎の服を脱がした。

いつもならば、セックスの前にシャワーを浴びるか風呂に入るが、それ無しで真歩子は健太郎の胸にキスをした。

それから真歩子は、自分の服を脱ぎ捨てた。そして健太郎の男性器に手を伸ばす。

「もうこんなになっているじゃないですか」

既に健太郎の男性器は、限界までそそり立っていた。

真歩子は健太郎に跨がると、女性器に男性器を自分から挿入した。淫らな水音が、部屋に響く。

「ま、真歩子ちゃんだつて。オマンコ、こんなに濡れて」

「バレンタインデーからは、暫くデートしていなかったから、私、健太郎さんのオチンチンが欲しくて…」

「それで真歩子ちゃん、今日はこんなに積極的に」

「二人でしていたんですよ。その、健太郎さんに優しくされた時の事や、乱暴にされた時の事を思い出して」

「真歩子ちゃん…」

「エッチな女の子は嫌いですか？」

「そんな事無いよ。お淑やかな真歩子ちゃんも、エッチな真歩子ちゃんも大好きだよ」

「うふふ」

そう言つと真歩子は腰の動きや角度を変える。

「どうですか？」

「凄く良い感じだよ。もう出そうだ」

「健太郎さんのオチンチン、私の中でピクピクして…。イキそうですね」

「ああ」

「じゃあ出して下さい。私の中を、健太郎さんでいっぱいにして…」

「出すよ、真歩子ちゃん」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に全てをぶちまけた。

「あつ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんの熱いのでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふつ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「じゃあシャワーに行こうか。今度は、僕の番だよ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

浴室にて。

互いの身体を洗った後、先に真歩子が、後から健太郎が頭を洗う。

それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音が、狭い浴室に響く。

「ああっ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです…。お漏らしして…」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

そう言うのと健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。

「じゃあベッドに行こうか」

二人はバスタオルで丹念に身体を拭くと、再度ベッドに入った。

健太郎と真歩子は、互いに唇を重ねる。合図のためのキス。

一度唇を離すと、再度唇を重ねる。今度は舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子の身体に丹念にキスをする。耳朶、首筋、鎖骨、左の乳首。

それと同時に、右の乳首を摘まんで転がす。

「乳首、硬くなっているよ」

「や、やあん」

健太郎は腹部にキスをした後、女性器に舌を這わせた。

真歩子のクリトリスに舌を這わせた後、真歩子の蜜を嚙る。更に指を入れてかき回す。

「健太郎さん、その、舌や指だけじゃなくて、そろそろ」

「僕もそろそろ入れたくなっていたんだ」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと。でないと、お預けだよ」

「は、はい…。健太郎さんのオチンチン、真歩子のエッチなオマンコに入れてください」

「じゃあ入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の女性器に男性器を挿入した。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

彼女の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色をしている。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女の子の大事な部分も、何もかも健太郎の物である。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。健太郎さんの意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太くて硬いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、

も、もうダメ…。ここ、壊れちゃう…。イツちゃう!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願いです…。出して、ください…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…ありがとう…。大好きです」

そう言っつて真歩子は笑みを浮かべた。

しかし、これだけで終わる二人ではなかった。

「真歩子ちゃん。舐めて。綺麗にしてよ」

そう言っつて健太郎は、ベッドに腰掛けた。

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを

増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

「真歩子ちゃん、じゃあご褒美だよ」

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして横倒しにしてから、背中側から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「あぁっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子のオマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のスケベなオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そうやって健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのおまんこ。〈松葉崩し〉、恥ずかしいとか

言つて…。本当は好きなんですよ、真歩子ちゃん」

そう言つて健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「オッパイ、吸いついてくるよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オまんこが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ!!」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。

今度は、健太郎は真歩子の尻を持ち上げた。

健太郎は真歩子の太股に指を這わせながら言った。

「次は〈お尻〉だから、念入りに準備するよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言うのと健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。突く度に、真歩子のアナルはすぼまつたり広がったりする。

「あぁっ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、い…入れて、く、ください。指で、お尻の穴を…」  
健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グングニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「葉月学園3年生の持田真歩子ちゃん。こうしている間にも、僕の指と真歩子ちゃんのエッチなお尻の穴は、しっかりハメハメしているんだよ」

「あぁっ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」  
そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あっさりと絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言うのと健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。

「今度は、お尻の穴を舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、真歩子のアナルに舌を這わせた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子のお尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。舌先でツンツンと突いた後、舌を密着させ、細かい皺を舐める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちゃう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください」

そして、健太郎は真歩子のアナルに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「先輩の、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いのでグリグリされて…。オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッチャう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。貴方を、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけ反らせながら果てた。



「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎が真歩子のアヌスから男性器を引き抜く。真歩子のアヌスから、健太郎の白濁が吐き出された。

「それじゃ、シャワーを浴びようか」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。

二人は身体を丹念に拭いた。

身体を乾かし、身支度を整えてから、二人はアパートを出た。健太郎は真歩子を自宅まで送る。

その道すがら、真歩子が言った。

「バレンタインデー、楽しみにしててくださいね」

「ああ、楽しみにしているよ」

健太郎が答える。

それから、彼は帰路についた…。

【続く】

## 第56章 バレンタインデーにラブホテルで

14日、土曜日。この日は、バレンタインデーである。

健太郎は専門学校でそれなりにチョコレートをもらった。例え義理チョコでも、チョコレートをくれた女子学生には礼儀正しく応対した。

しかし、本命は、真歩子からのチョコレートである。ただ、一方で、真歩子の受験の事もあり、健太郎は14日にはそれほど期待していなかった。

健太郎は《土下座》でのアルバイト終了後、真歩子のアルバイト先である《カトレア》に向かった。しかし、真歩子はいなかった。

「仕方ない。今日は帰ろう…。明日は日曜日だ。明日でも今年は仕方ないからな」

そう言つて健太郎はアパートに向かった。  
その途中。

「健太郎さん」

「えっ!?!ま、真歩子…ちゃん…?」

「良かった…。道を間違えたか、と思つて…」

「真歩子ちゃん、僕、今年は14日にはもらえないかと思つて」

「健太郎さんに当日に渡さない訳ありませんよ。これ、私の気持ちです」

真歩子がそう言つた直後、健太郎は真歩子を抱き締めた。ただ愛を語り合うだけでは足りない事を、健太郎はわかつていた。

そのまま二人は、久しぶりにラブホテルに向かった。そこで二人だけの時間を過ごしていた。

健太郎は真歩子を正面から抱き締め、セーラー服を脱がし、ブラジャーを外した。

そして、彼は部屋に置いてあつたチョコレートソースを、自分の男性器に塗った。

「えっ!?!」

「舐めて。綺麗にしてよ」

「は、はい。なんか、チョコバナナみたい…。噛んでしまいそうです」

そう言いながらも、真歩子は健太郎の男性器に舌を這わせた。舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

真歩子も気分が高まって来たのか、パンティーに手を入れ、女性器を弄り始めた。陰唇や穴、クリトリスを弄っているのがパンティ越しでもはつきりとわかる。

「真歩子ちゃん」

「ん？何ですか？」

「真歩子ちゃんは、結構一人でしているんじゃない？」

「ええ…」

真歩子は頷くと、更に激しく指を動かした。淫らな水音が部屋に響き、多量の蜜が溢れ出す。

「も、もうダメ…。わ、私、イツちやいます…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

健太郎は真歩子に男性器を深く啜えさせた。

「出すからね。全部飲んで」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ん、んぐ、んんんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

それから健太郎は、真歩子を対面座位から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女の子の大事な部分も、何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイよ…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!一緒に、イッてえっ!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁあーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけ反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好き」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

ここで健太郎は、部屋に予め置いてあったチョコレートソースを再度手に取ると、今度は真歩子の乳房に塗り着けた。

「え、ええっ!?!」

「今日はバレンタインデーだからね。このまま行くよ」

このまま健太郎は真歩子の乳房を舐めながら律動を再開。彼は再度中に解き放った…。

「ま、また…。出したの…?」

「ああ」

「うふふっ…。ありがとう、大好きです」

「じゃあ、次は。真歩子ちゃん」

「はい」

「オマンコの毛、剃ってあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子のスカートとパンティを脱がし、彼女の脚を開かせる。

次に健太郎は、浴室で用具を用意する。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は剃刀を確認した。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。タオルで真歩子の女性器を拭いた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は、浴室に行き、洗面器のお湯を捨て、中を洗った。そして、再度お湯を入れた。

「次は…、うつ伏せになつて」

「はい」

言われるまま、うつ伏せになる真歩子。

「もうちよつとお尻を高くしないと…」

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

「じゃあ、お尻の穴も剃るよ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女のアナルに剃刀を当てた。

「ああ…」

「ほらほら、じつとしていないと、切れちゃうぞ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫した。真歩子は、次第に落ち着きを取り戻した。

「それじゃ、剃るよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアナルの毛を剃った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は洗面器のお湯を処理し、用具を戻すと、再度真歩子の尻を持ち上げた。

「次は…」

次に健太郎は、鞆からある物を取り出した。

「健太郎さん、それは…?」

「チョコレート菓子だけど。自分で買ったんだよ」

健太郎が出したのは、棒状のプレッツェルにチョコレートがコーティングされたお菓子だった。

健太郎は箱を開け、袋の封を切った。

「それ、何するんですか?」

「こうするんだよ」

そう言つて健太郎は、袋から取り出したお菓子一本を真歩子のアヌスに宛がい、挿入した。

「イヤ、止めて。抜いて」

「真歩子ちゃん、あんまりお尻を振ると、お菓子が折れちゃうよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫する。

次第に真歩子は落ち着きを取り戻し、大人しくなる。

「ああ…」

「これじゃちよつと物足りないな」

そう言つて健太郎は、更にお菓子を二本挿入した。

「あうっ!!」

「これで良し。まるでウンチしているみたいだね、真歩子ちゃん」

「は、恥ずかしい…」

しばらくすると、真歩子の体温でチョコレートが溶け出した。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎は真歩子のアヌスからお菓子を引き抜く。

「アンツ…」

健太郎はお菓子をティッシュに包み、処分すると、もう一枚のティッシュで真歩子のアヌスを拭く。

「よし。綺麗になった」

そう言つて健太郎は、真歩子にチョコレートが付着したティッシュを見せた。

「真歩子ちゃん、見てごらん。まるでウンチしたみたいだね」

「ヤ、ヤダ…。み、見せないでえっ…!!」

そう言つて真歩子は右手で目を隠した。真歩子には、このジョークがお気に召さなかつたようだ。

「次は…」

健太郎は指にコンドームを被せると、真歩子のアヌスにその指を入れる。

真歩子のアヌスを丹念に愛撫すると同時に、残つたチョコレートを拭く意味もあつた。

指を引き抜くと、健太郎のコンドームには、真歩子のアヌスに僅かに残つたチョコレートが付着していた。

「じゃあ、真歩子ちゃん、シャワーに行こうか」

「ええ」

真歩子が頷く。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗つた後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

健太郎は、真歩子のアナルを確認する意味も兼ねて、丹念に洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股と尻を愛撫するだけで、挿入は無しである。ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗つて。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張つてはいないが、彼は湯船



に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、ベッドに戻った二人。健太郎はベッドに真歩子をあお向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言っただけ健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

健太郎は無言で頷くと、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、右手の人差し指で、女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ」

「は、恥ずかしい…」

「じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください…」

「じゃあ、入れるよ」

そう言っただけ健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせてから、彼女の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにおツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリつと。たっぷりおツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。真歩子ちゃんの母乳、美味しんだろうね」

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いや。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「いつも以上にキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やあん…。は、恥ずかしい。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

彼女の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに彼女がシートを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ。こ、壊れちゃう…。イッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健

太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あつ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は男性器を引き抜く。

真歩子の女性器からは、大量の精液が吐き出された…。

因みに、その日、口内射精も含め三回で終われなかった健太郎は、その後更に真歩子を抱いた。バックの後、正常位で一回、彼女の中で解き放った。最後まで、また二人同時に絶頂に達した…。

ベッドの上。愛し合った後、健太郎と真歩子は横たわり、お互いに向かい合って話をしていた。

「健太郎さん…」

「ん？」

「こんなに激しくエッチしたのって…」

「やはり、受験でしばらく会えなかったのと、今日がバレンタインデーだから、かな。真歩子ちゃん」

「ええ。私もそう思います。健太郎さん」

「それじゃシャワーに行こうか」

「はい」

真歩子が頷いた。

二人はシャワーを浴びた後、真歩子の家に向かった。その道すがら、15日の約束をした。真歩子を自宅まで送ってから、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第57章 バレンタインデーの翌日

15日、日曜日。

バレンタインデーの翌日。

健太郎と真歩子は、午前中に卯月駅で待ち合わせた。

行き先は、霜月町である。但し、目的地は、今回は霜月海岸ではない。

霜月駅で降りた健太郎と真歩子は、その足で霜月町の《霜月港海事博物館》に向かった。

この博物館は、船舶、港湾、漁業に関しての一級の博物館である。併設されている図書館は、船舶、港湾、漁業に関しての一級の図書から子供向けの図鑑や絵本まで揃っている。

博物館を出た健太郎と真歩子は、その足で霜月港の再開発地域のレストランで昼食を摂った。

二人が入ったレストランは、客船のレストランをモチーフにしている。

着席した後、真歩子が言った。

「健太郎さん」

「ん？」

「船がお好きなのは、一昨年から知ってましたけど、こんな博物館があつたなんて……」

「ああ、葉月町の《総合博物館》や、文月町の《町立博物館》も素晴らしいけど、船舶、港湾、漁業についてはこの博物館が一級だからね。それに、じっくり見学したかったから、待ち合わせを午前中にしたんだよ」

「はい。後、久しぶりに海に来る事が出来て、良かったです」

健太郎の言葉に真歩子が笑顔で答えた。

昼食後。健太郎と真歩子は、卯月町に戻った。

卯月駅を出た二人は、健太郎のアパートに向かった。

健太郎のアパート部屋、寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている服を脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳房を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、勃っているよ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティから手を出すと、溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イツちやったんだ。真歩子ちゃんのパンティ、ビシヨビシヨだよ。オマンコも透け透けだね」

「は、恥ずかしい…。健太郎さんのエッチ」

「ちつとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん…」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。健太郎はベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。  
しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。ヒクヒク蠢くアヌスが露になる。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」  
「じゃあ、ご褒美だよ。チンポを入れるよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい…」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。溢れ出した真歩子の蜜が、シートに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「あぁっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシートを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「真歩子ちゃん。チンポを舐めて。綺麗にしてよ」

そう言って健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ? なんですか?」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そう言って健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。へシックスサインである。

「ええっ!」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めないよ」

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアンナを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こっちも可愛がってあげるよ」

そう言って健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷっ、という愛らしい音がした。



健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああつ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?!んっ!!んぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるけど、今度は真歩子ちゃんの上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!?どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!？」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に 言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。」

こ、壊れちやう…、オマンコが壊れちやう。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出してください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふつ…。ありがとう…。大好きです」

そう言いながら真歩子は、自分の胸から腹部を撫で上げ、指に絡みついた健太郎の白濁を眺めていた。そして彼女は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

この時、実は健太郎は限界だった。というのも、前日の真歩子とのセックスで、五回も出したからである。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

健太郎と真歩子は、シャワーで身体を洗った。その後、丹念に身体を拭き、乾かしてから、アパートの部屋を出た。

そして真歩子を自宅に送ると、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第58章 スポーツクラブでデートの後

21日、土曜日。

健太郎は《土下座》でのアルバイト終了後、《カトレア》に行き、真歩子とデートの約束をした。

22日、日曜日。

健太郎と真歩子は、午前中に卯月駅で待ち合わせをして、葉月町に向かった。

今回の行き先は、葉月町のスポーツクラブである。このスポーツクラブは、卯月町や頼津町でも施設を経営しているが、葉月町の施設には屋内テニスコートがあるため、ここでデートする事にした。

健太郎は放課後やアルバイトの無い日に自主トレーニングをしていたが、真歩子は部活卒業後はしばらくテニスをしていなかった。よって、今日のデートは、ハードなトレーニングよりも体を慣らす事と感覚を取り戻す事がメインだった。

又、真歩子は大学に進学してからも、テニスを続けるつもりでいた。まずは、素振り等の基礎的な動きをして体を慣らす。

それから、健太郎が軽めのサーブを打ち、真歩子とラリーをする。

真歩子は、徐々に感覚を取り戻す。

しかし、真歩子に無理な練習をさせる訳にはいかないため、今日はサーブやスマッシュは無しにして、練習を終えた。

スポーツクラブのロビーにて。

「真歩子ちゃん、久しぶりのテニスはどうだったかな」

「楽しかったです、健太郎さん。しばらく体を動かしていなかったですから」

「僕も楽しかったし、二人で練習する事が出来て良かったよ」  
「はい」

スポーツクラブを出た健太郎と真歩子は、葉月駅のレストランで昼食を摂り、卯月町に戻った。その足で、二人は健太郎の住むアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている、葉月学園のジャージの上下を脱がした。更に上半身に着ていた、これまた葉月学園のTシャツを脱がして、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は、私物のジャージの上下、Tシャツ、下着を脱ぎ、全裸になった。

「じゃあ、真歩子ちゃん。テニスウェアに着替えて」

「はい」

健太郎に言われるまま、真歩子はテニスウェアに着替える。

真歩子は、持参したバッグから、まずアンダースコートを取り出し、パンティの上に穿く。それから、ポロシャツとプリーツ入りのミニスカートを着た。

「終わりました、健太郎さん」

「うん。真歩子ちゃんは、先にアンダースコートを穿くんだ」

「もう…、変な所を見ているんですね」

そうやって真歩子は少し頬を膨らませた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そうやって健太郎は、再度真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。そのままベッドに倒れ込む。

テニスウェアのポロシャツとブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首がこんなに勃っているよ。練習のせいかな？それとも生着替え？汗の味もしているね」

「健太郎さん、ダ、ダメです。シ、シャワーに…」

「まだダメだよ。真歩子ちゃんの身体を、たっぷり楽しんでからだよ」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースコートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ベッドから降りて。立って。それからベッドのシートに手をつい

て、お尻を突き出すんだ」

「ええっ？早くシャワーに…」

「まだだよ」

そう言つて健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよね」

「イ、イヤーン」

そう言つて真歩子は、かぶりを振つた。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやうっ」

そう言つて真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言つて真歩子は、再度少し頬を膨らませた。

「じゃあ、シャワーに行こうね」

健太郎は真歩子のテニスウェアを脱がすと、二人で浴室に入った。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗つて。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張つてはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗つてから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

シャワーを浴びた後。健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌尖で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ。乳首、こんなに勃たせて。真歩子ちゃんはオツパイを揉み揉みされるのが、好きなんですよ。気に入っているみたいだね。真歩子ちゃんの母乳、濃くて美味しいんだろうな」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン、イヤーン」

「ほらほら、乳搾り」

「ダメエ、そ、そんなにきつく揉まないで。オツパイが、ちぎれちゃう」

「でも真歩子ちゃんのオツパイ、可愛がりたいな。たまには、洗濯ばさみで乳首を攻めちやおうかな」

「洗濯ばさみはイヤです。健太郎さんの口と手で」

「うん。次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

健太郎は無言で頷くと、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、右手の人差し指で、女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ」

「は、恥ずかしい…」



「じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。正面から貫いた。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

それから健太郎は、健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで…」

「僕は事実を言っただけだよ」

「や、やだ…、は、恥ずかしい…。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優

しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

「ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。」

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃうっ…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

健太郎が頷いた。

「じゃあ…」

そう言っつて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽くのけ反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あっ、今、ピクンっつて…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言うと、真歩子は健太郎の男性器を舌先で刺激した。それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

「うふふ。はい、綺麗になりましたね」

「真歩子ちゃん…。そんなきつくチンポを舐められたら、またすぐに…。それに敏感になっっているのに」

「贅沢言ったらダメですよ、健太郎さん。じゃあ、今度は私が…」

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…。それにさつき出た健太郎さんのが、私の中でグチュグチュしてます…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてよ」

「ええっ!？」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイ  
イ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に 言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を  
貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いで  
すから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…」

こ、壊れちやう…、オマンコが壊れちやう。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてくださ  
いっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再  
度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き  
出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです…」

真歩子は、乳房から腹部を撫でた。そして、自分の指に絡みついた健太郎の白濁を、うっとりとした表情で見つめる。その後真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整えると、二人はアパートを出て、真歩子の家に向かった。

真歩子を家に送ると、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第59章 博物館でデートの後

2月28日、土曜日。

健太郎は《土下座》でのアルバイト終了後、真歩子の自宅に電話を入れ、彼女とデートの約束をした。

3月1日、日曜日。

健太郎と真歩子は、正午過ぎに、葉月町に向かった。

今回は、葉月町の《総合博物館》でのデートである。

実は、健太郎は卯月学園に入学してから一度もこの博物館を見学した事がなかった。

「実は、僕はこの博物館に来た事は一度もなかったんだよ」

「そうだったんですね、健太郎さん」

「それにしても、この博物館の展示物は凄いな。真歩子ちゃん」

「そうですね。私は小学校の時に来た事がありますが、その時以来です」

「そうだったの」

「はい、でもその時は、この新館が出来る前の旧館でしたから」

「そうなんだね。全く知らなかったよ」

健太郎が言った。

博物館を出た後、健太郎と真歩子は葉月駅行きのバスに乗った。

駅のレストラン街で昼食後、健太郎が言った。

「真歩子ちゃん、まだ時間は大丈夫だよ」

「はい」

「じゃあ《葉月ドーム》に行かないか？」

「えっ!?でも、今日はプロ野球のオープン戦はありませんよね」

「うん。でも、《葉月ドーム》に併設されている《日本野球博物館》は、今日やっているから、どうかな」

「はい、行きたいです。健太郎さん」

《日本野球博物館》は、日本の野球殿堂とも呼ばれている施設である。

野球の歴史年表、選手や監督、功労者のレリーフ、様々な用具や写

真の展示コーナーの他、図書館もある。

「《葉月ドーム》には何度も来ましたが、この博物館には初めて来ました」

真歩子が言った。

「僕も初めて来たけど、展示がこんなに充実していたとはね」

「そうですね」

健太郎の言葉に真歩子が答えた。

《葉月ドーム》を出た二人。

「どうだった、《日本野球博物館》は？真歩子ちゃん」

「良かったです。又来たいです」

健太郎の言葉に真歩子は嬉しそうに答えた。

葉月駅で電車に乗った健太郎と真歩子は、卯月駅で下車し、その足で健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている服を脱がし、下着姿にした。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力も

あつて、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色だもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「ほらほら、乳首、立っているよ。ツンツンしちやえ」

「ああつ…、そ、そんな。突かれたら…、摘まんじゃ…、コリコリさ  
れたら…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から  
女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティに手を入れ  
ると、溢れ出した蜜が絡みついた。丹念に愛撫してから、右手を真歩  
子に見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

「イッちやったんだ…。潮まで噴いて…。エッチな女の子だなあ」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん…」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗



うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いな  
がら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、  
自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は  
僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船  
に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックな  
セックスをする、というサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、背中を向け、後ろ手を組んだ。

しかし、健太郎はタオルを使わなかった。傍らにタオルを放った。

「えっ……？」

戸惑う真歩子。

「今日はこつちを使うよ」

そして健太郎は、真歩子の背後に立つと、ある物を取り出した。

そして、真歩子の首にそれをつけた。首輪だった。

「ええっ!?!健太郎さん、それは……」

「そうだよ、首輪だよ。それじゃあ、言う事を聞いて。まず四つん這  
いになるんだ」

「は、はい……」

健太郎の言い付けに従い、四つん這いになる真歩子。

「それじゃ、寝室を出るよ」

「はい……」

真歩子は健太郎の部屋を四つん這いになったまま進む。

「は、恥ずかしいです。こんな格好」

「二人だけだから、恥ずかしい事なんか無いでしょ」

「で、でも。やっぱり四つん這いは…」

真歩子が答えた直後。健太郎は彼女の尻を平手打ちした。

「アンツ!!ぶ、ぶたないてください…」

「じゃあ、『よし』と言うまでこのまま進んで」

「はい」

真歩子は健太郎の言い付けに再度従う。

健太郎と真歩子は、洗面所に来た。

「よし。じゃあ立って。手を洗おうか」

「はい」

ハンドソープで手を洗うと、健太郎と真歩子は部屋に戻った。

健太郎は、真歩子につけた首輪を外した。

そして、健太郎は真歩子をベッドにあお向けにさせた。

「次は」

「はい」

「へオナニー、して見せて」

「はい」

真歩子は言われるまま、自分の女性器を弄り始めた。

「真歩子ちゃん」

「ん？何ですか？」

「真歩子ちゃんは、一人でする事は多いの？」

「ええ」

真歩子は頷くと、更に激しく指を動かした。淫らな水音が部屋に響き、多量の蜜が溢れ出す。

「じゃあ、そろそろ」

健太郎は、真歩子に限界まで勃った男性器を舐めさせた。

真歩子は健太郎の男性器にチロチロと舌を這わせた。それから、啞えた。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

「出すからね。全部飲んで」

健太郎は、彼女の口の中で、全てをぶちまけた。

「ん、んぐ、んんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんの口の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「じゃあ、次は…」

健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。

「はい。今日は？」

「これは、目隠しに使うよ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は、真歩子を立たせてから、タオルで視界を奪う。そして、背後から真歩子の身体を愛撫する。

「今は、何をされているのかな？」

「健太郎さんに、オ、オッパイを揉まれています」

次に健太郎は右手を真歩子の下半身に這わせた。

「今は？」

「健太郎さんの右手が、お尻を触っています。あ、今、オ、オマンコを触っています…」

「じゃあ、そろそろ…、後ろ手に組んで」

「はい」

健太郎は真歩子が後ろ手を組むと、ある物を取り出した。手錠だった。

健太郎は真歩子の目隠しを外した。

「えっ？ 健太郎さん？ 手錠!？」

「うん。今日も手錠が良いかな、って」

金属音が、部屋に響いた。

「じゃあ、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃ってはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。大きくするんだ。もう一度、お口でして」

「はい」

手を使えない状態での、真歩子の舌と唇だけのフェラは、それほど気持ち良くはない。それでも健太郎の男性器は、僅かに蠢いた。

「真歩子ちゃん」

「はい?」

慌てて舌と唇を離す真歩子。

「早く大きくしてくれないから、僕のチンポ、怒っちゃったよ」

「ええっ!?!そんな…」

「じゃあ、お仕置きするけど、どっちか選んで。お口にするか、お尻ペンペンか」

「く、口にします」

「じゃあ、おしゃぶりしてもらおうよ」

健太郎は自分の男性器を軽く手コキして大きくすると、真歩子の頭を軽く押さえつけ、男性器を啜えさせた。

所謂、ヘイラマチオだ。

「んっ、うぐうっ!!」

激しく頭を前後に動かす。

淫らかな音が、部屋に響く。

ヘイラマチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「ほら、出すからな。全部飲んで」

サディステイックになる健太郎。

真歩子の口の中で、再度大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんんーっ」

二人は、同時に絶頂に達した。

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「真歩子ちゃんのお口、気持ち良いからね。じゃあ次は…」

そう言うのと健太郎は、右手人差指をアヌスに、左手人差指を女性器に入れた。

「アアッ!!」

身を仰け反らせる真歩子。

健太郎はアヌスをグニグニと揉みほぐし、指ピストンを女性器にする。

クチュクチュと、淫らな水音が部屋に響く。真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、ベッドのシーツに淫らな染みを作っているが、その染みは大きくなる。健太郎は次第にピッチを上げる。

「き、気持ちいいの…、アソコが、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「イッて良いよ。出してよ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ!!で、出ちやう!!」

健太郎は、女性器に入れた指を引き抜くと同時に真歩子が絶頂に達し、大量の潮を吹いた。

「こんなに出たんだ…」

そう言っつて健太郎は、真歩子のアヌスからも指を引き抜いた。

「じゃあ、舐めてあげるね」

「え、ええ…」

健太郎は、まず真歩子の女性器に舌を這わせた。

それから、アナルを舐めた。真歩子のアナルは、入浴中に洗った事もあつて、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子の尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イッちやう!!」

そう言っつて真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを真歩子のエッチなお尻の穴に、い、入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ハイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。お尻の穴が、イツっちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、良かったです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山山樂しまししょうね」

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は真歩子の尻たぶを掴み、左右に開く。

「いつ見ても、丸くて大きくてスベスベして可愛いお尻だね」

「健太郎さん、お願いです。真歩子のエッチなお尻にお仕置きして下さい…」

「良いの…?」

「はい…。お尻が、ウズウズ、ムズムズするんです…」

「じゃあ、お仕置きだ。お尻ペンペンするよ」

そう言って健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。

「あんっ!!お尻が、痛いです…。健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「健太郎さんの太くて硬いオチンチンを、真歩子のいやらしいオマニコに入れて、ください」

そう言って真歩子は尻を振り、淫らなおねだりをする。

「じゃあ、チンポを入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子の女性器に挿入した。

健太郎は、右手で真歩子の乳房を揉みしだき、左手で彼女の腰、尻、太股を愛撫しながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の首筋、肩口、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、可愛がってあげるね。乳首、こんなに勃たせて」

「ああつ、ダ、ダメです。胸をそんなに…」

「真歩子ちゃんの可愛いオツパイ、たっぷり揉み揉みしてあげるよ。いいサイズだよ」

「ア、アーン、は、恥ずかしい。そ、そんなにきつくオツパイ揉まないで…。オツパイ、ちぎれちゃうっ…!!」

そうしている間にも、真歩子の女性器は、健太郎の男性器を受け入れ、きつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段とキツくなつた。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健

太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

この後、健太郎は、手錠をしたまま真歩子の女性器に騎乗位で一回解き放った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。健太郎は真歩子の手首を拘束している手錠を外した。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々ま



で洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整えると、二人はアパートを出て、真歩子の家に向かった。

真歩子を家に送ると、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第60章 月曜日、午前授業の後

2日、月曜日。

「終わった、終わった」

そう言つて正門を見た健太郎は、セーラー服の少女を見かけた。

「あれは…?」

見慣れた葉月学園の制服。

「健太郎先輩」

「真歩子ちゃん!? どうして、ここに?」

話しをしている間も、専門学校の生徒は二人の事をチラ見せずに行く。

「それにしても、皆私達の事を見て行かないですね」

「ああ。今の時期は、他校の生徒が入学手続きに来るから、スルーするんだよね」

真歩子の言葉に健太郎は苦笑しながら頷いた。

「で、今日は、どうしてここに?」

「今日から葉月学園の3年生は午前授業で、後、今日は〈カトレア〉のアルバイトは休みですので、来てみました」

「そうなんだ」

「ええ…。それで、健太郎さん、今日は?」

「僕は今日は午後から授業はないよ。で、昼食は?」

「昼食は学校の食堂で済ませましたので…」

「よし、それじゃどこか行こうか」

「はい」

真歩子が頷いた。

まず健太郎と真歩子は、商店街をぶらつく。書店で植物の図鑑、生け花やフラワーアレンジメントの本を二人で選ぶ。更に服屋を見たり、ホームセンターやドラッグストアで買い物をした。

その後、二人が向かったのは、カフェだった。その店でドーナツと紅茶をオーダーした。

おおよそ、放課後デートとして考えられる事は楽しんだ。

そして、二人は健太郎のアパートの部屋に向かった。  
健太郎のアパートの部屋、寝室にて。

「真歩子ちゃん…」

そう言うのと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あんっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首がこんなに勃っているよ」

「イヤーン」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言っつて健太郎は、真歩子にフェイスタオルを見せた。それはSMチックなセックスをする、というサインである。

真歩子は心得たかの如く、頷き、一度ベッドから起きると背中を向け、後ろ手を組んだ。

健太郎は真歩子の両手首をタオルで縛った。

「じゃあ、次は」

そう言っつて健太郎は、真歩子のスカートとパンティを一気に剥ぎ取り、下半身を丸出しにした。

それから、健太郎は真歩子をベッドに仰向けに横たえた。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んつ、ふああつ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あつ、や、やんつ」

ツンツンと舌尖ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのオマンコにチンポを入れたくなつていたんだ」

そう言つて健太郎は、真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わり、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、足首を軽く掴んで女性器を外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を正面から貫く。

「け、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…。オマンコが、溶けちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ。イ、イク。あつ、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の乳房から腹部にかけて大量の白濁をぶちまけた。但し、セーラー服に付着はしていなかった。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎は真歩子の上半身を起こし、手首を縛るタオルをほどくと、セーラー服を脱がした。

「じゃあ、真歩子ちゃん。そろそろ、シャワーに」

「ええ…」

真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

シャワーを出した後、健太郎は真歩子を、再度タオルで後ろ手に縛った。

そして健太郎は、真歩子をうつ伏せにさせると、尻たぶを掴み、左右に開く。

「んっ、あつ、そ、そんなに広げないで下さい」

真歩子のアナルが露になる。

「お尻の穴の細かい皺も可愛いなあ」

「ヤ、ヤアン。そんなに見ないで」

「今度は…」

健太郎は、真歩子のアヌスを指で突こうとする。

「ダメです。汚ないです」

「好きな人の体に、汚ない部分はないさ」

「でも…」

「言う事を聞いてくれないの？じゃあ、お仕置きだね」

「はい…、お仕置きして下さい…」

「じゃあ、お仕置きするよ。悪い子には、お尻ペンペンだ」

そう言って健太郎は、真歩子の尻を愛撫する。それから、真歩子の尻を平手打ちした。乾いた音が、部屋に響く。

「あんっ!!」

「ほらほら、真歩子ちゃんの可愛いお尻が、真っ赤に腫れちゃったぞ」

「お尻が、痛いです…。それに、熱いです。お尻に、健太郎さんが欲しいです」

「じゃあ、おねだりしないと」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいお尻に入れて、ください」

「ちゃんと言えたね。でも、まだお預けだよ」

「ええっ!?!」

「ちゃんと態度で示さないよ」

「健太郎さんのエッチ。意地悪…」

「恥ずかしくないで、お尻を振ってごらん」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は再度、尻を振りながら淫らなおねだりをする。

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のスケベなお尻に入れて下さい」

「可愛いね。真歩子ちゃんの大きなお尻。じゃあ、チンポを入れるよ」

「え、ええ…。早く、オチンチンを入れて、ください…」

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。彼女の乳房は、弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

健太郎は、真歩子の背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつ

くす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いいよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子のアナルの締め付けが一段とキツくなつた。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツ！イヤーン！」

「凄いいよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は健太郎さんの太いのでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュされて…。わ、私、も、もうダメ…。オマンコが、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体を仰け反らせながら果てた。

健太郎が男性を引き抜くと、真歩子のアヌスから白濁が吐き出された。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。



「優しい健太郎さんも、乱暴な健太郎さんも大好きです。今日は、沢山楽しみましょうね」

真歩子の言葉に健太郎は頷いた。そして真歩子をベッドから起こすと、タオルをほどいてから、唇を重ねた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒に再度シャワーを浴びた。

シャワーを浴びた後。寝室にて。健太郎は真歩子を再度後ろ手に縛った。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「舐めて。僕のチンポを大きくするんだ」

真歩子は無言で頷き、跪くと、健太郎の男性器に舌をチロチロと這わせた。

健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の舌の感触が、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。手が使えない分、彼女は舌や頭の動かし方を工夫する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

「よし、大きくなったね。ご褒美だ。今度は真歩子ちゃんが上になつて」

「は、はい」

そう言つて健太郎は真歩子を拘束するタオルをほどいた。

そして健太郎は仰向けになった。

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ほ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に 言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。  
こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてくださ  
いっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、三  
度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から嘔き  
出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです…」

真歩子は、乳房から腹部を撫でた。そして、自分の指に絡みついた  
健太郎の白濁を、うっとりとした表情で見つめる。その後真歩子は、  
笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁  
寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々ま  
で洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整  
えると、二人はアパートを出て、真歩子の家に向かった。その道すが  
ら、健太郎と真歩子は翌日の約束をした。

真歩子を家に送ると、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第61章 火曜日、午前授業の後、児童公園で

3日、火曜日。この日は、桃の節句である。

健太郎と真歩子は、卯月駅で待ち合わせをした。

本日は、健太郎、真歩子共に午前授業である。

改札口にて。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん。お待たせしました」

「お疲れ様。で、今日も昼食は…」

「はい。今日も学校の食堂で済ませましたので」

「じゃあ、どこか行こうか」

「ええ」

健太郎と真歩子は、駅から《土下座》に向かった。

《土下座》にて。

健太郎と真歩子は紅茶をオーダーした。

「そう言えば、大学の合格発表、もう少しだね」

「はい、今週末に発表予定です。健太郎さん」

「真歩子ちゃん、吉報を待っているよ」

「はい」

《土下座》を出た健太郎と真歩子は、《カトレア》に向かった。

「えっ!?! 健太郎さん…?」

「今日は桃の節句、雛祭りだから、ね」

そう言っつて健太郎は、真歩子に枝物の桃をプレゼントした。

「有り難うございます、健太郎さん」

《カトレア》を出てから、二人は《卯月町立児童公園》に向かった。

《児童公園》のベンチにて。健太郎が聞いた。

「大学に入ってからでも、テニスは続けるんでしょ?」

「ええ、そのつもりです、健太郎さん。ただ」

「ただ?」

「ただ、大学受験はテニスでの推薦入試はなかったんです」

「そうだったんだね」

「はい」

「でも、真歩子ちゃんならば学力で合格しているよ」

「ありがとうございます」

そう言って真歩子は頷いた。

そうこうしているうちに、辺りは薄暗くなっていた。

「もうこんな時間ですね」

「ああ」

真歩子の言葉に健太郎が頷く。その直後。

「えっ!？」

健太郎は真歩子を抱き寄せると、唇を重ねた。

「んっ…」

唇を離す。合図のための、キス。

「もう…、健太郎さん、強引ですよ」

「真歩子ちゃん、強引なのは、嫌いじゃないでしょ」

「でも、誰かに見られるかも」

「この時間ならば、誰も来ないよ」

「そうかもしれないですけど」

「じゃあ、こっちにおいでよ」

そう言って健太郎は、真歩子を児童公園の公衆トイレの裏に連れ込んだ。

「ここなら、目立たないから」

「もう、健太郎さんのエッチ」

そう言いつつも、真歩子の表情は上気していた。

制服姿の真歩子を屋外で抱く、という事もあつてか、健太郎の男性

器は、限界までそそり立っていた。

健太郎は真歩子を抱き締めると、再度唇を重ねた。

そのまま互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子のセーラー服をたくしあげると、ブラジャーの上から乳房を愛撫する。

そして今度は、ブラジャーの中に手を入れ、直接乳房を愛撫した。

その後、ブラジャーをずらし、乳房を晒す。

「真歩子ちゃんのお尻、もうこんな…。感じてるんだ。表でするのが、気に入ったみたいだね」

「イヤン」

健太郎に言葉責めをされ、真歩子は目を閉じながら頭を振った。

健太郎はその後、真歩子の乳房を揉みしだき、硬くなって勃った左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてきつく吸った。

同時に右の乳首を摘まんで転がす。

更に真歩子の身体の香り、所謂へミルクの様な芳香に加え、真歩子の汗の香りを楽しんだ。

次に、健太郎は、真歩子の制服のスカートに手を伸ばした。

健太郎は、スカートを捲った。

「今日のパンティも、可愛いよね」

それから、健太郎は真歩子の股間を指で撫でた。

「アアツ…。そ、そこは」

指を離すと、今度は、スカートの中に手を入れ、直接股間を愛撫する。

既に、多量の蜜が溢れ出していた。

手を出すと、健太郎は、真歩子の背中側に立ち、後ろから抱き締めた。

そして今度は、後ろからスカートを捲った。

溢れ出した真歩子の蜜が、パンティに染みを作っていた。

健太郎は、真歩子の尻と太腿を撫で回すと、真歩子に、公衆トイレの壁に手を付いて、尻を突き出す様に言った。

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

頃合いを見計らい、健太郎は真歩子のパンティを膝までずらす。

「真歩子ちゃんのお尻、丸くて、プリンプリンして可愛いよね。太腿もムチムチして…」

「ヤ、ヤアン…。は、恥ずかしい」

健太郎の言葉に、真歩子は耳まで赤くした。

健太郎は再度、真歩子の尻たぶを掴み、尻穴を外気に晒してから、舌

先で刺激する。排泄物の臭いは殆んどしない、清楚なアナルだ。

「ダメです、そこは、き、汚いです」

「真歩子ちゃんの身体に、汚い部分はないよ」

「で、でも」

「じゃあ、下半身丸出しで、そこの水飲み場でお尻を洗う？」

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言って真歩子は顔を真っ赤にした。

そして健太郎は、真歩子の制服のスカートを捲り、男性器の先端を当てた。

限界までそり立った健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

しかし健太郎は軽く当てるだけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい。ほ、欲しいです…」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「健太郎さんの意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに入れて、ください…。オチンチンで、イカせてく、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。チンポを入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私のオマンコの奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」  
真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、地面に淫らな染みを作った。  
淫らな水音と、二人の吐息が付近に響く。

汗の香りが、付近に漂う。

「あぁっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大事な部分が、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなかった。イク前兆だ。

ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。オチンチン欲しいです」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ



!!

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。そして、咥えさせた。

「出すよ。全部飲んで」

真歩子が健太郎の男性器を咥え、舌が先端に触れた直後。

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の口の中で、全てをぶちまけた。

「ン。ング。ンーツ」

精液を全て出し切ると、健太郎は、真歩子の口から男性器を引き抜いた。

「健太郎さんのが…沢山…。私の中に」

「真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとうございます…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎と真歩子は、身支度を整えた。

そして、健太郎が聞いた。

「真歩子ちゃん、まだ時間は大丈夫だよね」

「はい。両親には、『授業が終わったら、健太郎さんに会いに行つてから帰る』と話してありますから」

「うん」

健太郎は頷くと、アパートに向かった。

アパートの部屋にて。真歩子は桃を花瓶に入れた。

そして寝室へ。

真歩子が目を閉じた。

健太郎は、真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

合図のための、キス。

一度唇を離し、健太郎は、真歩子と再度唇を重ねた。

今度は互いに舌を絡める。唇を離すと、二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子のあえぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」

「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして正面から抱き付いた。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ。吸い付いてくるよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

「ほらほら、乳搾り。たくさん可愛がつてあげる」

「アーン、ダメ」

真歩子がかぶりを振った。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと行ってごらん」

「イ、イヤ…。意地悪。ま、真歩子のオ、オマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「魅力的な真歩子ちゃんのオツパイ、ほらほら、ツンツンツンツン、つと。次は…、乳首を、摘まんて、ほら、コリコリコリコリ」

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

「じゃあ、そろそろ…」

そう言つて、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子を四つん這いにして、再度、男性器を挿入した。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締めまり」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう…」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イク、イクーツ!! け、健太郎さんも、一緒に、イツてえっ!!」

「くうっ…!!」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を背中から尻にかけてぶちまけた。

真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた後。

健太郎と真歩子は再度身体を重ねた。今度は、松葉崩しで絶頂に達した。

愛し合った後。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整えると、二人はアパートを出て、真歩子の家に向かった。その途中、水曜日の約束をする。

真歩子を家に送り、彼女が中に入るのを確認するしてから、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第62章 水曜日、午前授業の後、アパートの部屋で

4日、水曜日。

健太郎と真歩子は、卯月駅で待ち合わせをした。

本日も、健太郎、真歩子共に午前授業である。

健太郎の通う専門学校は、通常の授業は2月までで、3月からは午前授業となり、その内容は補習がメインとなる。

但し、健太郎は、パソコンが得意だった事もあり、補習を受講する必要はほとんど無く、図書室に入り浸っていた。

改札口にて。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん。お待たせしました」

「お疲れ様。で、今日も昼食は…」

「はい。今日も学校の食堂で済ませましたので」

「じゃあ、どこか行こうか」

「ええ」

今回は、駅前のスポーツ用品店に向かった。

テニスシューズを何種類か見てみたい、という真歩子に健太郎が付き合った。

その後、《土下座》に向かう。

《土下座》では、健太郎はジンジャーエールを、真歩子は紅茶をオーダーした。

《土下座》を出た健太郎と真歩子は、健太郎のアパートに向かった。アパートにて。

健太郎は真歩子に、寝室で待つ様に、と伝えた。

そして、健太郎は和室に荷物を置くと、寝室に向かい、そこで待つ真歩子をベッドに押し倒した。

「ええっ?!健太郎さん、ヤメてえ!!乱暴、イヤです!!」

「だって真歩子ちゃんは、僕の事を押し倒すじゃない。今日は僕が襲っちゃうぞ」

「イヤっ、そ、そんな、いきなりは…」

健太郎は皆まで言わせず、唇を重ねた。そのまま舌を入れる。真歩子も最初は戸惑っていたが、次第に、互いに舌を絡めた。唇を離す。

「もう、健太郎さん、強引ですよね」

「真歩子ちゃんだって」

健太郎はそう言うと、セーラー服をたくしあげ、ブラジャーをずらし、乳房を露にする。そして揉みしだき始めた。木の芽の様な乳首が屹立する。

「もうこんなに乳首を勃たせて…。真歩子ちゃんのオツパイは、こうされるのが、好きなんでしょ」

「イヤン。そ、そんな事」

真歩子は耳まで赤くした。

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、吸い付いてくるみたいだね」

「ああつ、ヤンツ。は、恥ずかしい…」

「真歩子ちゃんのオツパイ、たっぷり可愛がってあげるよ」

そう言つて健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

更に真歩子の身体の香り、所謂へミルクの様な芳香へに加え、真歩子の汗の香りを楽しんだ。

次に、健太郎は、真歩子の制服のスカートに手を伸ばした。

健太郎は、スカートを捲った。

「今日のパンティも、可愛いよね」

それから、健太郎は真歩子の股間を指で撫でた。

「アアツ…。そ、そこは」

指を離すと、今度は、スカートの中に手を入れ、直接股間を愛撫する。

健太郎は真歩子の女性器のクリトリスの包皮を剥き、直接刺激する。

「アーツ、ヒイツ。イイツ。イク、イク、イクーツ!!」  
そう言つて真歩子は絶頂に達し、気を失つた。

健太郎は真歩子の服を脱がした。今回は初めて真歩子を押し倒した事もあり、制服に破れ等が無いか確認し、食卓の椅子に引つ掛けた。そして自分も服を脱ぐと、真歩子に覆い被さつた。

気を失つた真歩子は、夢を見ていた。誰もいない林の中、突然食虫植物ナガバノモウセンゴケの様な触手に襲われ、捕らわれた。もがけばもがくほど、触手は締め付けてくると同時に粘りのある蜜を分泌する。その甘い匂いに真歩子は次第に抵抗出来なくなる。

更に次々と触手が襲つてくる。先端が手の様に枝分かれした触手に服を引き裂かれて全裸にされ、乳房や太股や尻を愛撫される。先端が口の様な触手には乳首を吸われる。そして、先端が男性器の様な触手に、口と女性器と尻の穴を蹂躪される。更に、花粉や蜜を浴びせかけられる。

「これは一体…?なんて気持ちが良いの?夢?現実?」

まさに触手に絶頂にイカされる直前に真歩子が夢から醒め、目を覚ました。その直後だった。真歩子の声が、寝室に響いた。

「ヒイツ!!イヤーン!!」

「お目覚めかな?真歩子ちゃん」

健太郎は真歩子の身体を縛つた訳ではない。

健太郎は真歩子を全裸にした後、脚を180度近く開き、左手で乳房を捏ね回し、女性器をペロペロ舐め、右手で尻たぶを撫で回していた。所謂、〈三所責め〉だった。

「真歩子ちゃんのオマンコ、いつ見ても綺麗だよね。気を失つている間に、お尻の穴の中も見させてもらったよ」

「イヤッ、そんな事…」

そう言つて真歩子は逃れようとしたが、快感には勝てない。

健太郎は真歩子の尻を愛撫する右手を離すと、アヌスに指を入れただ。ヌプツ、という愛らしい音がして、彼の人差し指が飲み込まれる。すぐに彼女の尻の穴は、彼の指を締め付ける。

健太郎は真歩子のアヌスをグニグニと揉みほぐすかの如く愛撫す



る。更に指を折り曲げ、直腸粘膜を刺激する。

健太郎の〈三所責め〉に、真歩子の快感は次第に高まる。

「ああっ、ま、またよ。健太郎さん、イク、イツちやう…!!」

そう言った直後。真歩子のアヌスは健太郎の人差し指を食い締め  
た。健太郎は一気に指を根元まで挿入した。

「ヒイツ!!イヤーツ!!イクーツ!!」

そう言つて真歩子は再度絶頂に達した。

「じゃあ、真歩子ちゃん、チンポを入れるよ」

「は、はい。健太郎さんの大きくて太いオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに入れてください」

「じゃあ入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の女性器に男性器を挿入した。

健太郎は、律動を開始する。

「け…、健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

彼女の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女の子の大事な部分も、何もかも健太郎の物である。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。  
部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツいよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。健太郎さんの意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太くて硬いオチンチンでグリグリされて…、わ、私も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツっちゃう!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願いです…。な、中に出して、く、ください…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で全てを解き放った。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も熱い精の直撃を受け、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…ありがとう…、大好きです」

そう言って真歩子は笑みを浮かべた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。そろそろ、シャワーに」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いな  
がら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、  
自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は  
僕が頭を洗うから」

「ええ…」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船  
に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。互いの舌を絡め  
る。

そのままベッドに倒れ込んだのだが、今度は真歩子が押し倒した。

「ま、真歩子ちゃん!？」

「さっきのお返しです。襲われたんですから、健太郎さんを襲っ  
ちやいます」

そう言って真歩子は健太郎の胸にキスをした。

それから真歩子は、健太郎の男性器に手を伸ばす。

「健太郎さんのオチンチン、もうこんなになっているじゃないです  
か」

既に健太郎の男性器は、限界までそそり立っていた。

真歩子は健太郎に跨がると、女性器に男性器を自分から挿入した。  
淫らな水音が、部屋に響く。

「ま、真歩子ちゃんだって。オマンコ、こんなに濡れて」

「さっきは、健太郎さんにレイプされたみたいだったから、早くお返  
ししたくて…」

「それで真歩子ちゃん、今度はこんなに積極的に」

「エッチな女の子は嫌いですか？」

「そんな事無いよ。お淑やかな真歩子ちゃんも、エッチな真歩子  
ちゃんも大好きだよ」

「うふふ」

そう言うのと真歩子は腰の動きや角度を変える。

「どうですか？」

「凄く良い感じだよ。もう出そうだ」

「健太郎さんのオチンチン、私の中でピクピクして…。イキそうなんですわね」

「ああ」

「じゃあ出して下さい。私の中を、健太郎さんでいっぱいにして…」

「出すよ、真歩子ちゃん」

そう言うって健太郎は、真歩子の中に全てをぶちまけた。

「あつ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんの熱いのでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふつ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた…。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「久しぶりにパイズリしてよ。真歩子ちゃんのオッパイで僕のチンポを挟んで」

健太郎は真歩子に跨がり、勃起した男性器を胸の谷間にあてがった。

真歩子が健太郎の男性器を乳房で挟むと、健太郎は腰を前後させる。

この方法だと、真歩子の体力の消耗は少なくて済む。

「真歩子ちゃんのオッパイの感触、最高だよ」

「なんか変…。健太郎さんに胸を犯されているみたいですよ…」

健太郎の腰の動きが激しくなる。

「くっ…。で、出る」

そう言った直後、健太郎は真歩子の顔面に射精した。

「真歩子ちゃんのお顔、先に拭くから。それからチンポを舐めて。綺麗にして」

「は、はい」

「終わったら、オマンコに入れてあげるからね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は真歩子の顔面をティッシュで拭いた後、お掃除フェラをさせる。

それから、今度はバックで挿入。最後、健太郎は背中から腰にかけて白濁をぶちまけた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。

愛し合った後、言った。

「じゃあ、シャワーを浴びるよ…」

「はい…」

真歩子が頷く。

その後、二人で一緒にシャワーを浴びた。

そして丹念に身体を拭き、服を着ると、二人はアパートを出た。

その道すがら、健太郎は真歩子に木曜日から土曜日までは《土下座》でのアルバイトのシフトが入っている事を話し、日曜日にデートをする事で合意した。

真歩子を自宅まで送り、彼女が玄関を潜るのを見てから、健太郎はアパートに戻った…。

【続く】

## 第63章 3月8日のプレゼント

木曜日から土曜日までは、健太郎は《土下座》でアルバイトのため、真歩子とは会えなかった。

一方、真歩子も土曜日は生け花教室と《カトレア》でのアルバイトだったが、アルバイト終了後、健太郎に電話を入れ、日曜日の日程を確認した。

8日、日曜日。

健太郎は真歩子の自宅を訪問した。

前回のデートの帰り、まず真歩子の自宅で待ち合わせする事で二人は合意していた。

真歩子の自宅にて。健太郎はチャイムを鳴らした。

「ごめんください。こんにちは。田中です」

「あ、田中君。こんにちは」

「健太郎さん、いらっしやい。お待ちしておりました」

真歩子の父と母が出迎えた。

「まずは、上がって」

「はい、お邪魔します」

真歩子の母に促され、健太郎は居間に通された。

「あの、本日、真歩子さんから自宅に来て欲しい、と。お話があるとの事で、伺ったのですが」

「ええ。そうなんです」

健太郎の言葉に真歩子の母が頷く。

「じゃあ、ちよつと待っていてくれるかな」

「はい」

真歩子の父の言葉に、健太郎が頷いた。

「真歩子」

真歩子の母が彼女を呼んだ。

「あ、健太郎先輩、お待たせしてすみません」

そう言って真歩子が居間に来た。

「で、どうして今日は自宅に…」

健太郎がそう言った直後、真歩子が口を開いた。

「健太郎先輩、これを…」

そう言つて真歩子が差し出したのは、三通の封筒だった。

「これつて…、もしかして」

「そう、受けた大学三校の合格通知です」

真歩子が笑みを浮かべた。

「そう、合格、おめでとう。それで今日は自宅に、という事だったんだね」

「はい。有り難うございます、健太郎先輩。先輩のおかげです」

「いや、真歩子さんが頑張ったからだよ」

健太郎が言った。

「という訳で、今日、田中君に来てもらったんだ」

「健太郎さん、有り難うございます。これからもよろしくお願いいたします」

「お願いするのは、僕の方です。今後ともよろしくお願いいたします」

そう言つて健太郎は真歩子の両親に一礼した。

それから、健太郎と真歩子は、外出した。行き先は、卯月町の《世界一公園》である。

公園のベンチにて。

「改めて、合格おめでとう」

「有り難うございます、健太郎さん」

「それで、どの大学に進学するかは、まだ決めていないんだね」

「ええ。今後両親と話すつもりです」

「うん、わかったよ」

それから健太郎と真歩子は、健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている服を脱がし、下着姿にした。

そしてベッドに倒れ込んだ。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの、真歩子ちゃん」

「どの大学に進学しても、私の事を好きでいてくれますか？」

「ああ。真歩子ちゃん以外に考えられないよ」

「健太郎さん、私も健太郎さんの事を好きでいられる自信がありません」

「真歩子ちゃん…」

健太郎が答えると、真歩子から彼に抱き付き、唇を重ねた。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに。乳首も硬くして…」



「イ、イヤ。そんな事…」

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にした。

「健太郎さん」

真歩子が口を開いた。

「ん？」

「そろそろ、シャワーに」

「うん」

健太郎が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日の〈お楽しみ〉は、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

まず健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌尖で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を

愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。薄い陰毛に覆われた女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

健太郎は無言で頷くと、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、舌を這わせ、女性器を舐める。舌を離すと、今度は右手の人差し指で、女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ」

「は、恥ずかしい…」

「じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言っただけで健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。たつぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほらほら、乳搾り」

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「いつも以上にキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やあん…。は、恥ずかしい。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

彼女の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「いつも以上にキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やあん…。は、恥ずかしい。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

彼女の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに彼女がシートを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、も

うダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイツても…イイです…。健

太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、彼女は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「君の中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとうございます…、大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

健太郎は男性器を引き抜く。

真歩子の女性器から、大量の精液が吐き出された。

「じゃあ、次は。真歩子ちゃん」

「はい」

「オマンコの毛、剃ろうか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子の脚を開かせる。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器に

お湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「ええ、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。彼は洗面器を食卓に置いた。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言っつて真歩子は、頬を赤く染めた。

「じゃあ、次は。真歩子ちゃん」

「健太郎さん」

健太郎を制するかの如く、真歩子が言った。

「ん?」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

真歩子の言葉に健太郎が頷く。

真歩子の蜜と健太郎の白濁で潤った彼の男性器に、彼女の舌がチロチロと触れる。

ほどなくして、健太郎の男性器は綺麗になった。

お掃除フェラの後、健太郎が言った。

「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!？」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじゃうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に 言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。

こ、壊れちゃう…。オマンコが壊れちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

互いの身体をバスタオルで丹念に拭き、乾かしてから、二人は身支度を整えた。

それから二人は、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。そして健太郎は帰路についた…。

【続く】

## 第64章 3月9日

9日、月曜日。

健太郎と真歩子は、卯月駅で待ち合わせをした。本日は、健太郎、真歩子共に午前授業である。改札口にて。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん。お待たせしました」

「お疲れ様。で、今日も昼食は…」

「はい。今日は学校の食堂で済ませましたので」

「じゃあ、どこか行こうか」

「ええ」

健太郎と真歩子は、《卯月町立美術館》に向かった。

今月の企画展示は、マウリッツ・エッシャーの作品だった事もあり、美術館に行く事にした。

ラウンジにて。

「エッシャーの作品も、好きなんですネ。健太郎さん」

「うん。小学校の図画・工作の教科書に、エッシャーの『滝』が掲載されていて、それ以来ずっとね」

「そうだったんですね」

「後、来月の企画展示の前売り券も今日買おうと思ってね。来月はシウルレアリスム展だから」

そうやって健太郎は、チケットを二枚買った。

美術館を出た二人は、その足で健太郎のアパートに向かった。アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。



二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。いつ見ても魅力的な、なかなかのサイズのオツパイだね」

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「次は、私が…」

そう言つて真歩子は自分から四つん這いになり、スカートを穿いたままで、尻を健太郎の股間に押し付けた。

「真歩子ちゃん、良いの？」

「えっ？」

「その…、制服着たままで、セックスするなんて」

「構いません。というより、健太郎さんも好きなんじゃないですか？」

「ああ、良いね。たまらないよ」

そう言つて健太郎は、ズボンとトランクスを脱ぎ捨てた。

真歩子の尻の刺激で、健太郎の男性器は限界までそそり立っていた。

そして真歩子のスカートを捲ると、パンティのクロッチに触れた。真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、淫らな染みを作っていた。

健太郎は真歩子のパンティのクロッチを摘まむと、右側にずらす。滴った蜜が、今度はシートに染みを作る。

「じゃあ、チンポを真歩子ちゃんのおまんこに入れるよ」

「は、はい。入れてください。真歩子のエッチなおまんこに、健太郎

のオチンチンを入れてください」

真歩子はそう言つて尻を振り、淫らなおねだりをする。

健太郎は真歩子のパンティのクロツチを掴まんで右側にずらしたまま、男性器を彼女の女性器に挿入した。

「んっ…、健太郎さんの、熱くて、硬いです、ん、んああっ…」

「真歩子ちゃんの中、凄く暖かくてぬるぬるしているよ」

真歩子は健太郎に背中を向けてゆっくりと腰を動かす。この角度だと、健太郎の男性器が真歩子の女性器を出入りしているのがしっかりと見える。

健太郎の男性器が出る度に、真歩子のピンク色をした薄い粘膜が、絡みつくかの様に捲れる。

「くう…、堪らないな」

健太郎が男性器を押し込む度に、真歩子の女性器の隙間から、白く濁った、粘度の高い蜜が染み出す。真歩子が相当感じている事の証だ。

「んっ…、んく…、健太郎さんのオチンチンで、私のお腹の中、一杯になつてる…。あふ…、中でぐりぐりつて擦つてきて、凄く気持ち良い…っ。健太郎さんが私のオマンコを一杯にしているとと思うだけで、凄く興奮しちゃいます…っ」

真歩子は背中をうねらせながら気持ち良さそうに喘ぐ。彼女が仰け反る度に、背中中の溝に汗が流れる。

しなやかな背中中の筋と腰のくびれ、その向こうに見えるなかなかのサイズの乳房。興奮した健太郎は、思わず真歩子の腰を掴み、激しく突き上げる。

「あっ、やっ、んっ、け、健太郎さんっ！あっ、あふっ、急に…っ、んく…っ、激し…っ、んああっ！」

健太郎は激しく突いているが、その割に真歩子は苦しそうにする訳ではなく、艶かしく喘ぐ。

「真歩子ちゃん、こんなに強めに突いているのに、中を擦っているのに気持ち良いんだ」

「は、はいっ…、凄く…んっ、気持ち良…い、んあっ、です…。んっ、

んっ…、あふっ、もつと強くても良い位…んあっ」

真歩子は膣内を締めながらも健太郎のリズムに合わせて彼女自身も腰を動かす。

「くうっ…、うっかりしていたらイカされそうになる位にヤバイ…」  
「ふふっ…、そんなにですか…？嬉しいです…っ。あつ、んっ、んんっ…、イイツ、気持ちイイツ…、はあ、はあ、ふう…ふう、んくうっ！」

真歩子が喘ぐ度、彼女の尻の穴がヒクヒク蠢く。健太郎はその小さなすばまりに指を伸ばした。

「やつ、健太郎さん…っ、そこ違っ、お尻の穴は、ダメえっ！あつ、んんっ！やつ、あつ、ダメですってばあ！いきなりはイヤですっ！」  
「ダメって言う割に、真歩子ちゃん、ここでもしっかり感じているじゃないか」

真歩子は勿論、アナルセックスは何度もしている。実際、尻の穴で絶頂に達してはいる。しかし、いきなり尻穴を弄られる事には抵抗感があるのも確かだ。

実際、健太郎は真歩子の尻の穴の皺を撫でているだけで、指は入れていないのだが、それでも真歩子の感じ方は触っていない時に比べて激しくなっていた。

「あつ、やつ、んんっ、そんなあつ。ダメ、んっ、あふ、声が…出ちゃうっ」

健太郎は単なるセックスをするだけに飽きたらず、真歩子のアヌスを愛撫するのは少々悪い気がするが、これだけ激しく喘ぐのを見てしまった以上は止めるに止められない。

「んっ、んくうっ…、やつ、あふ、私、いきなりお尻の穴を触られて、んあつ、感じちやつてる…っ！あつ、んっ、あつ、ああっ、ダメ、健太郎さん、違うんです、んんっ。違うんですってばあ」

「良いじゃないか、真歩子ちゃん。気持ち良い事、いっぱいしようよ」

健太郎が宥める様に言った。

「正直なところ、真歩子ちゃんがお尻の穴で感じるのも、オマンコが

チンポを啜えて愛液を垂れ流しているのも大して変わらないんだよ。真歩子ちゃんがセックスでいっぱい感じるエロい女の子だって事は変わらないんだよ」

健太郎にそう言われて真歩子は耳まで真っ赤にした。

「あつ、あつ、んんっ、ダメ、ダメ、健太郎さん…私、もうっ…！」  
「真歩子ちゃん、僕ももう…っ、出すよ、真歩子ちゃんの中に、僕の精液、出すよっ」

「出して…っ、健太郎さんのを私の中に全部出してください…っ！健太郎さんのが、んく、欲しい…っ！」

「くうっ、出るっ、真歩子ちゃん！出る…！んんっ！真歩子ちゃん！」

「あつ、ああっ…！健太郎さんの熱いのが、んく、中に…っ！ふああつ、私も、イ、イク…っ！ん、んあああ…っ！」

真歩子は健太郎の男性器を深く啜え込んだまま深く腰を落とし、健太郎の精液を一滴残らず受け止める。

「はあ、はあ…、ふう…、健太郎さん…凄く、んく、気持ち良かったです」

真歩子はあはあと荒い呼吸を整えながら、健太郎の方を見て微笑んだのだった。

「じゃあ、真歩子ちゃんそろそろ、シャワーに」  
「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。互いの舌を絡める。

そして健太郎は、真歩子の身体をベッドに横たえた。

それから正面から抱き付いた。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああっ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ。吸い付いてくるみたいだ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと行ってごらん」

そう言うと健太郎は、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、右手の人差し指で、女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ。ここは何て言うのかな？」

「意地悪…、真歩子のオ、オマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そうやって健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああっ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリつと。たつぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。真歩子ちゃんの母乳、美味しんだろかね」

「あっ…ああっ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そうやって健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして真歩子を横倒しにすると、彼女の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。

所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け。イイツ。最高だ。まさしく名器だよ」

真歩子の丸くて大きな尻を撫で回しながら、健太郎は律動する。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…!!」

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」  
健太郎は、次第に律動のピッチを上げていく。彼は、真歩子の乳房

を包み込み、揉みしだく。そして、指先で乳首を摘まみ、転がす。

「ああつ、む、胸を、そ、そんなに…」

「真歩子ちゃんのオツパイ、可愛がってあげるね。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリコリコリつと。たつぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほらほら、乳搾り。真歩子ちゃんの母乳、美味しんだろうね。ソフトタッチじゃ物足りないよ。オツパイが僕の手に吸い付いてくるよ」

「イ、イヤーン。そ、そんなにきつくオツパイ揉まないで…!!オツパイが、ちぎれちゃう…」

そうしているうちに、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シートに染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああつ…、私の中、引っ張られてる…」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーつ、イ、イヤーツ。イクーツ」

「くうっ」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あつ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふつ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん?」

「横になつてください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

お掃除フェラの後。

「真歩子ちゃんのお掃除フェラ、上手だから、すぐに僕のチンポ、大きくなつたね。じゃあご褒美だよ。オマンコにチンポを入れるよ」

今度は騎乗位で挿入。健太郎は再度中に解き放つた…。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

互いの身体をバスタオルで丹念に拭き、乾かしてから、二人は身支度を整えた。

それから二人は、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。

そして明日の約束をして、健太郎は帰路についた…。

【続く】



第65章 3月10日

10日、火曜日。

健太郎と真歩子は、卯月駅で待ち合わせをした。本日は、健太郎、真歩子共に午前授業である。改札口にて。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん。お待たせしました」

「お疲れ様。で、今日も昼食は…」

「はい。今日は学校の食堂で済ませましたので」

「じゃあ、どこか行こうか」

「ええ」

健太郎と真歩子は、《卯月町立図書館》に向かった。

図書館で健太郎はフクロウの図鑑を見てから、サルトルの『存在と無』を読み、真歩子はマザーグースの詩集を読んだ後、植物の画集を見た。

真歩子が植物の画集を見ていた際の事。僅かに真歩子の表情がハツとなったのを、健太郎は見逃さなかった。しかし、図書館の館内やロビーでは敢えて聞かない事にした。

図書館を出た健太郎と真歩子は、健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。健太郎と真歩子は、二人並んでベッドに腰掛けた。そして、健太郎が口を開いた。

「真歩子ちゃん」

「は…?」

「さつき、図書館で、植物の画集を見ていた時に、ハツとなっていたけど、何かあったの? 《カトレア》の仕事で何かトラブルでもあったとか」

「健太郎さん…」

「話してよ。出来るだけの事はするし、相談にも乗るよ」

「はい」

真歩子が頷いた。そして意を決して、口を開いた。

「先週、この部屋で健太郎さんとセックスした時の事です」

「うん」

「あの日、健太郎さんに押し倒されて…、私、気絶したのを覚えていますか？」

「ああ。覚えているよ」

「私、その時、変な夢を見ていたんです」

「変な…、夢？」

「はい。気を失った私は、夢を見ていたんです。誰もいない林の中、突然食虫植物ナガバノモウセンゴケの様な触手に襲われ、捕まってしまいました。触手は腕と脚に絡み付いて、もがけばもがくほど、触手は締め付けてくると同時に粘りのある蜜を出して…。その甘い匂いに私は次第に抵抗出来なくなりました」

「えっ…」

「更に次々とヌメヌメした触手が襲って来ました。先端が手の様に枝分かれした触手に服を引き裂かれて全裸にされて、その触手はオツパイや太股やお尻を触ったんです。先端が口の様な触手には乳首を吸われて…。そして、先端がオチンチンの様な触手に、口とオマンコとお尻の穴を犯されて…。それだけじゃなく、花からも花粉や蜜を浴びせられて」

「そこまで…？」

「『これは一体…？なんて気持ちが良いの？夢？現実？』と思って、まさに触手に絶頂にイカされる直前に私は夢から醒め、目を覚まししました。その時、健太郎さんに裸にされて、オツパイとオマンコとお尻を触られて、イカされたんです」

「そんな事があったんだね」

「はい…。それで、今日、画集を見ていたら、モウセンゴケの絵が出て来て…」

「真歩子ちゃん…」

「はい…？」

「それで、ハツとなったんだ…」

「ええ…」

「そういう、夢に出てくるといふのは、幾つか原因があるからね。例えば、そういうアニメや映画を見た、とか。或いは、SMの写真集を見たとか。それで夢に出てきたのかな？」

「それは無いです」

「そう…。という事は…」

そう言つて健太郎は真歩子を抱き締めた。

「えっ!？」

「真歩子ちゃんからのサインかな。その夢、怖かつたんでしょ」

「はい…」

「という事は、もうSMチックなエッチは控えて、というサインだと思ふよ」

「健太郎さん…」

「しばらくは様子を見て見るよ。約束する」

そう言つて健太郎は、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

「真歩子ちゃん…、その前に変な夢を見た事はあるの？それから、変な夢を見る事はあるの？」

「それは、全く無いです」

「大丈夫だよ。もう怖くないでしょ」

「ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は再度唇を重ねた。

そのまま二人は倒れ込んだ。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音

を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。そして唇を離すと、摘まんで転がす。

「真歩子ちゃんのオッパイ、乳首がこんなに勃っているよ。いつ見ても魅力的な、なかなかのサイズのオッパイだね」

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

浴室にて。

互いの身体を洗った後、先に真歩子が、後から健太郎が頭を洗う。

それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音が、狭い浴室に響く。

「ああっ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです…。お漏らしして…」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

そう言うと健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。

「じゃあベッドに行こうか」

二人はバスタオルで丹念に身体を拭くと、再度ベッドに入った。

健太郎と真歩子は、互いに唇を重ねる。合図のためのキス。

一度唇を離すと、再度唇を重ねる。今度は舌を絡める。

唇を離すと、健太郎は、真歩子の身体に丹念にキスをする。耳朶、首

筋、鎖骨、左の乳首。

それと同時に、右の乳首を摘まんで転がす。

「乳首、硬くなっているよ」

「や、やあん」

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ。乳首、こんなに勃たせて。真歩子ちゃんはオツパイを揉み揉みされるのが、好きなんですよ。気に入っているみたいだね。真歩子ちゃんの母乳、濃くて美味しいんだろうな」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン、イヤーン」

「ほらほら、乳搾り」

「ダメエ、そ、そんなにきつく揉まないで。オツパイが、ちぎれちゃう」

「でも真歩子ちゃんのオツパイ、可愛がりだな。僕の口と手で」

「はい、健太郎さんの口と手で、してください…」

「じゃあ、乳首を、ツンツンツンツンっ。次はコリコリコリコリ、つと。真歩子ちゃんのオツパイ、ソフトタッチじゃ物足りないよ。たっぷり揉み揉みしてあげるよ」

「アアンツ、ダメ。オツパイ以外も…」

「うん。次は…」

そう言って健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。彼女の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

健太郎は腹部にキスをした後、女性器に舌を這わせた。

真歩子のクリトリスに舌を這わせた後、真歩子の蜜を啜る。更に指を入れてかき回す。

「じゃあ次は…、真歩子ちゃん。僕のチンポ、舐めて」

そう言って健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、はい」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇

で包み込む。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなつた。

「真歩子ちゃん」

「えっ?なんですか?」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がつてあげる」

そう言つて健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌で、太股や尻たぶを手で愛撫し始めた。へシツクスナインである。

「ええっ!?!」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めないよ」

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアナルを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。こつちも可愛がつてあげるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷっ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああっ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ!?!んっ!!んぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に

達した。真歩子は、健太郎の精液を全て嚙下した。

健太郎は、真歩子をベッドに仰向けにさせると、彼女に覆いかぶさった。

「じゃあ、オマンコにチンポを入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息と喘ぎ声が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ。よく締まるオマンコだね」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言っただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」  
ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。オマンコ、こ、壊れちゃう…。イツちゃう、イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。イイツ、イツ、イクっ、イツちゃうっ…!!」

「くっ…」

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせ、潮を噴きながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

愛し合った後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。それから、二人は丹念に身体を拭いた。そして、健太郎は言った。

「ねえ、真歩子ちゃん」

「はい」

「僕はまだ元気だから。見てごらん」

「お、大きい…。もうこんなに…」

そう言うと健太郎は真歩子に、下半身を見る様に促した。健太郎の男性器は、再度フル勃起していた。そして真歩子を再度ベッドに横た



えた。

健太郎は右手で左の乳房を包み込むと同時に、左の乳首に舌を這わせた。舌先で転がした後、唇で包み込み、音を立てて吸う。その間も、右の乳首を摘まんで転がす。

それから、真歩子の女性器を押し広げ、舌と指で愛撫する。

更に陰核を剥き出しにして舌で刺激する。

そして溢れ出した蜜を吸う。

「ねえ…、お願い」

「ん？どうしたの？」

「じ、焦らさないで…。早くしてください」

柔らかさと弾力を併せ持つ乳房も、ピンク色の乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

で、今回も健太郎はちよつと意地悪をする。

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ」

「もう…」

そう言いながら、真歩子は、大事な部分を指で開いた。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。

「健太郎さんが、欲しいの…。早く、オチンチンを真歩子のいやらしいオマンコに入れて…。オチンチンで、イカせてください…」

真歩子は、淫らなおねだりをする。

その直後、彼女は耳まで赤くした。

そして健太郎も、心臓が高鳴った。

健太郎は真歩子の中に、再度、男性器を挿入した。

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でも、どこか温かく、そして優しく締め付ける。

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい締めまりだ。なんてよく締まるオマンコだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」  
健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」  
互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。  
健太郎は更に左の乳首を舌尖で転がした後、甘噛みした。

「け…、健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」  
ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーッ。イツちゃううっ…  
!!わ、私、壊れちゃう…。オマンコ溶けちゃう。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。健太郎さんも、一緒にイツてえっ…!!」

「分かった。真歩子ちゃん、イクよ」

「全部、出して…」

「くうっ…」

「あっ…、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。真歩子も、熱い精を浴び、身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがたくさん…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。その間、彼女は乳房から腹を撫で、指に絡みついた彼の白濁を見つめていた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。

そして言った。

「じゃあ、もう一度シャワーを浴びるよ」

「はい」

それから二人は、再度シャワーを浴び、身体を乾かしてから、アパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。その道すがら、健太郎は水曜日の約束をする。

真歩子が自宅の玄関を潜るのを確認してから、健太郎は帰路についてた…。

【続く】

## 第66章 3月11日

11日、水曜日。

健太郎と真歩子は、卯月駅で待ち合わせをした。本日も、健太郎、真歩子共に午前授業である。改札口にて。

「真歩子ちゃん」

「あ、健太郎さん。お待たせしました」

「お疲れ様。で、今日も昼食は…」

「はい。今日は学校の食堂で済ませましたので」

「じゃあ、どこか行こうか」

「ええ」

真歩子が頷く。

健太郎と真歩子は、《世界一公園》に向かった。

健太郎と真歩子は、公園でゆったりとした時間を過ごした。

公園を出てから、二人は今日も健太郎が住むアパートに向かった。寝室にて。

「真歩子ちゃん…」

そう言うのと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ?う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は一度真歩子から離れた。そして言った。

「真歩子ちゃん…、お願いがあるんだけど…」

「何ですか?」

「オッパイ、見せて」

「えっ!?!いつも、脱がして、オッパイ見ているじゃないですか」

「いや、そうじゃなくて、真歩子ちゃんが自分でセーラー服とブラ

ジャーをたくしあげる事って、出来ないかな」

「健太郎さん…」

「乱暴な事はしないから。ダメかな」

「良いですよ。健太郎さんの頼みですから」

そう言うのと真歩子は、まずはセーラー服をたくしあげ、ブラジャーをずらし、乳房を晒した。

「真歩子ちゃんのオツパイ、いつ見ても可愛いね」

しばらく健太郎は、真歩子の乳房を視姦した。そして言った。

「じゃあ、一度元に戻して」

「はい」

真歩子は頷き、健太郎に言われるまま、ブラジャーとセーラー服を元に戻した。

「次は…、スカートを捲って。パンティを見せて」

「はい」

真歩子は健太郎の言い付けに従い、スカートを捲り、パンティを彼に見せた。

「可愛いね。やはり真歩子ちゃんには、清楚な下着が似合うと思うよ」

「もう…」

健太郎の言葉責めと視姦に、真歩子は耳まで赤くした。更に、女性器から溢れた蜜が、パンティのクロッチに染みを作った。

「じゃあ真歩子ちゃん。スカートを元に戻して良いよ」

「はい」

そう言つて真歩子は、制服のスカートから手を離れた。

「でも、どうしたんですか？今日は、いつもとは違いますけど」

真歩子が聞いた。

「いや、こういうのも良いかなって思ったんだ。それに、どこか学校の中でしている感じがしたくてね」

「それで…」

「もしかして、真歩子ちゃん、嫌だったの？」

「そんな事は無いですよ。私も、以前机に向かっていた時に、制服の

上からオツパイ揉まれて、その時、どこか学校の中でエツチな事をしている気になりましたから……。何か、その、かえって新鮮でした」

「そう、良かった。それじゃシャワーに行こうか」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。互いの舌を絡める。

「じゃあ、次は。真歩子ちゃん」

「はい」

「オマンコの毛、剃ってあげようか」

「はい。お願いします」

真歩子が頷く。

まず、健太郎は、真歩子の脚を開かせる。

次に健太郎は、棚から道具一式を出した。

洗面器、剃刀、シェービングフォーム、タオル。健太郎は洗面器にお湯を入れた。

まずタオルを温めると、女性器に当てる。しばしの間蒸すと、丹念に拭く。

次にシェービングフォームを塗る。真歩子の股間は、白い泡まみれになった。

健太郎は真歩子の剃刀を確認した。女性用の剃刀である。

「じゃあ、剃るよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の陰毛を剃り始めた。

陰毛を剃る音が、部屋に響く。

ある程度剃ると、剃刀をお湯で洗う。

暫くすると、真歩子の陰毛は全てなくなっていた。健太郎は、タオルで真歩子の女性器を拭いた。それから、洗面器のお湯を捨て、中を洗った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言って真歩子は、頬を赤く染めた。

「次は…、うつ伏せになって」

「はい」

言われるまま、うつ伏せになる真歩子。

「もうちよつとお尻を高くしないと…」

健太郎の意地悪な言い付けに、真歩子はただ従う。

「じゃあ、お尻の穴も剃るよ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女のアナルに剃刀を当てた。

「ああ…」

「ほらほら、じっとしてないと、切れちやうぞ」

そう言って健太郎は、真歩子の尻を優しく愛撫した。真歩子は、次第に落ち着きを取り戻した。

「それじゃ、剃るよ」

そう言っていると健太郎は、真歩子のアナルの毛を剃った。

「剃り終わったよ、真歩子ちゃん。これでよし。やっぱり女の子は、

パイパンがイイな」

「もう…、健太郎さんのエッチ…」

そう言つて真歩子は、頬を赤く染めた。

健太郎は洗面器のお湯を処理し、用具をしまうと、再度真歩子の尻を持ち上げた。

健太郎は真歩子の太股に指を這わせながら言つた。

「今日は先に〈お尻〉だから、念入りに準備するよ」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言つと健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

突く度に、真歩子のアナルはすぼまつたり広がったりする。

「ああつ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、い…入れて、く、ください。指で、お尻の穴を…」

健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グニグニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「葉月学園3年生の持田真歩子ちゃん。こうしている間にも、僕の指と真歩子ちゃんのエッチなお尻の穴は、しっかりハメハメしているんだよ」

「ああつ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」

そう言つた直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あつさりと絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言つと健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。



「今度は、お尻の穴を舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、真歩子のアナルに舌を這わせた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子のお尻を撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。舌先でツンツンと突いた後、舌を密着させ、細かい皺を舐める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちやう!!」

そう言って真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください」

そして、健太郎は真歩子のアナルに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。更に、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを掴んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイッ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オッパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いのでグリグリされて…。オマンコはクチュクチュされて…。オッパイは揉み揉みされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちやう…。お尻でイツちやう…。イ、イク…!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…。あああああぁーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ真歩子ちゃん、シャワーに行こうか」

「はい」

真歩子が頷く。そして二人はシャワーを浴びた。

シャワーを浴び、丹念に身体を拭いた後。

健太郎と真歩子は、再度身体を重ねた。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに横たえた。

まずは真歩子を仰向けにさせる。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、

右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首

筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そうやって健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、〈マングリ返し〉である。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」  
だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んっ、ふああつ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ、次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あつ、や、やんっ」

ツンツンと舌尖ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのおまんこにチンポを入れたくなつていたんだ」

健太郎はそう言つた後、真歩子の身体を左側に横倒しにした。

そして背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああつ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくつて、温かくつて、弾力もあつ

て、形も良くって、最高だよ。ソフトタッチじゃ物足りない、と」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリコリコリつと。たっぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。真歩子ちゃんの母乳、美味しんだらうね」

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「真歩子のオマンコ」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のオマンコに、入れてください」

「じゃあ、入れるよ」

そう言って健太郎は、真歩子の中に挿入した。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああつ…、入って来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。

そして今度は正常位で挿入した。

「健太郎さんが、は、入つて来る…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのオマンコの締め付け。イイツ。最高だ。

まさしく名器だよ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーン。イクーツ」

「くうっ」

真歩子が絶頂に達し、潮を嘔くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。真歩子は乳房から腹部を撫で、指に絡み付いた白濁をうっとりとした表情で見つめた。

健太郎は真歩子の身体をティッシュで丁寧に拭いた。それから、健太郎が尋ねた。

「まだ、時間は大丈夫だよね」

「ええ」

真歩子が頷く。

「じゃあ…、跪け」

「はい」

真歩子の眼前には、健太郎の男性器。だが、勃つてはいない。射精した事もあるが、健太郎は一時的に無念無想になったため、男性器を萎ませていた。

「舐めて。お掃除と同時に大きくするんだ」

「はい」

そう言つて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかつた。  
「あつ、今、ピクンって…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言うのと、真歩子は健太郎の男性器をチロチロと舌尖で刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌尖を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、部屋に響く。

真歩子のフェラチオに、健太郎の男性器は激しく蠢く。

すぐに健太郎の射精感が高まる。

「真歩子ちゃん、出すからね。全部飲んで」

健太郎はそう言って、真歩子の口の中で大量の精液を放った。

「ん、んぐ、んんんーっ」

真歩子は、健太郎の精液を全て飲み込んだ。

「健太郎さんの、いっぱい出て…」

「じゃあ次は…」

「はい」

真歩子が頷くと、健太郎は真歩子に跨がる様に言ってから男性器を挿入した。所謂、対面座位である。

対面座位か後背座位は、お風呂でエッチする時に多いが、時々ベッドや椅子でする事がある。健太郎は真歩子を抱き締めると、最奥を突く。

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤァン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の右の乳房を愛撫し、左の乳首を指先で転がす。

「真歩子ちゃんのオッパイ、揺れているよ」

「あ…健太郎さんが、は、入って来る。私の中、健太郎さんのオチンチンでいっぱいになってる…」

「す、凄いよ…。真歩子ちゃんの中、吸い付いて来る。イイツ。いい

締めりだ。最高だよ」

「あ、あんっ。健太郎さんに私の中、引っ張られてる…」

健太郎は律動を続けながら、唇を重ねる。

「んっ…」

互いに舌を絡める。

唇を離す。二人の間には、淫らな銀色の糸が引かれていた。

健太郎は更に左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みした。

「健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、律動のピッチを上げていく。

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

「健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の手の指先が、健太郎の肩を掴んだ。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。オ、オマンコが、溶けちゃ

う！イク、イク、イク、イツちゃう…!!」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今度は、中に…。健太郎さんを、感じさ

せてえっ…!!」

「な、中!？」

「今日は、大丈夫ですから…」

「分かった。真歩子ちゃんの中に、全部出すからね」

「全部、出して、く、くださいっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。真歩子も、熱い精の直撃を受け、身体を仰げ反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、有り難う…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「真歩子ちゃん、このまま続けるよ」

「は、はい」

健太郎はそのまま仰向けになると、抜かずに律動を開始した。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もっと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

そして健太郎は真歩子の中に、全てを解き放った。

「ま…。また、健太郎さん…。だ、出したんですね…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。有り難う…。大好きです」

真歩子が満足そうに頷く。

今度は、健太郎が言った。

「じゃあ、シャワーを浴びるよ」

「はい」

その後、二人で一緒にシャワーを浴びた。

服を着て、身支度を整えると、健太郎と真歩子はアパートを出た。

健太郎は真歩子を自宅まで送る。その道すがら、健太郎が言った。

「真歩子ちゃん。ホワイトデー、楽しみにしてて」

「はい、楽しみにしてます。健太郎さん」

そして真歩子の自宅にて。彼女が玄関を潜るのを見てから、健太郎はアパートに向かった…。

【続く】



## 第67章 14日、ホワイトデー

14日、土曜日。この日はホワイトデーである。

健太郎は専門学校でバレンタインデーのお返しを全員にした。

その後、《土下座》でアルバイト。水曜日に真歩子と約束をしており、アルバイト終了後に《カトレア》で落ち合う事になっていた。

健太郎はアルバイト終了後、《カトレア》に真歩子を迎えに行った。

丁度真歩子も、シフトを終了したところだった。

「あ、健太郎さん。こんばんは」

「お疲れ様、真歩子ちゃん。これ、ホワイトデーのお返しだよ」

そう言って健太郎は真歩子にクッキーの詰め合わせを渡した。

「有り難うございます、健太郎さん」

「それじゃ行こうか」

「はい」

真歩子が頷く。健太郎と真歩子は、アパートに向かった。

アパートの寝室にて。

「真歩子ちゃん…」

そう言っていると健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに

舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎はセーラー服の前をたくし上げ、ブラジャーをずらすと、真

歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

更に健太郎は、乳房を揉みしだき、右の乳首を舌尖で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。いつ見ても魅力的な、なかなかのサイズのオツパイだね」

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

「次は…」

健太郎は、真歩子の制服のスカートを脱がした。

「今日のブラジャーとパンティは、白か…。やはり真歩子ちゃんには、清楚な下着が似合うよね」

そう言っつて健太郎は、真歩子のパンティも脱がした。

「真歩子ちゃんの下半身が丸出しだよ」

「アアツ、ヤンツ」

真歩子は、耳まで赤くした。

健太郎は、真歩子の背後に立つと、まずは乳房を愛撫する。それから、腹部、腰、尻たぶを愛撫すると、健太郎は徐にしゃがみ、女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いっつ見ても魅力的だよね」

「イ、イヤーン」

そう言っつて真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れ、掻き回すかの如く愛撫する。真歩子は、健太郎の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちゃう」

そう言って真歩子は、潮を噴き、絶頂に達した。

「ご、ごめんなさい。お、お部屋を汚して…」

「良いんだよ、真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

「健太郎さん…、もつとイカせて…」

そう言って淫らなおねだりをする真歩子。

「じゃあ、そろそろ、シャワーを浴びようか、真歩子ちゃん」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

健太郎は真歩子のセーラー服を脱がし、ブラジャーを外し、靴下も脱がして、全裸にした。そして健太郎も服を脱いだ。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音が、狭い浴室に響く。

「ああっ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです…。お漏らしして…」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

そう言うのと健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。

「じゃあベッドに行こうか」

二人はバスタオルで身体を丹念に拭いてから、脱衣場を出た。

裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。互いの舌を絡める。

健太郎はベッドに真歩子をあお向けにさせた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朵、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「次は…」

そう言うつて健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んつ、ふああつ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あつ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのオマンコにチンポを入れたくなつていたんだ」

そう言つて健太郎は、ベッドに真歩子をうつ伏せにさせた。

そして健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。

その代わりに、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。

健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「け…、健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付

ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…、あああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

シャワーを出た健太郎は、再度真歩子の身体を横たえた。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「パイズリしてよ。真歩子ちゃんのオツパイで僕のチンポを挟んで」

健太郎は真歩子に跨がり、勃起した男性器を胸の谷間にあてがった。

真歩子が健太郎の男性器を乳房で挟むと、健太郎は腰を前後させる。この方法だと、真歩子の体力の消耗は少なくて済む。

「真歩子ちゃんのオツパイの感触、最高だよ」

「なんか変…。健太郎さんに胸を犯されているみたいですよ…」

健太郎の腰の動きが激しくなる。

「くっ…。で、出る」

そう言った直後、健太郎は真歩子の顔面に射精した。

「真歩子ちゃんの顔、先に拭くから。それからチンポを舐めて。綺麗にして」

「は、はい」

「終わったら、オマンコに入れてあげるね」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

健太郎は真歩子の顔面をティッシュで拭いた後、お掃除フェラをさせる。

それから健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、おへそも、ウエストも、お尻も、女性器も、今や

何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただけだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの大事な部分が、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコがイッちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日も中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

お掃除フェラの後、健太郎が言った。



「今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

「ほ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、何もかも健太郎の物だ。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?!どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、チンポ、萎んじやうよ」

「も、もう…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!!イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を

貪る。

「イツて、良い？良いの？」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いから」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。君の中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。」

こ、壊れちゃう…、オマンコが壊れちゃう。イツちやう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。出して…。今度も中に、中にください…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、再度全てを解き放った。

「あっ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、貴方でいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。シャワーを浴びるよ」

「はい」

真歩子が頷く。

その後、二人で一緒にシャワーを浴びた。

そして服を着てから、健太郎が言った。

「真歩子ちゃんは、もう少して卒業か…。葉月学園の制服やジャージやTシャツやブルマ、テニスウェアを脱がす事が出来るのも、後僅

かか…」

「そんな事ないですよ。葉月学園の制服は、健太郎さんに差し上げますから。大学進学した後、制服でセックスするのって、新鮮だと思いませんか？」

そう言つて真歩子は、健太郎の頬にキスをした。

健太郎と真歩子は、アパートを出て、真歩子の自宅に向かった。健太郎は真歩子を自宅まで送る。

その道すがら、健太郎が言った。

「明日はホワイトデーの延長戦だからね」

その言葉に真歩子は頷いた。

【続く】

## 第68章 15日、ホワイトデーの延長戦

15日、日曜日。

健太郎は真歩子とホワイトデーの延長戦というべきデートに誘った。但し、プラン自体は12日から考えてはいた。

健太郎は昨年同様、卯月町のプレイガイドで、《葉月ドーム》で開催されるオープン戦のチケットを2枚買った。

葉月駅のレストラン街での昼食後。二人は《葉月ドーム》に向かった。

《葉月ドーム》のグッズショップにて。

「真歩子ちゃんは、これが似合うと思うんだけどね」

健太郎が選んだのは、真歩子がファンの東京キャピタルズのレプリカユニフォームだった。

但し、昨年、健太郎がプレゼントした物とは異なる。2月に、東京キャピタルズは、ホームとロード以外にオルタネイトを2種類、言わば第3、第4のユニホームを使用する事を発表した。デザインは、ホーム、ロード共に、左胸にTとCを組み合わせたマーク、右腹に番号が入っている。違いは色のみであり、ホームは白、ビジターは青である。

「これ、少し遅いけど、ホワイトデーのお返しだよ」

「あ、有り難うございます」

それから試合を観戦した。対戦カードは、東京キャピタルズ対福岡ツインズである。福岡ツインズは、ロード用ユニホームは緑色に白で“FUKUOKA”と書かれている。

健太郎がゲットしたのは、葉月ドームのバックネット裏の席である。公式戦ならばプラチナチケットだが、オープン戦なので比較的安価で購入出来た。

因みにプロ野球のオープン戦は、コーンリーグとポテトリーグに分かれて開催される。

キャンプは、コーンリーグは四国、ポテトリーグは九州・沖縄で開催するが、オープン戦は、当初は四国と九州・沖縄で開幕し、3月中

旬からは各地で開催する。

オープン戦と言えど、東京キャピタルズのホームゲームとなると、試合の盛り上がりは公式戦と同レベルである。

そして真歩子のノリも半端ではなかったが、ここは健太郎もノリに合わせた。

試合は拮抗し、9回規定により4対4で引き分けた。

試合終了後、健太郎と真歩子は、卯月町の健太郎のアパートに向かった。

アパートの部屋にて。

「じゃあ、健太郎さん」

そう言って真歩子は、レプリカユニフォームに着替えた。

「いいの？真歩子ちゃん」

「ええ…」

真歩子が頷くのと同時に、健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、服を脱がした。

そして、下着姿の真歩子を、ベッドに横たえた。

「随分派手な下着だね」

「そんな、普通ですよ」

真歩子が着けていた下着は、桃色で、全体にハートが描かれている物だった。

「学校にそんなのは良いの？僕ならば没収かな？真歩子ちゃんには清楚な下着が似合うと思うんだけどね」

そう言いながらも、健太郎の身体は、既に熱くなっていた。

〈お楽しみ〉の、始まりである。

真歩子は健太郎に抱き付くと、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は真歩子のブラジャーを外すと、乳房を露にした。

「真歩子ちゃんのオッパイ、柔らかくって、形も良くって、弾力もあって、最高だよ。乳首も綺麗なピンク色なもの」

それから乳房を揉みしだき、左の乳首を舌先で転がした後、甘噛みしてからきつく吸う。

その間に右の乳首を指先で摘まんで転がす。

「乳首、立っているよ。たっぷり可愛がってあげるね、真歩子ちゃんのオッパイ」

「ああっ…、そ、そんな。摘まんじゃ…」

そして背中に回した右手でお尻を撫で回した後、クロツチの上から女性器を愛撫する。

既に真歩子の女性器は、湿り気を帯びていた。パンティから手を出すと、溢れ出した蜜が絡みついた右手を見せる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もうこんなに…。ビショビショだね」

「イ、イヤ。そんな事…」

「だって、ほら。名器の持ち主だからね」

健太郎は真歩子の女性器に指を入れた。

そして、所謂Gスポットを刺激する。

淫らな水音が、部屋に響く。

「ダ、ダメエ…」

軽い絶頂に達する真歩子。同時に彼女は潮を噴いた。

その後、健太郎は真歩子のパンティを脱がし、全裸にして、それから真歩子をうつつ伏せにさせた。

健太郎は真歩子の女性器に男性器を軽く当てた。

しかし、挿入はしない。  
その代わり、お尻を愛撫する。

尻たぶを掌で撫で回した後は、軽く掴んでアナルを外気に晒す。  
健太郎の愛撫に焦らされた真歩子は、淫らなおねだりをする。

「健太郎さん…。じ、焦らさないで、は、早くください。健太郎さんの太くて熱いオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに…」

「じゃあ、ご褒美だよ」

健太郎は真歩子の女性器を後ろから貫く。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんの中、気持ちいい」

真歩子の大事な部分は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

溢れ出した真歩子の蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

淫らな水音と、二人の吐息が部屋の中に響く。

汗の香りが、部屋の中に充満している。

「あぁっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いや。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる。最高だよ」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、中でビクビクして、暴れてる…」

真歩子がシーツを掴むと同時に、彼女の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あっ…、あああああーっ  
!!」

真歩子が絶頂に達した。

「くうっ…!!」

健太郎も絶頂に達すると、男性器を引き抜き、真歩子の背中から尻

にかけて大量の白濁をぶちまけた。

健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。

浴室にて。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音と喘ぎ声が、狭い浴室に響く。

「ああっ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです……。お漏らしして……」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」



そう言うと健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。「じゃあベッドに行こうか」

二人はバスタオルで身体を丹念に拭いてから、脱衣場を出た。裸のまま、健太郎の寝室に戻った二人。

健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、唇を重ねた。互いの舌を絡める。

唇を離すと、健太郎が言った。

「じゃあ、真歩子ちゃん。舐めて。大きくしてよ」

そうやって健太郎は、ベッドに仰向けになった。

「は、は、は」

真歩子の舌先が、チロチロと触れ、健太郎の男性器は次第に硬さを増す。更に彼女の指と掌の柔らかさが、健太郎を刺激する。そして唇で包み込む。

「はむっ…、レロツ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らかな音が、部屋に響く。

健太郎の男性器は、再度大きく、硬くなっていく。

ここで健太郎は、ある事をしたくなった。

「真歩子ちゃん」

「えっ？なんですか？」

「僕だけが気持ち良くなるのもなんだから、僕も真歩子ちゃんを気持ち良くさせるよ。真歩子ちゃんのオマンコ、可愛がってあげる」

そうやって健太郎は、身体の向きを変え、真歩子の女性器を舌と指で愛撫し始めた。へシックスサインである。

「ええっ!？」

戸惑う真歩子。

「ダメだよ、真歩子ちゃん。フェラチオするのを止めたら。ちゃんとチンポを舐めない」と

健太郎に言われ、真歩子は彼の男性器を再度唇と舌で愛撫する。

一方、健太郎は、真歩子の女性器を愛撫すると同時に、彼女のアンナルを指で撫でる。

「真歩子ちゃんのお尻の穴、ヒクヒクして気持ち良さそうだね。」

こつちも可愛がつてあげるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ぬぷつ、という愛らしい音がした。

健太郎はそのまま指を震わせ、グニグニと揉みほぐすかの如く真歩子のアナルを愛撫しながら、女性器を舐める。

「ああつ、ヤンツ」

尻を振りながら逃れようとする真歩子。だが快感には勝てず、逃れる術はない。

「け、健太郎さん…、も、もうダメ…。イ、イツちやう…」

「真歩子ちゃん、僕もイキそうだ。出すよ」

「うっ?!んっ!!んぐぐぐぐーっ!!」

健太郎が真歩子の口に大量の精液を放つと同時に、真歩子も絶頂に達した…。

アヌスから指を抜くと、健太郎は言った。

「真歩子ちゃん、次はオマンコに入れるからね。今度は真歩子ちゃんが上になつて」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ほ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

更に、腰とお尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてみてよ」

「え、ええーっ!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いてみて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじやうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイ  
イ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」

健太郎に 言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を  
貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いで  
すから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…、わ、私も、もうダメ…。  
こ、壊れちゃう…。オ、オマンコが壊れちゃう。イ、イク、イツちゃ  
うっ…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」  
「くっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再

度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から嘔き出した健太郎の白濁が付着した。

「あつ…、あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふつ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。その間、彼女は乳房から腹を撫で、指に絡みついた彼の白濁をうっとりとした表情で見つめていた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

身体を乾かし、身支度を整えてから、健太郎と真歩子はアパートを出た。健太郎は真歩子を家まで送る。

その道すがら、健太郎が言った。

「明日は卒業式だね。卒業、おめでとう」

「有り難うございます、健太郎さん。本当は健太郎さんにも来て欲しかったですけど」

「仕方ないよ、学校の規則だから。16日は家族皆で過ごしたら」

「はい、そうします」

「それに、僕達は、会いたい時にいつでも会えるから。そうでしょ」  
「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

真歩子の自宅に着いた二人。健太郎は真歩子の両親に挨拶をする。それから、彼は帰路についた…。

【  
続  
く  
】

## 第69章 17日、卒業式の翌日に

16日、月曜日。

この日は、葉月学園の卒業式である。

葉月学園は、午前に卒業式を行い、午後からは在校生の終業式を行う。

真歩子は両親と登校し、卒業式に出席した。

真歩子はその日、家族と水入らずの一日を過ごした。

一方、健太郎は、専門学校の終業式に出席。その後、午後から《土下座》に向かい、春休みのシフトを入れた。今年も春休みは、午前は出勤し、午後は休みにした。又、《カトレア》にも足を運んだ。

翌日、17日。火曜日。

アルバイトを終えた健太郎は、《カトレア》に向かった。

真歩子は進学してからも、《カトレア》でアルバイトを続ける事を決めている、かつ、3月中は平日もシフトを入れていた。

「ごめんください」

「あ、健太郎さん。いらっしやいませ。こんにちは」

「あ、真歩子ちゃん。こんにちは。例の物を」

「はい」

真歩子は頷き、花束を持って来た。

健太郎は会計をすると、その花束を真歩子に渡した。

「えっ…!?!」

「改めて、卒業、おめでとう、真歩子ちゃん」

「あ、有り難うございます、健太郎さん」

実は前日、《土下座》でのアルバイト終了後、その足で《カトレア》に向かい、卒業に相応しい花束を見繕っていたのだった。

「それじゃ、アルバイト終了後に、改めて」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷いた。

夕方。健太郎は再度、《カトレア》に向かった。

「こんばんは、真歩子ちゃん。お疲れ様」

「あ、健太郎さん」

「それじゃ行こうか」

「ええ」

健太郎と真歩子は、彼が予め予約していたレストランに向かい、夕食を摂った。

それから、健太郎のアパートに向かった。

健太郎は花瓶に、真歩子にプレゼントした花束を入れた。真歩子の家に戻るまで、花束が萎れない様にするためである。

寝室にて。健太郎と真歩子はベッドに腰掛けた。

「真歩子ちゃん」

「はい」

「今日は、二人だけの卒業祝いだよ」

真歩子が頷くのと同時に、健太郎は、真歩子の身体を抱き締め、服を脱がした。

「真歩子ちゃん…」

そう言うのと健太郎は真歩子を抱き締め、唇を重ねた。

「えっ？う、う…うん」

合図のための、キス。

一度健太郎は、唇を離し、それから再度唇を重ねた。今度は互いに舌を絡める。

「んっ…」

唇を離す。二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子を後ろから抱き締め、服を脱がしていく。そして彼女を四つん這いにさせた。

「えっ!？」

「ん?」

「いきなりこんな格好…、恥ずかしいです」

健太郎は真歩子の大事な部分に指を這わせながら言った。

「今日はまずはへお尻でしよ。だから、きちんと準備しておかないと」

「え、ええ」

真歩子が頷くと、健太郎は彼女の女性器を愛撫した。

それから健太郎は女性器に指を入れる。溢れ出した蜜が、健太郎の指に絡み付いた。

「それじゃあ」

そう言うと健太郎は、真歩子のアナルを指で突いた。

突く度に、真歩子のアナルはすぼまったり広がったりする。

「あぁっ、ヤンツ」

真歩子は次第に、アナル愛撫をむずかり出した。

「じゃあ、次は…」

「焦らさないで、お尻に、い…入れて、く、ください」

健太郎は、真歩子のアヌスに指を入れた。ヌプツという音がした。

健太郎の指は、第一関節まで入り込んだ。

グングニと、丹念に揉みほぐす。更に、直腸粘膜を刺激する。

「あぁっ…、な、何か、ムズムズして来た…。イ、イキそうです」

そう言った直後、真歩子のアヌスは健太郎の指を食い締めた。彼は、指を第二関節まで挿入した。

「ヒイツ、イクーツ」

真歩子は、あっさりと絶頂に達した。

「可愛かったよ、真歩子ちゃん」

そう言うと健太郎は、再度真歩子の尻を高く持ち上げる。

「今度は…」

そう言って健太郎が真歩子の女性器に唇を近付けた直後。

真歩子は股間を手で隠した。

「ダ、ダメです…」

「あれっ?…どうしたの」

「まだ洗って無いですから…」

真歩子はアナルを舐められる事自体は平気になったが、やはり洗って無い事には抵抗があるのも、又事実である。

「じゃあ、シャワーを浴びようか」

「は、はい」

シャワーから戻った後、健太郎は再度真歩子を四つん這いにさせ



た。

「じゃあ、舐めてあげるね」

「え、ええ」

健太郎は、真歩子の女性器に舌を這わせた。

それから、アナルを舐めた。

彼女のアナルは、排泄物の臭いはほとんどしない。清楚なアナルだ。

「チュツ。ペロ」

健太郎は、真歩子の尻たぶを撫で回しながらアナルを舌と唇で責める。

「わ、私、も、もうダメ…。また、イ、イツちやう!!」

そう言つて真歩子は、再度絶頂に達した。

「じゃあ、真歩子ちゃん、チンポを入れるよ」

「え、ええ…。早く、入れて、ください。真歩子のいやらしいお尻の穴に、健太郎さんのオチンチンをください」

そう言つて真歩子は、尻たぶを広げアナルを外気に晒して、淫らなおねだりをする。

そして、健太郎は真歩子のアヌスに挿入した。

健太郎は、彼女の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

健太郎は、背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

ヒクヒク蠢く菊の蕾は限界まで広がり、健太郎の男性器を受け入れる。

真歩子のアナルは、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「あぁっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんのお尻の中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんのあれが、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシートを掴んだ。イク前兆だ。

ここで、健太郎は、右手で真歩子の乳房を愛撫しながら、左手で女性器を愛撫した。

「ヒイツ！イヤーン！」

「凄いよ。真歩子ちゃんは、オツパイ、オマンコとお尻の穴で感じるんだ」

「お尻の穴は貴方の太いオチンチンでグリグリされて…、オマンコはクチュクチュユされて…。わ、私、も、もうダメ…。お尻が、こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。お尻に…。健太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の腸内で、全てを解き放った。

「あっ…、あああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体をのけぞらせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「君の腸内も、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…。大好きです…」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「それじゃ、シャワーに行こう。身体の隅々まで、洗ってあげる」

健太郎が言った。

シャワーから戻った後、真歩子が言った。

「健太郎さん」

「ん？」

「大好きです。ずっと、このままいてくださいね」

そのまま二人は、第二ラウンドに突入した。

健太郎は再度、真歩子の身体をベッドに仰向けにした。そのまま全身を丁寧に愛撫する。

そして、横倒しにした後、背中から抱き付いた。

所謂〈背面側位〉〈側背位〉と呼ばれる体位である。

真歩子には正常位や騎乗位、座位よりも、後ろからの方が合っている事は、確かだ。

健太郎は真歩子の乳首を指先で摘まんて転がしてから、軽く突く。

「真歩子ちゃん、乳首が勃ってる」

「ああつ…、ヤンツ」

更に乳房を包み、愛撫する。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン」

健太郎の言葉責めに、真歩子は耳まで紅く染めた。

それから健太郎は、真歩子の股間に左手を伸ばす。そして女性器を愛撫する。

「ここは、何て言うのかな？」

「ク、クリトリス…」

「まだクリトリスは触っていないよ。ちゃんと行ってごらん」

「イ、イヤ…。健太郎さんの意地悪。真歩子のオマンコ…」

「良く言えたね。じゃあ、ご褒美してあげるけど、何が欲しいの？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに入れて、ください」

「じゃあ、今度は真歩子ちゃんのスケベなオマンコにチンポを入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。

淫らな水音が、部屋に響く。

「こんなにオツユを溢れさせて…」

「ああつ…。入つて来る…。健太郎さんのオチンチンが。太くて、硬くて、熱いのが」

背面側位は、深い挿入は難しいが、腰への負担は少ない。

「あつ…。ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

腰を動かしながら、健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

しかし、健太郎は律動を止めた。

「えっ!？」

戸惑う真歩子。

「ちよつと体位を変えてみようか」

そう言つて健太郎は、真歩子の中から男性器を引き抜いた。そして真歩子の片足を持ち上げ、再度、男性器を挿入した。所謂、〈松葉崩し〉である。

「イヤーン、こんな格好、は、恥ずかしい」

「凄いや。真歩子ちゃんのおマンコ」

真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく締め付ける。

健太郎の腰の動きも、自然と激しくなる。

「き、気持ちいいの…、オ、オマンコが気持ちいいの。イ、イキそう…」

「僕も、イキそうだ。出そうだ」

「もうダメ。あーっ、イ、イヤーツ。イクーツ。イツちやううつ…」

!!

「くうっ…!!」

「あっ、ああああああああああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達し潮を噴くと同時に、健太郎は真歩子の女性器から男性器を引き抜き、白濁を乳房から腹部にかけてぶちまけた。

「で、出てる…。健太郎さんがたくさん…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

そう言いながら真歩子は、自分の胸から腹部を撫で上げ、指に絡みついた健太郎の白濁を眺めていた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュユペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあ、次は…」

「はい」

「お口でして欲しいな。但し…」

「えっ？」

「跪くんだけ」

「はい…」

健太郎の指示に従い、真歩子はまず跪いた。

「お、大きい…。まだこんなに…」

そう言つて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。  
それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかつた。

「あつ、今、ピクンつて…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「そろそろ…」

そう言つと、真歩子は健太郎の男性器を舌先でチロチロと刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌先を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らな音が、付近に響く。

「真歩子ちゃんのお口、凄く気持ち良いんだけど、今日はもう良いかな」

健太郎は真歩子にフェラチオを止めさせると、真歩子を立たせた。  
そしてベッドに手をつく様に言った。

「それじゃ、そろそろ…」

健太郎はそう言つて、真歩子の股を開かせる。

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、健太郎の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「健太郎さん、早く…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのおマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「お尻を突き出すんだ」

意地悪な言い付けに従う真歩子。

そう言うのと健太郎は、真歩子の尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして。いつ見ても魅力的だよな。お尻の穴も綺麗だね。ヒクヒクしているよ」

「イ、イヤーン」

そう言うって真歩子は、かぶりを振った。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、健太郎の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやうっ」

そう言うって真歩子は、絶頂に達した。

「もう、健太郎さんの意地悪」

少し頬を膨らませる真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

健太郎の男性器の先端が、真歩子の女性器に当たる。

だが、彼は軽く当てただけで、挿入はしない。

「健太郎さん…」

「ん？どうしたの」

「じ、焦らさないで、早く下さい…。ほ、欲しいです…。オチンチンが欲しいです」

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「健太郎さんの意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ？」

「健太郎さんの、オチンチンを、真歩子のオマンコに、入れて、ください」

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…。き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオッパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋と背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいいっ」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。溢れ出した真歩子の蜜が、床に染みを作った。淫らなマーブル模様を描いた。

淫らな水音と、二人の吐息が付近に響く。

汗の香りも、付近に漂う。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大事な部分が、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなった。イク前兆だ。

ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしながらにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、(っ)褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク。あつ…。あああああーっ

!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。その直後、真歩子の背中から尻に二筋三筋と精液をぶちまけた。

「背中とお尻が、熱いです…。沢山出て…」

「うん。真歩子ちゃんのオマンコの中もお口の中も、気持ちいいから…。大好きだよ」

「うふふっ…。ありがとう…。私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。浴室にて。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日はへお楽しみを〜を終えたため、お風呂場では身体を洗うだけで、挿入は無しである。

ボディソープの泡まみれになった真歩子の身体を、健太郎は丹念に洗い流した。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。



真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

二人は身体を丹念に拭いた後、真歩子の家に向かった。その道すがら、次の約束をする。

そして、彼女を送り、玄関口で真歩子の両親とたけしに挨拶をしてから帰宅した。

【続く】

## 第70章 21日、テニスその後で

21日、土曜日。この日は、春分の日である。

健太郎と真歩子は、午前から卯月町のスポーツクラブにいた。

今日は、二人でテニスの練習である。とは、言ってもハードな練習ではない。

健太郎も真歩子も、放課後やアルバイトの無い日に自主トレーニングをしていたが、しばらく対戦形式の練習をしていなかった。よって、今日のデートは、ハードなトレーニングよりも体を慣らす事と感覚を取り戻す事がメインだった。

まずは、素振り等の基礎的な動きをして体を慣らす。

それから、健太郎が軽めのサーブを打ち、真歩子とラリーをする。

真歩子は、徐々に感覚を取り戻す。

しかし、真歩子に無理な練習をさせる訳にはいかないため、今日はサーブやスマッシュは無しにした。

スポーツクラブのロビーにて。

「真歩子ちゃん、久しぶりのテニスはどうだったかな」

「楽しかったです、健太郎さん。しばらく体を動かしていなかったですから」

「僕も楽しかったし、二人で練習する事が出来て良かったよ」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。

スポーツクラブを出た二人は、その足で、卯月駅前商店街のレストランで食事を摂り、それから健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

「真歩子ちゃん…」

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている、葉月学園のジャージの上下を脱がした。更に上半身に着ていた、これまた葉月学園の長袖Tシャツを脱がして、下着姿にした。

今日の真歩子の下着は、清楚な白の下着だった。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は、私物のジャージの上下、Tシャツ、下着を脱ぎ、全裸になった。

「じゃあ、真歩子ちゃん。テニスウェアに着替えて」

「はい」

健太郎に言われるまま、真歩子はテニスウェアに着替える。

真歩子は、持参したバッグから、まずアンダースコートを取り出し、パンティの上に穿く。それから、ポロシャツとプリーツ入りのミニスカートを着た。

「終わりました、健太郎さん」

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言って健太郎は、再度真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。

そのままベッドに倒れ込む。

テニスウェアのポロシャツとブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのおツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。練習のせいかな？それとも生着替え？汗の味もしているね」

「健太郎さん、ダメです。シ、シャワーに…」

「まだダメだよ。真歩子ちゃんのお尻を、たっぷり楽しんでからだよ」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースコートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのおマンコ、もう凄い事になっているよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのおマンコ、可愛がってあげるね。良い匂いもしているし、おツユが沢山溢れているよ。感じているの？」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ベッドから降りて。立って。それからベッドのシートに手をつけて、お尻を突き出すんだ」

「ええっ？早くシャワーに…」

「まだだよ」

そうやって健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよ」

「イ、イヤーン」

そう言つて真歩子は、かぶりを振つた。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。そして、掻き回すかの如く愛撫する。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「真歩子ちゃんのおまんこ、吸い付いてくるみたいだね。指だけで、こんなに良く締まるんだ。やつぱり名器だね」

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言つて真歩子は、絶頂に達した。

「も、もう、健太郎さんの意地悪」

そう言つて真歩子は、少し頬を膨らませた。

「じゃあ、シャワーに行こうね」

「はい」

健太郎は真歩子のテニスウェアを脱がすと、二人で浴室に入った。

健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。

本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボデイーソープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いながら愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗つて。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張つてはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗つてから、交代で健太郎が頭を洗う。

それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音が、狭い浴室に響く。

「ああつ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです…。お漏らしして…」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

そう言うとき健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た二人。健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、右の乳首を舌尖で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあって、形も良くって、最高だよ。乳首、こんなに勃たせて。真歩子ちゃんはおツパイを揉み揉みされるのが、好きなんですよ。気に入っているみたいだね。真歩子ちゃんの母乳、濃くて美味しいんだろうな」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン、イヤーン」

「ほらほら、驚掴み」

「ダメエ、そ、そんなにきつく揉まないで。オツパイが、ちぎれちゃう」

「でも真歩子ちゃんのオツパイ、たつぷり可愛がりたいな。たまには、洗濯ばさみで乳首を攻めちゃおうかな」

「洗濯ばさみはイヤです。健太郎さんの口と手で、して欲しいです」

「うん。それならば…」

健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリコリコリつと。たつぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。ミルクの香りも良いよね」

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

そう言つて健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

健太郎は無言で頷くと、真歩子の女性器から左手を、乳房から右手を離し、太股を軽く掴むと、脚を180度近く広げる。

「イ、イヤーン…」

そして健太郎は、右手の人差し指で、女性器を愛撫する。ヒクヒク蠢き、蜜を分泌する。

「ほら、どんどんオツユが溢れてくるよ」

「は、恥ずかしい…」

「クリトリスを剥き出しにして…、チュルツ」

「ヒヤウツ…!!そ、それは感じ過ぎです…」

「ほらほら、こんなに溢れさせて…。ちよつとしよっぱいよ。微妙に塩味が効いているけど、これって、汗かな？チュツ。カプツ。ペロペロツ…」

「イヤツ…!!味わつたりしないでください…!!もうダメです…。欲しいです。健太郎さんのので、イキたいです」

「じゃあ、真歩子ちゃん、どこに何が欲しいの？おねだりしてよ」

「健太郎さんのオチンチンを、真歩子のいやらしいオマンコに、入れてください」

「じゃあ、ご褒美だよ。入れるよ」

そう言つて健太郎は、真歩子の中に挿入した。正面から貫いた。

健太郎の男性器は、真歩子の女性器の中に入って行く。

それから健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、オチンチン、き、気持ちいい」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰と尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シーツに淫らな染みを作った。

真歩子の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで…」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪…」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イ、イキそう…。イク、イクツ…、イクちやうつ…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。出して…。今日は中でイッても…イイです…。健



太郎さんを、感じさせてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の中で、全てを解き放った。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精の直撃を受け、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。私の中が、健太郎さんでいっぱいになってる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…、ありがとう…、大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。そして続けた。

「健太郎さん」

「ん？」

「横になってください。お掃除しますから」

「あ、ああ…」

健太郎が頷いた。そして真歩子に従い、横になった。

「じゃあ…」

そう言っつて、真歩子は健太郎の男性器を手で包み込んだ。

それから、軽く手コキした。

「つつ…」

軽く仰け反る健太郎。柔らかい掌と指先の刺激がたまらなかった。

「あっ、今、ピクンっつて…」

笑みを浮かべながら、健太郎の男性器を愛撫する真歩子。

「じゃあ、そろそろ…」

そう言っつと、真歩子は健太郎の男性器を舌尖でチロチロと刺激した。

それから、唇で包み込んだ。

舌尖を巧みに動かし、カリから鈴口を刺激する。

「はむっ…、レロッ、ちゅぶちゅぶ…」

淫らかな音が、部屋に響く。

「うふふ。はい、綺麗になりましたね」

「真歩子ちゃん…。そんなきつくチンポを舐められたら、またすぐ

に…。それに敏感になっているのに」

「贅沢言ったらダメですよ、健太郎さん。じゃあ、今度は私が…」

「よし、今度は真歩子ちゃんが上になって」

「は、はい」

健太郎の男性器が真歩子の女性器に入ってから、彼は律動を開始する。

「あ…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…。それにさつき出た健太郎さんが、私の中でグチユグチユしてます…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、彼女の乳房を下から揉みしだきかつ、乳首を摘まんて転がしながら、律動のピッチを上げていく。

「真歩子ちゃんのオツパイ、僕の手で吸い付いてくるみたいだよ」

「アーン、ダ、ダメエ…」

快感には勝てず、身を振る真歩子。

健太郎は、更に、腰と尻を撫で回す。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

健太郎が突き上げる度、真歩子の乳房が大きく上下に揺れる。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、健太郎の男性器に絡み付く。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、真歩子の喘ぎ声、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

ここで健太郎は、普段ならば律動のピッチを上げるところだが、敢えてピッチを下げた。

「えっ?! どうしたんですか?」

真歩子が戸惑うのも、無理はなかった。

「真歩子ちゃんが動いてよ」

「ええっ!?!」

「だから、真歩子ちゃんの好きな様に動いて。早く動かないと、僕のチンポが萎んじゃうよ」

「も、もう…、健太郎さんの意地悪。エッチ…」

そう言いながらも、真歩子は自分から腰を動かし始めた。

「ひあっ!! イイツ。イイのお…。健太郎さんのオチンチン、凄くイイ」

「じゃあ、もつと動いてみて。僕のチンポで、おもいつきりイケよ」  
健太郎に　　言われるまま、真歩子は自分から腰を動かし、快感を貪る。

「イツて、良い? 良いの?」

「ああ。僕も、イキそうだ」

「なら、あ、健太郎さんも動いてください。その方が、気持ち良いですから…」

健太郎も再度、律動を開始する。

「ああっ…。私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、け、健太郎さんのオチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」  
真歩子の締め付けが一段とキツくなった。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いのでグリグリされて…。わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。オマンコが壊れちゃう。イ、イク、イクツ、イクちやう…」

「僕も、イキそうだ…」

「お、お願い…。だ、出して…。健太郎さんを、感じさせてくださいっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の尻を掴み、女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解放した。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…。あああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…」

「うふふっ…。ありがとう…。大好きです…」

真歩子は、乳房から腹部を撫でた。そして、自分の指に絡みついた健太郎の白濁を、うっとりとした表情で見つめる。その後真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整えた二人。

その直後、真歩子が言った。

「健太郎さん、これを」

そう言っただけ真歩子はテニスウェアと、スポーツブラとアンダーズコートを健太郎に渡した。

「真歩子ちゃん、これって…」

「はい、葉月学園のテニスウェアです。スポーツブラとアンダーズコートも入ってます」

「真歩子ちゃん、良いの…？本当に？」

「良いんですよ。健太郎さんとの約束ですから。後、セーラー服とジャージとTシャツとかは、又改めて持って来ます」

「大丈夫？お母様にバレない？」

「大丈夫です。実は二着持っていて、一着を健太郎さんに。それに、大学は専用のテニスウェアがありますから」

「うん、有り難う」

「どういたしまして」

「それじゃ行こうか」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子が頷くと、二人はアパートを出て、真歩子の家に向かった。

その道すがら。健太郎が言った。

「なるほど、22日と28日は入学準備で買い物があるんだ」

「はい」

「じゃあ、29日にデートしようか。本格的なテニスの練習をした  
いんだけど、どう」

「はい、良いですね。身体も戻ってきましたから」

「うん。真歩子ちゃん、負けないからね」

「私だって。負けませんよ、健太郎さん」

その直後、二人は笑った。

真歩子の家に着いた二人。

真歩子が玄関を潜ったのを見ると、健太郎はアパートに戻った。

帰宅後、健太郎は真歩子から貰ったテニスウェアをオカズにして自  
慰に耽った。但し、汚さない様に気を配った。そして達すると、彼は  
大量の白濁を放った。

【続く】

## エピローグ

3月29日、日曜日。

健太郎と真歩子は、午前から卯月町のスポーツクラブにいた。今日のデートもテニスである。今日は、久しぶりの試合形式の練習である。

まずは、素振り等の基礎的な動きをして体を慣らす。

それから、健太郎が軽めのサーブを打ち、真歩子とラリーをする。そして、試合形式の練習になった。

「そーれっ!」

「よし!」

「えいっ!」

「きやあ!」

テニスコートに真歩子の声が響く。

「はっはっは、これで僕が2セット連取だぞ」

そう言ったのは、健太郎だった。

ベンチにて。

「それにしても、本当に強くなりましたね」

「真歩子ちゃんのコーチが良いからだよ」

「もし葉月学園に入学してテニス部に入っていたら、インターハイに出られましたよ。それ位上達が早いです」

「もし葉月学園に入学してテニス部に入部していたら、真歩子ちゃんと二人で楽しくテニスはしていないと思うよ」

「あ…、それは嫌です」

「良かったあ、僕、葉月学園に入らなくて」

「は、はい。そう思います」

真歩子が頷いた。

「そう言えば、真歩子ちゃんは4月から大学生か…」

「はい。家から通える短大にしましたから、今まで通り会えると思います」

「早いね、あれから2年か…」

「健太郎さん。気持ち…、変わっていませんか？初めて会った時から…」

「ああ、ずっと一緒に、変わっていないよ」

「私もです。私も、もっと好きになりました」

「真歩子ちゃん…」

「これからも、ずっと一緒にいてくださいね」

今度は、健太郎が真歩子の言葉に頷いた。

スポーツクラブを出た二人は、その足で、卯月駅前商店街のレストランで食事を摂り、それから健太郎のアパートに向かった。

アパートの寝室にて。

健太郎は真歩子を抱き締めると、唇を重ねた。

唇を重ねるのみの、キス。

唇を一度離すと、再び唇を重ねた。

今度は互いに舌を入れ、絡め合わせる。

「んっ…」

唇を離す。

二人の間には、淫らな銀の糸が引かれていた。

健太郎は、真歩子が着ている、葉月学園のジャージの上下を脱がした。更に上半身に着ていた、これまた葉月学園の長袖Tシャツを脱がして、下着姿にした。

今日の真歩子の下着は、清楚な水色の下着だった。

そして健太郎は、ブラジャーの上から真歩子の乳房を愛撫する。

鼓動と温もりが、手のひらを通じて伝わる。

そのまま健太郎は、ブラジャーの中に手のひらを滑らせ、直接乳房を愛撫した。

そして乳首を摘まんで転がす。

「あんっ…」

真歩子の喘ぎ声が、部屋に響いた。

健太郎は、私物のジャージの上下、Tシャツ、下着を脱ぎ、全裸になった。

「じゃあ、真歩子ちゃん。テニスウェアに着替えて」

「はい」

健太郎に言われるまま、真歩子はテニスウェアに着替える。

真歩子は、持参したバッグから、まずアンダースコートを取り出し、パンティの上に穿く。それから、ポロシャツとプリーツ入りのミニスカートを着た。但し、ブラジャーは下着のまま、スポーツブラには替えなかった。

「終わりました、健太郎さん」

「じゃあ、真歩子ちゃん」

そう言つて健太郎は、再度真歩子の身体を抱き締めた。

それから二人は、唇を重ねる。合図のための、キス。

そのままベッドに倒れ込む。

テニスウェアのポロシャツとブラジャーをずらすと、真歩子の白い乳房がプルンと露になる。

「あっ…」

健太郎は、真歩子の左の乳首に舌を這わせると、唇で包み込み、音を立てて吸う。

「真歩子ちゃんのオツパイ、乳首がこんなに勃っているよ。練習のせいか？それとも生着替え？汗の味もしているね」

「健太郎さん、ダ、ダメです。シ、シャワーに…」

「まだダメだよ。真歩子ちゃんの身体を、たっぷり楽しんでからだよ」

健太郎はミニスカートの裾を捲ると、アンダースコートとパンティをずらして、真歩子の女性器を晒す。

「アンダースコートって、いつ見ても可愛いよね。その下にあるパンティとオマンコも綺麗だからね」

「ああっ、あんまり見ないでくださいね」

「どうして？いつも見せてくれるじゃない？」

「で、でも今日は…」

「真歩子ちゃんのオマンコ、もう凄い事になっているよ。ぬるぬる、ビショビショだよ」

健太郎は真歩子の女性器の匂いを嗅ぐ。汗と愛液の濃い匂いが、彼



の鼻腔を刺激する。

更に健太郎は真歩子のクリトリスを剥き出しにすると、女性器に舌を這わせる。

「イ、イヤです。早くシャワーを…」

「ダメだよ。真歩子ちゃんのありのままのオマンコ、可愛がつてあげるね。良い匂いもしているし、オツユが沢山溢れているよ。感じているの?」

「意地悪…」

真歩子は、耳まで赤くした。

「じゃあ、次は…」

「は、はい」

「ベッドから降りて。立って。それからベッドのシーツに手をついて、お尻を突き出すんだ」

「ええっ?早くシャワーに…」

「まだまだよ」

そう言って健太郎は、テニスウェアのミニスカートの裾を捲り、尻を晒した。

「真歩子ちゃんのお尻、結構大きいと思う。プリンプリンして魅力的だよね」

「イ、イヤーン」

そう言って真歩子は、かぶりを振った。

「あんまり言う事を聞かないと、お尻ペンペンするよ」

「も、もう…」

健太郎に軽い脅しをされた真歩子は、大人しく言う事を聞く。

健太郎は真歩子の女性器に指を入れる。真歩子は、彼の目の前で尻を振る。

「ああんっ。ダメ、イツちやう」

そう言って真歩子は、絶頂に達した。同時に潮を噴いた。

「もう、健太郎さんの意地悪」

そう言って真歩子は、少し頬を膨らませた。

「じゃあ、シャワーに行こうね」

健太郎は真歩子のテニスウェアを脱がすと、二人で浴室に入った。健太郎と真歩子は、二人で身体を洗う。

真歩子が健太郎の身体を洗った後、健太郎が真歩子の身体を洗う。本日のへお楽しみは、ベッドの上のため、お風呂場では身体を洗うのと同時に、乳房と太股を愛撫するだけで、挿入は無しである。

ボディースープの泡まみれになった真歩子の身体を、丹念に洗いなから愛撫する健太郎。次第に自分のボルテージが高まっている事を、自分の男性器を見ながら感じていた。

「じゃあ、真歩子ちゃん。先に髪の毛を洗って。終わったら、今度は僕が頭を洗うから」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。湯を張ってはいないが、彼は湯船に入り、縁に腰掛けた。

真歩子が髪の毛を洗ってから、交代で健太郎が頭を洗う。

それから健太郎は、真歩子を背後から抱き締め、彼女の身体を愛撫する。

左手で真歩子の乳房を揉みながら、指先で乳首を摘まみ、右手で彼女の股間を愛撫する。

快感に身体を振る真歩子。

淫らな水音が、狭い浴室に響く。

「ああっ、ダメ。出ちゃう。も、漏れちゃう」

そう言った直後。真歩子が失禁した。浴室の床に、薄黄色の水溜まりが出来る。

「は、恥ずかしいです…。お漏らしして…」

「ちっとも恥ずかしい事じゃないよ。真歩子ちゃんを感じさせたかったんだから」

そう言うと健太郎は、床と真歩子の股間をシャワーで洗い流した。脱衣場で身体を丹念に拭いてから、浴室を出た二人。健太郎は真歩子の身体をベッドに横たえた。

そして健太郎は真歩子に覆いかぶさると、唇を重ねる。

唇を離すと、次は耳朶、右の肩、右の乳房にキスをする。それから、

右の乳首を舌先で突くと、唇で包み込み、きつく吸う。その間も、首筋、背中を愛撫する。

更に、左の乳房を揉みしだくと同時に、指先で乳首を転がす。

「真歩子ちゃんのオツパイ、柔らかくって、温かくって、弾力もあつて、形も良くって、最高だよ。乳首、こんなに勃たせて。真歩子ちゃんはオツパイを揉み揉みされるのが、好きなんですよ。気に入っているみたいだね。真歩子ちゃんの母乳、濃くて美味しいんだろうな」

「イ、イヤ…。イヤア、イヤン、イヤーン」

「ほらほら、乳搾り」

「ダメエ、そ、そんなにきつく揉まないで。オツパイが、ちぎれちゃう」

「でも真歩子ちゃんのオツパイ、可愛がりたいな。たまには、洗濯ばさみで乳首を攻めちやおうかな」

「洗濯ばさみはイヤです。健太郎さんの口と手で」

「うん。それならば…次は」

健太郎は真歩子の乳房を愛撫する。

「乳首をこんなに硬くして…。エッチな女の子だなあ。ほらほら、ツンツンツンツン。次は、コリコリコリコリつと。たっぷりオツパイ揉み揉みしてあげるね。ほら、乳搾り。ミルクの香りも良いよね」

「あつ…ああつ、胸をそんなに、ヤ、ヤアン」

そう言つて健太郎は、真歩子のお腹にキスをする。同時に腰と尻を愛撫する。

その後、健太郎は真歩子の太股を愛撫しながら、脚を開かせた。無毛の女性器が晒される。

「じゃあ、オマンコ、舐めるよ」

「は、はい。オマンコ、ペロペロしてください…」

真歩子が頷くと、健太郎は膝裏を軽く掴み、膝を肩の辺りに押し付けた。所謂、へマングリ返しである。

「イ、イヤーツ、こんな格好、恥ずかしい…」

だが、健太郎に抑え込まれているため、逃れる術は無い。

健太郎は割れ目をそつと指で開く。そして舌を出すと、真歩子の女

性器を愛撫する。

「ひゃうつ、んっ、ふああっ、健太郎さん…」

健太郎は割れ目の先端にある真歩子のクリトリスを舌で転がすと、真歩子は身体をびくんと反応させる。

「どう？感じる？イヤじゃない？」

「イ、イヤじゃないです…」

「じゃあ次は…」

そう言つて健太郎は、真歩子の清楚なアヌスを舌で責め始めた。

「あつ、や、やんっ」

ツンツンと舌先ですぼまりを突つつき、細かい皺を丹念に舐める。

「あつ、そ…そんな、だ、ダメ…」

そう言つて真歩子は身体をびくびくさせた。軽い絶頂に達した。

「可愛いかったよ、真歩子ちゃん」

「健太郎さん、そろそろ、健太郎さんの、オチンチンを…」

「僕も、そろそろ真歩子ちゃんのオマンコにチンポを入れたくなつていたんだ」

そう言つて健太郎は、真歩子を正面から貫いた。

健太郎は、律動を開始する。

「け…健太郎さんが、わ、私の奥に、あ、当たつて…、き、気持ちいい…」

「ぼ、僕も、真歩子ちゃんの中、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきかつ、乳首を摘まんで転がしながら、律動のピッチを上げていく。

溢れ出した蜜のおかげもあり、スムーズに動く事が出来る。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

乳房も、乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

健太郎は、乳首にキスをして、汗の雫まで味わいつくす。

更に、腰とお尻を撫で回す。

女性器から溢れ出した蜜が、シートに淫らな染みを作った。

健太郎の部屋には、二人の汗の香りが充満している。

淫らな水音と、肌がこすれる音、喘ぎ声、そして熱く、甘く、荒い吐息が部屋に響く。

「凄いよ。真歩子ちゃんの締め付け」

「や、やあん」

「後ろからする時よりもキツイよ」

「そ、そんなこと…、い、言わないで」

「僕は事実を言ったただだよ」

「や、やだ…。は、恥ずかしい…。意地悪」

真歩子は耳まで赤くした。

実際、真歩子の女性器は、健太郎の男性器をきつく、でもどこか優しく締め付ける。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「け、健太郎さんの、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

ついに真歩子がシーツを掴んだ。イク前兆だ。

「健太郎さんの太いオチンチンでグリグリされて…、わ、私、も、もうダメ…。こ、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「お、お願い…。健太郎さん、出して…。イツ、イクっ…!!い、一緒に、イツてえっ…!!」

「くうっ…」

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜くと、再度全てを解き放った。真歩子の乳房と腹部に、男性器の先端から噴き出した健太郎の白濁が付着した。

「あっ…、ああああああーっ!!」

二人は、同時に絶頂に達した。

熱い精を身体に浴びて、真歩子は身体を仰け反らせ、潮を噴きながら果てた。

「で、出てる…。健太郎さんがいっぱい出てる…」

「真歩子ちゃんの中、気持ちいいから…。それに真歩子ちゃんも、」

「うふふっ…、ありがとうございます…、大好きです」

真歩子は、笑みを浮かべて頷いた。

その後、真歩子は、乳房から腹部を撫でた。そして、自分の指に絡みついた健太郎の白濁を、うっとりとした表情で見つめていた。

愛し合った後、健太郎は、真歩子の身体をティッシュペーパーで丁寧に拭いた。そして言った。

「それじゃシャワーに行こうか」

「ええ…」

その後、健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。

それから、二人は丹念に身体を拭いた。そして、健太郎は言った。

「ねえ、真歩子ちゃん」

「はい」

「僕はまだ元気だから。見てごらん」

そう言うのと健太郎は真歩子に、下半身を見る様に促した。健太郎の男性器は、再度フル勃起していた。

「お、大きい…。もうこんなに…」

そして真歩子を再度ベッドに横たえた。

健太郎は右手で左の乳房を包み込むと同時に、左の乳首に舌を這わせた。舌先で転がした後、唇で包み込み、音を立てて吸う。その間も、右の乳首を摘まんで転がす。

それから、真歩子の女性器を押し広げ、舌と指で愛撫する。

更に陰核を剥き出しにして舌で刺激する。

そして溢れ出した蜜を吸う。

「そ、そんなにキツく吸われたら、ク、クリトリスが、取れてしまいます…。ねえ…。お願いです」

「ん？…どうしたの？」

「じ、焦らさないで…。早くしてください」

柔らかさと弾力を併せ持つ乳房も、ピンク色の乳首も、臍も、ウエストも、尻も、女性器も、今や何もかも健太郎の物だ。

で、今度も健太郎はちよつと意地悪をする。

「じゃあ、きちんとおねだりしないと」

「意地悪…」

「言わないと、入れてあげないよ。欲しいんでしょ」

「もう…」

そう言いながら、真歩子は、大事な部分を指で開いた。

真歩子の女性器から溢れ出した蜜が、シーツに染みを作った。

「健太郎さんが、欲しいの…。早く、オチンチンを真歩子のいやらしいオマンコに入れてください…」

真歩子は、淫らなおねだりをする。

その直後、彼女は耳まで赤くした。

そして健太郎も、心臓が高鳴った。

「じゃあ、ご褒美だよ。オマンコに入れるよ」

そう言うと健太郎は真歩子をうつ伏せにさせた。

「ああつ、イヤーン。な、何を…」

「今度は、後ろから入れるよ」

健太郎は、真歩子を後ろから貫いた。

「健太郎さんのオチンチンが、わ、私の奥に、あ、当たって…、き、気持ちいい…」

健太郎は、真歩子の乳房を揉みしだきながら、律動のピッチを上げていく。

真歩子の乳房は、形が良く、しかも弾力と柔らかさを併せ持つ。

乳首は、綺麗なピンク色だ。

「真歩子ちゃんのオツパイ、揺れているよ」

「ヤ、ヤアン。は、恥ずかしい…」

健太郎は、首筋と背中にキスの雨を降らせ、汗の雫まで味わいつくす。

「ぼ、僕も、気持ちいい。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいい」

真歩子の女性器は、健太郎をきつく、でもどこか優しく締め付ける。溢れ出した真歩子の蜜が、草地に染みを作った。淫らなマーブル模様を描いた。

淫らな水音と、二人の吐息が付近に響く。

汗の香りも、付近に漂う。

「ああっ…、私の中、引っ張られてる…」

「凄いよ。真歩子ちゃんの中、熱くて、吸い付いてくる」

「あ、健太郎さんの大事な部分が、オチンチンが、ビクビクして、暴れてる…」

真歩子の女性器の締め付けが一段ときつくなつた。イク前兆だ。ここで健太郎は、敢えて律動のピッチを緩め、男性器を引き抜こうとする。

真歩子の尻が、健太郎に密着しようとする。

「あれれ？真歩子ちゃんのお尻が、欲しそうにしている。欲しいの？」

「は、はい。欲しいです…」

「じゃあ、お尻を振ってごらん」

「健太郎さん…、エ、エッチです。は、恥ずかしいです…」

「それじゃ、止めるね」

「意地悪…」

「じゃあ、恥ずかしがらずにお尻を振って。言う事を聞かないと、お尻ペンペンするぞ」

「もう…」

そう言いながらも、真歩子は尻を振った。

「良く出来たね。じゃあ、ご褒美だよ」

再度、健太郎は真歩子の中に深く挿入した。

健太郎は律動のピッチを上げる。

「も、もうダメ…。わ、私、壊れちゃう…。イツちゃう…」

「僕も、イキそうだ」

「アーツ、イ、イヤーツ…。イ、イク、イツちゃうつ。あつ…、ああああああーっ!!」

真歩子が絶頂に達した。

健太郎は、真歩子の女性器から男性器を引き抜いた。その直後、真歩子の背中から尻に二筋三筋と精液をぶちまけた。

「背中とお尻が、熱いです…。沢山出て…」

「うん。真歩子ちゃんのオマンコの中、気持ちいいから…。大好き



だよ」

「うふふつ…、ありがとう…、私も大好きです」

健太郎の言葉に、真歩子は微笑みながら頷いた。

「じゃあシャワーに行こうか」

「ええ」

健太郎の言葉に真歩子が頷く。すぐに二人は浴室に向かった。

健太郎と真歩子は、二人で一緒にシャワーを浴びた。身体の隅々まで洗い流す。

シャワーを出て、身体を丹念に拭いた健太郎と真歩子。身支度を整えた二人は、アパートを出て、真歩子の家に向かった。

その道すがら、健太郎が言った。

「なるほど、短大の入学式は弥生町キャンパスで4月6日にあるんだ」

「ええ…。入学式はそっちですが、短大のキャンパスは卯月町にあります」

「そうなんだ」

「健太郎さんにも、入学式に来て欲しかったのですが…」

「こればかりは仕方ないよ。それに僕達は、会いたい時にいつでも会えるから」

「はい」

健太郎の言葉に真歩子は頷いた。健太郎は、5日はデートは無しにして、12日にデートをする事で合意した。

真歩子の家に着いた二人。

健太郎は真歩子の頬にキスをした。

「それじゃ」

「はい」

真歩子が玄関を潜ったのを見ると、健太郎はアパートに戻った。そして4月1日。

健太郎の通う専門学校では、入学式と始業式が行われた。

健太郎は専門学校での2年に進級した。健太郎は月曜日と土曜日は午前授業、火曜日、木曜日、金曜日は一日中、水曜日は午後からの授

業となった。

これに伴い、《土下座》でのアルバイトのシフトを変更し、学校がある時期は土曜日のみとした。

そして6日、月曜日。

真歩子が進学した、短大の入学式が行われた。

真歩子の進学した弥生学園大学は、主なキャンパスは弥生町にあるが、短大は卯月町にある。

で、入学後。健太郎と真歩子は、半同棲状態である。真歩子が健太郎のアパートに、4月の毎週土曜日と日曜日に、着替え等を搬入した。健太郎はホームセンターで、クローゼットケースを何個か買って用意した。

当初、真歩子が健太郎のアパートに泊まる事について、健太郎が心配した。しかし、真歩子が、「外泊する際には、真歩子が自宅に連絡する事」を条件に両親を説得した事を健太郎にも話した事や、両親から挨拶もあつて、今ではほぼ毎日、真歩子が健太郎の部屋に泊まりに来る。

その真歩子専用のクローゼットケースは健太郎の部屋の押し入れに入っており、着替えが入っている。たまに健太郎が見てしまう事があり、真歩子に「健太郎さんのエッチ!!」と言われる事があるが、いつもの事である。

食事は、健太郎も作るが、今は真歩子を作る事が多い。《土下座》で鍛えたとは言えど、真歩子の腕前にはかなわない。

夕食後は、体を重ねる。たまに服を着たままや、裸エプロン、葉月学園時代の制服等でセックスをする事もある。

しかし、SMチックなセックスは殆どない。言葉責めや剃毛、軽くスパンキング、たまに浣腸プレイとアナルをする位である。勿論、所謂へ大人の玩具も健太郎は好まない。あくまでも、自分の体でセックスを楽しむ主義である。

で、5月のある日の朝。

「あーっ！遅刻しそうです」

真歩子の叫び声が、健太郎の部屋に響いた。

「ふあああ。目覚まし時計を止めたのは僕かな？」  
半ば寝ぼけ眼で健太郎が言った。

「急がないと、専門学校の授業に遅れると思いますよ」

「大丈夫。今日は午後からの授業だから」

「あ…。もう、ずるいです」

真歩子が頬を膨らませながら言った。

「それにしても、良い眺めだね。今日のブラジャーとパンティは、白か…。似合ってるよ」

「健太郎さん」

「ん？」

「あんまりじろじろ見ないで下さい」

「だって色っぽいんだもん」

「イヤです。恥ずかしい。またエッチな事考えているんじゃない？」

「ゴメンね。じゃあ見ない」

「私、魅力無いんですね…」

「あのね…どつちかにして…」

「だって、私、オッパイ小さいし…。お尻は大きいし」

「そんな事無いよ。オッパイは初めて会った時より大きくなったよ。パイズリも上手に出来る様になったし。乳首も綺麗な色だもん。お尻だってプリプリして魅力的だよ。後ろも綺麗だね」

「もう、健太郎さん、エッチです…」

そう言って真歩子は頬を膨らませた。でも、彼女の目は笑っていた。

「さてと、僕も着替えて用意するかな」

「健太郎さん？」

「ん？」

「今日は何時位に帰って来ますか？」

「大体18時位かな」

「わかりました。今日も、晩ごはん、作りに来ますね」

「わかった。夕方には帰っているからね。やった。今日もまともな食事が食べられる」

「それと…」

「今日も…ここに泊まって良いですか？」

「ああ、構わないよ」

「はい、私も全然構いません」

そう言つて真歩子は笑つた。健太郎も笑つた。こうして二人は歩いて行く。二人の道を…。

【おわり】